

姫路市 豆腐町遺跡 II



兵庫県文化財調査報告
第403冊

兵庫県教育委員会

姫路市

豆腐町遺跡 II

- JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書 V -



2011（平成23）年3月
兵庫県教育委員会

姫路市

豆腐町遺跡 II

- JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書 V -

2011（平成 23）年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会



南上空から



東上空から



南西上空から



西上空から



北東上空から



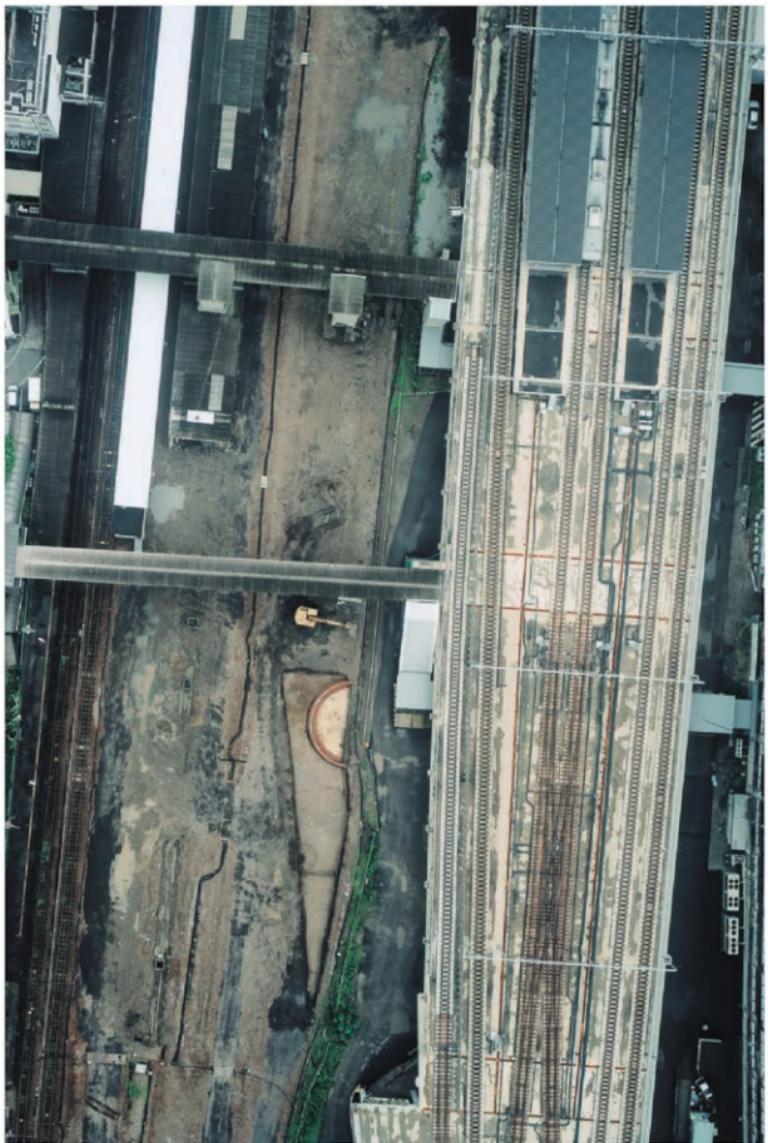
I 区（北西から）



I 区（西から）



II 区（北東から）



空中写真



全 景



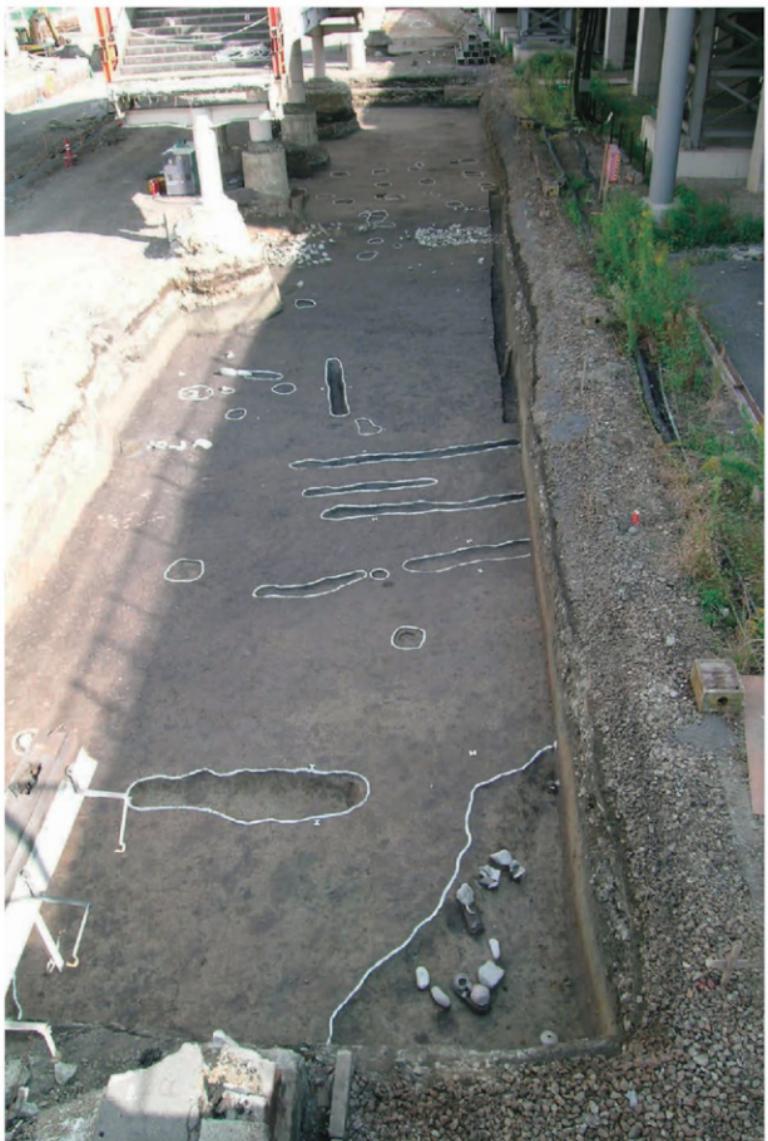
転車台坑全景



転車台坑の煉瓦積



転車台坑



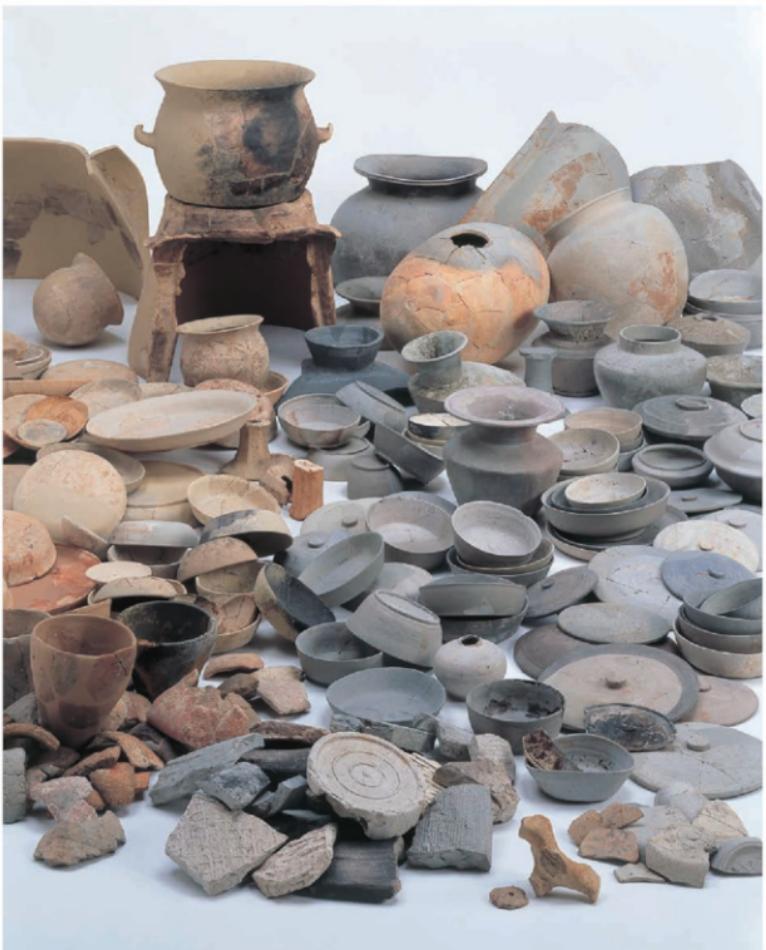
全景（西から）



南壁と南側石敷



SE01 全景（南から）



豆腐町遺跡出土遺物集合写真



SE01 出土遺物



SK02 出土遺物



石敷出土遺物



製塩土器



煮沸土器



土師器皿（灯明芯痕跡）



墨書土器



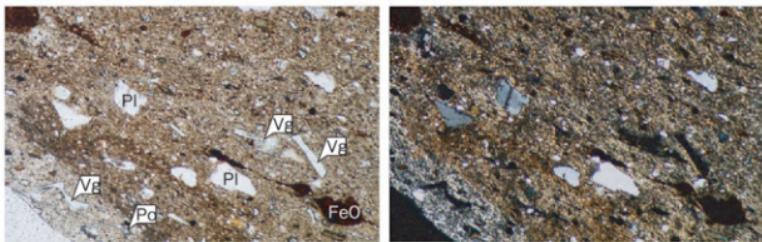
漆付着土器



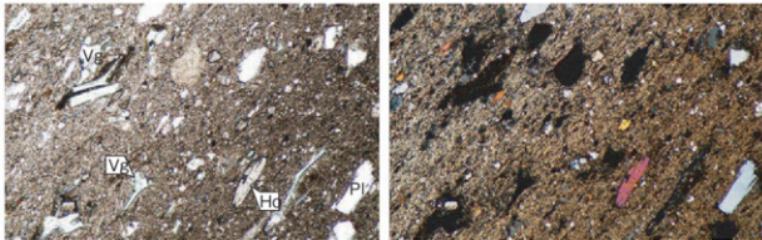
豆腐町遺跡出土遺物集合写真



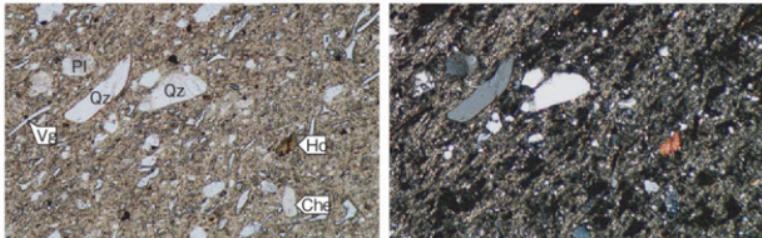
豆腐町遺跡出土須恵器集合写真



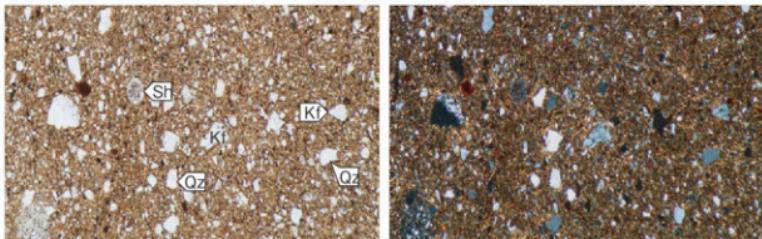
1. No.1 (土師器 杯 ネーミングNo.107)



2. No.2 (土師器 杯 ネーミングNo.136)



3. No.3 (土師器 杯 ネーミングNo.440)



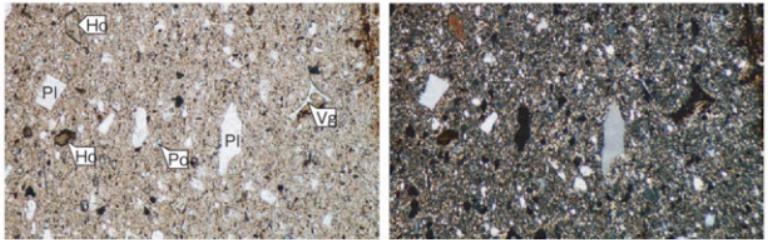
4. No.4 (土師器 杯 ネーミングNo.351)

Qz:石英,Kf:カリ長石,Pl:斜長石,Ho:角閃石,Che:チャート,Sh:真岩,

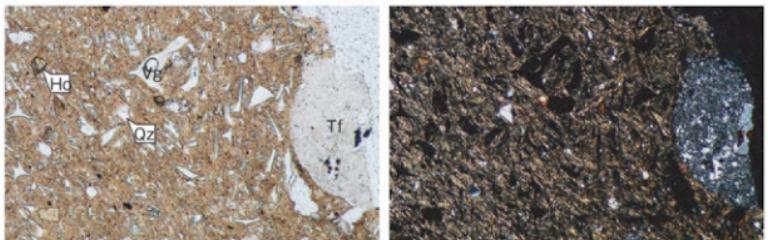
Vg:火山ガラス,FeO:酸化鉄,Po:植物珪酸体。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

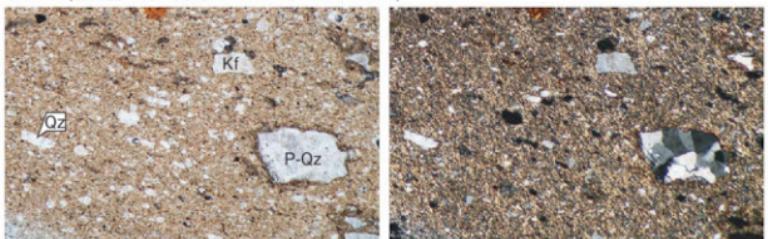
0.5mm



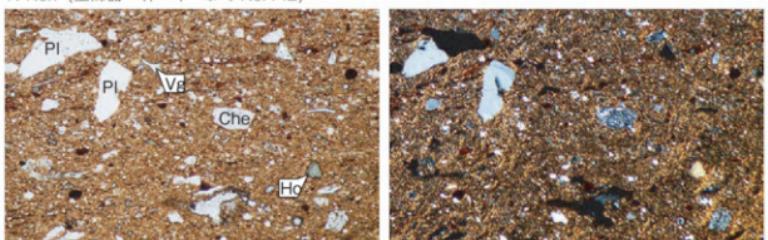
5. No.5 (土師器 杯 実測No.116 ネーミングNo.435)



6. No.6 (土師器 杯 実測No.155 ネーミングNo.32)



7. No.7 (土師器 杯 ネーミングNo.442)

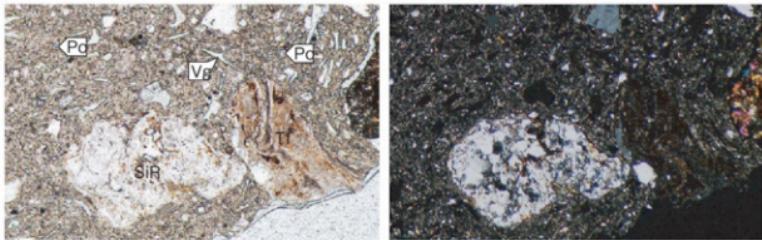


8. No.8 (土師器 杯 ネーミングNo.201)

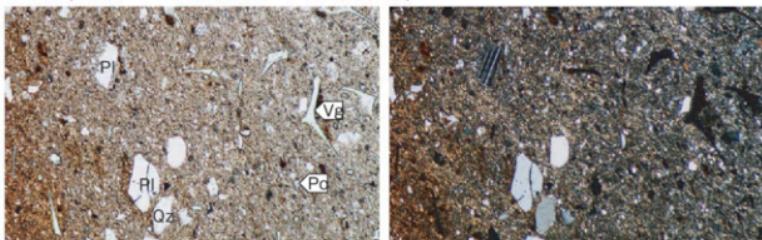
Qz:石英.Kf:カリ長石.PI:斜長石.Ho:角閃石.Che:チャート.Tf:凝灰岩.
P-QZ:多結晶石英.Vg:火山ガラス.Po:植物珪酸体.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

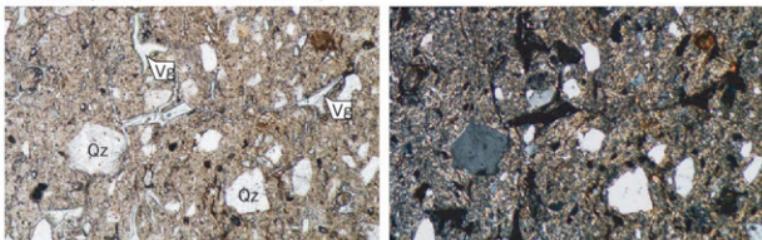
0.5mm



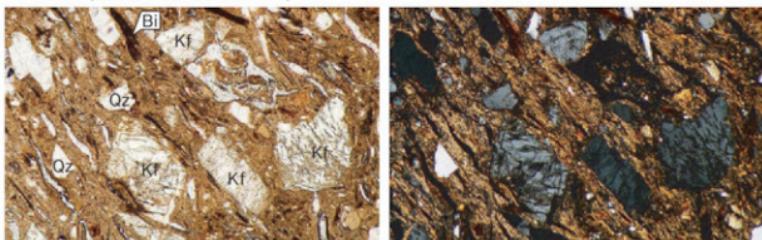
9. No.9 (土器器 杯 実測No.233 ネーミングNo.480)



10. No.10 (土器器 杯 ネーミングNo.116)



11. No.11 (土器器 槌 実測No.232)



12. No.12 (土器器 壺 ネーミングNo.353)

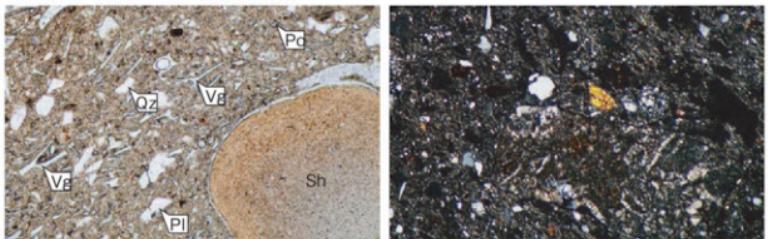
Qz:石英.Kf:カリ長石.PI:斜長石.Bi:黒雲母.Tf:凝灰岩.SIR:珪化岩.Vg:火山ガラス.
Po:植物珪酸体。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

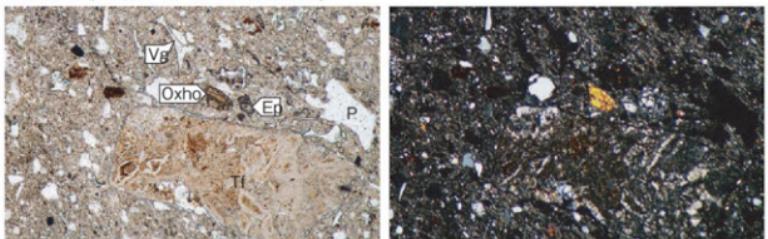
0.5mm



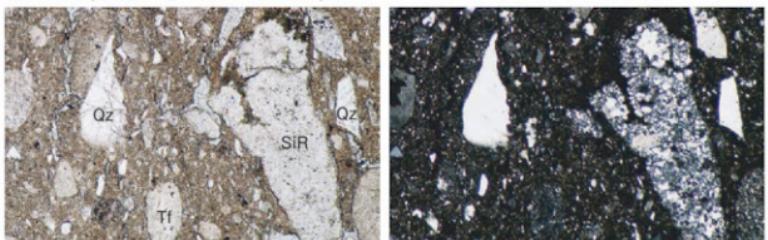
13. No.13 (土師器 魚 実測No.169)



14. No.14 (土師器 罐 ネーミングNo.421)



15. No.15 (土師器 罐 ネーミングNo.361)

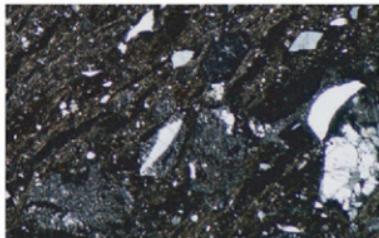
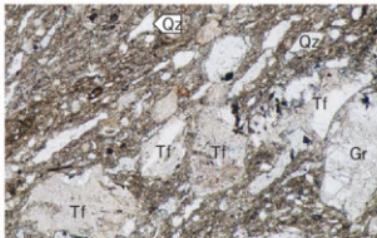


16. No.16 (土師器 製塙土器 ネーミングNo.289)

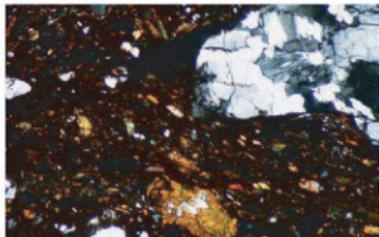
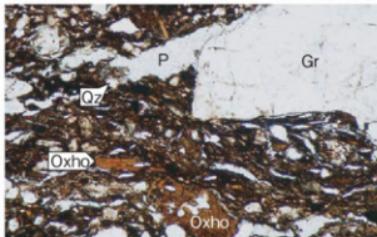
0.5mm

Qz:石英, Pl:斜長石, Oxho:酸化角閃石, Ep:緑レン石, Sh:頁岩, Tf:凝灰岩, SiR:珪化岩,
Vg:火山ガラス, Po:植物珪酸体, P:孔隙。

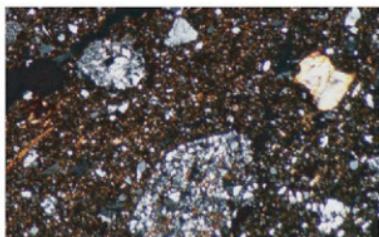
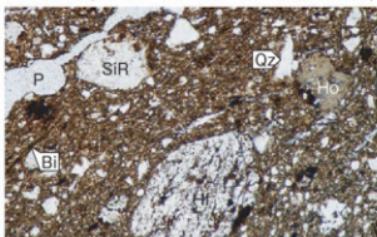
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



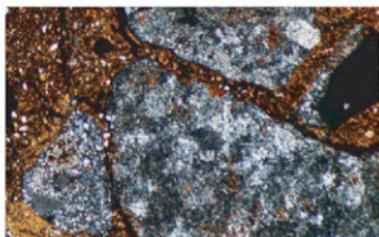
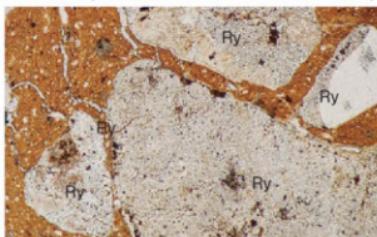
17. No.17 (土師器 製塙土器 ネーミングNo.410)



18. No.18 (土師器 製塙土器 ネーミングNo.432)



19. No.19 (土師器 製塙土器 ネーミングNo.432)



20. No.20 (土師器 製塙土器 ネーミングNo.432)

0.5 mm

Qz:石英, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, Bi:黒雲母, Tf:凝灰岩, Ry:流紋岩, Gr:花崗岩,

Hf:ホルンフェルス, SiR:珪化岩, P:孔隙。

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

例　　言

1. 本書は兵庫県姫路市豆腐町・南歛町（現駅前町）に所在する豆腐町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 豆腐町遺跡の調査は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所が計画・施工するJR山陽本線等連続立体交差事業に伴うものである。事業の進捗に伴って平成10年度から継続的に実施しているもので、今回の調査以前については2007年3月に「豆腐町遺跡Ⅰ」として兵庫県教育委員会から刊行している。本報告は書名を「豆腐町遺跡Ⅱ」とした。
3. 調査は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所の依頼を受けて、兵庫県立考古博物館が行った。
4. 確認調査は平成18年度に山田清朝・鈴木啓二が担当した。本発掘調査も平成18年度に渡辺　昇・長濱誠司が担当した。
5. 調査で使用した方位は国土地理院第V系を使用し、水準は兵庫県姫路土木事務所設定の3級基準点を使用した。
6. 全体図・I区転車台ならびに基準点測量は株かんこうに委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。
7. 遺構写真は調査員が撮影した。空中写真は株かんこうに依頼して撮影したものを使用した。
8. 整理作業は、兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所の依頼を受けて、平成20～22年度に兵庫県立考古博物館で行った。
9. 執筆は本文目次の通りで、編集は前山三枝子の協力を得て渡辺が行った。
10. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中1-1-1）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。ご活用ください。
11. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。
(敬称略・順不同)
姫路市教育委員会・兵庫県立歴史博物館・小西伸彦・秋枝　芳・大谷輝彦・小柴治子・中川　猛

本文目次

例言

第Ⅰ章	はじめに	(渡辺)	1
	第1節 調査に至る経緯		1
	第2節 既往調査の結果		1
	第3節 本発掘調査の経過		6
	第4節 整理作業の経過		7
第Ⅱ章	位置と環境		8
	第1節 地理的環境	(渡辺)	8
	第2節 歴史的環境	(渡辺)	8
	第3節 姫路駅の歴史	(長瀬)	12
第Ⅲ章	I 区の調査結果	(長瀬)	14
	第1節 概要		14
	第2節 遺構		14
	第3節 転車台坑の調査		14
	第4節 煉瓦		20
	第5節 転車台についての検討		26
	第6節 姫路機関庫の変遷と背景		31
第Ⅳ章	II 区の調査結果	(渡辺)	37
	第1節 概要		36
	第2節 II-1区の遺構		36
	第3節 II-2区の遺構		40
	第4節 遺物		41
第Ⅴ章	科学分析		70
	第1節 豆腐町遺跡II出土遺物の自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	70
	第2節 豆腐町遺跡における放射性炭素年代	(株式会社加速器分析研究所)	86
第VI章	おわりに	(渡辺)	89

挿図目次

図1	兵庫県・姫路市・豆腐町遺跡の位置	3	図13	側壁掘方内杭痕検出状況	17
図2	姫路駅周辺の主な遺跡と豆腐町遺跡調査地点	4	図14	煉瓦敷床面の枕木痕	18
図3	豆腐町遺跡調査位置図	5	図15	転車台坑使用煉瓦の刻印	23
図4	調査風景	6	図16	転車台周辺採集煉瓦の刻印	25
図5	調査風景	6	図17	中央支承台設置推定復原図	29
図6	整理作業風景	7	図18	円形軌条枕木推定復元図	30
図7	豆腐町遺跡の位置と周辺の遺跡	9	図19	石器・鉄器実測図	43
図8	壇場山古墳・山之越古墳	11	図20	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	77～80
図9	播磨国分寺	12	図21	胎土中の砂の粒径組成	77～80
図10	明治40年頃の姫路駅と調査区の位置	13	図22	碎屑物・基質・孔隙の割合	81
図11	I区の遺構	15	図23	暦年校正年代グラフ	88
図12	I区空中写真	16			

表目次

表1	豆腐町遺跡調査一覧表	2	表8	豆腐町遺跡II遺物観察表	44～69
表2	豆腐町遺跡周辺の遺跡	10	表9	樹種同定結果	70
表3	転車台坑使用煉瓦観察表	22	表10	胎土分析試料一覧および胎土分類	71
表4	県内所在山陽鉄道の構造物	26	表11	薄片観察結果	73～76
表5	発掘された転車台坑	27	表12	試料一覧	87
表6	40軒転車台の定規	28	表13	暦年校正年代	87
表7	出土木器計測表	43			

図版目次

- | | |
|---------------------------------|--|
| 図版1 調査区配置図 | 図版29 II - 1区遺構出土遺物実測図(4) |
| 図版2 I区平面図 | 図版30 II - 1区遺構出土遺物実測図(5) |
| 図版3 I区南壁断面図 | 図版31 II - 1区遺構出土遺物実測図(6) |
| 図版4 I区転車台坑実測図 | 図版32 II - 1区遺構出土遺物実測図(7) |
| 図版5 I区転車台模式図 | 図版33 II - 1区遺構出土遺物実測図(8) |
| 図版6 I区転車台坑中央支承台・集水溝実測図 | 図版34 II - 2区遺構出土遺物実測図(9) |
| 図版7 II - 1区平面図・西壁土層断面図 | 図版35 II - 1区流路出土遺物実測図(1) |
| 図版8 II - 1区上層水田実測図・中央部平面図 | 図版36 II - 1区流路出土遺物実測図(2) |
| 図版9 II - 1区南壁土層断面図 | 図版37 II - 1区流路出土遺物実測図(3) |
| 図版10 II - 1区SB01実測図 | 図版38 II - 1区流路出土遺物実測図(4)・包含層出土遺物実測図(1) |
| 図版11 II - 1区SB02・SA01・SA02実測図 | 図版39 包含層出土遺物実測図(2) |
| 図版12 II - 1区北側石敷・SE01・SE03実測図 | 図版40 包含層出土遺物実測図(3) |
| 図版13 II - 1区南側石敷・SE02実測図 | 図版41 包含層出土遺物実測図(4) |
| 図版14 II - 1区南側石敷南壁土層断面図・SE02実測図 | 図版42 包含層出土遺物実測図(5) |
| 図版15 II - 1区SK01・SK02 | 図版43 包含層出土遺物実測図(6) |
| 図版16 II - 1区SD01～SD05実測図 | 図版44 包含層出土遺物実測図(7) |
| 図版17 II - 2区平面図・遺構実測図(1) | 図版45 包含層出土遺物実測図(8) |
| 図版18 II - 2区北壁土層断面図 | 図版46 包含層出土遺物実測図(9) |
| 図版19 II - 2区SX06実測図 | 図版47 包含層出土遺物実測図(10) |
| 図版20 I区出土煉瓦(1) | 図版48 包含層出土遺物実測図(11) |
| 図版21 I区出土煉瓦(2) | 図版49 包含層出土遺物実測図(12) |
| 図版22 I区出土煉瓦(3) | 図版50 包含層出土製塙土器実測図 |
| 図版23 I区出土煉瓦(4) | 図版51 包含層出土瓦実測図(1) |
| 図版24 I区出土煉瓦(5) | 図版52 包含層出土瓦実測図(2) |
| 図版25 I区出土土管・鉄器実測図 | 図版53 包含層出土木器実測図(1) |
| 図版26 II - 1区遺構出土遺物実測図(1) | 図版54 包含層出土木器実測図(2) |
| 図版27 II - 1区遺構出土遺物実測図(2) | 図版55 包含層出土木器実測図(3) |
| 図版28 II - 1区遺構出土遺物実測図(3) | 図版56 包含層出土木器実測図(4) |

写 真 図 版 目 次

卷頭図版1	上	空中写真（南上空から）	写真図版5	上左	I区 転車台坑 側壁内盛土と端方断面（北から）
	下	空中写真（東上空から）		上右	I区 転車台坑 側壁端方断面(南半部)（東から）
卷頭図版2	上	空中写真（南西上空から）		中上	I区 転車台坑 側壁端方断面(北半部)（東から）
	下	空中写真（西上空から）		中下左	I区 転車台坑 側壁端方断面(東半部)（東から）
卷頭図版3	上	空中写真（北東上空から）		中下右	I区 転車台坑 側壁端方断面(西半部)（東から）
	下	I区空中写真（北西から）		下左	I区 転車台坑 側壁基礎の杭痕（1）
卷頭図版4	上	I区空中写真（西から）		下右	I区 転車台坑 側壁基礎の杭痕（2）
	下	II区空中写真（北東から）	写真図版6	上左	I区 転車台坑 側壁内面（西から）
卷頭図版5		I区空中写真		上右	I区 転車台坑 側壁積組の状況（北から）
卷頭図版6		I区全景		中上左	I区 転車台坑 側壁内面の煉瓦積（南から）
卷頭図版7	上左	I区転車台坑全景		中上右	I区 転車台坑 側壁外面の煉瓦積（東から）
	上右	I区転車台坑の煉瓦積		中下左	I区 転車台坑 側壁最下段の煉瓦積（1）
	下	I区転車台坑		中下右	I区 転車台坑 側壁外面の加工された煉瓦積（2）
卷頭図版8		II - 1区全景（西から）		下左	I区 転車台坑 側壁最下段の煉瓦積（2）
卷頭図版9	上	II - 1区南壁と南側石敷		下右	I区 転車台坑 煉瓦平面加工の状況
	下	II - 1区SE01全景（南から）	写真図版7	上左	I区 転車台坑 東側床面ボルト突出状況（東から）
卷頭図版10		豆腐町遺跡出土遺物集合写真		上右	I区 転車台坑 西側床面ボルト突出状況（東から）
卷頭図版11	上	SE01出土遺物		中上左	I区 転車台坑 北東床面ボルト突出状況（南から）
	下	SK02出土遺物		中上右	I区 転車台坑 ポルト1設置状況
卷頭図版12	上	石敷出土遺物		中下左	I区 転車台坑 ポルト1固定状況（1）
	下	製塙土器		中下右	I区 転車台坑 ポルト1固定状況（2）
卷頭図版13	上	煮沸土器		下左	I区 転車台坑 東側ボルト2設置状況（1）
	下	土師器皿（灯明芯痕跡）		下右	I区 転車台坑 東側ボルト2設置状況（2）
卷頭図版14	上	墨書き土器	写真図版8	上左	I区 転車台坑 床面西北部枕木の痕跡（南から）
	下	漆付着土器		上右	I区 転車台坑 床面南東部枕木の痕跡（南から）
卷頭図版15	上	豆腐町遺跡出土遺物集合写真		下	I区 転車台坑 枕木の痕跡とボルト1（東から）
	下	豆腐町遺跡出土須恵器集合写真	写真図版9	上左	I区 転車台坑 中央支承台 植出状況（1）（東から）
卷頭図版16		胎土薄片（1）		上右上	I区 転車台坑 中央支承台 植出状況（2）
卷頭図版17		胎土薄片（2）		上右下	I区 転車台坑 中央支承台上面（東から）
卷頭図版18		胎土薄片（3）		中左	I区 転車台坑 中央支承台基礎検査状況（北から）
卷頭図版19		胎土薄片（4）		中右	I区 転車台坑 中央支承台西側端方断面（北から）
卷頭図版20		胎土薄片（5）		下左	I区 転車台坑 中央支承台上面加工の状況
写真図版1		I区 姫路駅と調査区		下右	I区 転車台坑 中央支承台基礎（台石除去後）
写真図版2	上	I区 全景（西から）	写真図版10	上左	I区 転車台坑 溝橋の位置（東から）
	下左	I区 南壁断面（北西から）		上右	I区 転車台坑 溝橋全景（北東から）
	下右	I区 SD02（西から）		中上左	I区 転車台坑 溝橋排水口（北東から）
写真図版3	上	I区 転車台坑 北半部（1）（東から）		中上右	I区 転車台坑 側壁部土管設置状況（北東から）
	下	I区 転車台坑 北半部（2）（西から）		中下	I区 転車台坑 床面断面（北半部）（西から）
写真図版4	上	I区 転車台坑 北半部（3）（北から）		下	I区 転車台坑 床面断面（西半部）（北から）
	下	I区 転車台坑 完掘状況（東から）			

写真図版11	上	I 区 転車台坑 刻印煉瓦 (刻印1類)	写真図版24	上	II - 1 区 SE01検出状況 (南から)
	中上	I 区 転車台坑 刻印煉瓦 (刻印3類)		下	II - 1 区 SE01全景とSE03検出状況 (南から)
	中下	I 区 転車台坑 梯搗煉瓦	写真図版25	上	II - 1 区 SE01 (南から)
	下	I 区 転車台坑 調査風景		中	II - 1 区 SE01 (北から)
写真図版12	上	II - 1 区 全景 (西から)		下	II - 1 区 SE01土器出土状態
	下	II - 1 区 全景 (東から)	写真図版26	上	II - 1 区 SE01断ち割り
写真図版13	上	II - 1 区 西半全景 (東から)		中	II - 1 区 SE01断ち割り
	下左上	II - 1 区 第1面水田 (西から)		下	II - 1 区 SE01調査風景
	下右上	II - 1 区 第1面水田 (西から)	写真図版27	上	II - 1 区 SE03 (南から)
	下左下	II - 1 区 調査風景		下左上	II - 1 区 SE03 (南から)
	下右下	II - 1 区 調査風景		下左下	II - 1 区 調査風景
写真図版14	上	II - 1 区 中央部全景 (南東から)		下右上	II - 1 区 SE03断ち割り
	下	II - 1 区 SB01 (南東から)		下右下	II - 1 区 調査風景
写真図版15		II - 1 区 中央部(SB01・02, SA01・北から)	写真図版28	上	II - 1 区 SD01 ~ SD04 (北から)
写真図版16	上	II - 1 区 SB01 (南から)		下左上	II - 1 区 SD02アゼ (北から)
	下	II - 1 区 SB01・SB02 (北から)		下左下	II - 1 区 SD05アゼ (東から)
写真図版17	上左上	II - 1 区 P6		下右上	II - 1 区 SD03アゼ (北から)
	上右上	II - 1 区 P7		下右下	II - 1 区 SD03土器出土状態 (東から)
	上左下	II - 1 区 P8	写真図版29	上左上	II - 1 区 SD04アゼ (北から)
	上右下	II - 1 区 P30		上右上	II - 1 区 SD04土器出土状態 (北から)
	下左上	II - 1 区 P32		上右下	II - 1 区 SD05土器出土状態 (西から)
	下右上	II - 1 区 P35		下左上	II - 1 区 SK01 (北から)
	下左下	II - 1 区 調査風景		下左下	II - 1 区 SK01アゼ (北から)
写真図版18	上左上	II - 1 区 P5 (南から)		下右上	II - 1 区 SK01上層土器出土状態
	上左下	II - 1 区 P5 (南から)		下右下	II - 1 区 SK01土器出土状態 (南から)
	上右上	II - 1 区 P15 (南から)	写真図版30	上	II - 1 区 SK01・02 (北から)
	上右下	II - 1 区 P36 (南から)		下左上	II - 1 区 SK02 (北から)
	下	II - 1 区 南壁と南側石敷		下左下	II - 1 区 SK02 (北西から)
写真図版19	上	II - 1 区 南側石敷と北側石敷・SA02(北から)		下右上	II - 1 区 SK02土器出土状態
	下	II - 1 区 南側石敷と北側石敷・SA02(南から)		下右下	II - 1 区 SK02断面 (東から)
写真図版20	上	II - 1 区 南壁と南側石敷	写真図版31	上左上	II - 1 区 SK03・04 (北から)
	中	II - 1 区 南側石敷 (南から)		上左下	II - 1 区 SK03断面 (東から)
	下	II - 1 区 南側石敷 (北から)		上右上	II - 1 区 調査風景
写真図版21	上	II - 1 区 南側石敷 (東から)		上右下	II - 1 区 調査風景
	中	II - 1 区 南側石敷 (北から)		下左上	II - 1 区 包含層土器出土状態
	下	II - 1 区 SE02上面		下右上	II - 1 区 包含層土器出土状態
写真図版22	上	II - 1 区 SE02 (東から)		下右下	II - 1 区 包含層土器出土状態
	中	II - 1 区 SE02 (北から)	写真図版32	II - 2 区	全景 (東から)
	下	II - 1 区 SE02 (北から)	写真図版33	上	II - 2 区 全景 (東から)
写真図版23	上左上	II - 1 区 SE02下層集石		下	II - 2 区 全景 (西から)
	上右上	II - 1 区 SE02噴砂			
	下	II - 1 区 北側石敷 (北から)			

写真図版34	上	II - 2 区 北壁 (南東から)	写真図版46	SK01・02出土遺物
	下左上	II - 2 区 調査区から北東方向	写真図版47	SE01出土遺物
	下左下	II - 2 区 調査区から北東方向	写真図版48	SE01～03・北側石敷出土遺物
	下右上	II - 2 区 調査区から東方向	写真図版49	北側石敷出土遺物
	下右下	II - 2 区 調査風景	写真図版50	北側石敷出土遺物
写真図版35	上	II - 2 区 東端遺構 (南西から)	写真図版51	北側石敷・南側石敷出土遺物
	下左上	II - 2 区 SD01 (南から)	写真図版52	SX01～03出土遺物
	下左下	II - 2 区 SK03 (東から)	写真図版53	流路出土遺物 (1)
	下右上	II - 2 区 SK01 (南から)	写真図版54	流路出土遺物 (2)
	下右下	II - 2 区 SK03・SX06 (南から)	写真図版55	流路出土遺物 (3)・包含層出土遺物 (1)
写真図版36	上	II - 2 区 調査区西半 (南東から)	写真図版56	包含層出土遺物 (2)
	下左上	II - 2 区 SX01 (南から)	写真図版57	包含層出土遺物 (3)
	下左下	II - 2 区 SX01 (南から)	写真図版58	包含層出土遺物 (4)
	下右上	II - 2 区 SX02 (南から)	写真図版59	包含層出土遺物 (5)
	下右下	II - 2 区 SX02 (南から)	写真図版60	包含層出土遺物 (6)
写真図版37	上左	II - 2 区 SX03 (南から)	写真図版61	包含層出土遺物 (7)
	上右	II - 2 区 SX05 (南から)	写真図版62	包含層出土遺物 (8)
	中	II - 2 区 SX06 (北から)	写真図版63	包含層出土遺物 (9)
	下左	II - 2 区 SX06 (北から)	写真図版64	包含層出土遺物 (10)
	下右	II - 2 区 SX06 (南から)	写真図版65	包含層出土遺物 (11)
写真図版38	I 区	転車台 煉瓦 (刻印 1 類)	写真図版66	包含層出土製塙器
写真図版39	I 区	転車台 煉瓦 (刻印 2 類・佛描 1 類)	写真図版67	出土瓦 (1)
写真図版40	I 区	転車台 煉瓦 (佛描 1・2 類)	写真図版68	出土瓦 (2)
写真図版41	I 区	転車台 煉瓦 (佛描 2 類)	写真図版69	出土瓦 (3)
写真図版42	I 区	転車台 煉瓦 (刻印 3 類・その他)	写真図版70	出土木器 (1)
写真図版43	I 区	刻印 1 類 刻印 2 類 転車台周辺採集煉瓦 刻印	写真図版71 写真図版72	出土木器 (2) 出土木器 (3)
写真図版44	SA・SP・SD01～04・SX06	出土遺物	写真図版73	出土石器・鉄器・土管
写真図版45	SD04・05、SK01・02	出土遺物	写真図版74	木材

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

特別史跡姫路城跡は播磨国を治める居城として構築されたもので、姫山を中心に城郭が並ぶ平山城である。その南側一帯に城下町が広がっている。現在の姫路駅北側に外堀が存在し、そこまで城下町が広がり、その南側には町屋があった。江戸時代には当然姫路城を中心とした町割り・都市計画がなされていたが、近代になって外堀が埋められ、鉄道・自動車道整備が進められることになり、鉄道敷設と道路整備が行われる。

鉄道は兵庫から姫路まで開通し、さらに西に延び山陽本線となり、さらに播但線・姫新線や現在の山陽電鉄も敷設される。当然平面交差しており、姫路市街地の南側に大きな南北方向の障壁となっている。南北方向には旭橋と大将軍橋によって、線路と道路が立体交差して通っていたが慢性的な交通渋滞になっていた。それを解消するために高架事業が計画された。

調査は、すべて兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所から調査依頼があり、平成7年度から継続的に調査を行っている。調査は兵庫県教育委員会が調査主体となり、埋蔵文化財調査事務所（組織の改編により平成19年度から兵庫県立考古博物館）が担当した。調査年度や調査地区・担当者は表1の通りである。

第1期工事として山陽本線の高架工事部分の調査を終了し、整理作業も平成18年度に「豆腐町遺跡Ⅰ」を刊行して作業を終了している。引き続き姫新線高架部分について調査を平成18年度に実施した。その成果が本書であり、「豆腐町遺跡Ⅱ」とする。

第2節 既往調査の結果

調査は埋蔵文化財調査事務所が調査主体となり、5カ年にわたって9570m²の調査を行った。その結果、弥生時代から平安時代にかけての官衙的な遺跡と中世の集落跡、近世城下町と近代鉄道の遺構が検出された。東からA～E区に分けてある。近代になると鉄道が敷設され、その関連の遺構が全域で見られる。鉄道前は全体に水田であったようである。

A区は東端の調査区で、今回調査区のⅡ区に接している。旧河道SR01も今回調査したSR01と同一遺構である。弥生時代後期までにある程度埋没し窪み状となっており、古墳時代にさらに埋まり、奈良時代に廐棄場として大量の遺物が入れられたと思われる。周辺部文は奈良時代に官衙遺構が築かれ、掘立柱建物・井戸・土坑が検出されている。中世にも小規模集落があったようだが明瞭ではない。近世になると水田として利用されていたが、掘立柱建物が1棟確認され、農作業に伴う小屋と考えられている。

B区では弥生時代と奈良時代の溝が確認されている。軽鍤車や縄文土器も出土している。中世の集落が確認されており、掘立柱建物や焼土坑・溝が検出されている。近代では生野の銀を姫路港に運ぶ馬車道の付帯施設の可能性が高い。

C区では弥生時代前期の溝と土坑が検出され、SD02は中期の溝で、窪み状になっていたところに奈良・平安時代の遺物が多数混じて埋められている。奈良・平安時代にはビット・土坑はあるものの明確でない。C区では近代の遺構がメインである。今回調査した次の機関車転車台と扇形機関車庫が調査されている。絵葉書などにも残っているもので、良好な資料である。隣接地が今回の調査区Ⅰ区であ

る。

D区は筋磨街道に面した部分である。弥生時代は後期を中心とする土坑が数基調査されている。奈良時代は井戸と溝・埋甕・土坑が検出されている。中世の遺構は西端に限られ、掘立柱建物・池跡・土坑が調査されている。池跡は石組などが見られないが、土師器皿を大量に投棄する点は共通している。

E区は既存建物があったことから遺構の残存状況は悪い。奈良時代の井戸・土坑・溝が検出されているが、建物は確認されていない。井戸からは古代銭貨が出土している。

F区はE区の北側に位置している。西半は残存状態が悪い。弥生時代の遺構は土坑・ピットだけである。奈良時代は掘立柱建物・土坑・溝が検出されている。掘立柱建物では建て替えが確認されている。中世の遺構が最も多く検出されている。やはり掘立柱建物・土坑・溝が検出されている。

出土遺物は多く、主に旧河道から大量に出土している。墨書き器・漆付着土器が多いのが特徴である。二彩や瓦・棟樋・古代銭貨なども特徴的な遺物である。また、姫路市教育委員会の調査では漆紙文書が出土していることは特記されよう。

表1 豆腐町遺跡調査一覧表

年度	遺跡調査番号	所在地(姫路市)	調査種別	担当者	期間	面積(m ²)	調査箇所	
H7	950276	豆腐町322	他	確認	種定淳介	平成7年10月25日～10月27日、11月13日～11月14日	60	7a・1G～15G
	950389	豆腐町322	他	確認	種定淳介	平成8年2月5日～2月7日	48	7b・1G～12G
H10	980050	豆腐町322	他	本発掘	岡田章一・井本有二 松岡千寿	平成10年5月22日～8月12日	2300	B区
	980131	豆腐町		確認	多賀茂治	平成10年9月7日～9月11日	180	10・1T～7T
	980177	豆腐町		確認	多賀茂治	平成10年11月10日～11月13日	310	10・8T～15T
	980200	豆腐町		確認	多賀茂治	平成10年12月14日～12月16日	240	10・16T～21T
	980210	豆腐町		本発掘	水口富夫・佐々木俊彦 多賀茂治	平成11年1月5日～3月8日	3556	A区
	980241	豆腐町		確認	多賀茂治	平成11年2月8日～2月9日	88	10・22T～24T
	980242	南畠町		確認	多賀茂治	平成11年3月4日～3月5日	28	10・4G～6G
H11	990010	豆腐町		本発掘	水口富夫・松岡千寿	平成11年5月10日～8月16日	2211	C区
	990247	南畠町		確認	多賀茂治	平成11年11月8日～11月10日	32	11・8G
	990319	南畠町	他	確認	多賀茂治	平成12年3月1日～3月2日	46	11・1T～6G
H12	2000281	南畠町1丁目 86・100・ 110～112		本発掘	中川 渉・松岡千寿	平成12年5月22日～8月11日	539	D・南区・E区
	2000295	南畠町1丁目 87・89		本発掘	中川 渉・松岡千寿	平成12年10月17日～平成13年3月16日	389	D・中区
	2000344	南畠町1丁目109		本発掘	多賀茂治	平成13年1月22日～3月16日	477	F区
	2000371	南畠町1丁目95		確認	中川 渉	平成13年2月27日	8	12・1G～2G
H13	2001047	南畠町		確認	多賀茂治	平成13年4月24日	8	13・1G～2G
	2001090	南畠町1丁目92		本発掘	森内秀造・久保弘幸	平成13年7月9日～8月10日	98	D・北区
H18	2006064	駅前町		確認	山田清朝・鈴木敬二	平成18年5月26日～5月30日	60	18・1T～4T
	2006103	駅前町		本発掘	渡辺 昇・長濱誠司	平成18年8月28日～11月17日	1,063	18年度 I・II区

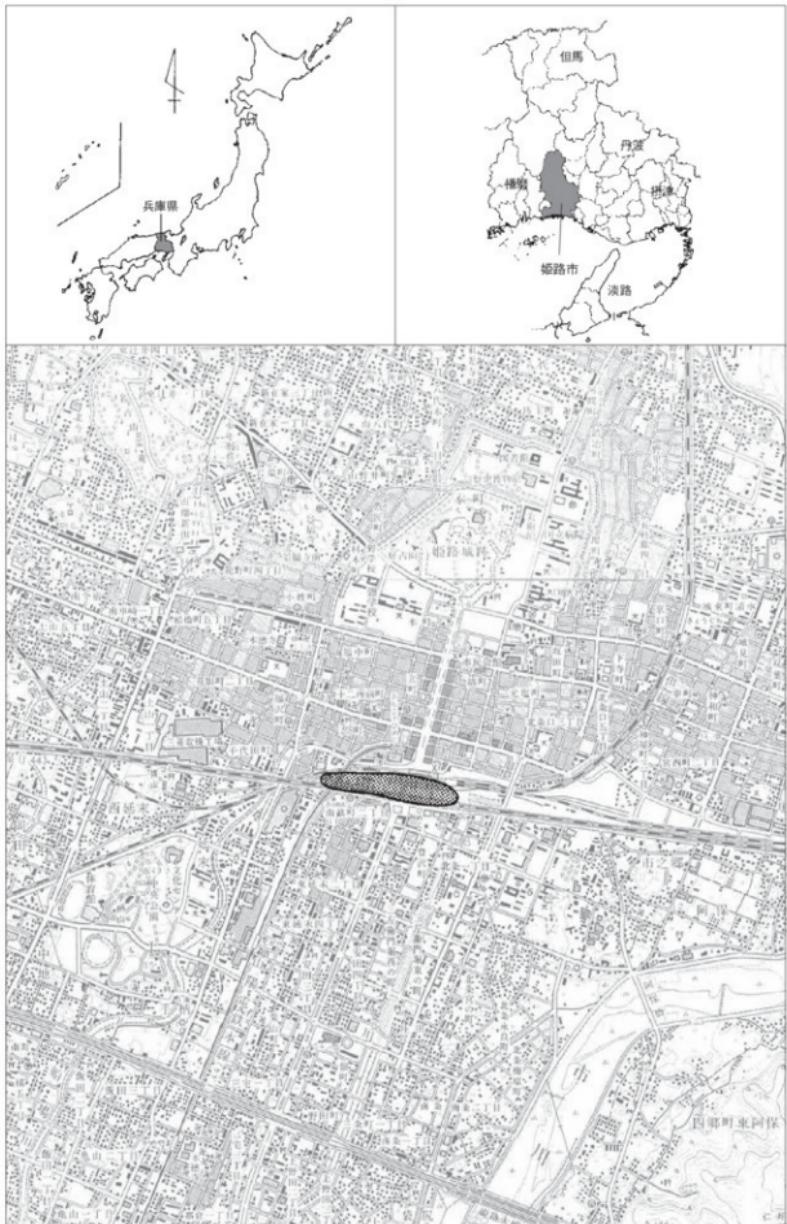


図1 兵庫県・姫路市・豆腐町遺跡の位置



図2 姫路駅周辺の主な遺跡と豆腐町遺跡調査地点

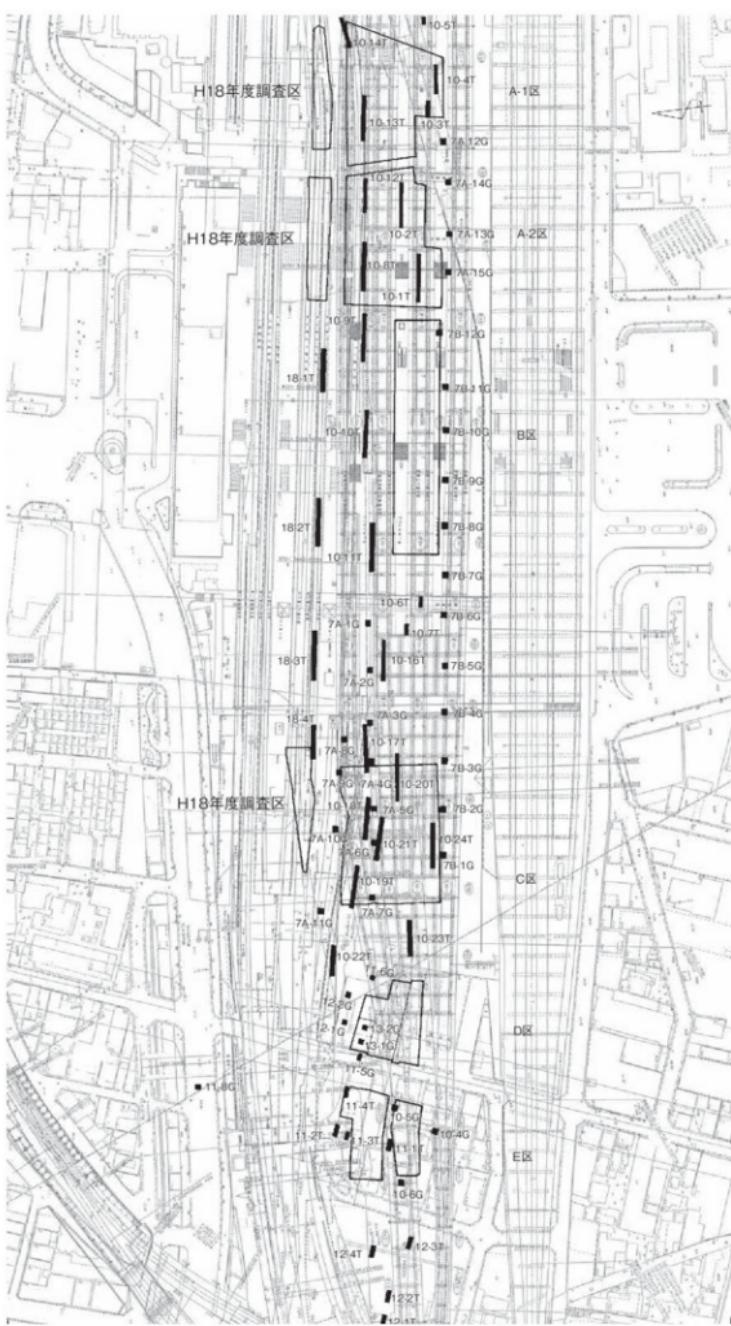


図3 豆腐町遺跡調査位置図

第3節 本発掘調査の経過

既往の調査地点に隣接する部分で十分に遺跡の広がりは予測されたが、鉄道敷設工事などで遺跡が残存していない可能性もあったので、平成18年5月に確認調査を実施し、その結果を受けて本発掘調査を実施した。I区は「豆腐町遺跡I」C区北側に位置し、II-1区は「豆腐町遺跡I」A-2区北側、II-2区は「豆腐町遺跡I」A-1区北側に位置している。調査区は近接しているものの、接点があるわけではなく、数mの余白（未調査）地域が存在する。

8月11日現地打ち合わせを行ったのち、地下埋設物の有無を確認するためのトレンチ調査を翌週の18日に実施した。人力掘削でI区の調査を行い、すでに確認されている電線ケーブル以外は認められなかつた。そのことから、機械掘削を21日から開始し、断面清掃や監督員詰所設置などと平行して人力掘削は2日遅れて開始した。確認調査で検出した機関車転車台以外は明瞭な遺構は検出されなかつた。姫路駅初代転車台で保存協議を経て、未調査部分の調査も10月末から行った。空中写真と転車台の写真測量を㈱かんこうに委託して行った。同様の方法でII-2区は9月14日に確認調査を行い、17日から調査を開始した。II-1区は10月7日にトレンチ調査を行い、2地区合わせて10月24日に空中写真を撮影した。中間検査は11月10日に行い、17日に引き上げた。



図4 調査風景

調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 平岡憲昭

主幹兼総務課長 若生晃彦

主幹 池田正男

総務課 事務職員 九野真衣

企画調整班 主査 柏原正民

調査第1班 調査専門員 吉田 畿

調査担当 調査第1班 担当課長補佐 渡辺 畿

主査 長濱誠司

調査参加者 森本文子・赤堀千恵子・前田陽子・藤田 泉



図5 調査風景

第4節 整理作業の経過

整理作業は発掘調査段階から順次行っていた。埋蔵文化財事務所は組織の改編で兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部となる。現場事務所では一部の土器洗浄と台帳作成を実施した。それ以降の作業は平成21年度から平成22年度の2カ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。平成21年度は水洗い作業から実測作業までを、平成22年度は写真撮影・復原作業・トレース作業・保存処理と原稿執筆・レイアウトを行い、報告書を刊行した。保存処理は整理保存課主査岡本一秀が担当した。

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県立考古博物館

館長 石野博信

埋蔵文化財調査部長 若生晃彦

主幹 吉田 昇（平成22年度）

総務課 課長 前川浩子

主査 大西晃彦（平成21年度）

事務職員 川原聰介（平成22年度）

整理保存班 調査専門員 森内修造（平成21年度）・村上泰樹（平成22年度）

（課） 担当課長補佐 岡田章一

主査 莊田淳子（平成21年度）・篠宮 正・山本 誠（平成22年度）

調査担当 担当課長補佐 渡辺 昇

主査 長濱誠司

嘱託員 前山三枝子・吉田優子・佐伯純子・加藤裕美・又江立子

保存処理 主査 岡本一秀

嘱託員 長濱重美・前田恵梨子・浜脇多規子・桂 昭子



図6 整理作業風景

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

豆腐町遺跡は姫路市豆腐町に所在する遺跡である。調査手段階ではJR姫路駅構内に位置している。姫路平野の中心にあたり、市川によって開拓された平野である。東西9.8km、南北7.5kmの兵庫県で最も広い平野である。市川及び船場川の氾濫原であり、平地であるものの地下は旧河道と微高地が複雑に存在している。姫路城跡の東外堀である三左右衛門堀（川）は一時期（豆腐町遺跡盛行期）の市川本流と考えられる。現在の市川は姫路城下町設立時になってからである。船場川も現在は紙堀で市川から分かれているが、ある時期の氾濫でつながったものと思われる。本来は大野川から流れてきた河川と考えられる。小河川であるが、周辺の微高地に多数の遺跡を営んだ重要な河川である。肥沃な可耕地を提供していた証拠であろう。「播磨國風土記」の記載では市川は小川とあり、西側に大川があるとされている。大川は船場川に比定されている。船場川は手柄山に当たり、その付近から遺跡は増加し蛇行して南流する。

第2節 歴史的環境

旧石器時代の良好な調査例は、姫路市ではほとんどない。溜池を中心とする表面採集が多く、丘陵上からも採集されている程度である。近隣ではたつの市御津町碇山南山遺跡で調査例がある。豆腐町遺跡近くでは手柄山北丘遺跡で黒曜石とサスカイト製の尖頭器が出土している。縄文時代早創期に下る石器である。

縄文時代になっても遺跡数は余り知られていない。辻井遺跡で戦前に人骨が調査されたことが著名である。中期の墓域であり、土壙墓・袋状ピットなども調査されている。人骨以外に犬の骨も出土している。中期の遺跡は八代深田遺跡など少なく、後期になると今宿丁田遺跡でまとまって出土している。波状口縁や磨消縄文など装飾に富んだ土器群である。それ以外に本町遺跡などでも土器は出土しているが、依然遺跡数は数える程度である。飛躍的に遺跡数が増加するのは晩期になってからである。標高5m以下の低地で晩期の遺跡が増え、弥生時代に受け継がれる。姫路平野ではこのような状況であるが、西側に行くと遺跡はやや顯著である。菅生川沿いの六角遺跡では晩期の住居跡が調査されている。大津茂川沿いには中期から晩期まで継続する丁柳ヶ瀬遺跡があり、さらに西の林田川沿いには前期の住居跡を調査した片吹遺跡がある。

弥生時代になると遺跡数は増大する。縄文晩期土器を出土した姫路平野低地の遺跡の多くから弥生前期の土器が出土している。姫路駅周辺の千代田遺跡・本町遺跡・市之郷遺跡・小山遺跡などで古くから前期の調査例がある。「日本農耕文化の生成」に記載されていることもあって、全国的にも知られている。辻井遺跡も弥生時代を通しての集落で中心集落である。今宿丁田遺跡・名古山遺跡では銅鐸鋳型が出土しており、銅鐸生産の可能性があり注目されている。銅鐸や同じく祭器とされる石劍は平野部からは出土しておらず、山間部から出ていることは注目される。飾西東山遺跡など高地性集落も広がっている。中期後半より後期の遺跡数の方が多いのも播磨の特徴であろう。

姫路平野の遺跡は比較的全期間を通して継続している遺跡が多い。市之郷遺跡は母集落で全期を通して遺構が検出されている。居住域と墓域が調査されていることも重要で、古墳時代から古代へと続いていく一大集落である。宮山古墳の初期須恵器との関連から古墳時代中期後半の市川下流域の中心集落と



図7 豆腐町遺跡の位置と周辺の遺跡

表2 豆腐町遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代	No.	遺跡名	所在地	遺跡の時代
1	豆腐町遺跡	姫路市豆腐町	弥生～平安	29	手柄山南丘古墳群	姫路市西延末	古墳
2	南畠町遺跡	姫路市南畠町	弥生	30	小山遺跡	姫路市延末	弥生～古墳
3	千代田遺跡	姫路市町	縄文～弥生	31	黒表遺跡	姫路市東延末	弥生～古墳
4	西延末遺跡	姫路市西延末	弥生	32	吉屋敷遺跡	姫路市手柄1丁目	弥生～古墳
5	手柄山北丘遺跡	姫路市西延末	弥生～古墳	33	浜田遺跡	姫路市手柄	弥生
6	橋詰遺跡	姫路市延末	縄文～古墳	34	竹の前遺跡	姫路市手柄	弥生～古墳
7	村潤遺跡	姫路市延末1丁目	弥生	35	三宅遺跡	姫路市飾磨区三宅	奈良
8	君田遺跡	姫路市東延末	弥生	36	ヒジ倉遺跡	姫路市飾磨区阿成	古墳～中世
9	豊沢遺跡	姫路市豊沢町	弥生	37	船場川町区整地跡第3地点	姫路市飯田	縄文～中世
10	北条遺跡	姫路市北条	弥生～古墳	38	長越遺跡	姫路市飯田	弥生～中世
11	阿保道路第1地点	姫路市阿保	平安～中世	39	郭東遺跡	姫路市中地	弥生
12	阿保道路第2地点	姫路市阿保	弥生～中世	40	東久保遺跡	姫路市中地南町	弥生
13	市之郷遺跡	姫路市市之郷	弥生～中世	41	大町遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	弥生
14	本町遺跡	姫路市本町	縄文～近世	42	大塚遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	古墳
15	姫路城跡	姫路市本町	近世	43	真福寺遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	縄文～弥生
16	姫路城下町跡	姫路市本町	近世	44	丁田遺跡	姫路市町坪・中地	弥生～古墳
17	野里門下層遺跡	姫路市鍛町	縄文～弥生	45	中ノ町遺跡	姫路市玉手	弥生
18	富士才遺跡	姫路市八代	弥生	46	西久保遺跡	姫路市中地南町	弥生
19	御茶屋町遺跡	姫路市八代	弥生	47	中地天神遺跡	姫路市中地南町	弥生～中世
20	東山燒窯跡	姫路市山野井町	近世	48	権現遺跡	姫路市中地南町	縄文～弥生
21	八代深田遺跡	姫路市南八代町	弥生	49	カスカエ遺跡	姫路市飯田	弥生～中世
22	岩端町遺跡	姫路市岩端町	弥生	50	構遺跡	姫路市飾磨区構3丁目	縄文～弥生
23	名古山遺跡	姫路市名古山町	弥生	51	船場川町区整地跡第2地点	姫路市飯田	縄文～古墳
24	辻井遺跡	姫路市辻井1～7丁目	縄文～奈良	52	船場川町区整地跡第5地点	姫路市飯田	弥生～古墳
25	今宿遺跡	姫路市西今宿5丁目	奈良～中世	53	船場川町区整地跡第3地点	姫路市飯田	平安
26	今宿丁田遺跡	姫路市東今宿1～4丁目	縄文～奈良	54	大鳥遺跡	姫路市飯田	縄文
27	八反長遺跡	姫路市岡田	弥生	55	石ヶ坪遺跡	姫路市龜山	縄文～弥生
28	堂田遺跡	姫路市岡田	縄文～弥生				

考えられている。周辺部では中期からの遺跡が多く見られる。縄文晩期の住居を検出した六角遺跡も前期はなく断続して集落を再開し、古墳時代まで継続する。国分寺台地遺跡・和久遺跡も中期からの集落である。国分寺台地遺跡は石器製作も行った可能性があり、北側の八幡遺跡は方形周溝墓群を早い時期に調査されている。大津茂川流域の中心集落だった丁柳ヶ瀬遺跡は中期後半で断絶し、和久遺跡に引き継いだのではないかと思われる。和久遺跡は兵庫県で最も多くの堅穴住居跡を検出した遺跡で、古墳時代まで継続する。建て替えが多く堅穴住居跡の密度は際立っている。庄内期に遺跡の中心があり、他地域からの搬入品も多い。姫路平野南側の長越遺跡・船場川東遺跡群も庄内期を中心とする遺跡である。長越遺跡はこの時期の開発集落と思われ、庄内窯を作り、周辺に配布したと思われる。庄内期だけの単純遺跡である。それに比べて対岸の船場川東遺跡群は前期から生活をはじめ、後期に集落を拡大する。環濠を掘り構を作った大型居館を築いている。大形の周溝墓も調査されており、古墳に引き継がれる要素がある。手柄山北丘遺跡では石棺など後期の墓が存在する。船場川流域には弥生前期から庄内期まで多数の遺跡が確認されている。

庄内期になると、播磨産庄内窯を生産しており、長越遺跡・船場川東遺跡群を中心に拡散し、和久遺



図8 塙場山古墳・山之越古墳

跡から太子町域の鶴石田遺跡・鶴遺跡・上構遺跡に広がっていく。古墳時代はじめの古墳は横山7号墳と丁瓢塚古墳がある。ともに前方後円墳である。横山7号墳は全長30mであるが、丁瓢塚古墳は98mと大型である。

バチ型前方後円墳で箸墓古墳との関連が窺われる。中期になると国分寺台地の塙場山古墳が市川流域の首長墓として築かれる。全長142mを測り陪塚を持ち、3段築成で盾型周濠を有する。隣接する次代の首長墓である方墳の山之越古墳とともに竜山石製の長持形石棺を所有していた。市川左岸の国分寺台地から南に築かれた宮山古墳があり3基の竪穴石室を埋葬主体とし、豊富な副葬品を保有していた。装飾太刀や鍍金した垂飾付き耳飾り・指輪・玉類と初期須恵器と他に例がない内容であった。加耶との関連が想定される古墳で、市川西側の市之郷遺跡の韓式土器との関係が興味深い。

後期古墳は平野周辺部の山塊・山麓に築かれる。近くでは手柄山や姫路城跡がある鶯山に古墳が構築されている。北側山麓には山崎山・名古山などに横穴式石室が認められる。大型の横穴式石室も北側に見られる。北平野の御奥塚古墳は家形石棺を内包した典型的な横穴式石室である。以前、ゴーランドも調査した良く知られた古墳である。全長11.7mの両袖式で竜山石製の組み合わせ石棺である。北西方向の市川沿いに近い低幅に椎現山古墳がある。全長14mの大型石室である。群集墳は大市の西脇古墳群が最大数で、その他阿保古墳群が群集墳である。姫路平野周辺ではなく、離れた丘陵部に群集墳は築かれている。

奈良時代になると本町遺跡一帯に播磨国府が置かれ、市川東側に播磨国分寺・播磨国分尼寺が建立される。豆腐町遺跡も国府の雑舎の1つではないかと思われる。山陽道は現在の西側は県道姫路路上郡線、東側は県道神戸加古川姫路線と考えられており、北側を東西に走っている。



図9 播磨国分寺

第3節 姫路駅の歴史

姫路駅周辺鉄道高架事業の進捗により、山陽本線に引き続いて播但・姫新線が高架化され、2008(平成20)年12月23日に新しい姫路駅が完成した。姫路駅の歴史はその120年前の1888(明治21)年12月23日、兵庫県最初の私設鉄道である山陽鉄道の駅として始まった。

鉄道は幕藩体制から近代国家へ生まれ変わった明治政府にとって国内統治に不可欠なツールであった。播磨・摂津・但馬・丹波・淡路の旧5ヶ国を統合して1876(明治9)年に誕生した兵庫県にとって、神戸の県庁から全県を掌握するには移動時間を縮めることが最適であり、その手段として鉄道敷設が提唱された。これが山陽鉄道の始祖となる。姫路は大國であった播磨国の中心であり、各地域を結ぶ街道が放射状に延びていた。また姫路を通過する瀬戸内航路や山陽道は物流の大動脈でもある。姫路では兵庫県に統合された飾磨県の再置の声も大きい。そのためにも神戸との距離感を縮める必要があった。

再び鉄道敷設の機運が高まつたのは1885(明治18年)である。兵庫・姫路間の鉄道として政府に申請したが、政府としても山陽路に幹線鉄道を敷設する重要性は認識しており、下関までの敷設を条件に認可した。つまり、山陽鉄道は兵庫県内の地方鉄道と、西日本の幹線鉄道との2面を併せ持つことになったのである。

1888(明治21)年1月に山陽鉄道会社が設立された。6月に起工した敷設工事は急ピッチで進められ、11月には兵庫・明石間、翌12月に明石・姫路間が開業した。姫路駅は本屋および附属建物の他に、機関車庫、客車庫を備える二等駅に位置づけられていた。ただし駅本屋やホームは仮設で開業し、盛大な開業式典は行われなかったようである。施設は順次整備された。神戸・姫路間の開業は当初の目標であったものの、山陽鉄道会社にとっては1891(明治24)年までに岡山まで開通させることが第1の目標であ

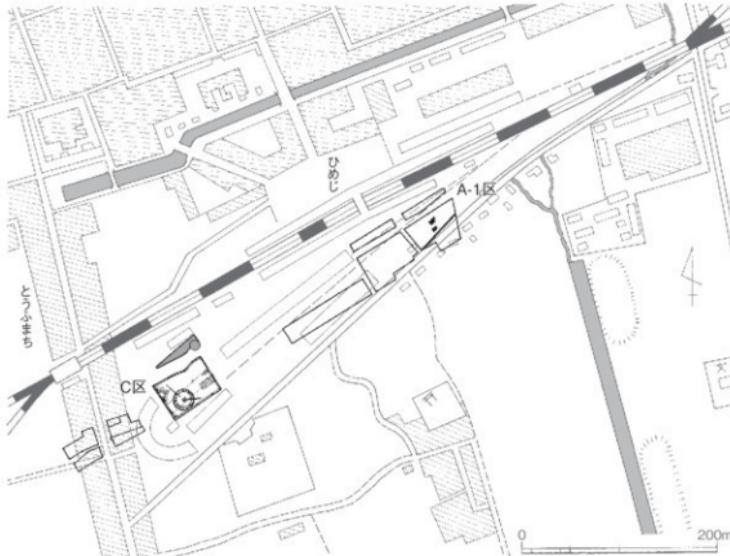


図10 明治40年頃の姫路駅と調査区の位置 (姫路市史第十二巻 19図)

り、多額の建設費や採算性など多くの問題を抱えていた。姫路はあくまで通過点だったのである。

翌1889(明治22)年には官設鉄道の新橋・神戸間が開業、山陽鉄道兵庫・神戸間も開業し、幹線鉄道の骨格がほぼできあがる。この年、姫路は市制が施行され、県立尋常中学校が設置される。その後、1901(明治34)年に高等師範学校、1898(明治31)年に第10師団が設置される。1903(明治36)年陸軍大演習の明治天皇の行幸に合わせて姫路城内の師団司令部まで駅前が整備される。学校や師団が県庁所在地以外の都市に置かれる例は少なく、姫路が城下町から近代都市に脱皮するのに鉄道の果たした役割は大きかったことがわかる。

1895(明治28)年には生野鉱山と飾磨港とを結ぶ播但鉄道(後の播但線)が開業し、姫路の東西南北に鉄道が敷設される。山陽鉄道は1901(明治34)年下関まで開業を果たした後、1903(明治36)年播但鉄道の買収を経て、1906(明治39)年鉄道国有法公布により国有化され、会社は解散となった。

1923(大正12)年私設の電気鉄道である神戸姫路電鉄(後の山陽電気鉄道)が明石・姫路間を開業、姫路駅前に駅を設置し、その後瀬戸内沿岸部を経て明石・神戸地域とを結ぶ鉄道に発展する。

昭和に入ると駅の機能が東側へ拡大し、機関車や貨物操車場が水田を埋立て設置される。1936(昭和11年)姫津線(後の姫新線)が全線開通し、播磨北西部を経て津山とを結ぶ。鉄道の電化も進み、1958(昭和33)年西明石・姫路間、翌年には岡山まで電化される。これと時を同じくして姫路駅の駅舎は「民衆駅」として整備され、私鉄、バスターミナルを統合した新たな玄関口となる。

1972(昭和47)年には山陽新幹線が岡山まで開通し新幹線姫路駅が開業する。その後旅客の長距離大量輸送は新幹線に移行し、山陽本線は貨物と近距離旅客輸送を担うこととなる。それでも姫路駅は新幹線「のぞみ」の一部や特急の停車駅であり、兵庫県西部のターミナルとしての地位は今日でも不動である。

第Ⅲ章 I 区の調査結果

第1節 概要

調査区は平成11年度調査(遺跡調査番号:990010)のC区北側に位置する。ただし当調査区とC区は連続せず、図上で10m前後の空白が生じている。

C区の調査では弥生・奈良・平安と近代の3時期の遺構が検出されている。弥生時代は微高地で土坑、微高地と自然流路状のくぼみとの境界付近で前期の溝を検出している。奈良・平安時代の遺構は、柱穴群、土坑を検出した。近代の遺構はJR山陽本線の前身である山陽鉄道から国鉄に至る機関庫(区)関連の遺構である(註1)。

調査区の基本層序は、表土以下、1888(明治21)年の姫路停車場開業以来の鉄道建設による盛土、それ以前の旧水田面、自然流路状のくぼみの堆積土、基盤層となる。遺構検出面は基盤層直上である。

鉄道建設に伴う盛土は、転車台用達廃止後の石炭ガラによる盛土層と山陽鉄道敷設時と推定する盛土層に大別できる。後者の上面は標高10.4m前後を測り、煉瓦片や礫を含む層と含まない層がある。なお姫路駅の造成においては城外周の土塁を切り崩してその土を用いたとされる(註2)。

第2節 遺構

当調査区の西端付近は微高地の縁辺にあたりが、大半は擾乱により損なわれて弥生時代と推定する溝を1条検出したのみである。溝の東側では自然流路状のくぼみを検出した。奈良・平安時代の遺構は検出していない。近代の遺構として調査区東端で煉瓦積の機関車転車台坑を検出した。

溝

S D 0 1

調査区西半で検出した南北方向にのび、両端とも調査区外へ続く。幅1m、深さ0.1m、断面観察では旧耕土層直下より掘り込まれている。出土遺物はないが、検出地点や溝の方向からC区で検出された弥生時代の溝S D05・07と同一の溝と推定する。遺物は出土していない。

S D 0 2

C区で検出された弥生時代前期から平安時代まで存続する自然流路状のくぼみS D02と同一の遺構である。南北方向にのび、北側は調査区外へ、南側はC区へ続く。旧耕土層直下で検出し、西肩付近では深さ0.6mを測る。調査区の制約から東肩部は検出していない。遺物は出土していない。

第3節 転車台坑の調査

1. 概要

調査区東南端で検出した。南半部側壁と床面の一部が損壊する他は良好に遺存していた。坑内は石炭ガラにより一気に埋め立てられている。その際に側壁の一部が崩されたと思われ、石炭ガラの最下層には煉瓦片が混じる。

2. 調査の経緯と方法

当初検出した部分は北半部分にあたる1/2弱であった。南半部については通信ケーブルや車両用通路があり、拡張して調査することが不可能な状況であった。その後これらの移設に伴い南半部、中央部の

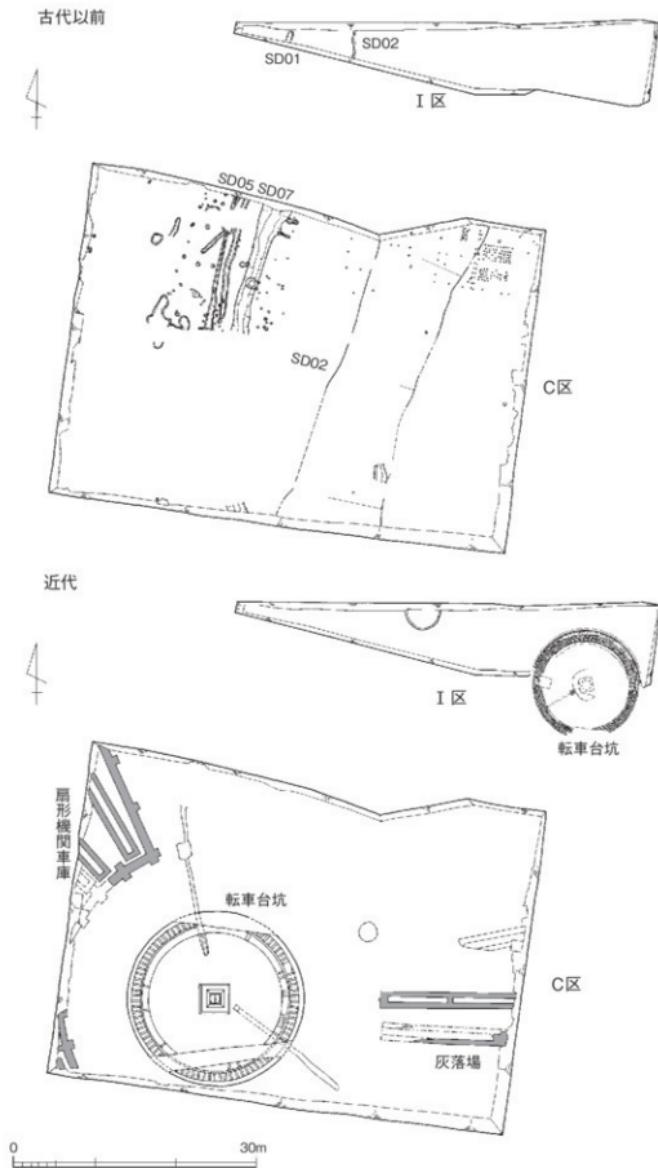


図 11 I 区の遺構



図 12 I 区空中写真

順で調査を追加して行い、結局 3 分割して調査することとなったが転車台坑のほぼ全体を調査することはできた。実測は、北半部は写真測量を行い、その他は手実測によった。最終的に 3 分割したものを作成したが、手違いから一部実測漏れの部分が生じた。また平・断面図は各調査時で実測範囲を重複させることなどにより正確に繋ぎ合わせることを心かけたが、法量には誤差が生じているおそれも捨てきれない。

北半部は本来調査対象とした造構面まで掘削を行っていたため、側壁の外側が基礎近くまでは露出することになり、掘方や側壁の内外側を基礎部まで調査した。転車台坑の表面観察以外の記述は北半部で得られた成果である。

南半部は時間的な制約があり、北半部で転車台坑の構造をほぼ明らかにしたと判断し、側壁と床面の表面調査を行うにとどめた。ただし排水施設の全容については明らかにできず、中央支承台下部についても、表面観察にとどめ工事時の解体にあわせて補足的に略測したのみである。

北半部では、側壁の円周から中軸線を復元してトレンチにより床面と側壁の断割り調査を行った。全容を検出した後にこの断割トレンチは転車台坑の中軸線にはば合致していることが判明した。東半部では煉瓦の粗積を観察しながら解体、北半部では基礎のコンクリートも含めて断割りを行った。

側壁の北東部約 1/4 の部分は側壁および床面を解体し、刻印を有するなど特徴的な煉瓦を探取した。

残る3/4の部分については、表面で確認できた刻印などがある煉瓦を選択して取り上げた。なお溜枠を構築する煉瓦と坑内に埋設された土管は全て取り上げた。

3. 調査の結果

①側壁

基礎 煉瓦積により構築される側壁および床面の基礎は、掘方の幅2mを測る。転車台坑掘方からさらに0.5m程輪状に掘り下げ、栗石を敷きコンクリートを流し込む。コンクリートの厚さは0.3mである。掘方の両肩付近のコンクリート上面では一辺3.5cmの角杭の痕跡が7箇所確認できた。角杭は掘方の内側で3箇所、外側で4箇所検出した。杭は内外が互い違いになるよう配置していたとみられる。その用途は明らかでないが型枠などの押さえとは考えがたく、煉瓦組積の水平を出すための測量に用いられたと推定する。なお基礎の底部に木杭を打ち込んだ基礎杭は認められなかった。これは転車台坑を安定した基盤層上に設置したため、構造物や機関車の重量を十分支えられると判断したためであろう。

側壁 円形を呈し、コンクリートの基礎上に煉瓦を断面の形状がL字形に組み上げる。側壁により囲まれた内径は12.3mを測る。この規模から、遺構は40軒転車台の転車台坑であることが明らかである。

表面に現れる煉瓦積みは、煉瓦積床面から最も残存する部分で0.77m(11段)を測る。側壁の幅は0.45m(煉瓦の長手方向に2列分)である。煉瓦の組積は長手段と小口段が交互となり、「羊羹」と呼称される小口面を半折した煉瓦を用いていることから、緻密なイギリス積みに分類できる。また内側壁面の目地は断面が三角形を呈する「山目地」としており、兵庫県内の山陽本線に現存する煉瓦構造物の多くと同じ特徴をもっている(註3)。

側壁の基底部は基礎となるコンクリート上面にモルタルを塗布し煉瓦を接着している。基底部の幅は1.45mを測る。基礎のコンクリート上面は凹凸をもつため、それに対応させて基底部の煉瓦は平面を削り厚さを調整する加工を施し、厚さを薄くしたもの、薄く加工した煉瓦を2段積にするなど2段目以降を水平に積み上げるための工夫がなされている。基礎は煉瓦を3段積み上げさらに、幅1.3mに控えて1段、さらに2段煉瓦を控え積みし、この上に側壁および煉瓦敷の床面が構築される。煉瓦積の最下部から側壁の最上部まで最も残存する部分の高さは1.32m(17段)である。

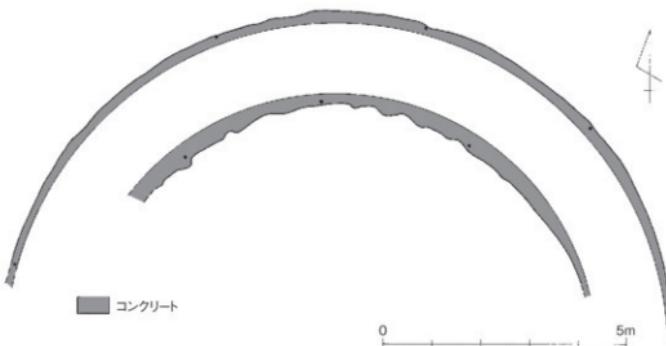


図13 側壁掘方内杭痕検出状況

直方体のブロックである煉瓦(「おなま」と称する)を積み上げて円形構造物を構築しているため、煉瓦の組積にはひずみが生じている。しかし円形構造物を構築するに用いる楔形煉瓦や弧状煉瓦などの異形煉瓦は用いず、このような形状に加工した煉瓦も見られない。積み上げによって生じるひずみは見えない外側に集約され、側壁外側は目地に隙間が多く、多少の出入りが見られる。また、水平を出すために下段の煉瓦積の形状に合わせて平面を細かく削り出した煉瓦も確認できた(写真図版42)。ただしこれらの部分も目地は強固であり、側壁の解体には苦労した。

煉瓦敷床面 側壁内側には幅0.65m(長手方向3列)の煉瓦敷の床面が巡る。床面上では目地部分に埋め込まれた2種計24本のボルトを検出した。

ボルト1 床面の内側から1・2列間の煉瓦の目地部分にボルトを約1.6m前後の間隔で設置する。現存するものは20本であるが本来は22本あったと推定する。その検出位置からこのボルトは転車台坑の床面に設置される円形軌条の枕木を固定するものと推定される。ボルト周辺には枕木の接着に用いられたと思われるモルタル、黒く汚れた部分と汚れの少ない部分の境界が煉瓦床面に線状に残存し、円形軌条の枕木の痕跡と思われる。ボルト(M1)は径2.0cmの鉄製である。全長は48.3cmあり約30cmが床面に埋め

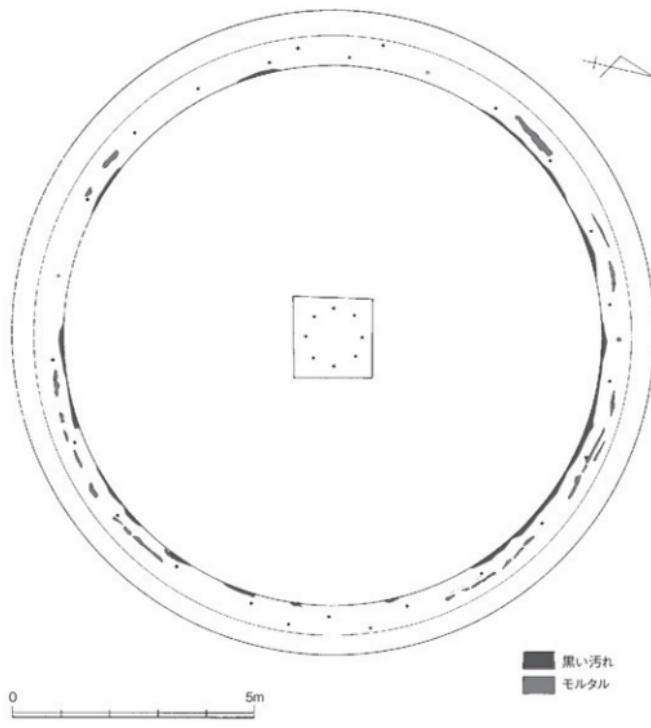


図 14 煉瓦敷床面の枕木痕

込まれていた。上端4.5cmはネジ切りが行われ、図示したものは対角3.75cm、対辺3.0cm、厚さ2.2cmの六角形の鉄製ナットが付く。また下端は六角形の鉄製ナットと、一辺4.7cm、厚さ0.5cmの四角形の鉄製ワッシャが付く。

ボルト2 ボルト1の列と側壁の間、床面の煉瓦、内側から2、3列間に設置される。東西の対になる位置に所在し、2本で1組になるが、西側の1本は損なわれている。ボルト間は約1.7mを測る。ボルト(M2)は径2.6cmの鉄製である。全長は47.8cmあり約20cmが床面に埋め込まれていた。上端7.5cmはネジ切りが行われる。また下端は対角4.8cm、対辺4.2cm、厚さ2.7cmの六角形の鉄製ナットと、一辺6.5cm、厚さ1.0cmの四角形の鉄製ワッシャが付く。ワッシャは鉄によりボルトに固着し、ナットとの間は2.0cmを測る。

なお東側のボルト2の中軸にボルト1の1本があり、側壁の「羊羹」使用箇所とほぼ並ぶことから、この部分が転車台坑の構築の起点であったと考える。

②中央支承台

基礎 挖方は完掘していないが、断面断面から復元すると径3.7mの円形を呈し、転車台坑掘方からさらに1m程掘削している。掘方内に栗石を敷きコンクリートを流し込む。コンクリートによる基礎は径約3m、厚さ約0.75mを測る。底には側壁の基礎同様木杭を打ち込んだ基礎杭は認められなかった。なお断面観察によると、基礎工事は転車台坑床面および側壁の施工に先立って行っている。コンクリート上面にモルタルを約1cmの厚さで塗布し中央支承台となる花崗岩切石を接着する。

台石 1.9m×1.75m、厚さ0.48mの花崗岩切石であり、その上部を1.6×1.7mの方形に加工する。仕上げを行ったのは三和土で仕上げた床面より上に露出する部分のみ高さ5cm程度である。基礎のコンクリート上に花崗岩剥片が層をなしていただけ、加工は基礎に設置後、床面の整地前に行われたと推定する。上面には計8本のボルトが円形に配置され、外径1.38mの鉄の痕跡がドーナツ状に確認できた。

ボルトを設置する穴は10cm×8cmの方形を呈し、各穴の左隅に溝状の掘り込みが確認できるが、その意図は不明である。ボルトは穴にモルタルを流し込んで固定される。ボルトは径3.5cmを測り、台石上面から10cm露出しているが、本来の長さは不明である。ボルトの上端は約7cmネジ切りを行う。

③床面

転車台坑のうち、煉瓦敷以外の床面は機関車や桁の重量がかからない部分であり三和土により仕上げる。掘方掘削により生じた土を薄く敷いて整地し、その上に砂をよく締めて敷き下地とする。砂の厚さは基礎部分の煉瓦1~2段分に相当する。床面の表面は三和土で仕上げるが、厚さは煉瓦1段分に相当し、この上に床面となる煉瓦1段が露頭する。床面は側壁側から中央へ緩い勾配をもち、中央支承台の周間に馬蹄形に巡る幅約70cm、深さ6cm程の凹地を設けて坑内の滲水を溜井へ導く。

④溜井

中央支承台南西側に位置する。平面方形であるが、中央支承台とは主軸方向が異なり、排水機能を優先して設置したと思われる。側壁は一辺34cm、深さ43cm(6段)を測る。「おなま」41個を長手積するが、この他に長手方向を約1/2に切断したもの18個、厚さを約1/2にしたもの4個、いわゆる「七五」1個、小口両面を欠くもの2個、長さ、厚さを約1/2にしたもの4個、小口面のみ2個、小口面の破片1個を調整として用いる。これらは現地で切断・加工したと思われる。目地は平目地であるが、転車台坑側壁と比べると仕上げが荒く、漏水により周囲の土砂が流失し地下に空洞が生じていた。上面は長手方向に2個分を控え積みして三和土の上面と揃える。東側には床面に設けられた凹地により導かれた水を集め

る取水部がある。また南北の隅は隙間を煉瓦片で調整する。底部も煉瓦敷で平面を見せる。

西側壁には排水口があり南西方向に土管が5本延び転車台坑側壁に達する。底から排水口までの高さは25cmあり、沈砂などの用途も兼ねていたと思われる。橋から坑外へ延びる土管にうち、側壁部分は煉瓦積み上げ前に設置する。土管は無釉陶器で全長65cm、口径は10.6cmを測る。粘土板を巻き合わせて作った長さ30cmの筒部を2本と受口部を接合している。製造者印などはない。

⑤転車台坑の構築

転車台坑は、煉瓦(側壁・床)、コンクリート(基礎)、三和土(床)、石材(中央支承台)により構築され、モルタルが目地や接着剤として用いられる。このうちコンクリートのみ埋設され、完成後は見ることはできない。調査の結果明らかとなった転車台坑の構築の順序を記す。

1. 坑内の測量により転車台設置位置を割り出す。
2. 構内の整地に先立って掘方を円形に掘削する。さらに設計に基づき側壁、中央支承台の掘方の深掘りを行う。
3. 側壁、中央支承台の掘方に栗石を入れ、基礎となるコンクリートを流し込む。
4. 中央支承台となる石材を設置し、整形する。
5. 側壁の煉瓦積み上げ、溜橋を設置する。
6. 坑内の床面を整地し、表面を三和土仕上げる。また溜橋上部も仕上げる。

註

- 1 「豆腐町遺跡Ⅰ」 兵庫県文化財調査報告第322冊 兵庫県教育委員会 2007年
- 2 高橋秀吉『姫路の交通五十年』高橋文庫 1963年
- 3 鈴木敬二「旧山陽鉄道（兵庫～姫路間）開通時の煉瓦構造物」『兵庫県立歴史博物館紀要 塵界』 第21号 兵庫県立歴史博物館 2010年

第4節 煉瓦

転車台坑の煉瓦は、時間的な制約から使用总数を算出するには至っていないが、刻印・櫛描が確認できたものを中心に、調整に特徴があるものなどを選択して243点採集した。うち41点は溜橋を構成する「おなま」である。採集した煉瓦はすべて計測を行ったが、このうち44点を拓本・写真撮影の対象とし、報告書に掲載した。煉瓦についての概要は以下に記し、個別の煉瓦については観察表にまとめた。記述した数量は採集した煉瓦の個数を反映したものであり、使用された煉瓦の大半は刻印や櫛描がないことを断っておく。計測は長さ(長手長)と幅(小口幅)は平面の1面を上にし、その中心部付近で、厚さは側面の中央部付近で行うことを原則とした。ただし計測条件の悪いものはその限りではない。

この他に転車台坑周辺で採集した特徴的な煉瓦4点も掲載した。

1. 転車台坑使用煉瓦

①煉瓦の製造と表面の特徴

転車台上に使用された煉瓦は全て手抜成形されたものである。手抜煉瓦の製造には「撫板」と型枠である「成形用枠」が用いられる。最初に「成形用枠」に抜き砂をまぶし、粘土を押し込み、上部の盛り上がった粘土を切り「撫板」により仕上げ、「成形用枠」から抜く。「成形用枠」はロ字状に4側面を囲う形状が一般的で、これで長手、小口面が形成される。平面はナデにより一方が形成され、もう一方は煉瓦の作業台である「素地抜臺」か、その上の「素地抜板」そのものが型枠になるといえる(註1)。今回報告する煉瓦は

長手・小口面には抜き砂が付着するのに対し、両平面にはこの付着が顕著でない。これは「成形用枠」にのみ抜き砂をまぶし、「素地抜臺」や「素地抜板」には抜き砂をほとんど用いなかつたためと推定する。煉瓦は、平面の一方に布痕が認められるものがあり、「素地抜臺」または「素地抜板」には粘土が付着しないよう布が敷かれていたと思われる。

煉瓦は成形作業により平面は両面で顕著な差異が認められる。そこで両平面を区別するため、顕著なナデなどの調整がみられない面を「I面」、みられる面を「II面」として記述する。豆腐町遺跡出土煉瓦については、「豆腐町遺跡Ⅰ」において分類がなされているが、そこでは櫛目文が施されている「平」面を裏面、櫛目文がない場合は抜き砂がない、あるいは反対の「平」面より少ない面を表面とした。今回の表記と「豆腐町遺跡Ⅰ」の表記を対比すると、「I面」は「表面」、「II面」は「裏面」に該当すると思われる。

I面は、「接合面ト為ルベキ一側ハ素地抜臺ノ(木板)上ニ在」(註2)の面であり、成形作業時には下面となる。ナデを施すが後述するII面ほど顕著ではなく、不調整とみられるものもある。部分的に布痕が残存するものがあり、多くの煉瓦には手抜成形の煉瓦に普遍に見られる長手に沿う1条の凹線が認められる。後述する櫛描1類は型抜き後に粗くナデを施した後に描いたものである。

II面は、丁寧なナデが施され平滑に仕上げられた面であり、「一側ハ針金ニテ裁断シ之ヲワフ付ケタル板ニテ撫デルヲ以テ、其面頗ル平滑トナル」(註3)面であろう。成形作業時には上面となる。後述する刻印1・2類の大部分と櫛描2類はこの面に施す。

②胎土、焼成

煉瓦の原料は粘土を主成分として砂を混ぜ、「煉瓦要説」によればさらに粘性を調整する目的で通常の砂の他に微細な砂を多く含む「サク」土を混ぜるという。本報告の煉瓦には浅黄橙(10YR8/4)色の微細な砂の混和が認められ、主材である粘土とマーブル状を呈する。この微細な砂が「サク」土に該当するものであろうか。粘土、砂などの混練の具合は総体的に良好であるという(註4)。また煉瓦の色調は一般的に低温で焼かれたものはみかん色を呈するが、そのような煉瓦はみられず、総体的に焼成は良好である。側壁や床面に使用された煉瓦は高温で焼かれ黒味を帯びた「焼過煉瓦」が多く、長手面が焼過の「横黒」や小口面が焼過の「鼻黒」が目立つ。胎土や焼成の具合から、煉瓦製造には一定の仕様が存在するか、煉瓦製造技術を有する職人、組織が関わっていた可能性が高い。

③寸法

出土した煉瓦の寸法にはばらつきがあり、最大で23.3×11.3×7.4cm(B26)、最小で21.3×10.2×6.9cm(B32)であるが、大半の煉瓦は、長さ21.5～22.5cm、幅10.5～11.0cm、厚さ6.5～7.1cmの範囲内にある。この寸法は大高分類の山陽形(22.73×10.67×6.97cm)(註5)に近く、山陽形と比較すると幅、厚さは標準的で長さがやや短い傾向にある。

④いわゆる「刻印」

煉瓦平面などに煉瓦製造会社の社章などの印を施した煉瓦を「刻印煉瓦」と呼称する。この用語は定着しているためここでも用いているが、実際は押印したものが多く、本報告の煉瓦も「刻印」よりも「押印」と表現するのが妥当であろうと考える。

確認できた刻印は3種に大別できる。

表3 車台坑使用煉瓦觀察表

番号 No.	寸法			調整	特徴	種目		刷印	始上	色調	備考
	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)			単位	幅(cm)				
B1	21.9	10.4	6.9	303	I II III ナデ	円鏡		製	6mm以下複合む	10R5/6	長手にタキ痕
B2	21.7	10.9	6.8	304	I II III ナデ	円鏡 焼過		質	6mm以下複合む	1 : 10R6-4 II : 2.5YR6/4	墨黒
B3	22.0	10.7	6.8	304	I II III ナデ	円鏡 焼過		未	6mm以下複合む	1 : 2.5YR6/4 II : 10R4-2	墨黒
B4	22.2	10.5	6.6	308	I II III ナデ	円鏡 焼過		未	5mm以下複合む	II : 10R5-6	墨黒
B5	21.7	10.7	7.0	302	I II III ナデ	円鏡 焼過		質	5mm以下複合む	II : 10R4-6/6	墨黒
B6	22.1	10.1	6.9	310	I II III ナデ	円鏡 焼過		未	6mm以下複合む	1 : 10R4-4 II : 10R4-2	墨黒
B7	22.0	10.8	6.8	306	I II III ナデ	円鏡		未やマーブル状	5mm以下複合む	II : 2.5YR4/2	焼過ぎみ
B8	22.2	10.5	6.8	306	I II III ナデ	円鏡		質	6mm以下複合む	II : 2.5YR6/6 小 : 10R4-2	墨黒
B9	21.8	10.8	6.7	302	I II III ナデ	円鏡		質	5mm以下複合む	1 : 10R5-4	墨黒
B10	22.7	11.2	7.3	330	I II III ナデ	円鏡	15	32	1型	マーブル状	2.5YR6-6
B11	23.0	11.1	7.0	332	I II III ナデ	円鏡	10	26	1型	小複合む	2.5YR6-6
B12	22.6	11.1	7.1	310	I II III ナデ	円鏡	14	22	1型	マーブル状	2.5YR6-8
B13	22.5	10.9	7.2	320	I II III ナデ	円鏡	14	3	1型	15mm大複合む	2.5YR6-6
B14	22.6	10.9	6.9	322	I II III ナデ	円鏡	10	3	1型	マーブル状	2.5YR6-8
B15	22.5	11.0	7.1	326	I II III ナデ	円鏡	7	19	1型	小複合む	2.5YR6-8
B16	22.8	11.2	7.1	324	I II III ナデ	円鏡			5mm以下複合む	II : 2.5YR6/8 小 : 10R4-2	墨黒
B17	22.9	11.0	7.2	314	I II III ナデ	円鏡	14	2	1型	マーブル状	2.5YR6-6
B18	22.4	11.1	7.3	326	I II III ナデ	円鏡	10	3	1型	小複合む	2.5YR6-6
B19	22.3	10.5	7.0	328	I II III ナデ	円鏡	6	19	1型	15mm大複合む	10R5/4
B20	22.7	10.7	6.9	314	I II III ナデ	1/3欠	7	27	1型	マーブル状	2.5YR6-6
B21	22.6	11.0	7.0	326	I II III ナデ		8	33	1型	マーブル状	2.5YR6-3 小 : 10R5/3
B22	22.2	10.9	6.8	301	I II III ナデ	円鏡	4	12	2型	15mm以下複合む	1 : 10R5-2 II : 2.5YR6/3
B23	22.1	10.6	7.0	304	I II III ナデ	円鏡	3	0.5	2型	5mm以下複合む	2.5YR5/3
B24	23.0	11.0	7.5	342	I II III ナデ	円鏡 やや焼過	5	1	2型	小複合む	1 : 2.5YR5/3
B25	22.2	10.7	7.2	324	I II III ナデ	円鏡	9	1	2型	小複合む	10R5/4
B26	23.3	11.3	7.4	340	I II III ナデ	円鏡	4	1	2型	小複合む	2.5YR6-6
B27	22.2	10.7	7.0	303	I II III ナデ	円鏡	8	15	2型	小複合む	2.5YR6/4
B28	22.5	10.9	7.1	330	I II III ナデ	円鏡	5	15	2型	小複合む	10R5/4
B29	21.6	10.5	7.1	303	I II III ナデ	円鏡	5	15		小複合む	2.5YR5/3
B30	22.0	10.8	7.1	314	I II III ナデ		8	1.1	2型	5mm以下複合む	10R5/4
B31	21.7	10.3	(34) 1.130	I II III ナデ	欠損		4	0.9	2型	6mm以下複合む	10R5/4
B32	21.5	10.5	6.7	306	I II III ナデ		9	15	2型	小複合む	10R5/4
B33	21.9	10.7	6.9	303	I II III ナデ	円鏡	4	1.1	2型	小複合む	2.5YR6/4
B34	22.2	10.9	7.0	308	I II III ナデ	円鏡	3	0.9	2型	6mm以下複合む	II : 2.5YR6/6 小 : 10R4-2
B35	22.3	10.8	7.1	305	I II III ナデ	円鏡	4	15	2型	15mm以下複合む	10R5/4
B36	22.0	10.8	7.1	302	I II III ナデ	一部欠	4	13	2型	小複合む	10R5/3
B37	21.7	10.7	7.0	302	I II III ナデ	円鏡	6	18	2型	6mm以下複合む	10R5/4
B38	22.6	10.8	7.1	328	I II III ナデ	円鏡	7	15	2型	小複合む	10R5/3
B39	21.6	10.4	6.8	258	I II III ナデ	円鏡	4	1	2型	小複合む	10R5/3
B40	22.0	10.6	7.1	320	I II III ナデ	円鏡	5	14	2型	小複合む	10R5/4
B41	22.2	10.4	7.1 (230)	I II III ナデ	2/3欠			3型	マーブル状	10R5/6	
B42	21.5	10.3	6.9 (292)	I II III ナデ	円鏡 大欠				6mm以下複合む	II : 10R4-2	
B43	21.3	10.6	7.1	262	I II III ナデ	ヘラ彫		3型	マーブル状	10R5/8	
B44	21.4	10.3	6.8 290	I II III ナデ	彫刻 極々彫り			3型	マーブル状	10R5/4	

a)刻印1類(B 1 ~ 10)

四角形の枠内に漢字1文字が書かれる。「製」(B 1)、「吉」(B 2)、「末」(B 3)、「旗」(B 4)、「煉」(B 5)、「化」(B 6)、「造」(B 7)、「賣」(B 8)、「部」(B 9)、「子」(B 10)の10種が確認できたが本来何種あったかは不明である。刻印はⅡ面に施すが、B 9のみⅠ面に施す。「部」は他にⅠ面に刻印したものを1点確認したが、意識的にⅠ面に施したものかは明らかでない。文字を囲む枠は一辺1.8cmであり、文字も刻印2類と比較すると太めである。

例外は「子」で、刻印2類と枠の寸法が同じで文字も細めであり、Ⅰ面に櫛描1類があるのも共通している。本来は刻印2類に分類すべきものである。

b)刻印2類(B 11 ~ 16)

四角形の枠内にカタカナ1文字が書かれる「フ」(B11・12)、「ソ」(B13)、「ナ」(B14)、「ム」(B15)、「ヘ」(B16)の5種が確認できた。仮名文字47字が全てあるのか、何かの名を分解したものは明らかでない。文字を囲む枠は一辺1.5cmであり、枠・文字ともに1類よりも細めである。B16を除いてⅠ面上に櫛描1類を描く。

c)刻印3類(B 41・42)

平面の小口寄りに「-」を刻む。分布は床面の南半部に集中する。長手方向に3列並ぶうち最も内側の煉瓦に刻印され、平面の外側に向く小口寄りに刻印する傾向がある。刻印の長さは1.5cm前後であり、焼成後に打刻する。Ⅰ・Ⅱ面の区別なく施し、多くは刻印の反対側にあたる平面を2/3程度打ち欠いている。したがってこの刻印は、煉瓦積みの段階で床の水平を整えるために加工した煉瓦を区別する目的で施されたものと考えられ、煉瓦積み職人が刻んだものと推定する。

⑤櫛描

a)櫛描1類(B 11 ~ 15, 17 ~ 21)

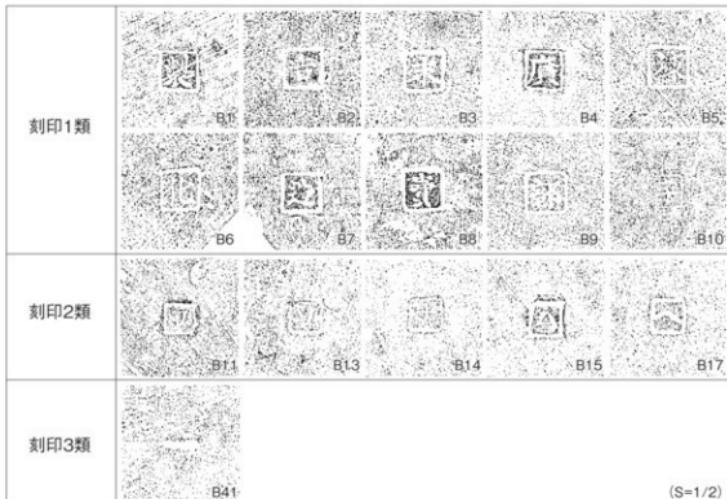


図15 転車台坑使用煉瓦の刻印

I面の下地を粗くナデた後に櫛状工具により「×」を描く。43点採集し、11点掲載した。II面に刻印2類を施すものがある。

b) 櫛描2類(B22～40)

櫛状工具により文字・文様状を描く。51点採集し19点掲載した。一筆書き状のもの、カタカナの文字、数字などみられる筆運びのものなど櫛描の形態はバラエティに富む。

⑥その他

B43はヘラ状工具によりI面に「×」と線を描いたもの。B44はI面を線状に粘土を搔き取ったものである。これらは他に確認できず、施した意図は不明である。

⑦検討

a) 刻印

水野信太郎氏の研究では、「刻印」は製造所を示す社印、製造担当者を示す責任印があるとされる(註6)。今回確認できた刻印は同じ規格のものが複数種あることから、社印でなく責任印と考える。

1・2類は刻印煉瓦としては未周知のものであり、現状では製造元を明らかにできないが、調査終了後に市川橋梁(姫路市)上り線の橋脚で「製」の可能性のある印(註7)、揖保川橋梁(たつの市)下り線の橋脚で「化」(註8)を確認した。これらに使用された煉瓦の寸法は転車台坑と同じ山陽形であり、この煉瓦製造所は、少なくとも明治20年代前半に山陽鉄道で用いる煉瓦を注文生産していたと推定する。ただし両地点では転車台坑では確認できなかった漢数字の刻印も認められる(註9)。また「賣」の刻印は西宮神社社頭遺跡(西宮市)出土煉瓦にある(註10)。煉瓦寸法は山陽形とは判断できないが、阪神間まで製品を流通させていた可能性を示す。

刻印の文字が意図することは明らかでない。「部」、「廣」、「吉」という姓名の一部などの可能性があるものが見られる一方で、「煉」、「化」、「製」、「造」といった工業関係とみられる文字がある。これらを並べると「煉化(石)製造部」と見ることもでき、煉瓦製造所の名称を解体し、各文字で職工またはそのグループを表している可能性もある。なお「煉化(石)」は「煉瓦」のことであり、ともに明治期に用いられ、山陽鉄道の営業報告書(註11)の中でも両者が混用されている。

b) 櫛描

櫛描を施した煉瓦は各地で確認されている。特に櫛描1類は目地のモルタルの食いつきをよくする目的で施されると考えられる。

1類を施した工具は櫛目の本数/幅から、22種程度が存在する。櫛目は5～20本程度を数える。工具の幅は1.4～3.0cmであるが、櫛目の本数ごとにみると工具はそれぞれ4種程度に集約できる。

櫛描2類を施した工具は櫛目の本数/幅から17種程度が存在する。櫛目は3～9本を数えるが、3～6本が多い。それに対応する工具の幅も0.5、1.0、1.5、1.8cm前後の4種に集約できる。

1類に比べると2類は工具の種類が少なく幅も狭い。両者は異なる工具を用いているようである。

c) 刻印と櫛描の関係

櫛描1類のうち13点はII面に刻印2類、1点は刻印1類を押印しており、計6点を掲載した。このことから刻印2類は櫛描1類を施した製造担当者あるいは班を示す責任印であると考える。作業はII面の調整後に刻印2類を押印し、その後I面を粗くナデて櫛描1類を施すことになる。

次に櫛描1類の工具と刻印の関係をみたい。最も採集点数の多い「フ」はB11・12の他に5点あり4種類程度の工具を用いる。「ム」はB15の他2点あり3種、「ナ」はB14の他2点あり2種程度の工具が

確認できる。いずれの場合も1つの刻印に複数の櫛状工具が存在することになり、刻印が特定の工具とセットにはなっていない。これは複数の製造担当者が存在するか、製品の単位などで刻印を変更しているためと思われる。

櫛描2類は当初櫛描1類と同じ目的で施すもののうち製造担当者の悪戯によるものと考えていた。しかし櫛描はⅡ面に施し、下地に粗いナデを行なわないことから、異なる工程で施していることが明らかである。したがって施す意図も異なると考える。使用する工具も異なる。

Ⅱ面に施すことは刻印1・2類と同じ工程で行われるものである。またB23・35は未掲載の煉瓦に類似する文字状の櫛描が確認される。以上の点から、櫛描2類は、刻印ではないものの製造担当者を示す「責任印」と同等の性格をもっていると考える。

煉瓦の胎土を肉眼観察すると、刻印1・2類を施した煉瓦は長石などの砂粒を多く含み、「サク土」と思われる混和材が混じるのに対し、櫛描2類を施した煉瓦は砂粒が少なく、「サク土」と思われる混和材が明瞭に認められない。転車台坑使用煉瓦は、刻印により明示するグループと櫛描2類により明示する系統の異なる2つのグループが存在し、両者は製造場所も異なる可能性もある。

2. 転車台周辺採集煉瓦

B45は機械掘削中に採集したもの。同じ刻印を有する破片がもう1点出土している。長さ23.0cm、幅10.8cm、厚さ5.9cmである。この寸法は東京形(7寸5分×3寸6分×2寸:22.73×10.91×6.06cm)に近いものである。手抜成形でⅠ面には部分的に布痕が残る。Ⅱ面に堺煉瓦株式会社の社印に類似する刻印がある。刻印の5本の端部は丸く肥厚するのが特徴であり、既知の刻印の端部が四角く終わるのは異なる。B46は調査区東側の旧8番線ホーム付近で採集したもので、長手方向が欠損する。手抜成形でⅡ面の中央付近に岸和田煉瓦株式会社の社印に類似する刻印がある。姫路駅構内で確認された同社の刻印と比較すると大型で、同じものは出土していない。Ⅰ面は全面削り加工が施され、本来の厚さは不明である。現存長14.5cm、幅10.5cm、現存する厚さ5.1cmである。

B47・48は調査区内の円形の擾乱内から出土したもの。いずれも異形煉瓦とされるものである。B47は長手が弧状を呈する。手抜成形で、Ⅰ面には布の縫じ跡らしい凹線が確認できる。長さは24.5cmと21.0cm、幅12.1cm、厚さ6.8cmである。Ⅱ面に「ハ」の刻印があるが、刻印は2×1.7cmの板状のものに刻んだ痕跡が認められる。B48は平面が楔状を呈する煉瓦である。小口は短面の幅9.0cm、長面の幅11.5cm、厚さ6.8cmを測る。手抜成形でⅠ面には離れ砂の付着が認められる。B47・48は厚さが同じことから、セットで円形構造物を構築するのに用いられたのであろう。厚さは山陽形に近似していることから、山陽鉄道の構造物で使用されたものかもしれない。



図16 転車台周辺採集煉瓦の刻印

註

- 1 名称は諸井恒平『煉瓦要説』博文館 1902年 国立国会図書館近代デジタルライブラリーによる。
- 2 前掲註1
- 3 前掲註1
- 4 株式会社大平神崎 保氏、カンザキ商事有限会社神崎悠二、藤本伸和氏よりご教示を得た
- 5 大高庄右衛門「煉瓦の形状に就いて」『大日本窯業協会雑誌』第159号 大日本窯業協会 1905年
- 6 水野信太郎「国内煉瓦刻印集成」「産業遺産研究」第8号 中部産業遺産研究会 2001年
- 7 鈴木敬二「旧山陽鉄道(兵庫～姫路間)開通時の煉瓦構造物」兵庫県立歴史博物館紀要 「塵界」第21号 兵庫県立歴史博物館 2010年
- 8 小西伸彦氏よりご教示を得た
- 9 前掲註7
- 10 『西宮神社社頭跡』兵庫県文化財調査報告第388冊 兵庫県教育委員会 2011年
- 11 老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1～6巻『明治期私鉄営業報告書集成(4)』日本経済評論社 2005年

第5節 転車台についての検討

1. 烹造時期

まず転車台坑の烹造時期を使用煉瓦の寸法や組積からみてみたい。

兵庫県内に残存する山陽鉄道の構造物のうち、烹造時期がある程度特定できる構造物を表4に記す。周期として明治30年代半ばまでに構造物に用いられる煉瓦が山陽形からより薄手の山陽新形に変わる。また目地も明治31年前後を境に平目地が採用されている。同時に隅部処理に「羊羹」を使用した厳密なイギリス積から、「七五」煉瓦を用いるオランダ積が主流となるようである(註1)。以上の特徴から、転車台坑は明治20年代に構築された可能性が高いと判断する。また煉瓦に施された刻印に着目すると、転車台坑と同じか、同じ可能性のある刻印は、1890(明治23)年頃築造された市川橋梁上り線橋脚、揖保川橋梁下り線橋脚で確認される。したがって、転車台坑も明治20年代前半に位置づけることが可能かと考える。掘方に拡張・改築の痕跡がないことから、山陽鉄道の姫路開業時前後に築造された可能性が高い施設と考える。

表4 県内所在山陽鉄道の構造物

名称	所在地	煉瓦寸法	隅部処理	目地	築造年
市川橋梁橋脚(上り)	姫路市	山陽形	羊羹	山目地	1890(明23)年
揖保川橋梁橋脚(上り)	たつの市	山陽形	羊羹	山目地	1890(明23)年
梨ヶ原橋梁(下り)	上郡町	山陽形	羊羹	山目地	1890(明23)年
市川橋梁橋脚(下り)	姫路市	山陽形	七五	平目地	1898(明31)年
和田旋閘(回)橋	神戸市	山陽形	不明	山目地	1899(明32)年
姫路扇形機関車庫	姫路市	山陽新形又は並形	不明	不明	1903(明36)年
梨ヶ原橋梁(上り)	上郡町	山陽新形	七五	平目地	1906(明39)年

(註2)

2. 転車台の構造

転車台は桁と中央支承、それを収める転車台坑よりなる。今回検出した転車台坑は転車台の下部構造といえるもので、地表下にあるとはいえ、1つの完結した構造物である。遺構は一部破壊されていたものの遺存状態は良好であり、上部構造となる桁の規模・構造の復元が可能かと思われる。そこで調査成果から復元と位置づけを試みたい。

①規模・形態

明治時代の転車台については、転車台坑のみ残存するもの、現存するもの、標準設計図面がある。ここでは40両転車台に限定して考察してみたい。

a)転車台坑のみ残存するもの

豆腐町遺跡検出の転車台坑の他に考古学的調査が行われた明治期の転車台として新橋(註3)、七条(註4)、二条(註5)、奈良(註6)の停車場がある。これらはいずれも用途廃止により転車台は撤去され転車台坑のみが埋没して残存していた。側壁は完存するものはないため、主に平面形態を中心に対比する。なお姫路で検出されたもう1基の転車台坑の構造は大正時代以降に構築された可能性があるため(註7)、今回の検討からは除外した。

遺構の概略

新橋(東京都)

5J-010

1872(明治5)年の開業に合わせて築造されたわが国最古の転車台である。側壁は切石積み、底部はコンクリートである。中央支承台は残存しない。

3H-005

2基目の転車台であり、その存続時期は構内図からほほ明らかとなっている。

七条(京都市)

1877(明治10)年開業の官設鉄道七条停車場(現京都駅)のものであるが、正確な設置時期は不明である。中央支承台の掘方は方形を呈すると思われ、厚くコンクリートを流し込んで基礎としている。

二条(京都市)

1897(明治30)年開業の京都鉄道に伴うものの可能性がある。

奈良(奈良市)

表5 発掘された転車台坑

	転車台坑				中央支承台		桁	存続期間
	坑内径	側壁基底幅	側壁高	床面幅	辺長	ボルト		
新橋5J-010	12.2m				—	—	11.9m	明治5年～大正3年頃
新橋3H-005	12.8m	1.8m	0.38m	0.85m	1.7m	8本	12.6m	明治20年代～40年代
七条	12.4m	1.8m	0.4m	1.0m	1.73m	8本	12.2m	～大正初年？
二条	12.5m					8本	12.3m	明治30年以降
奈良	12.3m	1.38m	0.4m	0.8m	—	—	12.1m	明治20年代～32年
姫路	12.3m	1.4m	0.45m	0.65m	1.7m	8本	12.1m	～明治36年頃

・数値のうち太字は各報告書掲載図・写真から計測・判読したもの

・桁の推定長は、転車台坑の径-0.2mで計算したもの

1890(明治23)年開業の大坂鉄道あるいは1896(明治29)年開業の奈良鉄道に伴うものと推定され、1899(明治32)年の駅構内改造により移転したとされる。床面は階段状を呈し、コンクリート仕上げの部分にボルトを埋め込んでいるところから、ここに円形軌条を設置していた可能性がある。中央支承台は残存しない。

b)現存する転車台

40両転車台のうち転用されたものが少数現存している。そのうちJR西日本因美線の美作河井駅(岡

山県津山市)のものが実測調査されている(註8)。製造年は美作河井駅開業をさかのほる1923年(大正12年)とされるが、来歴は不明である。

転車台坑の内径は12.42m、深さは中央付近で約1.4m、側壁際で0.85mである。中央支承台は円形のコンクリート製で8本のボルトにより中央支承を固定する。なお主桁の長さは12.21m、高さは中央で0.935m、端部で0.57mを測る。中央支承の底部は円形を呈し、その径は1.346mである。

c)転車台の標準設計

官設鉄道の標準設計である定規のうち、40呎転車台に関するものは、明治28年5月付の達第555号(註9)と明治42年7月付の達第660号(註10)がある。また、1893(明治31)年発行の『鐵道工事設計参考圖面 停車場之部』には達第555号と同型の転車台(註11)の他に「轉車臺之圖」甲號・乙號(註12)の2種が収録される。『鐵道工事設計参考圖面 停車場之部』掲載の図は明治20年代における標準的な転車台を示すとみてよいだろう。

表6 40呎転車台の定規

	桁			転車台坑		中央支承		備考
	長さ	中央高	端高	内径	円形軌条	底径	固定	
達第555号	41呎3 1/4吋 12579mm	3呎 0914m	1呎9吋 0533m	42呎 12801m	37呎5 1/4吋 11410m	4呎6吋 1371m	4本ボルト	
達第660号	41呎3/4吋 12515m	3呎 0914m	1呎9吋 0533m		37呎5 1/2吋 11417m			
甲號	41呎3/4吋 12515m	3呎 0914m	1呎9吋 0533m	41呎5 1/4吋 12630m	37呎5 1/4吋 11410m	4呎6吋 1371m		
乙號	39呎10吋 12141m			40呎6吋 1234m	37呎5 1/4吋 11410m	4呎6吋 1371m	8本ボルト	

・ 1吋 = 0.0254 m、1呎 = 0.3048 mで換算

②各部の比較

a)転車台坑・桁

40呎転車台の40呎は桁の長さを示す。40呎といつても機関車の大型化に対応して41呎・42呎と長大化し、明治30年代には45呎も設置されている(註13)。転車台坑の直径は「転車台の直径より8吋位長く」(註14)余裕を持たせてある。美作河井駅の場合その差は21cm、達第555号では22cmであり、ほぼ記述に合致する。したがって転車台坑の内径-0.2mとして計算すると、転車台坑の構造から桁の長さを復元することが可能かと考える。以下に述べる桁の長さはこの計算により復元したものである。

最も古い標準設計は明治28年5月の達第555号である。新橋3H-005は桁の長さ、転車台坑の内径とともに達第555号に近似し、達第555号を範に鑄造したか、逆に3H-005と同規格のものを追認したと考えられる。達第555号の2年後を鑄造の上限とする二条は長さ12.3m(40呎4吋)とやや小型に造られる。姫路の桁の復元長は12.1m(約39呎8吋)、奈良も同規模で40呎にやや足らず、同時期の官設鉄道よりも小型の転車台を採用している。私設鉄道の転車台には官設鉄道の定規に近い甲號とともにやや小型の乙號がある。この乙號と姫路・奈良の寸法は近似することから、1つの標準的な規格として存在したものと考えられる。ただし、規模は同じでも乙號の桁は下端の屈曲が大きく、奈良の床面は階段状を呈

するなど、桁や転車台坑の形態は多様なようである。開業当時山陽鉄道が保有していた機関車の全軸距(最前部の車輪から最後部の車輪までの長さ)は四輪連結八輪車タンク機関車が5944mm、六輪連結六輪タンク機関車が3190mm(註15)であり、桁の長さとしてはかなり余裕をもっている。

転車台坑はその径が定規としてあるだけで、形状についての規定はない。造構としては、新橋5J-010が石積みである他は全て煉瓦積みである。新橋駅建設時には煉瓦の入手が困難なため石材が用いられたといわれる(註16)ことから、官・私設を問わず煉瓦積みが主流であったとみてよいだろう。コンクリートは側壁と中央支承台の基礎にのみ用いられ、外観には現れない点も共通している。

b)中央支承

中央支承は転車台の桁および機関車の重量を支えるもので、鉄製で円錐形を呈する(註17)。定規での中央支承の底径は全て4呎50吋(1.371m)であり、姫路の台上に残る鋸の痕跡と規模がほぼ一致する。また、新橋3H-005、七条も同規模の円形の鋸の痕跡が認められる。

達第555号では、台石に相当する部分は一辺5呎4吋(1.6256m)の方形であり、厚さは1呎6吋(0.4572m)である。台石は現存するもの全てが石材を用い、上面は一辺の長さ17m前後を測る。これは達第555号よりやや大型であるものの近い数値である。姫路は達第555号と厚さも近似する。中央支承の固定は、達第555号の中央支承は、4本のボルトで台石に固定しているが、現存する中央支承台にはすべて8本のボルトがあり、美作河井の中央支承も8本である。

40軒転車台は、桁の規模は大小があるものの、中央支承の形態・規模は官・私設問わず明治20~30年代で大きく変化していないといえる。

c)円形軌条

転車台坑の床面には円形軌条が巡り桁端に付帯する車輪を受ける。側壁に沿う煉瓦敷の床面は円形軌条を設置するためのものであり、幅は0.8~1mを測る。円形軌条は床上に放射状に敷かれた枕木(横枕木)上に固定される例が多い。達第555号や新橋駅など転車台の古写真でも横枕木であり、少なくとも明治期の転車台の円形軌条は横枕木が主流であったと思われる。横枕木の固定は達第555号では内外にオフセット状に配置された2本1組のボルトにより床に固定され、七条でもそれを確認できる。

姫路は床面の幅が0.65mと調査された中では最も狭く、ボルトの並列がみられないことから横枕木であることは考えがたい。ボルト間の床面には枕木の痕跡が明確に確認できる部分があり、円形軌条と同じ方向に多角形に板あるいは角材を巡らせていたことが明らかである。このような形状の枕木を縦枕木という。痕跡から復元される枕木の寸法は、長さ1.5~1.7m、幅約30cmである。床面に残るボルトは煉瓦上面より18~19cm出て上面4.5cmにナットが付く。したがって枕木の厚さは15cm程度になるだろう。山陽鉄道の並枕木の寸法は、長さ7呎(2.133m)、幅9吋(228cm)、厚さ41/2吋(11.4cm)(註18)で

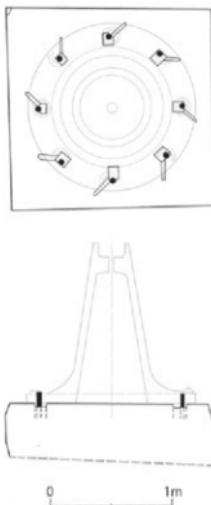


図17 中央支承台設置推定復原図

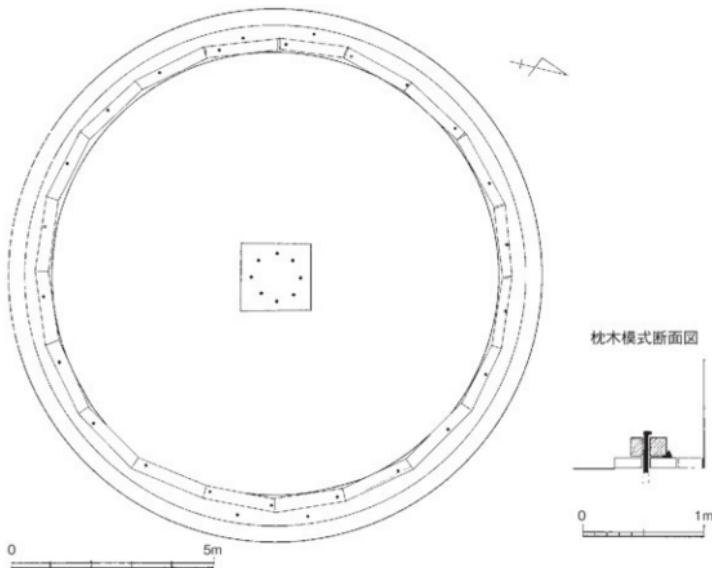


図 18 円形軌条枕木推定復元図

ある。円形軌条の縦枕木は普通枕木よりも幅が広く、厚さがあったことになる。枕木は少なくとも1本のボルトとモルタルにより床面に固定していた。痕跡から20本程度の枕木が煉瓦床面の内側沿いに多角形に周回し、この上に円形軌条が設置されたとみられる。なお、この枕木上に設置された円形軌条の推定径は113～114mで定規とはほぼ同じかやや小さい数値となる。

縦枕木は40呎転車台の桁上に用いられるが、円形軌条に用いた類例は知られていない。しかし概念として縦枕木が存在しないわけではなく(註19)、一部私設鉄道では縦枕木を採用していたと推定される。

d) 鎮錠装置

桁を所定の位置に固定するための装置である。40呎転車台の場合、桁側の止め金具を転車台坑側の受け部へ押し込む簡単な構造とされる(註20)が、定規ではその形態や設置箇所は明確でない。

姫路の場合、受け部は歓面および床面に現存せず、その痕跡も確認できなかったが、煉瓦床部分の側壁と推定円形軌条の間にある2組のボルト2が受け部を設置した場所の可能性がある。装置の形状は不明であるが、枕木を床面にボルト2で固定し、その上に鎮錠装置の受け部を設置したと推定する。このような形態の鎮錠装置は、時代が下がるが若桜転向所(鳥取県)(註21)、津和野機関区(山口県)(註22)に類例がある。1対しか鎮錠装置しかもたないことから、この転車台は機関車の転線には用いられず、転向のみに用いられたと推定する。

③小結

官設鉄道では新橋5J-010を最古例とすれば、3H-005製造までの約20年間に、長さが約2軒増しているだけで形態的に大きな変化はない。これは転車台が完成した形態で日本に導入され、機関車の進化にのみ対応していたことを意味する。単純に桁が時代とともに大型化するとした場合、官・私設の違いがあるにしても明治20年代前半に製造されたであろう姫路はやや小型の、言い換えれば古い寸法を採用しているといえる。山陽鉄道は、幹線鉄道として道床、擡堤、隧道などは官設鉄道に準拠して製造する一方で、路線の勾配など独自の基準で工事を行っている。転車台に関しては、基本的な形状は同じものの、類例の少ない縦枕木の採用など官設鉄道の新橋、七条とは異なる点もある。40軒転車台はその形態が多様であること、山陽鉄道はイギリスの鉄道を独自に研究していることなどから、官設鉄道を参考にしつつも社独自の定規によって転車台を製造したと推定する。

明治30年代における40軒転車台の建設費は、価格350磅とされ、これ以上・以下の場合直径1軒に付其価格約10磅の増減となるという(註23)。所有する機関車の規模とともに製造費用も転車台の規模を決定する要素といえ、私設鉄道のいくつかは所有する機関車の規模に応じて必要最小限の規模で製造したことが考えられる。後に旅客サービス面や会社経営など外向きには先進的とされる山陽鉄道だが、内向きには不要な支出を抑えるなど堅実な面も持ち合わせており、転車台も後者の一面が反映されているのかもしれない。

第6節 姫路機関庫の変遷と背景

調査地点は姫路停車場のうち姫路機関庫(後の姫路第2機関区)が所在した場所である。機関庫とは車両基地として機関車の整備・点検を行う施設であり、運転士や整備を行う職工などの人員からなる組織でもあった。機関庫の初代の転車台は、「改装後撤去その台枠を軍艦に見立てマストを建てワイヤーを曳いて油糸屑に点火満艦飾をして日露戦争の勇士を歓送した」(註24)とされる。この記述から初代の転車台は1904(明治37)年頃にはすでに撤去されていたことになる。姫路機関庫の推移と転車台の終焉をみていくたい。

蒸気機関車は走行に石炭と水を必要とし、適宜供給する必要がある。そこで路線の要所に機関庫(機関区)が設置された。山陽鉄道の場合、終点の馬関(下関)まで概ね50哩(約80km)ごとに設置されている。山陽鉄道の起点兵庫停車場にも機関庫が設置され、姫路はそれに次ぐ。姫路は兵庫から32哩75鎖(約53km)、岡山までは55哩4鎖(約88.6km)である(註25)。姫路・岡山間は標準的な距離だが姫路・神戸間は距離が短い。神戸・姫路間は同鉄道の主要区間であり姫路機関庫はこの区間の列車運行を担っていたが、もう一つ兵庫・岡山県境の船坂峠越えにも対応する機能を有していたと思われる。船坂峠は西進する山陽鉄道の最初の難所であった。当初の計画通り緩い勾配で敷設したが勾配区間が長いため、列車によっては牽引する貨客車数に制約があったといわれる(註26)。姫路機関庫は船坂峠越えのための拠点でもあったのだろう。

機関庫周辺の遺構としては、本報告の転車台坑の他にC区で扇形機関車庫、転車台坑、灰落場(引込み線と記述)が検出されている(註27)。また開業当初に建造された2線構造の矩形機関車庫が古写真で知られる(註28)。しかし山陽鉄道の営業報告において姫路機関庫に関する記述は乏しい。岡山停車場の

機関庫の施設は、車庫1棟、灰落場2箇所、石炭台2箇所、給水器台1箇所、転車台1箇所(註29)であり、姫路にも同規模の施設があったものと思われる。

転車台については、高橋秀吉氏は「あった」(註30)と記しているが、「営業報告書」には兵庫、岡山、三原、広島の停車場に転車台設置の記述があるものの、姫路に関しては記述がない。

兵庫停車場は、1888年度上半期に機関車庫の建築工事を急ぎ、「転車台給水器石炭台ノ建設モ大半ヲ竣ヘタリ」(註31)とある。山陽鉄道の機関車は、1888(明治21)年5月に最初の車両が到着した(註32)、兵庫駅構内の工場で組み立てられた後、7月から和田岬支線にて試験走行が行われていたという(註33)。兵庫機関庫は機関車の受け入れ施設として先行して工事が進められていたことがうかがえる。同時に姫路では運転手及び火夫役の建築(註34)が記述されるのみである。一方、仮出物品の内訳に「金千七百六拾七円拾六錢六厘 転車台其他製造中物件」(註35)とあり、工事の大半が竣工していた兵庫とは別に製造中の転車台があるとも見える。これが姫路に設置される転車台の可能性がある。明治21年度下半期には「一建築竣工 姫路停車場内機関車庫1棟(中略)当季中新築工ヲ竣ヘタリ」(註36)とある。姫路機関庫の施設建設は兵庫駅にやや遅れ、1888(明治21)年12月の開業時に間に合わせて工事が進められていたのかもしれない。

開業当初の山陽鉄道が保有していた機関車は、「タンク」機関車9両(註37)である。具体的には四輪連結八輪車(山陽鉄道1～6号)と六輪連結六輪車(山陽鉄道7～9号)(註38)である。前者は、当時としては標準的な規模の機関車であり、後者は主に構内の入れ替えに用いられた。この時期機関庫が置かれたのは兵庫・姫路のみであり保有車両を単純に2分すれば5両前後の機関車が各機関庫に配置されていたことになる。「大型で四輪、小型なら六輪」(註39)収納可能という機関車庫の規模は開業時では十分であったと思われる。

山陽鉄道の機関車の大型化は岡山開業の頃から進む。「テンダー」機関車が山陽鉄道に最初に導入されたのは岡山開業の1890(明治24)年である(註40)。「テンダー」機関車は炭水車を牽引するため牽引力や長距離走行に優れるといわれる。最初のテンダー機関車である四輪連結八輪車(註41)の全軸距は11634mm(註42)である。この規模は転車台の桁よりも0.5m程短い。テンダー機関車は炭水車が空車の場合と石炭・水を積載している場合で重心が移動する。当時の転車台は中央支承の1点で桁と機関車の重量を支えるバランス式であり、重心の移動に対応するためには機関車よりも余裕を持った桁の長さが必要とされる(註43)。40両転車台は少なくとも山陽鉄道ではタンク機関車に対応した大きさといえ、テンダー機関車を運用していくにはやや困難な規模になっているともいえる。山陽鉄道ではその後テンダー機関車を主体に増備が進み、1903(明治36)年にはタンク機関車とテンダー機関車の比率は1：3前後(註44)となっている。

1890年の保有機関車数は25両(註45)となり、岡山延伸に伴い岡山機関庫が新設された。機関車の数字を兵庫・姫路・岡山の3機関庫で割ると配置数は各8両程度となる。さらに1897(明治30)年には姫路の機関車配置数は10両(註46)となり開業当初から倍増している。

山陽鉄道は西へ延伸するとともに貨客とも輸送量、列車の運転頭数も増加する。これに関連して姫路では給水用に新たに井戸を掘削(註47)し、1898(明治31)年には姫路機関庫事務室が1棟増築される(註48)。さらに1899(明治32)年には輸送力強化のため兵庫・姫路間が複線化される(註49)。明治30年前後は姫路機関庫の人員・組織が拡充された一方で、開業当初に設置された施設・機能が限界に達していたことが予想される。

播但鉄道は生野鉱山の鉱石を飾磨港まで輸送する目的で1895(明治28)年に生野・飾磨間が開業した(註50)。その結果姫路駅構内で山陽鉄道と播但鉄道の路線が交差することとなり、山陽鉄道の列車運行の支障となった。播但鉄道は姫路停車場に隣接する豆腐町停車場を設置(註51)して対応していたが、山陽鉄道の輸送量が増加するにつれ運行上の障害も増大する一方であった。鉄道建設規定上からも場内線路を改良する必要が生じたことから、1902(明治35)年から線路、建造物の補設・改築・移設が計画された(註52)。姫路機関庫は構内を南北に拡張して設置され、1902(明治35)年11月7日付で機関車庫客車庫改築(註53)が逓信大臣より許可される。また1903(明治36)年には経営が悪化した播但鉄道を山陽鉄道が買収、施設、車両などが統合された(註54)。この時重複する施設の整理なども行われたと推測される。

明治36年度下半期には「姫路停車場及び豆腐町停車場各種ノ規模拡張工事ハ全部竣了セリ」(註55)となり、一連の事業は明治36年度内に終えていたと推定される。初代転車台は構内改築工事の中で用途廃止され、新築された扇形機関車庫に伴う転車台が機関車の転向と転線を担うことになったと思われる。

註

- 1 鈴木敬二「旧山陽鉄道(兵庫～姫路間)開通時の煉瓦構造物」「兵庫県立歴史博物館紀要 塵界」第21号 兵庫県立歴史博物館 2010年
- 2 「豆腐町遺跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第322冊 兵庫県教育委員会 2007年および前掲註1を参照して作成。築造時期は「山陽鉄道営業報告」各期によった
- 3 「沙留遺跡Ⅰ」第1分冊 東京都埋蔵文化財センター 1997年および「沙留遺跡Ⅲ」第6分冊 東京都埋蔵文化財センター 2003年 以下の記述はこれによる
- 4 「平安京左京八条二坊2」「平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要」 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年 以下の記述はこれによる
- 5 「平安京右京三条一坊1」「平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要」 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年 以下の記述はこれによる
- 6 「平城京左京四条四坊・四条五坊」 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第101冊 奈良県立橿原考古学研究所 2007年 以下の記述はこれによる
- 7 工作局機械課『転車台状態調査』 1955年 記述に混乱が認められるが、大正14あるいは昭和4年設置とある
- 8 津山町並保存会『J R美作河井駅転車台実測調査』2008年 以下の記述はこれによる
- 9 明治28年5月3日付鉄工第555号(課長達)「転車台定規」『規定類聚』鉄道作業局工務部 国立国会図書館近代デジタルライブラリー
- 10 小西純一「転車台のはなし」掲載表1「鉄道ファン」第49巻第9号 交友社 2009年
- 11 前掲註10掲載図7
- 12 内田謙雄「鉄道工事設計参考図面」定規之部 1893年 小西伸彦氏より資料提供を受けた
- 13 木生子「講演第二章鐵道要具(六)」「鐵道時報」第221号 1903(明治36)年12月12日
- 14 竹内季一「鐵道停車場 中編」 鐵道時報社 1916年
- 15 「明治の機関車コレクション」 機芸出版社 1968年
- 16 「日本鉄道請負業史 明治篇」 鉄道建設業協会 1967年
- 17 前掲註10
- 18 工学会「明治工業史 鐵道篇」 内外出版株式会社 1926年
- 19 時代は下がるが、前掲註14に「坑内円形軌条を支ふる枕木は從来檜材を用ふることが多けれど、混凝土にて継枕木式に造る方が有利」との記述がある
- 20 稲葉権兵衛・大津 寛「機関車轉車臺ノ新設計ニ就テ」「業務研究資料」第23巻第26号 鐵道大臣官房研究所 1935年
- 21 小西伸彦「因美線美作河井駅に残る40ft転車台」前掲註8収録
- 22 前掲註7
- 23 前掲註13

- 24 高橋秀吉「姫路の交通五十年」 高橋文庫 1963年
- 25 「第貳拾四回報告」(明治三十二年度上半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第4巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 26 長船友則「山陽鉄道物語」JTBパブリッシング 2008年
- 27 「豆腐町遭跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第322冊 兵庫県教育委員会 2007年
- 28 「高橋秀吉コレクション古写真Ⅰ」兵庫県立歴史博物館収蔵資料目録4 1989年
- 29 「第七回報告」(明治二十三年度下半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 30 前掲註24
- 31 「第貳回報告」(明治二十一年度上半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 32 「神戸又新日報」明治21年5月15日記事
- 33 「神戸又新日報」明治21年7月19日記事
- 34 前掲註31
- 35 前掲註31
- 36 「第參回報告」(明治二十一年度下半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 37 前掲註36
- 38 「第拾六回報告」(明治二十八年度上半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第3巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年、車両の番号は前掲註26によった
- 39 前掲註24
- 40 「第七回報告」(明治二十三年度下半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第1巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 41 前掲註38
- 42 前掲註15
- 43 小西純一「転車台のはなし」「鉄道ファン」第49巻第8号 交友社 2009年
- 44 「三十六年度期営業報告」(三十二回)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第6巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 45 「第九回報告」(明治二十四年度下半季)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第2巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 46 前掲註26
- 47 「第二十一回報告」(明治三十年度下半期) 老川慶喜編「山陽鉄道会社」第3巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 48 「第貳十回報告」(明治三十一年度上半期) 老川慶喜編「山陽鉄道会社」第4巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 49 「第貳拾参回報告」(明治三十一年度下半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第4巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 50 前掲註18
- 51 前掲註48
- 52 前掲註44など
- 53 「第三十一回報告」(明治三十五年度下半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第5巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年
- 54 前掲註26
- 55 「第三十三回報告」(明治三十六年度下半期)老川慶喜編「山陽鉄道会社」第5巻「明治期私鉄営業報告書集成(4)」日本経済評論社 2005年

第IV章 II区の調査結果

第1節 概要

調査区は平成10年度調査区の北側に位置する。豆腐町遺跡の東端になる。今回、報告のII-1区がA-2区の北側、II-2区がA-1区の北側にあたる。ただ、完全に接しているのではなく、1区同様8m前後の空白地が存在する。

また、今回調査区北側は姫路市教育委員会による本発掘調査が実施されている。II-1区北側には官衙的な遺構・遺物が確認されている。倉庫と思われる縦柱と側柱の掘立柱建物群で主軸は南北である。漆付着土器や奈良三彩・二彩など特殊な遺物が出土している。墨書き土器・製塩土器が多いことや鍛冶関連遺物が出土していることも、今回調査区と共に、同一遺構群と思われる。井戸が多いことも共通点であり、和同開珎が出土している。北東調査区では、漆紙文書が出土した井戸と和同開珎を出土した井戸が検出されている。

II-1区は406m²で、旧線路部分にある。北側にはホーム断面や階段などの施設が残存しており、調査時には解体中であった。第1面は中世の水田跡を検出した。第2面で検出した遺構は掘立柱建物・横跡・溝・井戸・石敷き遺構・土坑・落ち込み・旧河道・ビットと多彩で遺構の密度も高い。原則的にすべて奈良時代に含まれる遺構と思われる。包含層はほとんど残っておらず、中央部分の遺構覆土に限られる。大半の遺物は旧河道(SR01)から出土している。その埋土には前代の遺物も含まれている。日常雑器が多いが墨書き土器・漆付着土器も少なからず含まれている。掘立柱建物から石敷き遺構・井戸にかけて特殊遺物が多く出土している。

II-2区は350m²で、II-1区同様で元の線路部分にある。周辺の状況も同じである。旧ホームの階段や施設が残存していたことから、調査区が分離されている。検出した遺構は土坑・溝・落ち込みである。落ち込みの中には井戸の可能性の高い遺構も含まれている。西側にやや離れて位置しているSK01とSX01は時期不明であるが、それ以外は奈良時代の遺構である。井戸以外は性格がわかる遺構なく、包含層もほとんど残存しておらず、出土遺物も寡少である。

第2節 II-1区の遺構

遺構面は2面で調査したが、上面は中世末の水田跡だけであり西半だけを調査した。ほとんど第2面の調査に費やした。第2面は1面で調査したが、遺構の時期幅は多少あるように思われる。ただ、大きな時期差ではなく奈良時代の狭い幅に入る。検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟、横跡2基、井戸3基、溝5条、土坑4基以上、石敷き遺構2基と落ち込み・旧河道・ビットである。

水田跡

調査区西半だけで検出した。畦畔を確認した。調査区西端で直線に延びる大畦畔を、中央近くでは弧を描く畦畔と南北に延びる畦畔を検出した。西端の畦畔はN18°Eに主軸を有し、最大幅1.1mを測る。ほとんど痕跡だけで高さは数cmしか確認していない。中央付近の畦畔は最大幅2.3mある。明確な時期はわからないが、近世以前の水田跡と思われる。両者が同時期であるかも不明であるが、極端な時期差はないものと思われる。中世後半期でも新しいと考えている。

掘立柱建物

SB01は調査区中央で検出した掘立柱建物である。東西2間の南北棟で正方位（南北）を主軸としている。調査区内で3間確認しており、北側に延びている。現状で東西3.6m、南北4.6mを測る。2間×4間の建物と思われる。それは南から2間目の列に中央柱があることからで4間と想定しており、復元すると南北6.0mになる。柱穴は、現状では不定形になっているものもあるが、本来は方形プランの掘り方と思われる。調査した範囲の柱穴では、柱穴内での建て替えは認められない。また、明確な柱の抜き取り痕跡も確認出来なかった。南辺両側の隅柱では柱痕跡が確認出来なかつたが、抜き取りの痕跡も認められなかつたことから、柱穴底部の整地土と思われる。1時期の建て替えのない掘立柱建物と考えられる。柱穴の大きさは、南から2列目中央の柱穴（P30）が最も大きく、東西0.7m、南北0.6mを測る。柱径は32cmを測る。最小小さい柱は西側のP7で25cmである。深さは南辺中央の柱穴（P33）が深く、0.35mである。レベル的にも低く標高9.3mが底面になっている。隅柱が深くないのが本建物の特徴である。柱穴からは大きな土器片は出土していない。意識的に遺物は埋納していない。土師器・須恵器の破片が出土しているだけであるが、奈良時代の破片である。

SB02はSB01の南側に位置しており、主軸方向は僅かに西に振っておりN4°Wである。東西2間で南北の調査区外に延びている。「豆腐町1」のA-2区では柱穴が確認されていないので、そこまで延びていいことになる。が今回調査部分でも残存状態が悪く断言は出来ない。今回調査した北辺も後の影響を受けていると想定しており、北西隅柱穴は柱痕跡部分だけを調査したと考えている。北辺は4.5mで南側に1.8mのところに1間目の柱列がある。隅円方形の掘り方をしていたものと思われる。遺物は須恵器・土師器の小片だけである。SA01に切られていることから、僅かに古い時期となる。SA01と主軸方向が同じSB01より古い可能性がある。

柵

調査区外に延びているものもあり、掘立柱建物の1辺である可能性も多い。SA01はSB01の南側に位置しており、主軸方向もSB01と同じ正方位を探っている。2間以上で西側に延びる可能性がある。柱間は4.0mで、現況では8mの長さになる。西側の柱穴だけ円形に近いが、他は隅円方形のプランで、中央の柱穴は径30cmの柱痕跡を示す。

SA02は北側石敷の南側に東西方向に並んでいる柱穴群である。主軸はN70°Wで東西から20°角度を変えている。3間検出しており、柱間は西側が2.6m、中央が2.8m、東側が5.4mの長さ10.8mである。柱穴は大きめで最大長65cm、深さ45cmを測る。プランは方形ではないが、やや角の取れた不定円形である。掘立柱建物の1辺のように見えるが、南北石敷の間にあり、いずれかを遮る意図があるように思える。そのことから柵跡とした。掘立柱建物であるとすれば、西側の2間であろうか。

それ以外にSB01南側にも柱穴は存在するが、確實に柵とは断定できないが、並んでいるかもしれない。

井戸

集中して検出されている。前回調査した南側や姫路市教育委員会調査の北側でも複数の井戸が確認されており、豆腐町遺跡の中で井戸の多い地域である。水脈によるものも当然あろうが、当地区周辺の遺跡の性格を示すものと思われる。井戸の上面には石敷遺構が築かれており、その間に多くの遺物が含まれている。炭を伴う層で火を使用した祭祀の可能性が高く、井戸の性格も表しているかもしれない。北側石敷遺構の下にSE01とSE03が、南側石敷遺構の下にSE02がある。

SE01は、3基の中で最も大きな井戸で縦板横桟式の方形井戸である。SE03の南側を切っているので新しいことになる。掘り方も方形で、南北1.17m、東西1.26mを測る。深さは残存する深さで0.6mである。掘り方中央より南西にずらして井側を築いている。四隅に角杭を打ち込み、杭穴によって横桟を接続して補強し、外側に幅30cm前後の縦板材を打ち込んでいる。横桟は下から30cmのところにあり、1辺6cmの角柱を使用している。井側の内法は0.6m四方であるが、土圧のため現状では歪んでいる。残存高は0.55mである。井側中央に残存していないが曲物を据えた痕跡があり、井筒である。径0.45mの曲物と思われ、現状で5cmの深さがある。井筒上面から底面に比較的多くの遺物が置かれていた。大型須恵器甕以外は精製の土師器高杯・皿・碗が出土している。精製品であるが、井側のような墨書き土器は入れられていない。掘り方埋土は、井側が南西に偏っている短い部分は垂直方向に埋められているが、広い部分は水平方向に周辺を埋めてから垂直に南西部分と同じ埋土を入れている。遺物は比較的多く出土している。特に井戸底の井筒上面では墨書き土器・刻書土器などがまとまって出土している。

SE02は南側石敷の下で検出されている。石敷は北側より南側の方が密集しており、稠密度が高い。隅円方形の掘り方中央に井筒である曲物を据えるものであるが、曲物は僅かに残存するだけで痕跡に近い保存状態で取り上げ困難であった。掘り方は東西1.05m、南北0.9mで、深さ0.4mを、曲物は径0.7m、深さ0.2mを測る。土器皿皿・碗・甕が出土しており、3基の井戸で最も新しいのではないかと思われる。

SE03は掘り方南側をSE01に切られている。不定の隅円方形の掘り方で、東西0.65mで南北の残存長が0.7mである。南側は極端に切られたとは思われないが、多少延びることは確実である。北側に寄せて井筒である曲物を据えている。南北に歪んで（延びて）トラック形の平面になっている。内法は現状で、東西0.35m、南北0.5m、高さ0.2mを測る。桜樹皮で結合している点は一般的である。須恵器杯Bや土器皿皿が出土しているが、SE01より大きく異なることはない。

溝

調査区西側で5条検出している。幅0.3～0.5mで、深さ0.13～0.3mである。4条は平行しており、ほぼ正方位を探っている。SD05は直交方向に延びており、東西2.9mを測る。断面形状も底は丸みを持つ台形でしっかりとしている。SD01～SD04は北側端部が斜め方向に直線にはば描っており、北側が削平されたかもしれない。SD01の東側の方が浅く、西側のSD04の方が深くなっている。南側は調査区外へ続いている。SD01が最も長く検出しており、4.5mを測る。SD04は南北に分断しており、北側だけ直線でない弧状になっていることから別遺構かもしれない。出土遺物はSD04南半だけかたまっているが、それ以外は須恵器・土師器など奈良時代の小片だけである。時期は確定しがたいが、すべて主軸方向からもSB01と同じ奈良時代の遺構と考えられる。

土坑

土坑は全体で検出しているが、遺構番号を与えたのは西側の2基だけである。北西部や北東部分にも土坑があるが、自然の可能性が高いと判断し遺構番号を与えていない。SK01は西端中央で検出している溝状の土坑である。中央が広く最大幅0.7mを測り、長さ2.35mになり端部は両方ともに丸く納めている。断面形状は逆台形に近く底面は平坦ではない。深さは0.5mと比較的深く、中央が深く両端は浅い。下層には遺物はなく灰シルト質細砂が堆積し、上層に同色の粘性のあるシルト層になっており、遺物が含まれる。

SK02は調査区南西隅の自然の可能性の高い落ち込みである。南西隅に向かう南北より45°近く振っている。旧河道などの最終段階の埋土かもしれない。比較的多めの礫を埋土に有している。ただ、肩部下

に一段平坦になっている部分があり、幅0.6m前後のテラス面となっている。そこから下に向かって完全に近い土器を納めていたので、最終段階の埋め立て時などの祭祀かと思われる。須恵器で肩の張る同タイプの壺を4個体以上据えている。深さは0.5m測る。土層は細かい層ではなく一気に埋めたような状態であり、底よりも中位の方が遺物は多かった。

石敷遺構

調査区中央の井戸上面にある遺構である。北側石敷がSE01・SE03の上部、南側石敷がSE02の上部に塗かれている。両石敷の間には空闊地があり、そこにSA02が存在する。

北側石敷は2基の井戸の上部遺構であるが、南側石敷と比べると粗雑で部分的に抜けている。特にSE03の上部は疎らであった。SE01を中心に入敷設していることが明らかで、北側は調査区外続く可能性もあるが、ほぼ終焉するものと思われる。南北3.0m余りで東西5.0mを測る。SE01上部には礫が集中し密度が高くなっている。その西側は少くなり、すぐ西側はなくなり北西部に少量の礫が配されている。北東側も礫は多めに見られることから、未調査部に他の遺構があるかもしれない。礫は円礫を主体とする拳大からその倍程度の大きさである。少量ながら角礫も認められる。石敷は底面のレベルは比較的合わせているが、上部は均一でない。3段になっている部分が最高で、多くは2段か1段になっている。

南側石敷は礫の密度が高く、配石土坑のようである。SE02上面から北には広がっておらず南側に幅を同じくして延びている。北側石敷と異なる点は、掘り方を有し、一段下がった部分に礫を配置していることである。東西1.35mで南北に2.65mを測るが、南側はやや外に続いている。北辺は直線的で方形プランを呈し、南側は丸みを持つ形状である。それが接合した状態のプランとなっている。SE02上面が方形になり、その南側に不定円形が接続している。井戸南側の板材出土位置でくっついている。礫の大きさは北側と同じく拳大前後のもので、やはり円礫主体である。礫は坑内に詰まっているのではなく、上面中心に置かれている。1段か2段が大半である。井戸上面から0.1m上まで掘り方となっている。井戸掘り方南端から0.2mまで平坦となり、そこから低くなり始める。その変化点に板材が置かれている。また、井戸掘り方南端から1.05mのところまでが1段低くなってしまい、そこから上にベースは上がっている。掘り方の内外はあるが、礫の高さは同じで南へ延びていて一体感がある。が、ベースに付いている礫と上部にある礫は性格が番う可能性も多い。すなわちベースに付いている礫は井戸使用時に配されていた礫で、上の礫は使用しなくなつてからの廃棄後の行為と考えられる。

旧河道

調査区南西部で検出しており、「豆腐町遺跡Ⅰ」のA-2区で調査されているSROIが伸びているものである。旧河道全体が伸びているのではなく、本調査区内で西側に曲がっている。北側に伸び途中で向きを変え、西側に主体を振っている。そのことから上端を確認しただけで全体は検出していない。下端も調査区外に存在しており、肩部の縦斜面の状況を呈している。それでも遺物量は質量とともに豊富である。ベース面には植物痕跡が認められ、イネ科類が繁茂していたようである。有機質も多く認められる。その上層は凹凸が激しく炭が混じっている。シルト層・炭混じり層と堆積しており、すべての層に遺物を包含しているが、炭混じり層が傑出して濃密に包含している。墨書き器や稜碗などと日常具が多く含まれる。旧河道の底面は検出していない。

第3節 II - 2区の遺構

当初、II - 1区と連続して調査する予定でII区としたが、旧駅舎の階段部分の撤去が種々の事情で残されたことから、間を開けて調査を実施した。

検出した遺構は落ち込み・土坑・溝である。多くは奈良時代の遺構でII - 1区と同時期と思われる。西側に離れているSX01とSK01だけが時期不明で後出の遺構である。

落ち込み

SX01は西側で検出しており、SK01に切られている。最大長2.2mのやや歪な円形をしている。北側が直線的で東側もやや直線的になり、南半が円形になっている。西側に細く続いているようだが、SK01によって切られている。底は平坦で浅い落ち込みである。深さは最大0.2m、最小0.1mで黄灰シルト質極細砂を单一の埋土にしている。有機質を含むシルトブロックと礫を含んでいる。礫は東側方向に限られており、西側には見られない。SX01周辺にピットが複数あり関連があるかもしれない。中世末から近世はじめにかけての遺構である。

SX02は不定形で、東西2.2m、南北1.75m、深さ0.8mを測る。底面に平たい円礫を散き、壁に曲物の痕跡があったことから、井戸と思われる。掘り方は東西に長い長円形で、東西2.2m、南北1.8mを測る。深さは最大0.45mと深い。高い部分からの比高差でも0.7mと小さい数値であるが、豆腐町遺跡の他の井戸も浅いことから矛盾しない。掘り方西端に寄せて中央に井筒部分を設置している。やはり長円形で南北1.1m、東西1.5mを測る。

SX03～05も不定形で性格は明らかでない。SX03はSK02に南西隅を切られている。東西2.35m、南北2.0m、深さ0.15mである。隅の丸い三角形に近い形状で底面は平坦ではない。SX04はSX03の北東側、SX05の南側に位置しており、落ち込み間の切り合い関係はない。東西に長い溝状の落ち込みで、東西3.0m、南北1.1mである。SX05は調査区北側に延びる方形の落ち込みで東西2.6m、南北の残存長は0.8mである。南西は角張るが南東は丸みを持つ。

SX06は平面形が不定三角形で、内部に円礫を詰めていた。遺物が礫間に含まれていた。西側をSK03によって切られている。今回の調査区ではすべて土坑が落ち込みを切っている。北辺が2.35m、南東辺が2.4m、南西辺が2.5mを測る三角形に近いが、南側に0.6mの一辺を設けている。東側に礫は集中しており、その部分だけは底は平坦である。礫のない西側は一段低くなっている。底は中央が深くレンズ状になっている。礫は円礫を主体とするが角礫も含まれている。礫の間に奈良時代の須恵器・土師器を含んでいるが小片になっている。礫は底から0.15m上まであり、多い部分では3段になっている。上面はある程度描えているように見えるが丁寧にはしていない。

土坑

土坑は6基検出している。楕円形のものと不定円形のものがあるが、すべて性格は不明である。SK01には遺物は含まないが、SX01を切っていることから、中世末より新しい遺構であることが理解される。南北1.55m、東西0.7mを測り、北側は尖りぎみである。南側は丸みを持っており、深さは0.12mと浅く、底は平たい。埋土に地山や黒褐シルトのブロックを含んでおり、自然ではない。

SK01以外の土坑はすべて東半で検出している。SK02はSX03を切っている土坑である。南北1.05m、東西0.65m、深さ0.2mで底面は比較的平坦である。深さは余りなく肩部から緩斜面となり、南北に長い楕円形である。

SK03は東西に長い不定形の土坑でSX06を切っている。東西1.7m、南北0.9m、深さ0.2mを測る。東側は方形に近く、西側は丸くなっている。南北は直線的である。

SK04は東半西端で単独にある小土坑である。主軸は正方位を探り、南北0.55m、東西0.4m、深さ0.15mを測る。

SK05・SK06は東端に位置する土坑である。SK05は南北0.75m、東西0.4m、深さ0.2mの不定円形である。主軸を南北から45°近く振っている不定形をしている。幅0.6mで長さ0.75m、深さ0.25mを測る。ともに埋土は1層である。断面形状は皿状で底は丸い。

溝

溝は1条検出している。東半中央に位置している。N25°Eの主軸方向になっている。幅0.15～0.2mと狭い溝で深さも最深で0.15mである。僅かに西側に湾曲ぎみだが、ほぼ直線に延びている。北側は丸みを持っており端部かもしれない。南側は調査区内で終息している。両端を検出しているなら、長さ4.7mになる。II-2区東半の遺構を東西に分けているように見える。

第4節 遺物

橋跡・ビット出土土器（1～6）

(1) はSA01出土の須恵器碗である。白っぽく胎土は緻密である。(2) は甌の把手部でSA02から出土している。(3) (4) (5) は製塙土器でビットから出土している。製塙土器の破片は今回の調査区でも多く、特に遺構から出土している。すべて丸底Ⅲ式のものである。(6) はSP42出土の土師器壺である。

溝出土遺物

(7) は須恵器杯AでSD01から出土している。(8)～(16) はSD02出土で、製塙土器が多く出土している。奈良時代特有の厚手の土器で、布目は認められない、ユビ成形で端部周辺のみヨコナデで仕上げている。(11) は土師器煮沸具把手部で細かいハケ整形を施している。(14) (15) は須恵器で、(14) は杯Aで底が極めて平坦である。(15) は甌で口縁部に波状文が認められる。SD03の土器は3点同化している。製塙土器2点と須恵器甌底部1点である。外に聞く高台が付き、精製された胎土である。

(21)～(29) はSD04出土土器で、やはり製塙土器が目に付く。同化した土器はすべて土師器で、須恵器の破片はあるものの確実に少ない。(29) は大型の甌の据部で、端部は外反しユビ成形で安定を図り、ハケ整形している。甌以外に(23) の甌など煮沸具が多い。(21) は杯で(22) は皿で、ともに胎土は良好である。

(30)～(40) はSD05から出土しており、やはり製塙土器・土師器煮沸具が多く含まれてもの、他の溝よりは少なく須恵器の量がやや多く認められる。(30) (32) は皿で細砂を含むものの比較的良好な胎土で丁寧に仕上げられている。ケズリで側面を整形しナデ仕上げで化粧土を塗布している。(31) は器高が高いことと体部が内湾することから椀になる。皿と比べて仕上げも粗く、ナデ整形であるがユビ痕跡が残っている。(33) (34) は甌でハケ整形で仕上げるぐの字甌である。(37)～(40) は須恵器で、(37) はボタン状のつまみを有し、端部は垂下するように曲げている。天井部は平たく墨書きが見られる。

(38) は杯Aで底は平たく体部は内湾ぎみである。白っぽい色調で有機質が付着している。(39) は高台が大きく開くもので、甌の底部であろうか。(40) は杯Bで断面台形の低めの高台である。器壁は薄く、灰白を呈し胎土は緻密である。

土坑出土土器

土坑出土遺物は、土師器煮沸具・製塙土器がないわけではないが、量的に少なく溝出土土器とは大きく内容が変わっている。杯皿が多く、須恵器も通常の出土量である。瓦は1点も出土していない。(41)～(44)はSK01出土土器で、(41)は球形の体部を持つ土師器小形壺である。底部を丸く丸底である。ユビ成形からハケ整形し口縁部はヨコナデを施す短い頸部を持つ。(42)は土師器皿で屈曲する体部で端部は肥厚ぎみである。細砂を含むものの精製品でヨコナデで仕上げる。(43)は土師器壺で奈良時代の特徴を持つ口径が体部より大きいものである。ハケ整形で口縁部のみヨコナデ。(44)は須恵器壺の口縁部で、口径27.8cmを測る大型品である。口縁部は外反し端部は内外に肥厚する。タタキからナデ整形、ロクロケズリも見られる。肩が張るタイプで倒卵形になり丸底であろうか。

SK02出土土器は(45)～(52)で9点図化している。1点を除いてすべて須恵器であるが、土師器が極端に少ないわけではないが、他造構と比較するとやはり寡少であろうか。(45)は土師器壺で上向きの把手を有している。幅広の薄めのシャープな把手で断面方形になっている。最大腹径の上に付けており、体部は内湾しユビ成形から外面はハケ整形する。口縁部は外反しており、ハケ整形からヨコナデで仕上げる。(46)は杯蓋で天井部は湾曲し、つまみ部も先端がまだ尖っている。杯Aと杯Bが混在しており、破片を含めても同量である。(48)は口径18.7cmと大型で底は平たく底径14.7cmを測り、体部は直線的で端部近くで反っている。(49)～(52)は似たタイプの壺である。肩が張り広口で器高の低いもので、精製品である。(52)は他より大きく肩部に刺突文が巡らされている。

(53)はSK03出土で浅い小型の椀である。丸底と思われ、細砂を含むが胎土は良好である。

井戸出土土器 (54～90)

(54)～(78)はSE01出土である。出土位置は井筒出土(68)～(72)と井側底部となる井筒上面(54)～(67)と井戸掘り方(73)～(90)に分けられる。井筒上面は井戸廃棄時と考えられ、土師器・須恵器が出土している。墨書き土器と刻書き土器が出土しているのが特徴である。それ以外も精製の杯・皿・蓋で地元産と思われ、赤色粒・クサリ礫を胎土に含んでいる。化粧土を塗布しており、ハケの痕跡が明瞭である。口径8.0cm、器高2.1cmの小皿は余り見ない器種である。小皿と壺も出土していることは日常的な遺物も入っていたことになろうか。井筒内出土は5点である。(68)は黒色土器椀で、今回調査で唯一の黒色土器である。磨滅しており暗文は不明である。土師器杯は3点あるが、(71)は体部が屈曲しており金雲母を胎土に含み搬入品と思われる。(72)は須恵器壺口縁部で口径45.8cmと大型である。タタキ成形で口縁部は外反している。井戸掘り方からは日常雑器が多く出土している。甕・壺の破片が出土しており、意図したものとは思われないことから、前代のものであろうか。製塙土器なども含まれ、一般的な出土内容であることからも意識した遺物ではなく、周間にあったものを埋土にした可能性が高い。(81)は須恵器杯であるが、強く被熱していることから増堀であろうと考えている。豆腐町遺跡の性格を表す遺物である。

SE02出土遺物は3点(82)～(84)図化している。すべて土師器であるが、やはり甕など日常具が出土していることが遺跡の性格を示しているように思われる。(84)は甕で豆腐町遺跡に多く出土する壺部が棒状になっている。壺部が一段下がって突出するように成形しているのは、特徴的である。

SE03からは(85)～(90)の6点の土器を図化している。(90)は造構の時期ではなく弥生中期末の甕である。短く外反する頸部で口縁部は外側に大きくつまみ出すように肥厚している。(85)は土師器蓋で口径22.2cmと大きい。(88)は高台を有する土師器杯である。断面台形で端部が肥厚する高台で外

側に聞いている。底径が18.4cmと大型になり、蓋とセットになる可能性があり、大きさから皿の可能性も多い。(86) (87) は丁寧にミガキが施されている。(89) は須恵器椀で器高が高めである。

石敷出土土器 (91 ~ 162)

北側石敷の方が多く(91 ~ 152)出土している。その中でも大半は下層となる石敷直上の炭混じり層からの出土である。石敷上層からは7点(91) ~ (97) 図化している。遺構廃絶後の埋土で中世に下るもので、水田化する前の時期を示しているものと思われる。(91) の土師器小皿と(97) の須恵器椀が新しい時期を確実に示す資料である。12世紀末頃で、それ以外は奈良時代の遺物である。

(98) ~ (110) は石敷上面の灰砂土出土の遺物で、墨書き土器や暗文・ミガキのある杯が多く認められる。墨書き土器・須恵器両方あり記号ではなく文字で、「大山」「柏」で前回出土例と同じである。径の大きい皿Bも出土している。転用硯も存在する。

(111) ~ (152) は石敷直上の炭混じりシルト質層からの出土で大量の遺物が包含していた。墨書き土器「大山」「佐太」や漆付着土器・墨の付いた土器が多く見られるのが特徴である。埴輪があるのも遺跡の性格を示しているものと思われる。暗文のある杯も多くミガキがなされているものが主体である。口縁端部は丸く肥厚するものと外側に反するものがあるが、古相を示している。須恵器にも「大山」「佐太」と同じ墨書きが見られる。底部に高台を付ける際の工具痕や記号も見られる。杯は図化した中では杯Bが多いが、数量的には杯Aと杯Bの比率は余り変わらない。杯Bは体部が内済するものより直線的に延びるシャープな作りのものが多い。底径の大きいタイプや深い杯、接線が甘いものの後椀に近い形状のものも出土している。平瓶・横瓶などの器種や壺などの大型品も出土している。石敷の上から小片となって出土していることから、意図的に破砕して置いたかもしれない。

(153) ~ (162) は南側石敷出土の遺物である。(153) は土師器皿で上面出土である。接線を持たないものでナデ仕上げである。(154) は製塙土器でユビ成形からナデ整形をしており器肉厚い。(155) は内済する杯蓋で器高い。端部角張り内面ミガキである。(156) は杯Aで底部丸みを持ち、(157) は杯Bで外側に聞く高台を有する。杯には北側石敷同様やはり両者が混在する。(158) には底部に墨書きが見られるが判読出来ない。(159) は漆付着した須恵器杯で、底部は残存していない。(160) は接線が甘いものの後椀である。外側に聞く端部が肥厚した高台部を有する。底面に「志」の墨書きが見られる。前回の調査例にも杯蓋に似た例がある。(161) は皿Bで高台周辺に刻み目状の工具痕が残っている。(162) は須恵器壺口縁部で、大きく外反して端部近くは水平に近くなり角張る。自然釉が付着している。

II-2区落ち込み出土土器 (163 ~ 188)

(163) (164) はSX01出土で、(163) は備前焼擂鉢口縁部でII区出土の図化した遺物で最も新しいものである。SX01の後に水田が認められることから、遺構は近世~近代のものである。擂り目上部がかろうじて残っている。端部は肥厚し内傾しており、色調が灰色を示すものである。(164) は外面に波状文が施された大型の口縁部である。

(165) ~ (174) はSX02の出土遺物である。井戸と考えられる遺構で製塙土器が多く見られる。杯Aと杯Bが出土しており、杯Bは白っぽく胎土緻密で精製されている。(166) は口径27.6cmと大きめの皿Bで丁寧な作りである。

(175) は土師器皿でSX03出土である。多くの土師器と同様の色調・胎土をしている。底は平たく体内済し口縁部は外反し端部丸めている。ミガキで仕上げている。

(176) ~ (188) はSX06の出土遺物である。日常具が多いことが指摘できる。煮沸具である壺・竈の

破片が目立っている。ただ特徴的な遺物も出土している。(185)の須恵器壺と(188)の土馬脚部が出土しており興味深い。(185)は肩の張る広口になるものと思われ、SK02でも祭祀具として使用されている。

旧河道出土土器（189～251）

(189)～(192)(206)～(208)は土師器皿である。端部は肥厚ぎみに反っており丁寧な作りである。(192)は稜線を明瞭に持ち底径は16.8cmと大きめで高台を有する皿Bである。(213)も皿Bでさらに大きく、口径27.3cmを測り外反してから端部を肥厚させている。(194)は後輪蓋でつまみ部の低いものでつまみ部径10cmを測る。(197)(200)(251)は須恵器壺である。(197)(251)はタタキ成形で肩が張り口縁部は短く直立ぎみである。製塙土器も多く含まれている。墨書き土器も多く「大山」「左二」が判読できる。記号や漆付着土器も存在する。面取りをした土師器高杯や杯蓋も出土している。杯Aと杯Bの比率はあまり変わらないと思われる。土師器壺・竈も少なからず出土している。

包含層出土土器（252～502）

绳文土器から近世までの遺物が出土している。前回の調査に比べると弥生土器の量は極めて少ない。古墳時代の遺物も杯身と蓋が逆転する時期から増加するが、古いものは少ない。土師器の蓋は比較的多く出土している。暗窓・ミガキが見られる。土師器皿・杯で高台を有するものが多く見られる。高台の高い椀も出土している。墨書き土器・漆付着土器・製塙土器も多い。小皿かミニチュアの鉢と思われる小型品も存在している。鉢の中には取瓶の可能性があるものもある。面取りされた多角形の高杯も多く見られ、化粧土が塗布されている。煮沸具が多いのも問う町遺跡の特徴である。壺は長胴のものが多く、球形小型のものは少ない。口径が大きいのが多く、ハケ整形が主流である。(379)は竈蓋と思われる特殊な遺物である。ユビ成形で粗く仕上げナデ仕上げする。断面三角形の手捏ねの把手を付けている。土馬・紡錘車も特殊な出土品である。

瓦

軒丸瓦が1点と瓦当部の残っていない軒平瓦が1点出土している。軒丸瓦(T1)はSE01の井筒内から出土している。播磨国府系瓦で本町式のものである。瓦当径14.1cm、厚さ3.15cmを測る。平瓦は包み込んでおり、側面はケズリで裏面はナデで調整する。T11・T12だけII-2区のSX06から出土している。それ以外はII-1区包含層からの出土である。旧河道からも数点出土しているが、多くは石敷上面から出土している。

丸瓦は内面布目が残り、外面はナデで仕上げている。平瓦の凹面は布目が残り、コビキ痕が認められる破片もある。凸面はタタキが多く、縦目・格子・斜格子があり、それには精粗がある。端面は面取りしているものが多いが、ナデのものもある。

木器

W1はSE03の水溜めに使用されていた曲物である。土圧などで旧態を残していないので正確な形状は不明である。平面は円形であった可能性が高いが明らかでなく、橢円形であったかもしれない。高さはあるものの1枚の板材を曲げて作っている。板材の接合面は16cm重複させている。桜皮によって接合している。内面には通常よく見られる縦方向の刻みで曲げ易くしている。高さは18.4cmと高く、円形に復原すると直径50cmとやや大きめである。

W2～W16はSE01の井戸枠である。W2～W7は縱板で幅のある4点は建築材の転用かと思われる。W2は端部に近い長辺に両側から大きな繰り込みを入れており、確実に転用材である。幅23.2cmで厚さ

2cmを測る。最大7cmの平面三角形の縁り込みを入れている。W6・W7は幅11cmで下端を薄く加工している。縦板の継ぎ目の補強材である。縦板を据えた後に地山に突き刺したものと思われる。

W8・W9・W16は四隅に据えられた縦桿である。横木を差し込む枘穴が穿たれている。下端から22cmのところに枘穴を設け、その上に直交する横木を据える段を設けている。やせ細っているが、本来は1辺9cmの方柱であったと思われる。

W10～W15は横木である。枘穴や縁り込みが見られる。残存状態が悪いものが多く割れている。W14・W15は縦桿との接合部で接合部分を薄く仕上げている。W17は杭状になっている。

W18はSX02から出土しているが、SE03の井戸枠が流れたものと思われる。横木と思われ、枘穴か縁り込みがあり、加工痕が残っている。

W19は枘状に突出した柱材である。柱根部分かと思われる。

W20～W23は祭祀具であろうと考えられる。W20はSE03から出土しており、肅串である。先端側を折り取っている。W21は板材でなく厚みのある角材に近い製品で、鳥形の可能性を考えている。W22・W23は馬形ではないかと思われる。W22は鞍部分を表し、W23は上半部を表している。長めの製品になる。

表7 出土木器計測表

No.	実測	地区	出土遺構	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	参考
W1	1	Ⅱ区	SE03	石器	曲物	61.0			
W2	19	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(縦枠)	(55.6)	23.7	2.2	
W3	20	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(縦枠)	(45.6)	25.8	2.3	
W4	22	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(縦枠)	(37.4)	27.0	3.0	
W5	25	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(縦枠)	(37.2)	19.0	2.5	
W6	53	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(縦枠)	(63.0)	10.0	2.0	
W7	54	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(縦枠)	(62.3)	9.2	2.0	
W8		Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	(48.7)	8.0	6.7	
W9	7	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	53.6	8.2	5.6	
W10	10	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	(41.7)	5.7	4.2	
W11	13	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	(17.9)	4.7	4.0	
W12	14	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	(9.0)	4.1	2.9	
W13	11	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	(32.3)	4.3	2.3	
W14	9	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	(27.5)	5.1	3.9	
W15	9	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	(28.7)	6.1	3.9	
W16		Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	25.3	7.2	6.1	
W17	17	Ⅱ区	SE01	建築材	井戸枠(横枠)	34.0	4.6	3.1	
W18	47	Ⅱ区	SX02	建築材	井戸枠(横枠)	(52.5)	3.4	2.6	SE03 横
W19	52	Ⅱ区	瓦合層	石器	柱根	(17.2)	7.7	6.2	
W20	56	Ⅱ区	SE03	祭祀具	肅串	(11.3)	0.9	0.45	
W21	2	Ⅱ区	SE01	祭祀具	鳥形	(12.5)	2.1	1.9	
W22	3	Ⅱ区	SE01	祭祀具	馬形	(15.2)	3.8	0.6	
W23		Ⅱ区	SE01	祭祀具	馬形	(35.7)	4.5	1.5	

鉄器

鉄斧が1点出土している。小型品で鍛造である。幅3.2cmで厚さ1.4cm、残存長5.2cmを測る。両側を曲げており、刃先は明瞭でなく磨滅している。使用による磨耗であろうか。

石器

石器は3点出土している。S1・S2はII-1区の石敷上面の包含層からの出土である。層位は奈良時代である。S3はP10から出土している。

S1は平基式の石鏡である。重さ1.1gと小さく両面ともに両側から丁寧に加工している。対称でなく、片側が鋭くなっている。長さ2.5cm、厚さ0.35cm、幅1.3cmを測る。

鉄器



0 5cm

S 2・S 3は紙石である。地元山塊で採取される凝灰岩質の石材であり、ともに1面だけ使用している。S 2は高さがあり使用面が狭く、割れたものと思われる。残存長9.0cm、残存幅3.7cm、残存厚6.8cmで、重さは154.6gである。S 3は残存長4.2cm、幅4.4cm、残存厚2.0cmを測る。

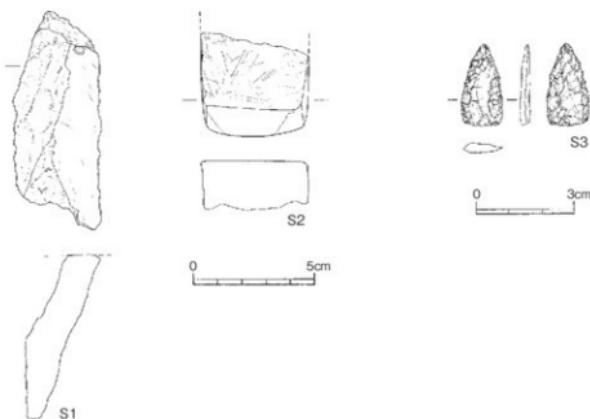


図 19 石器・鉄器実測図

表 8 豊島町通跡 II 潜物観察表 (1)

番号	図版 写真	種類	器種	地区	遺構	探法	他	形態の特徴	内面	外面	船主	口径	器高	底径	備考
1	26	44	須恵器	壺	II-1 SP15	ロクロナデ、底部ヘラ切	平底から内湾する体部、端	N7.0灰白	N6.0灰	6.0灰	織密	(14.80)	(3.70)	(10.40)	
2	26	44	土師器	甕	II-1 P41	ナデからハケ整形、面取直線的	屈曲して立ち上がり端部角張り	7.5YR4.1 に5.5V	7.5YR5.4 に5.5V	7.5YR5.4 に5.5V	粗砂、石英	(9.60)	(6.30)	2.00	
3	26	44	土師器	製埴土器	II-1 SP20	ユビ成形からナデ	屈曲きみに外傾し端部丸い	粗灰~黒	粗灰~黒	粗灰~黒	粗砂、石英	(11.00)	(8.20)	-	
4	26	44	土師器	製埴土器	II-1 P41	ユビ成形からナデ	屈曲きみに外傾し端部丸い	7.5YR5.4 に5.5V	7.5YR5.4 に5.5V	7.5YR5.4 に5.5V	粗砂、長石	(10.00)	(4.80)	-	
5	26	44	土師器	製埴土器	II-1 P42	ユビ成形からナデ	屈曲きみに外傾し端部丸い	粗灰~黒	粗灰~黒	粗灰~黒	粗砂	(12.30)	(10.30)	-	
6	26	44	土師器	甕	II-1 P42	ハケ整形からナデ、ヨコナデ	屈曲きみに外傾し端部丸い	粗灰~黒	粗灰~黒	粗灰~黒	細砂、石英	(35.40)	(8.10)	-	
7	26	44	土師器	杯	II-1 SD001	ヨコナデ	内湾する体部から外反する	内面	内面	内面	細砂、石英	(35.40)	(8.10)	-	
8	26	44	土師器	製埴土器	II-1 SD002	ユビ成形からナデ	内湾する体部から外反する	内面	内面	内面	細砂、雲母、石英	(13.60)	(3.20)	-	
9	26	44	土師器	製埴土器	II-1 SD002	ユビ成形からナデ	外傾し端部厚く角張る	5YR4.1に 5V赤褐色	5YR4.1に 5V赤褐色	5YR4.1に 5V赤褐色	粗砂、雲母、石英	(12.40)	(7.30)	-	
10	26	44	土師器	製埴土器	II-1 SD002	ユビ成形からナデ	内湾する体部から外反する	内面	内面	内面	粗砂、長石	(11.00)	(6.40)	-	
11	26	44	土師器	把手付甕	II-1 SD002	ハケ整形からナデ	内湾する体部、把手は下に向く	内面	内面	内面	粗砂、石英	(13.60)	(5.70)	-	
12	26	44	土師器	製埴土器	II-1 SD002	ユビ成形からナデ	僅かに湾曲して開く	2.5YR6.6	2.5YR6.6	2.5YR6.6	粗砂	(11.20)	(5.80)	-	
13	26	44	土師器	製埴土器	II-1 SD002	ユビ成形からナデ	内湾する口縁部で端部薄い	2.5YR8.3	2.5YR8.3	2.5YR8.3	粗砂	(12.40)	(3.80)	-	
14	26	44	須恵器	杯	II-1 SD002	ロクロナデ	平たい底から外傾する体部	2.5YR8.3	2.5YR8.3	2.5YR8.3	粗砂	(4.00)	(14.40)	-	
15	26	44	須恵器	甕	II-1 SD002	ロクロナデ	外反する、透 stav 文	白	白	白	粗砂、雲母	(23.60)	(2.30)	-	
16	26	44	土師器	甕	II-1 SD002	ヨコナデ、ナデ、ミガキ丸	内湾する体部で端部厚く角張る	10YR7.2/1- 5V	10YR7.2/1- 5V	10YR7.2/1- 5V	粗砂、雲母	(5.10)	(1.00)	-	
17	26	44	須恵器	壺	II-1 SD003	ロクロナデ、高台貼り付内反	平坦な天井部にボタン状の折り曲げ	10YR7.1 に5.5V	10YR8.3 に5.5V	10YR8.3 に5.5V	粗砂	(4.60)	(8.40)	-	
18	26	44	土師器	製埴土器	II-1 SD003	ユビ成形からナデ	屈曲して開き端部内傾きみ	2.5YR6.4 に5.5V	2.5YR6.8 に5.5V	2.5YR6.8 に5.5V	粗砂、長石	(11.20)	(5.60)	-	
19	26	44	土師器	製埴土器	II-1 SD003	ユビ成形からナデ	屈曲して開き端部内傾きみ	2.5YR6.6 に5.5V	2.5YR6.6 に5.5V	2.5YR6.6 に5.5V	粗砂、長石	(13.00)	(7.00)	-	
20	26	44	須恵器	甕	II-1 SX006	ロクロナデ、貼り付けナデ	平坦な天井部にボタン状の折り曲げ	N5.0灰	N5.0灰	N5.0灰	細砂	(12.80)	(2.20)	-	
21	27	44	土師器	杯	II-1 SD004	ヨコナデ、ミガキ	内湾する体部で端部丸く肥厚する	2.5YR7.2/2	2.5YR7.2/2	2.5YR7.2/2	粗砂	(11.70)	(3.60)	(7.20)	
22	27	44	土師器	甕	II-1 SD004	ヨコナデ、ヨコ記号	内凹する体部で端部外傾し薄い	2.5YR7.2/2	2.5YR7.2/2	2.5YR7.2/2	粗砂、クサリ織	(17.20)	3.10	15.80	
23	27	44	土師器	甕	II-1 SD004	ヨコナデ	外反する、葉付着	10YR8.3/1- 5V	10YR8.3/1- 5V	10YR8.3/1- 5V	粗砂、長石、雲母	(24.80)	(3.70)	-	
24	27	45	土師器	製埴土器	II-1 SD004	ユビ成形からナデ	屈曲して開き端部内傾きみ	2.5YR7.4 に5.5V	2.5YR7.4 に5.5V	2.5YR7.4 に5.5V	粗砂、長石、雲母	(12.20)	(9.10)	-	

表 3 豆腐町遺跡 II 遺物類型表 (2)

番号	図版 写真 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴	色調	胎土	口径 (cm)	法量 (cm) 高さ	備考
25	27	45	土師器	製壺土器	II-1	SD04	ユビ成形からナデ	外傾し端部近くで厚くなる	にぶい黄 緑～灰灰	粗砂	(10.70)(11.10)	-	
26	27	45	土師器	製壺土器	II-1	SD04	ユビ成形からナデ	外傾し端部丸い、 内湾し端部丸みを持つ	7.5YR6.4 6.4R7.4 1.0g	粗砂	(14.60)(7.40)	-	
27	27	45	土師器	製壺土器	II-1	SD04	ユビ成形からナデ	内湾ぎみに外傾し端部角張り、 内湾ぎみに張り出る	10YR5.3i 5.5YR7.4 1.0g	粗砂	(13.90)(6.00)	-	
28	27	45	土師器	製壺土器	II-1	SD04	ユビ成形からナデ	外反し端部反る	10YR8.3 10YR8.3 1.0g	砂粒	(11.20)(46.80)	-	
29	27	45	土師器	甕	II-1	SD04	ユビ成形からハケ整形、 テナ	上口直になり体部内湾し端部厚くなつて尖る	10YR7.2i 5.5YR7.4 1.0g	細砂	(21.30) 3.10	12.80	
30	27	45	土師器	甕	II-1	SD05	ヨコナダ、ケズリ、 キ(暗文)、化粧土金帯	内湾し端部丸い、焼付着	にぶい黄 緑～灰 1.0g	細砂	(17.20)(5.40)	-	
31	27	45	土師器	輪?	II-1	SD05	ユビ成形からヨコナデ、 ナ	平たい底から後を持たすに内 外反し端部丸く尖る、焼付	2.5Y7.2K 1.0g	細砂	(16.60)(3.30)	(11.60)	
32	27	45	土師器	甕	II-1	SD05	ヨコナデ、ミガキ	内湾する体部、端部丸く尖る、 焼付	にぶい黄 緑～灰 1.0g	細砂	(23.80)(4.00)	-	
33	27	45	土師器	甕	II-1	SD05	ハケ整形、ヨコナデ、ナ	内湾する体部から外反する、 焼付	10YR7.2i 5.5YR7.4 1.0g	細砂	(25.70)(9.00)	-	
34	27	45	土師器	甕	II-1	SD05	ユビ成形からヨコナデ	内傾し端部尖に曲がる	10YR7.3i 5.5YR7.4 1.0g	粗砂	(11.20)(4.90)	-	
35	27	45	土師器	製壺土器	II-1	SD05	ユビ成形からナデ	外傾し端部やや内傾し角張る、 焼付	10YR5.3i 5.5YR7.4 1.0g	粗砂	(15.40)(7.90)	-	
36	27	45	土師器	製壺土器	II-1	SD05	ロクロナデ、貼り付けナ ラケズリ	内湾する、高台外に開き直る	7.5YR8.1K 1.0g	微密	(18.60)(2.70)	-	
37	27	45	須恵器	蓋	II-1	SD05	ロクロナデ、ヘラ切りか ら	内湾し端部尖り直る	10YR8.1 1.0g	白	(14.20)(4.20)	(10.80)	
38	27	45	須恵器	杯	II-1	SD05	ロクロナデ、貼り付けナ ラケズリ	内傾する、高台外に開き直る	10YR6.1 1.0g	微密	(2.50)(10.00)	-	
39	27	45	須恵器	甕	II-1	SD05	ロクロナデ、貼り付けナ ラケズリ	内傾する	N7.0K 1.0g	灰白	(12.50) 3.90	9.00	
40	27	45	須恵器	杯	II-1	SD05	ロクロナデ、貼り付けナ ラケズリ	平底から僅かに内湾する体 部で窪く丸い、高台整形	10YR8.3 1.0g	細砂、雲母 赤色粒	(15.60)(14.00)	-	
41	28	46	土師器	甕	II-1	SK01	ユビ成形からハケ整形、ヨ コナデ、ロクロナデ	屈曲しながら内湾する、端 部丸い	10YR8.2 5.5YR7.2i 1.0g	細砂、雲母 赤色粒	(16.40)(4.00)	-	
42	28	45	土師器	甕	II-1	SK01	ヨコナデ	ユビ成形から外傾する、端 部丸い	10YR7.2i 5.5YR7.4 1.0g	細砂、雲母 赤色粒	(23.80)(8.00)	-	
43	28	45	土師器	甕	II-1	SK01	ヨコナデ、内面板ナデと 繩縫	内湾する体部から上方に 出る	10YR7.2i 5.5YR7.4 1.0g	粗砂、石英 赤色粒	(27.80)(24.70)	-	
44	28	46	須恵器	甕	II-1	SK01	タキカラナデ、ロクロナ デ	口縁部脣の張った内湾する 体部から外反する、端部内 に肥厚	N7.0K 1.0g	米白～墨黒 石英、長石 砂粒	(27.80)	-	

表 8 豊島町通跡 II 潜物観察表 (3)

番号	図版 写真	種類	器種	地区	遺構	採法	他	形態の特徴		内面	外面	船上	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考	
								内湾から外反する 底部から口縫部、外側 に内湾する体部	外側から内反する 底部から口縫部、上側 に内湾する体部								
45	28	46	土師器	把手型	II-1	SK02	ビ成形からナデ、外側に内湾する体部から口縫部、ハケなし	10YR8.2	浅黄橙～灰白	繊砂	(62.00)	(23.00)	-	-	-	-	
46	28	45	土師器	蓋	II-1	SK02	ヨココナデ、貼り付けナデ	7N/0وك白	灰～灰黄	長石偏か、 輪	-	(2.20)	-	-	-	-	
47	28	45	須恵器	杯	II-1	SK02	ヨココナデ、把手型	23Y7/1K 白	繊密	(12.00)	(3.10)	(6.80)	-	-	-	-	
48	28	45	須恵器	杯	II-1	SK02	ヨココナデ、把手型	23Y7/1K 白	繊密	(18.70)	5.50	14.70	-	-	-	-	
49	28	45	須恵器	壺	II-1	SK02	ヨココナデ、把手型	23Y7/1K 白	石英、長6、 チャート	砂粒	(4.40)	(10.00)	-	-	-	-	
50	28	46	須恵器	壺	II-1	SK02	ヨココナデ、ナデ、自然 耳	N7/0وك白	灰～灰オ リーブ	石英、長6、 チャート	砂粒	(10.30)	-	-	-	-	
51	28	46	須恵器	壺	II-1	SK02	ヨココナデ、自然 耳	灰～灰オ リーブ	石英、長6、 チャート	砂粒	(14.75)	14.55	8.20	-	-	-	
52	28	46	須恵器	壺	II-1	SK02	ヨココナデ、把手型	灰～灰オ リーブ	石英、長6、 チャート	砂粒	(18.40)	17.40	10.10	-	-	-	
53	28	45	土師器	椀	II-1	SE03	ヨココナデ、ナデ	内湾する体部から口縫部 丸い	明礬灰～ 灰	10Y47/3 白	繊砂、雲母	(13.00)	(3.00)	-	-	-	-
54	29	47	土師器	蓋	II-1	SE01	ヨココナデ、ミガキ	直線的に開く天井部で端部 丸い	黄～橙	10Y47/3 白	繊砂、長6、 石英	(17.80)	(1.60)	-	-	-	-
55	29	47	土師器	杯	II-1	SE01	ヨココナデ、底面暗文、 内面暗文	内湾する体部から口縫部 丸い	黄～橙	10Y47/3 白	繊砂、長6、 石英	(19.20)	(3.20)	-	-	-	-
56	29	46	土師器	杯	II-1	SE01	ヨココナデ、底面ナデ、内 面ミガキ	内湾する体部で端部丸い	黄～橙	10Y47/3 白	繊砂、赤色	(18.20)	3.80	-	-	-	-
57	29	46	土師器	杯	II-1	SE01	ナデからミガキ、ヨコナ デ、化粧土漿	丸底から内湾する体部、口 縫部近くで直立する端部	黄～橙	5YR7/6 白	繊砂、赤色	(19.20)	5.60	-	-	-	-
58	29	47	土師器	杯	II-1	SE01	ナデからミガキ、ヨコナ デ、化粧土漿	平底から内湾し口縫部 丸い	10YR8.2	灰白～浅 黄	繊砂、赤色	(17.50)	4.30	13.70	-	-	-
59	29	46	土師器	小皿	II-1	SE01	ヨビ成形からナデ、ミガ キ、ヨコナデ	丸底から内湾する体部に、 端部丸い	7N/0وك白	浅黄橙～ 灰	繊砂、赤色	(8.00)	2.10	-	-	-	-
60	29	47	土師器	蓋	II-1	SE01	ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から口縫部 丸い	10YR7/2 白	5.5、黄 白	繊砂、赤色	(17.00)	(5.10)	-	-	-	-
61	29	47	土師器	蓋	II-1	SE01	外側に縦方向、口縫部 ナデ	内湾する体部から口縫部 丸い	10YR8.2	10YR8.3 白	繊砂、長白	(30.00)	(8.70)	-	-	-	-
62	29	47	土師器	壺	II-1	SE01	形、内面板ナデ、口縫部 ナデ	内湾する体部から口縫部 丸い	23Y8/3 白	5YR8/2 白	繊砂、赤色	(22.20)	(10.50)	-	-	-	-
63	29	47	土師器	杯(墨付)	II-1	SE01	ヨコナデ、ミガキ、ヨコナ デ、ヨコナデ	丸底から内湾し口縫部外 反	灰白～橙	繊砂、赤色	(16.90)	(4.10)	-	-	-	-	

表 3 豆腐町遺跡 II 遺物観察表 (4)

番号	写真 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴		内面	外面	胎土	法量 (cm)	備考	
								灰白	5YR7/6						
64	29	土師器	杯	II-1	SE01	ナデ、ミガキ、剝書	平底			10YR7/2 15.5V、黄 骨	灰白～黄 灰	細砂、長石	-	(7.40)	-
65	29	47	土師器	鉢?	II-1	SE01	ナデ	ロクロナデ、底部へラ切	平底から内湾する底部	長石少量含 むが吸留	N7/0灰白	N8/0灰白	10YR7/6	(12.40) (3.80)	(6.80)
66	29	47	須恵器	杯	II-1	SE01	リ	ロクロナデ、底部へラ切	平底から外傾し端部丸い	N7/0灰白	N7/0灰白	10YR8/3 浅黄橙	(12.40) (4.60)	-	
67	29	47	須恵器	高杯(脚)	II-1	SE01	ナデ	ロクロナデ、ナデ	内面絞り目	内湾がりに外反する脚部	N7/0灰白	N7/0灰白	石英、長石、 砂粒	(10.45)	-
68	29	47	黑色土	碗	II-1	SE01	ナデ	内湾する体部で端部内傾	灰白～黒	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、長石	(12.30) (4.00)	-	-	
69	29	47	土師器	杯	II-1	SE01	ナデ、ヨコナデ、内面ミ ガキ	内湾し端部丸く厚い、 内湾から内湾し口	灰白～黒	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、長石	(12.30) (4.00)	-	-	
70	29	48	土師器	杯	II-1	SE01	ナデ、ヨコナデ、ナデ	2次焼、不安定な平底から内湾 底や外反し、内湾する体部から外傾する	灰白～黒	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、金芸	(13.80) (5.20)	-	-	
71	29	47	土師器	杯	II-1	SE01	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	内湾する体部から端部厚い	灰白～厚 母	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、金芸	(16.40) (3.50)	-	-	
72	29	47	須恵器	甕	II-1	SE01	ロクロナデ	内傾し口部外反し角張る	N5/0灰～ 母	N5/0灰～ 母	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、金芸	(15.80) (12.30)	-	-
73	29	47	須恵器	高杯(脚)	II-1	SE01	ロクロナデ、ケズリ、ナ ベード下	端部折曲りげて 垂下する	N6/0灰	N6/0灰～ 母	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、金芸	(11.40) (13.80)	-	-
74	30	48	土師器	甕	II-1	SE01	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	底部から体部に優厚持たす る	N7/0灰白	N7/0灰白	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、金芸	(14.80) (2.30)	-	-
75	30	48	土師器	杯	II-1	SE01	ヨコナデ	内湾し端部下で屈曲し内側 にぶつまみ出す	内側にぶつ い筋	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、金芸	(13.20) (3.10)	-	-	
76	30	48	土師器	質壇土器	II-1	SE01	ヒビ成形からナデ、ヨコ ナデ	外反しきみに通び端部角張り みに内側に尖らす	内側に くぼみ	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、石英	(15.00) (6.50)	-	-	
77	30	48	土師器	甕	II-1	SE01	ヒビ成形からナデ、ヨコナデ	外反しており、骨は下向き に内側に尖らす	内側に くぼみ	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、石英	(13.00) (16.70)	-	-	
78	30	48	土師器	甕	II-1	SE01	ヒビ成形からナデ、ヨコナデ、 ナデ	内側に通び端部は角張り、ナ ベード下	内側に くぼみ	25Y7/2 灰白～灰 黄	細砂、石英	(15.00) (20.00)	-	-	
79	30	48	須恵器	蓋	II-1	SE01	ロクロナデ	ロクロケズ ナデ	内湾する天井部から下向 き	25Y7/1灰 母	2.5Y6/1灰 母	2.5Y6/1灰 母	(15.45) 245	-	-
80	30	48	須恵器	蓋	II-1	SE01	ロクロナデ、貼り付けナデ、仕上 り、ヨコナデ	内側に通び端部は角張り、ナ ベード下方に尖った端部、平たん した端部	内側に くぼみ	25Y6/1灰 母	2.5Y6/1灰 母	(15.50) 260	-	-	
81	30	48	須恵器	埴輪?	II-1	SE01	ロクロナデ、ロクロケズ	内湾する天井部から下向 き	25Y6/1灰 母	2.5Y6/1灰 母	2.5Y6/1灰 母	(10.40) (3.95)	-	-	
82	30	48	土師器	甕	II-1	SE02	ナデ、ヨコナデ	内湾し端部丸く肥厚ぎみ	10YR7/3 にぶい黄 母	10YR7/2 にぶい黄 母	細砂、長石	(11.70) (3.10)	-	-	

表 8 豊島町通跡 II 構物観察表 (5)

番号	図版 写真	種類	器種	地区	遺構	接法	他	形態の特徴	内面	外面	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
83	30	48	土師器	杯	II-1	SE02	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	平底から外傾し縁部丸い、直線的で鶏は厚く方形	10YR8.3 にぶい黄 粒	10YR7.3 にぶい黄 粒	細砂、赤色 粒	(16.20)	(2.70)	-	
84	30	48	土師器	甕	II-1	SE02	ビ成形からハケ、ナ	内溝し縁部肥厚する	10YR7.2 にぶい黄 粒	10YR8.3 にぶい黄 粒	細砂、石英	-	(19.10)	-	
85	30	48	土師器	蓋	II-1	SE03	ヨコナデ、ケズリ、ナデ	内溝し縁部肥厚する	51Y7.2K オリーブ 白	51Y7.2K 灰黄～青 白	細砂	(22.20)	(3.30)	-	
86	30	48	土師器	杯	II-1	SE03	ヨコナデ、板ナデ、ミガ	不安定な平底から外反し縁部から内湾する、底部で屈曲する	10YR7.2K にぶい黄 粒	10YR8.2K にぶい黄 粒	無砂、素色 粒	16.30	4.30	11.50	
87	30	48	土師器	杯	II-1	SE03	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	曲線的に端部上方保白	10YR7.2 にぶい黄 粒	10YR8.2 にぶい黄 粒	細砂	(18.30)	4.10	(15.30)	
88	30	48	土師器	杯	II-1	SE03	ヨコナデ、アズリ、ナデ、ミガキ、化粧土鉢	やや済曲する底部が斜く路筋がある高台が付く	51Y7.6K 灰	51Y7.6K 灰	細砂、赤色 粒	-	(1.50)	(18.40)	
89	30	48	須恵器	輪	II-1	SE03	ヨコナデ、板ナデ、ケズリ、重ね燒き	路筋で縁部外方に付く	2.5Y7.5K 灰	2.5Y7.5K 灰	粗砂	(1.580)	(3.90)	-	
90	30	48	須生	甕	II-1	SE03	タキナデ、板ナデ、ヨコナ	内溝する体部から外反する	10YR7.3K にぶい黄 粒	10YR7.3K にぶい黄 粒	粗砂	(1.680)	(7.20)	-	
91	31	48	土師器	小皿	II-1	北側 石敷	ヨコナデ、底部へ凹切	2.5Y7.8K 白	2.5Y7.8K 白	粗砂	7.90	12.0	6.00		
92	31	48	土師器	小皿	II-1	北側 石敷	ヨコナデ	上げ底で内溝し縁部丸い	7.5YR7.6 にぶい黄 粒	7.5YR7.6 にぶい黄 粒	粗砂	9.60	17.0	5.80	
93	31	48	土師器	盆	II-1	北側 石敷	ヨコナデ	内溝し縁部直立みで尖る	10YR5.4 にぶい黄 粒	10YR8.3 にぶい黄 粒	細砂	(12.20)	(3.60)	-	
94	31	48	土師器	輪	II-1	北側 石敷	ナデ、2次焼成、黒斑	内溝し縁部肥厚する	7.5YR7.6 にぶい黄 粒	7.5YR7.6 にぶい黄 粒	細砂	(12.00)	3.90	(3.60)	
95	31	48	須恵器	蓋	II-1	北側 石敷	ロクロナデ、ヨコクロケズ	輪ややく縁部直立	N7.0K6.8 灰白～明 オリーブ	N7.0K6.8 灰	細砂	14.90	(1.80)	-	
96	31	48	須恵器	蓋	II-1	北側 石敷	ロクロナデ、ヨコクロケズ	平坦な天井部に中実 ^チ 、強部 ^チ	10Y7.1K 白	10Y7.1K 白	細砂	-	(1.60)	-	
97	31	48	須恵器	輪	II-1	北側 石敷	ヨコナデ、美部系切	平底から外傾し縁部丸く肥厚する	10YR7.3 にぶい黄 粒	10YR7.3 にぶい黄 粒	石英、長石、 チヤードの 砂粒	(15.00)	4.70	(6.20)	
98	31	49	土師器	皿	II-1	北側 石敷	ヨコナデ、ナデ	不安定な平底から外傾し肥厚する	10YR8.3 にぶい黄 粒	10YR7.3 にぶい黄 粒	細砂	(14.80)	(2.60)	-	
99	31	49	土師器	皿	II-1	北側 石敷	ナデ、ミガキ(暗文)、 化粧土	外傾する口縁部で底部丸い、	2.5Y7.2K 黄	2.5Y7.2K 黄	細砂	(13.70)	(2.70)	(11.40)	
100	31	49	土師器	皿	II-1	北側 石敷	ヨコナデ、ミガキ、暗文	底部から外反し強 ^チ で端部に後継持たず	7.5YR7.3 にぶい黄	7.5YR7.3 にぶい黄	細砂	(16.80)	(3.30)	-	

表8 豆腐町遺跡II遺物観察表(6)

番号	国版 写真版 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴		内面	外側	胎土	法量(cm)	高さ
								ヨコナヂア、ミガキ	平底から外傾し縁部丸い	10YR8.3 浅黄	10YR8.2 灰白	(15.10) (3.20)		
101	31	49	土師器	Ⅲ	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ミガキ	丸底から内凹し縁部近くまで 屈曲し縁部丸い	10YR8.3 浅黄	10YR8.2 灰白	(17.80) (3.30)	-	-	
102	31	48	土師器	Ⅲ	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ミガキ	丸底から後縁を持ち縁部内側に 不安定な平底から後縁を持ち 内凹する	10YR8.3 浅黄	10YR8.2 灰白	(16.20) (3.00)	-	-	
103	31	49	土師器	Ⅲ(黒漆)	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ナヂ、墨書き 「大」	平底から外傾し縁部内側に 不安定な平底から後縁を持ち 内凹する	10YR8.2 灰白	10YR8.2 灰白	(11.20) (4.20)	-	-	
104	31	49	土師器	輪	II-1	北隅 右敷	ユビ成形からハケ彫形、 ナヂ	平底から外傾し縁部内側に 不安定な平底から後縁を持ち 内凹する	10YR8.2 灰白	10YR8.2 灰白	(17.80) (3.30)	-	-	
105	31	49	土師器	盤	II-1	北隅 右敷	平底から外傾し縁部内側に 不安定な平底から後縁を持ち 内凹する	10YR8.2 灰白	10YR8.2 灰白	(16.20) (3.00)	-	-		
106	31	49	土師器	壺	II-1	北隅 右敷	外面ハケ彫形、内面ナ ジテ、口縁部ヨコナヂ	内傾する体部に外反する 縁部で端部角張る	2.5Y8.2K 白	2.5Y8.2K 白	(25.20) (6.70)	-	-	
107	31	49	須恵器	杯(黒漆)	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、底部へA切 出、内面方舟青【大山】	平底から内凹し縁部下から 外反する	N-7.0/6灰 N-6.0灰	N-7.0/6灰 N-6.0灰	(14.20) (4.90)	(11.00)	-	
108	31	49	須恵器	杯(黒漆)	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、貼り付けナ ヂ、口爪、足置、貼り付けナ ヂ	平底に低い台形の高台付く、 平底内凹し底部反つてく	N-6.0灰 N-5.0灰	N-6.0灰 N-5.0灰	(14.20) (3.50)	(10.80)	-	
109	31	49	須恵器	杯	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、底部へA切 出、貼り付けナヂ	平底から外傾する体部、外 に聞く高台	5Y7.1灰 1日	5Y7.1灰 1日	(220)	8.75	-	
110	31	49	須恵器	皿	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、基軸あり、輪 用鉗か	平底から外傾する体部で端 部角張る	2.5Y7.1灰 1日	2.5Y7.1灰 1日	(16.00)	2.45	(13.10)	
111	31	49	土師器	蓋	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ヨコナヂア ヨコナヂア、有機質付着	平底から外傾し縁部丸い 平底から内凹し縁部丸い	5Y7.1灰 1日	5Y7.1灰 1日	(12.30)	(2.10)	-	
112	31	49	土師器	皿	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ミガキ、化粧 ヨコナヂア、ミガキ、化粧	平底から外傾し縁部丸い 平底から内凹し縁部丸い	10YR8.2 灰白	10YR8.2 灰白	(15.30)	2.10	(12.50)	
113	31	49	土師器	皿	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ナヂ、ミガキ 墨書き	内凹した底から後縁持つてく 下で屈曲し丸く	7.5YR7.4 灰白	7.5YR7.4 灰白	(18.80)	(2.40)	(15.60)	
114	31	49	土師器	皿(黒漆)	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ナヂ、ミガキ、 墨書き「大山？」	平底から外傾し縁部丸い 平底から内凹し縁部丸い	10YR7.3 灰白	10YR7.3 灰白	(2.70)	(3.60)	(0.40)	
115	31	49	土師器	碗(黒漆)	II-1	北隅 右敷	ナヂ、墨書き「花太」	平底から外傾する	10YR7.2 灰白	10YR7.2 灰白	(7.30)	(3.60)	(0.60)	
116	31	49	土師器	皿	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ミガキ、ナヂ 墨書き	修復を待たずして外反し 下で外反し丸く	5Y7.1灰 1日	5Y7.1灰 1日	(17.60)	(3.10)	(9.30)	
117	31	49	土師器	皿	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ナヂ	修復を待たずして外反し 下で外反し丸く	5Y7.1灰 1日	5Y7.1灰 1日	(18.20)	(3.00)	-	
118	31	49	土師器	皿	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ナヂ、ナヂ 墨書き	修復を待たずして外反し 下で外反し丸く	7.5YR7.3 灰白	7.5YR7.3 灰白	(18.80)	(2.60)	-	
119	31	49	土師器	杯	II-1	北隅 右敷	ヨコナヂア、ナヂ、ナヂ 墨書き	内凹した底から後縁持つてく 下で屈曲し丸く	2.5Y8.2K 白	2.5Y8.2K 白	(17.20)	4.10	(11.60)	

表 8 豊島町通跡 II 潜物観察表 (7)

番号	写真 図版	種類	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴	色	外観	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
120	31	49	土師器	皿	II-1 北側 石敷	ヨコナデ、ミガキ、ナデ丸	平底から外頸、端部肥厚し	7.5YR7/3 に高い橙	細砂	(16.50) (2.60)	(13.50)				
121	31	49	土師器	杯	II-1 北側 石敷	ヨコナデ、ミガキ、ナデ丸	内湾する体部から口縁部で 端部外反し端部丸い	10YR8/2 橙～灰黄 粒	細砂、赤色 粒	(20.60) 4.40	(16.80)				
122	31	50	土師器	碗	II-1 北側 石敷	ヨコナデ、貼り付けナデ丸	内湾する体部で端部丸い、 内湾する体部の高台	10YR8/2 灰白	石英、チャート	(13.40) 4.65	(8.50)				
123	31	49	土師器	杯(出場)	II-1 北側 石敷	ヨコナデ、ナデ、2次焼成なし	平底から内湾し端部丸い	5Y7/1灰 白	細砂	(13.00) 4.10	8.00				
124	31	50	土師器	底	II-1 北側 石敷	ヨコナデ、ミガキ、漆付	内湾する	10YR7/2 5.5YI黃白	細砂	-	1.60	-			
125	32	50	土師器	甕	II-1 北側 石敷	ハケ整形、ヨコナデ内面	内湾する体部から外反する	10YR7/3 5.5YI黃白	細砂	(23.60) (9.30)					
126	32	50	土師器	甕	II-1 北側 石敷	外腹内凹で、内面ナデ、 内湾する	内湾する体部から外反し角 平い天井部から外反し直角	10YR8/2 5.5YI黃白	細砂	(27.00) (8.20)	-				
127	32	50	須恵器	蓋(墨青)	II-1 北側 石敷	ヨコナデ、ロクロケズ ヨリ、墨青	平い天井部から垂下する	2.3YR8/1灰 白	細砂	(15.00) (1.00)	-				
128	32	49	須恵器	蓋	II-1 北側 石敷	ロクロナデ	ロクロケズままで垂下、平内湾 つまみ	N5/0灰	細砂	(17.80) 3.20	-				
129	32	50	須恵器	蓋	II-1 北側 石敷	ロクロナデ貼り付けナデ ヨリ貼り付けナデ、内面	平な天井部から外傾し直角 つまみ	5Y8/1～ 7/1灰白	細砂	(14.20) 1.90	-				
130	32	49	須恵器	蓋	II-1 東隅 石付	ロクロナデ、重ね焼き	内湾する大形の蓋で端部三 角に肥厚する	7.5YR5/1 黒灰	微密	(22.20) (3.00)	-				
131	32	49	須恵器	杯	II-1 北側 石敷	ロクロナデ、自然釉	凹凸のある平底から内湾し 端部丸い	5Y6/1灰 白	細砂、石英、 長石	(13.50) 3.75	9.50				
132	32	49	須恵器	杯	II-1 北側 石敷	ロクロナデ、内面仕上げ 後ナデ	平底から外傾し端部丸い	5Y6/1灰 白	石英、長石	(14.40) 3.25	(11.40)				
133	32	50	須恵器	杯	II-1 北側 石敷	ロクロナデ、内面仕上げ 後ナデ	平底へテ切平底から外傾し 端部丸い	5Y8/1灰 白	石英	(15.00) 3.80	(9.80)				
134	32	50	須恵器	杯	II-1 北側 石敷	ロクロナデ、内面仕上げ 後ナデ	平底へテ切平底から外傾し 端部丸い	5Y6/1灰 白	細砂	(15.10) (2.85)	(12.20)				
135	32	50	須恵器	杯(墨青)	II-1 北側 石敷	ロクロナデ、基部へテ切 後ナデ	平底へテ切平底から外傾し 端部丸い	2.5Y8/3灰 白	細砂	-	(12.0) (9.00)				
136	32	50	須恵器	皿(墨青)	II-1 北側 石敷	重ね焼き	ロクロケズ、基部へテ切	N8/0灰 白	細砂	(16.20) 2.00	(12.60)				
137	32	50	須恵器	杯	II-1 北側 石敷	ロクロナデ、内面仕上げ 後ナデ	底部へテ切不安定な平底で 端部丸い	黄灰～黒 褐色	細砂、石英、 長石	(11.70) 3.60	(9.00)				
138	32	50	須恵器	蓋	II-1 北側 石敷	ロクロナデ、内面 仕上げナデ	底部へテ切平底から内湾する、 高台仕形でやや外に開く	5Y5/1灰 白	細砂、石英、 長石	(3.80) (7.20)					

表 8 豆腐町遺跡 II 遺物観察表 (8)

番号	図版 番号	写真 版面	種類	器種	地区	遺構	技法		他		形態の特徴		内面	外側	胎土	法量(cm)	
							ロクロナデ	底部へV切口	不安定な平底から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	N6.0K白	灰~灰白	細砂、石英	口径	高さ	備考	
139	32	50	須恵器	杯	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、底部へV切口	不安定な平底から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(13.30)	3.75	(9.40)	
140	32	50	須恵器	瓶	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、底部へV切口	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(14.30)	4.90	(7.20)	
141	32	50	須恵器	杯(墨黒)	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、底部へV切口	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(13.30)	4.80	(9.70)	
142	32	50	須恵器	杯	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、底部へV切口	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(13.10)	5.00	8.50	
143	32	50	須恵器	杯	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、底部へV切口	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(16.80)	6.00	(11.80)	
144	32	51	須恵器	楕	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、底部へV切口	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(19.40)	6.85	(13.60)	
145	32	51	須恵器	杯	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、高台貼付ナ 上げナデ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(17.40)	7.60	(11.80)	
146	32	51	須恵器	楕	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、底部へV切口	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(18.00)	5.55	(11.50)	
147	32	51	須恵器	杯	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、高台貼付ナ 上げナデ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(31.70)	6.20	(27.00)	
148	33	51	須恵器	楕	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、高台貼付ナ 上げナデ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(15.90)	5.55	(11.50)	
149	33	51	須恵器	平腹	II-1	北隅 石敷	ロクロナデ、ケスリ、ナ ラ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(15.30)	4.00	(13.60)	
150	33	51	須恵器	楕(底)	II-1	北隅 石敷	タタキからナデ、板ナデ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(13.90)	4.00	(13.90)	
151	33	51	須恵器	楕瓶?	II-1	北隅 石敷	タタキからナデ、口縁部 ロクロナデ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(14.10)	10.70	(13.70)	
152	33	52	須恵器	楕	II-1	北隅 石敷	タタキから板ナデ、ナナ 形	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	57.1K	2.5Y5/1K	4.7K黄灰	石英、長石	(37.50)	-	(37.50)	
153	33	51	土師器	三	II-1	石敷 上面	ヨコナデ、ナデ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部見る	10YR7/3	10YR7/3	3	5.5K黄	(16.60)	3.00	-	
154	33	51	土師器	製埴土器	II-1	南隅 石敷	ヒビ成形からナデ	内窓飾部角張り	内窓飾部角張り	10YR4/1	5.5K黄	粗砂	(10.80)	4.00	-		
155	33	51	須恵器	蓋	II-1	南隅 石敷	ロクロナデ、ロクロケズ ミガキ下り	内窓飾部角張り	内窓飾部角張り	2.5Y7/1K	2.5Y7/1K	1K	粗砂	(17.80)	2.60	-	
156	33	51	須恵器	杯	II-1	南隅 石敷	ロクロナデ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部角張り	10YR8/2	火白~灰 白	粗砂	(13.50)	3.70	(10.00)		
157	33	51	須恵器	杯	II-1	南隅 石敷	ロクロナデ、底部へV切 口後ナデ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部角張り	10YR8/2	火白~灰 白	粗砂	(N-4.0)K	0.95	(11.10)		
158	33	51	須恵器	杯	II-1	南隅 石敷	ロクロナデ、ロクロケズ	底部から外傾し端部近くで外傾する方型の高台	内窓飾部角張り	10YR8/2	火白~灰 白	粗砂	(N-6.0)K	0.95	(9.50)		

表 8 豊島町通跡 II 潜物観察表 (9)

番号	図版 写真	種別	器種	地区	遺構	技術	他	形態の特徴	内面	外面	船上	口径 (cm)	器高 (cm)	底径	備考
159	33	須恵器	壺	II-1	南側 石敷	ロクロナデ、ロクロケズ		内溝し端部彌くなり丸い	灰~青灰 (アッシュ)	N5.0灰	細砂	(13.00)	(5.10)		
160	33	須恵器	輪(黒青)	II-1	南側 石敷	ロクロナデ「高台貼付ナ ド、墨書き「志」		底部から体部へ内溝し口縁 底部大きく外反しない、外に 開き高台	2.5Y7.3灰 黄	灰白~灰	細砂	(17.80)	(5.60)	(12.00)	
161	33	須恵器	壺	II-1	南側 石敷	ロクロナデ、底面刻み自表の工具 底面刻み自表の工具		粗外輪すり体部で端部角 張り外輪する体部で細い	灰白~灰 リーフ状	3Y7.1灰 白	細砂	(18.70)	(5.90)		
162	33	須恵器	壺	II-1	南側 石敷	ロクロナデ、自然釉		外輪する頸部がから大きくな り端部肥厚	N5.0灰	灰~灰褐色 リーフ状	細砂	(29.20)	(5.00)		
163	34	須恵器	壺前縫錐	II-2	SX01	ロクロナデ、鉢目		内溝し端部大きく肥厚	N8.0灰白	灰~黄	細砂	-	(4.00)		
164	34	須恵器	壺	II-2	SX01	ロクロナデ、波状文		底部から体部にかけて横縞 底部から外輪し端部肥厚	5.8~4.8淡 黄	10YR8.4淡 黄	細砂	(14.80)	3.10		
165	34	土師器	壺	II-2	SX02	ヨコナデ、ナデ、ナデ		底から外輪し端部肥厚し 内溝し縫合部の高台	底から外輪し端部肥厚し 内溝し縫合部の高台	浅黄~ 金	細砂	(27.60)	3.20	(23.10)	
166	34	土師器	壺	II-2	SX02	ヨコナデ、ナデ		底から外輪し端部角張りぎみ	2.5YR5.6 5YR5.4に 至る	明褐色 5.5灰赤褐色	粗砂	(9.00)	(6.20)		
167	34	土師器	製埴土器	II-2	SX02	ヨビ成形からナデ		底部から内溝し端部丸い	N7.0灰白	6.0灰白	細砂	(0.20)	3.00	(9.00)	
168	34	土師器	杯	II-2	SX02	ロクロナデ、底部へテ切		底部から内溝し端部丸く	N7.0灰白	6.0灰白	細砂	(12.20)	(4.30)	(9.00)	
169	34	土師器	杯	II-2	SX02	ロクロナデ、高台貼付ナ ド		底部から内溝し端部丸く 内溝する体部で端部肥厚	2.5Y6.1萬 灰	5.5Y6.1萬 灰	細砂	(10.80)	4.80	(7.00)	
170	34	土師器	壺	II-2	SX02	ヨビ成形からナデ		底部三脚形の輪台	10YR7.3: 5YR6.8:輪	5YR6.8:輪	粗砂	(10.40)	7.00		
171	34	土師器	製埴土器	II-2	SX02	ヨビ成形からナデ		底部三脚形の輪台	7.5YR7.4 12.5YR7.3: 5YR6.3	7.5YR7.4 12.5YR7.3: 5YR6.3	粗砂	(11.40)	(5.80)		
172	34	土師器	製埴土器	II-2	SX02	ヨビ成形からナデ		外輪し端部厚く丸い	12.5YR7.3: 5YR6.3	12.5YR7.3: 5YR6.3	粗砂	(17.00)	4.00		
173	34	土師器	壺	II-2	SX02	縁部ヨコナデ		内溝する体部から外反する 内溝する体部、口内溝する 体部から外反する	5YR5.1萬 灰	5YR5.1萬 灰	細砂	(17.00)	4.00		
174	34	須恵器	壺	II-2	SX02	ロクロナデ		外輪し端部丸い、 内溝し輪部丸い、 外輪し輪曲し外反してか	5YR7.6盤 輪~浅黄	5YR7.6盤 輪~浅黄	細砂	(13.20)	(3.30)		
175	34	土師器	壺	II-2	SX03	ヨコナデ、ミガキ		底部から内溝し端部丸く 内溝する	5YR7.6盤 輪~浅黄	5YR7.6盤 輪~浅黄	細砂	(17.80)	2.70		
176	34	土師器	壺	II-2	SX06	ヨコナデ、ナデ		底部から内溝し端部丸く 内輪し端部付近で	5YR7.6盤 輪~浅黄	5YR7.6盤 輪~浅黄	細砂	(0.370)	2.30	(10.50)	
177	34	土師器	壺	II-2	SX06	ヨビ成形からナデ、ヨコ ナデ		輪部角張る 輪部角張る	10YR8.2 5YR7.6盤 輪~浅黄	5YR7.6盤 輪~浅黄	細砂	(12.80)	2.30	(9.50)	
178	34	土師器	壺	II-2	SX06	ヨコナデ、ミガキ		輪部角張る 輪部角張る	10YR8.2 5YR7.6盤 輪~浅黄	5YR7.6盤 輪~浅黄	細砂	(16.40)	3.40	(13.80)	
179	34	土師器	製埴土器	II-2	SX06	ヨビ成形からナデ		輪部角張る 輪部角張る	10YR8.2 5YR7.6盤 輪~浅黄	5YR7.6盤 輪~浅黄	細砂	(10.00)	6.50		
180	34	土師器	壺	II-2	SX06	外輪ハケ、ヨコナデ、ナデ		内輪する体部から大きくな り外輪する	10YR8.1 10YR8.2	10YR8.1 10YR8.2	細砂	(27.50)	(5.40)		
181	34	土師器	壺	II-2	SX06	外輪ハケ、ヨコナデ		内輪する体部から大きくな り外輪する	灰白~灰 黄褐色	灰白~灰 黄褐色	細砂	(27.20)	(5.20)		

表8 豆腐町溝跡II遺物観察表(10)

番号	図版 写真 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴	内面	外側	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
182	34	土師器	甕	II-2	SX06	ハケ整形からヨコナデ		内傾する体部から僅かに外反し端部が強まる。	10YR8/2 灰白	7.5YR6/3 灰白	細砂	(3210) (6.30)	-	-	
183	34	土師器	甕	II-2	SX06	ヒビ成形からハケ、ナデ	直線的に広がり端部肥厚する。	10YR5/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(1300) (7.60)	1.0 1.3	-		
184	34	土師器	甕	II-2	SX06	ヒビ成形からハケ、ナデ		内側と端部が狭く角張る。	10YR5/2 灰白	灰白～灰	細砂	(920) (9.00)	1.10	-	
185	34	須恵器	壺	II-2	SX06	ロクロナデ	丸底から外傾する体部。底部は外側に踏ん張り端部肥厚する。	N7.0灰白 N7.0灰白	N7.0灰白 N7.0灰白	細砂	-	(7.90) (8.70)	-		
186	34	須恵器	杯	II-2	SX06	ロクロナデ、火燐	不安定な底部から外傾し尖る。	N8.0～ N7.0灰白	N8.0～ N7.0灰白	細砂	(1060) (4.30)	(8.70)	-		
187	34	須恵器	杯	II-2	SX06	ロクロナデ	内側と底部から体部で窪入する。	II-7 N7.0灰白	N7.0灰白	細砂	(1460) (4.10)	(11.00)	-		
188	34	土師器	土馬(脚)	II-2	SX06	ヒビ成形、ナデ	豊かな円凹状	灰白～浅黄	灰白～浅黄	粗砂	(720) (2.40)	2.40	-		
189	35	土師器	皿	II-1	流路	ヨコナデ、ナデ	平底から内側し端部付近	10YR7/3 外傾、端部尖り、底部と底部は接觸なく内側へ傾く。	10YR7/3 内側へ傾く。	細砂、赤色	(1740) (2.60)	-	-		
190	35	土師器	皿	II-1	流路	ヨコナデ、ミガキ	口部部及び底部及び側部を接觸及びて端部丸い。	5YR7/3 内側へ傾く。	5YR7/3 内側へ傾く。	細砂、赤色	(1800) (2.30)	-	-		
191	35	土師器	皿	II-1	流路	ヨコナデ、ナデ	平底から内側し端部丸い、	5YR7/3 内側へ傾く。	5YR7/3 内側へ傾く。	細砂、赤色	(1760) (3.10)	-	-		
192	35	土師器	皿	II-1	流路	ヨコナデ、高台貼付ナデ	口部部外及び底部肥厚きみ、高台部分で窪入	10YR8/2 灰白	7.5YR7/4 灰白	細砂、赤色	(2260) (3.10)	(16.80)	-		
193	35	土師器	甕	II-1	流路	ヒビ成形、ナデ、11部ヨコナデ	内側と底部から外反する。	浅黄橙～灰灰	浅黄橙～灰灰	細砂、赤色	(2740) (12.00)	-	-		
194	35	須恵器	棒柄蓋	II-1	流路	ロクロナデ、ロクロケズ	内側と底部から外反する天井部がからS字状に傾く。	2.5YR7/1灰 白	5YR7/1灰 白	細砂	20.75	390	-		
195	35	須恵器	耳	II-1	流路	ロクロナデ、ロクロケズ	平底から内側し端部が尖る。	5YR7/1灰 白	5YR7/1灰 白	細砂	1290	500	8.80		
196	35	須恵器	壺	II-1	流路	ロクロナデ、底部へラ切り	底部から内側立し端部角張る。	7.5YR7/4 灰	長尺～47cm 7.5YR7/1灰	長尺～47cm 子ポートの 底粒	(1055) (14.10)	1320	-		
197	35	須恵器	甕	II-1	流路	タスキ(腰から縱方向の彫痕)、平面、内面同心円、クロナデ	内側と底部から外傾する。	5YR7/4 黄	5YR7/4 黄	微密	(6160) (35.20)	-	-		
198	35	土師器	製塙土器	II-1	流路	ヒビ成形から板ナデ、ナ	器壁に凸凹があり外傾する。	5YR7/4 黄	7.5YR7/3 灰	粗砂	(2760) (1.70)	(23.60)	-		
199	35	須恵器	皿	II-1	流路	ロクロナデ	底部大きく厚い、外傾し端部丸い。	N7.0灰白 N7.0灰白	N7.0灰白 N7.0灰白	細砂	(6640) (5.20)	-	-		
200	35	須恵器	壺	II-1	流路	ロクロナデ	内側と端部付近に外傾し端部内側につけたあげる。	10YR7/2 灰白	10YR7/2 灰白	石英・ト	(2440) (2.05)	-	-		
201	36	土師器	蓋	II-1	流路	ヨコナデ、ナデ	内側になり端部丸い、平底から内側し端へにぶつ	5YR7/4 灰白	5YR7/4 灰白	細砂	(1400) (3.40)	(8.40)	-		

表8 豊橋町溝跡II遺物種類表(11)

番号	図版 写真	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴	内面	外面	色調	注記(cm)	口径	器高	底径	備考
203	36	土師器	皿	II-1	流路 東脣	ヨコナデ、ナデ		不安定な平底から内部へ内湾し、端部から内湾する口縁部が曲がる。丸みのある底がある。	10YR8.3 5V-黄青	10YR7.2/ 5V-黄青	灰白～黒	(13.10) 2.80	-			
204	36	土師器	椀	II-1	流路 東脣	ヨコナデ、ナデ、ケズリ、ナデ		不安定な平底から内外湾し、端部付近で内湾する口縁部が曲がる。丸みのある底がある。	2.5Y7.7/34 黄	2.5Y7.7/29 黄	石英の砂粒	(14.80) 3.80	(3.00)			
205	36	土師器	皿	II-1	流路 東脣	ヨコナデ、ナデ、化粧土、ナデ		不安定な平底から内外湾し、端部付近で内湾する口縁部が曲がる。丸みのある底がある。	灰白～黒	灰白～黒	細砂	(18.70) 4.00	-			
206	36	土師器	皿	II-1	流路 東脣	ヨコナデ、化粧土		不安定な平底から内外湾し、端部付近で内湾する口縁部が曲がる。丸みのある底がある。	灰白～黒	灰白～黒	細砂	(21.20) 2.70	-			
207	36	土師器	皿	II-1	流路 東脣	ヨコナデ、ナデ、ミガキ		不安定な平底から内外湾し、端部付近で内湾する口縁部が曲がる。丸みのある底がある。	10YR6.6/6 黄	10YR7.2/ 5V-黄	細砂	(21.70) 1.80	(13.50)			
208	36	土師器	杯(墨窓)	II-1	流路 東脣	ヨコナデ、ハラケスリ、ナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。窓外側する、端部角張る。	2.5Y7.7/34 黄	2.5Y7.7/29 黄	石英の砂粒	(21.60) 2.55	(16.30)			
209	36	土師器	杯(墨窓)	II-1	流路 東脣	ナデ	平坦	直線部から窓やかげに内湾する、端部角張る。	自白	灰白～黄	細砂	-				
210	36	土師器	椀	II-1	流路 東脣	ユビ成形からナデ		内湾し浅く端部丸い。	灰白～黄	灰白～黄	細砂多い	(11.70) 4.30	-			
211	36	土師器	椀	II-1	流路 東脣	ヨコナデ、ナデ		内湾する体部から口縁部が内湾し端部尖る。	4-1灰	浅黄～黒 黒	石英の砂粒	(12.70) 4.60	(6.40)			
212	36	土師器	椀	II-1	流路 東脣	ナデ		不安定な平底から内外湾し端部尖る。	灰白～灰	灰白～灰	長石の砂粒	(27.30) 4.00	(18.90)			
213	36	土師器	皿	II-1	流路 東脣	ヨコナデ、ミガキ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	8.6/4前後 8.6/4前後	10YR8.3～ 8.4/前後	細砂	(10.40) 6.40	-			
214	36	土師器	製埴土器	II-1	流路 東脣	ユビ成形からナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	10YR7.4 5V-黄	10YR6.4/ 5V-黄	細砂	(11.00) 6.00	-			
215	36	土師器	製埴土器	II-1	流路 東脣	ユビ成形からナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	10YR8.3 5V-黄	10YR7.3/ 5V-黄	細砂	(11.00) 6.00	-			
216	36	土師器	製埴土器	II-1	流路 東脣	ユビ成形からナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	10YR8.2 5V-黄	10YR8.2 5V-黄	細砂	(11.60) 9.80	-			
217	36	土師器	高杯	II-1	流路 東脣	ナデ、欽り目、ヨコナデ、角張り		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	2.5Y8.2/ 5V-黄	2.5Y8.2/ 5V-黄	細砂	-	(8.30) (11.80)			
218	36	土師器	甕	II-1	流路 東脣	緑部ヨコナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	白	白	細砂	(16.90) (14.60)	-			
219	36	土師器	甕	II-1	流路 東脣	ユビ成形からハケ・板ナデ、ナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	10YR8.2 5V-黄	10YR7.2/ 5V-黄	細砂	(13.00) 38.50	-			
220	37	土師器	鉢	II-1	流路 東脣	ユビ成形からハケ・板ナデ、ナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	10YR7.2/ 5V-黄	10YR7.2/ 5V-黄	細砂	(20.60) 6.60	-			
221	37	土師器	甕	II-1	流路 東脣	強いヨコナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	10YR6.2 5V-黄	10YR6.2 5V-黄	細砂	(23.20) 6.50	-			
222	37	土師器	甕	II-1	流路 東脣	ハケ・板ナデ、ヨコナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	2.5Y7.2/ 5V-黄	10YR7.3/ 5V-黄	細砂	(26.80) 6.50	-			
223	37	土師器	甕	II-1	流路 東脣	ユビ成形からハケ・ヨコナデ		直線部から窓やかげに内湾する口縁部が曲がる。	10YR5.2 5V-黄	10YR5.2 5V-黄	細砂	(25.40) 6.30	-			

表8 豊岡町溝跡II遺物観察表(12)

番号	図版 写真 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴		内面	外面	胎土	口径(cm)	高さ(cm)	備考	
								平面	断面							
224	37	54 須恵器 蓋		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面不定方向のナデ	ロクロケズ	平坦な天井部で端部肥厚し 下につまみ出ず、平たい臺	5Y6/1W	N6/0W	細砂	(16.20)	1.10	-			
225	37	54 須恵器 蓋		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面不定方向のナデ	ロクロケズ	端やかに湾曲し端部下につ 下につまみ出ず、ボタン状つまみ	5Y8/1W 白～6/1W	N6/0W	細砂	15.05	2.45	-			
226	37	54 須恵器 蓋		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内山方向	ロクロケズ	平たい天井部から縁やかに 丸く折り曲げる、つまみ欠	7N/0W	N6/0W	細砂	19.30	1.10	-			
227	37	55 須恵器 蓋(記号)		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面不定方向のナデ	ロクロケズ	内湾する天井部から下につ 下につまみ出ず、ボタン状つま み出る	3Y7/1W 白	N6/0W	細砂	(13.90)	1.95	-			
228	37	55 須恵器 蓋(墨書)		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面不定方向のナデ	ロクロケズ	平たい天井部から下 下につまみ出る	N6/0W	N6/0W	細密	(14.80)	1.70	-			
229	37	55 須恵器 蓋		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面不定方向のナデ	ロクロケズ	平面な天井部から重下する 下につまみ出る	N5/0W	N5/0W	細砂	(12.80)	1.35	-			
230	37	55 須恵器 蓋		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内山方向	ロクロケズ	平面な天井部から直立名口 底	2S3Y6/1W 底	N7/0W	細砂	(15.15)	2.80	-			
231	37	55 須恵器 蓋		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面不定方向のナデ	ロクロケズ	内湾ぎみの天井部から直立 下につまみ出る	N5/0W	N5/0W	細砂	(17.95)	2.65	-			
232	37	55 須恵器 杯		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面不定方向のナデ	ロクロケズ	内湾ぎみの天井部 内湾角張る	N5/0W	N5/0W	細砂	(13.80)	2.85	-			
233	37	55 須恵器 杯(墨書)		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、底部へチ切	ロクロケズ	底から内湾する	N7/0W	灰白～灰	細砂	-	(3.60)	(8.60)	-		
234	37	54 須恵器 杯		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、仕上げナ リ、火触裏	ロクロケズ	底から外側し端部尖る	2S3Y6/1W 5/1W 底	N5/0W	細密	(15.20)	3.50	(11.60)			
235	37	55 須恵器 杯		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、ナデ	ロクロケズ	底から外側し端部尖る	N6/0W	N5/0W	細密	(12.80)	3.60	(6.80)			
236	37	54 須恵器 杯		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、ロクロケズ	大きく壘んでおり平底から 外傾	灰白～黒 (ルシ)	N7/0W	細砂多い 短柱	長径 13.3 10.3	4.70	8.50	-			
237	37	55 須恵器 杯(墨書)		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、底部へチ切 り後ナデ、内面不	ロクロケズ	至んだ平底から外傾する	2S3Y7/1W 白	2S3Y7/1W 白	細密	-	(2.20)	(9.80)	-		
238	37	54 須恵器 杯(記号)		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、墨書 「二」	ロクロケズ	底から外傾し端部角張る	5Y7/1W 底	黄灰～黒	石英・長石	(13.80)	4.25	(11.10)			
239	37	54 須恵器 杯		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面仕上げナデ	ロクロケズ	内湾する体部で端部角張る	10YR5/1 底	N7/0W	細砂	(17.00)	(4.55)	(11.60)			
240	37	54 須恵器 杯		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、高台貼付ナデ	ロクロケズ	平底から外側する、方影の外 なる高台	2.5Y5/1 底	N6/0W	細砂	(12.70)	4.30	9.50			
241	37	55 須恵器 杯		II-1 滝路 東脣	ロクロナデ、内面不定方向ナデ	ロクロケズ	至んだ平底から薄く外傾す る、端部尖る、外に開く高 台	N6/0W～ 7.0W	N6/0W～ 7.0W	細砂	(16.80)	(5.20)	(12.00)			

表 8 豊橋町溝跡 II 潜物整理表 (13)

番号	図版 写真	種類	器種	地区	遺構	技術	他	形態の特徴		内面	外面	船上	注量 (cm)		備考
								内面	背面する底から内湾する体				7.5YR7/1 明褐色	N7/0灰白	
242	37	54 須恵器 檻	II-1 東路 路内面不特定	ロクロナデ、貼付ナデ、転用	青曲する底から内湾する体	7.5YR7/1 明褐色	N7/0灰白	織密	(19.00) 6.30	(13.40)					
243	37	55 須恵器 墓葬	II-1 東路 脚付	ロクロナデ、墨書き不端	底から外傾する、弓形の高台	N8/0灰白	N8/0灰白	織密	(16.30) 2.30	(10.20)					
244	37	55 須恵器 檻	II-1 東路 脚付	ロクロナデ、ナダ、ミガキ、墨書き不端	底から外傾する、脚部丸い、方	N7/0灰白	灰白～灰	織密	(17.80) 2.20	-					
245	37	55 須恵器 檻	II-1 東路 脚付	ロクロナデ、ナダ、テスリ、ナダ	底から外傾する、脚部丸い、方	N6/0灰	N6/0灰	織砂	(23.60) 2.30	(21.00)					
246	37	55 須恵器 檻	II-1 東路 脚付	ロクロナデ、ミガキ、高台貼付ナ	丸底から内湾し後縁を持つ	N6/0灰	N7/0灰白	織砂	20.00	7.20	10.50				
247	38	55 須恵器 檻	II-1 東路 脚付	ロクロナデ、沈線、自然袖	丸底から内湾し後縁を持つ	N6/0灰	N6.0～	織密	(9.50) 6.20	-					
248	38	55 須恵器 檻	II-1 東路 脚付	ロクロナデ、自然袖	丸底から内湾し後縁を持つ	N6/0灰	N6/0灰	織砂	(15.60) 3.40	-					
249	38	55 須恵器 檻	II-1 東路 脚付	ユビ成形、ロクロナデ	丸底から内湾し後縁を持つ	N6/0灰	N7/0灰白～N6/0灰	織密	(14.60) 12.70	-					
250	38	55 須恵器 檻	II-1 東路 脚付	ロクロナデ、自然袖	丸底から内湾し後縁を持つ	N6/0灰	N5.0～	織砂	(27.20) 9.50	-					
251	38	55 須恵器 檻	II-1 東路 脚付	ロクロナデ、自然袖	丸底から内湾し後縁を持つ	N6/0灰	N7/0灰白	織砂	(19.10) 25.30	-					
252	38	56 土師器 檻	I 転台 下	内面2種の向田タタキ、カギ、脚部ロク	丸底から内湾し後縁を持つ	25YR8/1灰	3.5YR7/3 [にぶい橙]	織砂	(12.00) 3.00	(9.80)					
253	38	56 土師器 檻	I 人力 拖削	ヨコナデ、高台貼付ナデ	丸底から内湾し後縁を持つ	7.5YR7/3 [にぶい橙]	3.5YR7/3 [にぶい橙]	織砂	(19.10) 25.30	-					
254	38	56 土師器 高杯	I 人力 拖削	ヨビ成形、接り目、ナダ	丸底から内湾し後縁を持つ	7.5YR7/4 [にぶい橙]	7.5YR7/4 [にぶい橙]	織砂	(7.80)	-					
255	38	56 須恵器 蓋	I 人力 拖削	ロクロナデ	丸底から内湾し後縁を持つ	N7/0灰白	N7/0灰白	織砂	(15.80) 1.90	-					
256	38	56 須恵器 檻	I 人力 拖削	ロクロナデ、ナデ	丸底から内湾し後縁を持つ	N7/0灰白	N8/0灰白	織砂	(16.20) 3.60	-					
257	38	56 須恵器 高杯	I 人力 拖削	ロクロナデ、仕上げ貼付ナ	丸底から内湾し後縁を持つ	N7/0灰白	N7/0灰白	織砂	(21.0) 9.40	-					
258	38	56 須恵器 高津	I 人力 拖削	ナダ、貼付着	丸底から内湾し後縁を持つ	N7/0灰白	N7/0灰白	織砂	(3.50)	(7.90)					
259	38	56 須恵器 鉢	I 人力 拖削	ロクロナデ、貼付ナデ	丸底から内湾し後縁を持つ	N6/0灰	N6/0灰	織砂	(16.40) 5.60	(11.60)					
260	38	56 須恵器 檻	I 人力 拖削	ロクロナデ	丸底から内湾し後縁を持つ	N8/0灰	N8/0灰	織砂	(21.00) 2.50	(19.00)					

表 8 豊岡町溝跡 II 遺物観察表 (14)

番号	写真 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴	内面	外面	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
261	38	須恵器	壺	I	人力 施釉	ロクロナデ、自然釉	外反し縁部近くで水平にな る	7.5Y7/1白 白	7.5Y7/1白 白	細砂	(12.60)	(3.90)	-	-	
262	38	須恵器	壺	I	人力 施釉	ロクロナデ、自然釉	外反し縁部附近に肥厚	N7/0灰白	N7/0灰白	細砂	(11.00)	(4.60)	-	-	
263	38	須恵器	高杯	I	人力 施釉	ロクロナデ、沈線、波状 文	杯底平たい、縁部外側に肥厚	5Y6/1灰	灰~灰白	細砂	-	(10.20)	-	-	
264	38	須恵器	壺	I	人力 施釉	立白 付	内湾し縁部曲にな り肥厚	N7/0灰白	灰白~灰	細砂	-	(6.00)	-	-	
265	39	須恵器	鉢	II-1	人力 施釉	ナデ、沈線	内湾し縁部丸い	10YR4/4- 5.5灰	粗砂	-	(3.70)	-	-	-	
266	39	須恵器	高杯	II-1	人力 施釉(頭跡)	ヨコナデ、ハケ、凹線	外反する	7.5YR5/4 12.3V.3地	7.5YR5/4 灰白~灰	細砂	-	(6.20)	-	-	
267	39	須恵器	土甕	II-1	直線 四半引削	立1裂見 ナデ、底面裝飾	上げ底から外反する	2.5Y8/2 白	2.5Y8/2 灰白~	細砂	-	(3.00)	(6.00)	-	
268	39	須恵器	土甕	II-1	直線 下	SE03 ビヒ成形からハケ整形、刻み目、黒斑	内湾する体部から外反し縁 部丸い	10YR7/2 5Y5/1灰	浅黄盤~ 灰黄~黒	粗砂含む	(40.00)	(15.40)	-	-	
269	39	須恵器	杯	II-1	黒シル ト	ロクロナデ、ロクロケズ ナデ、ナデ	内湾する底部体部で全部剥 落する。反りは外反する。	36.0灰 青灰	36.0灰 青灰	細砂	(12.70)	(4.20)	(5.70)	-	
270	39	土師器	壺	II-1	火照 施釉	ナデ、ミガキ、化粧土	内湾する天井部厚く1.5倍 し端部垂下する	2.5Y8/2灰 白	2.5Y8/2灰 白	細砂	(17.50)	(2.10)	-	-	
271	39	土師器	壺	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、 化粧土	内湾し縁部付近で水平に屈曲 する	2.5Y6/2灰 白	2.5Y8/2灰 白	細砂	(24.70)	(2.20)	-	-	
272	39	土師器	壺	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、 化粧土	内湾し縁部付近で水平に屈曲 する	2.5Y8/2灰 白	2.5Y8/2灰 白	細砂	(24.50)	(1.90)	-	-	
273	39	土師器	壺	II-1	火照 施釉	ナデ、ミガキ、 化粧土	内湾し縁部や下に向く	2.5Y8/2灰 白	2.5Y8/2灰 白	細砂	(29.40)	(2.40)	-	-	
274	39	土師器	壺	II-1	火照 施釉	ナデ、ミガキナデ、 化粧土	内湾し縁部外反し縁部上に 屈曲して口	2.5Y7/2灰 白	2.5Y7/2灰 白	細砂	(30.00)	(2.70)	-	-	
275	39	土師器	壺	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ、 化粧土	内湾する、高台尖りきみの	10YR8/2 5.5灰白	2.5YR8/2 灰白	クサリ繩	-	(2.00)	(0.70)	-	
276	39	土師器	杯	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ、 化粧土	内湾する底部から体部で口 部を内湾する	2.5YR8/2 灰白	2.5YR8/2 灰白	細砂	(17.60)	(4.40)	(12.70)	-	
277	39	土師器	壺	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ、 化粧土	内湾し縁部外反し縁部丸い、 高台	2.5Y7/3灰 白	2.5Y7/3灰 白	細砂	(24.20)	(4.05)	(19.40)	-	
278	39	土師器	杯	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ ケスリ	内湾する底部から外傾し縁部反つて	2.5Y7/3灰 白	2.5Y7/3灰 白	クサリ繩	14.40	(3.30)	(11.70)	-	
279	39	土師器	杯	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から縁やかに 外反し縁部丸い	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(14.60)	(3.80)	-	-	
280	39	土師器	杯	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ、化粧土	内湾する底部から体部で口 部を内湾する	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(14.50)	(3.90)	-	-	
281	39	土師器	杯	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	内湾から内蔵し直立きみす る縁部凹曲	2.5Y7/3灰 白	2.5Y7/3灰 白	長竹 子ヤ一ト、 蓋含む	(15.00)	(3.25)	(0.25)	-	
282	39	土師器	杯	II-1	火照 施釉	ナデ、ヨコナデ	平底から内蔵し縁部内側につまみ出す 肥厚きみに内蔵す	10YR7/2灰 白	灰白~暗 黄	細砂	(13.90)	(3.40)	-	-	

表8 豊橋町溝跡II遺物種類表(15)

番号	図版 写真	種別	器種	地区	遺構	技術	他	形態の特徴	内面	外面	胎土	口径	器高	注量(cm)	底径	備考
283	39	土師器	皿	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ		平底から内湾し端部丸い	にぶい黄澄	10YR7.3/2~5/1黄澄	細砂	(1380)	(3.30)	-	-	-
284	39	土師器	皿	II-1	人効	ナデ、ヨコナデ、化粧土	み	平底から外傾し端部反りき	灰白~明	細砂	(1270)	(2.90)	-	-	-	
285	39	土師器	皿	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	み	平底から外傾し端部丸い	10YR7.3/2~5/1黄澄	細砂	(1385)	3.95	11.50	-	-	
286	39	土師器	皿	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ	み	平底から内湾し端部丸い	10YR7.3/1~4/1	細砂	(1330)	3.30	(10.95)	-	-	
287	39	土師器	杯(墨窓)	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ	み	平底から外傾し端部尖りき	2.5Y8.2/2~5/1黄澄	細砂	(1480)	(3.30)	(0.00)	-	-	
288	39	土師器	碗(泡)	II-1	人効	ナデ	内湾する	内湾する	黒~暗褐色	5YR6.7/6	砂粒多く含む	(210)	-	-	-	-
289	39	土師器	皿(墨窓)	II-1	夷器	ナデ、底部へラ切り、墨	底底	2.5Y8.1/2~5/1黄澄	自白	細砂	-	0.50	-	-	-	
290	39	土師器	杯(墨窓)	II-1	夷器	ナデ、底部へラ切り、墨	底底	平底から内湾する	2.5Y8.1/2~5/1黄澄	細砂	-	(150)	-	-	-	
291	39	土師器	小皿	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ、ヘラ切	ナデ	平底から外傾し端部丸い	7.5YR7.6/6	細砂	(780)	(110)	5.30	-	-	
292	39	土師器	椀	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ	ナデ	平底から外傾し端部尖りき	2.5YR8.2/2	細砂	-	(280)	(8.70)	-	-	
293	40	土師器	杯	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ、ヘラ切	ナデ	平底から外傾し端部尖りき	灰白	石英、長石、	(1350)	3.85	(13.50)	-	-	
294	40	土師器	杯	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ	ナデ	平底から外反し端部丸い	10YR8.2/2	細砂	(1630)	(3.45)	(13.70)	-	-	
295	40	土師器	杯	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ	ナデ	溝曲して底から全体、部、口環	10YR7.3/1~5/1黄澄	石英、長石、	(1765)	3.70	(13.80)	-	-	
296	40	土師器	杯	II-1	夷器	ナデ、ヨビ成形、ナデ、ヨコナデ、ミガキ	ナデ	平底から外反する口縁部で	2.5Y8.2/2~5/1黄澄	細砂	(1590)	(3.40)	-	-	-	
297	40	土師器	杯	II-1	人効	ナデ、ヨコナデ	ナデ	平底から内湾し口縁部外反し端部丸い	7.5YR8.4/4	細砂	(1670)	(3.40)	(14.50)	-	-	
298	40	土師器	杯	II-1	夷器	ナデ、ケズリ、ヨコナデ	ナデ	平底から内湾し口縁部外反し端部丸い	10YR7.3/1~5/1黄澄	細砂	(1630)	(4.40)	-	-	-	
299	40	土師器	杯	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ	ナデ	平底から内湾し底部丸い	2.5Y8.2/2~5/1黄澄	細砂	(1770)	(4.20)	-	-	-	
300	40	土師器	杯	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	ナデ	平底から内湾する部、部、口縁部外反し	10YR7.3/1~5/1黄澄	クサリ繩	18.45	4.70	14.50	-	-	
301	40	土師器	杯	II-1	人効	ナデ、ヨコナデ	ナデ	平底から内湾し口縁部尖る	2.5Y8.2/2~5/1黄澄	細砂	(1820)	(3.80)	(14.70)	-	-	
302	40	土師器	杯	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ	ナデ	平底から内側に屈曲	灰白~橙	細砂	(1960)	5.20	-	-	-	
303	40	土師器	皿	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ、ヘラ切	ナデ	平底から外傾し端部丸い	10YR8.3/3	チヤード、赤色粒、鉛母	(1575)	2.20	(13.00)	-	-	
304	40	土師器	皿	II-1	夷器	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	ナデ	底から内湾する部、部、口縁部外反し端部丸い	2.5Y8.2/2~5/1黄澄	細砂	(1460)	(2.50)	-	-	-	

表 8 豊岡町溝跡 II 遺物類型表 (16)

番号	図版 写真 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴		色調	胎土	口径	器高	底径	備考
								内面	外面						
305	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ		平底から外傾し端部肥厚	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(16.80)	(2.60)	(15.20)	
306	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ		不安定な底部から外傾し端部肥厚	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(16.70)	(2.15)	(14.60)	
307	40	57	土師器	皿(縁)	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、 滑出し	底部から外傾し端部肥厚	灰白～黒 灰白～黒	3.5Y17/2K 黄	灰白～黒 灰白～黒	細砂	(15.80)	(2.40)	(10.50)	
308	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ、ケズリ、 平底から外傾し 化粧土	底部から外傾し端部肥厚	灰白～黒 灰白～黒	灰白～黒 灰白～黒	細砂	(16.80)	(2.60)	-		
309	40	57	土師器	皿(記号)	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ、ミガキ、 丸印	底部から外傾し端部肥厚	10YR8/3 灰白	10YR8/3 灰白	細砂	16.75	3.05	-		
310	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ	平底から内溝し端部丸く肥	10YR8/3 灰白	10YR8/3 灰白	細砂	(16.60)	(2.60)	-		
311	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ、ヘラ切	平底から内溝し端部丸く肥	灰白～黄 灰白～黄	10YR7/2 灰白～黄	灰白～黄 灰白～黄	細砂	(16.60)	2.50	(10.00)	
312	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ	底盤を斜めに内溝し端部丸く詰める	10YR8/3 灰白～赤	10YR8/3 灰白～赤	細砂	(17.70)	(2.60)	(14.20)		
313	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ	底盤を斜めに内溝し端部丸く詰める	10YR7/3 灰白～黄	10YR7/3 灰白～黄	細砂	(18.40)	(2.60)	-		
314	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西半 底面	ナデ、ヨコナデ	平底から内溝し端部近くて底部丸く肥	10YR8/3 灰白	10YR8/3 灰白	細砂	(17.80)	(2.70)	-		
315	40	58	土師器	杯	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	内溝する底部で端部肥厚	10YR8/3 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	17.85	2.70	-		
316	40	58	土師器	皿	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、ケズリ	底盤丸く外反する、端部丸く肥	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(19.70)	(2.55)	-		
317	40	58	土師器	皿	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	底盤丸く外反するように角張る	10YR6/6 灰白	10YR6/6 灰白	細砂	(19.85)	(2.60)	(16.05)		
318	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	底盤丸く外反する	10YR7/2 灰白	10YR7/2 灰白	細砂	(18.80)	2.80	-		
319	40	57	土師器	杯	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	底盤丸く外反する	10YR8/2 灰白	10YR8/3 灰白	細砂	(10.80)	(4.70)	-		
320	40	58	土師器	杯	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、ヘラ切	底盤丸く外反する	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(12.60)	(4.30)	-		
321	40	58	土師器	杯	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、2次 ユビ成形	底盤丸く外反する	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(13.80)	(4.40)	-		
322	40	57	土師器	杯	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、 ユビ成形	底盤丸く外反する	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(13.80)	(4.40)	-		
323	40	57	土師器	皿	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	内溝し端部丸い	10YR7/3 灰白	10YR7/3 灰白	細砂	(8.60)	2.56	(3.20)		
324	40	58	土師器	皿	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ	平底から内溝し端部丸い	10YR8/2 灰白	10YR8/3 灰白	細砂	(9.60)	2.60	(6.00)		
325	40	58	土師器	皿	II-1 人形 西端	ユビ成形、 ユビ打芯	丸底から外傾し端部丸い	10YR7/3 灰白	10YR8/2 灰白	細砂	(7.80)	3.20	-		
326	40	57	土師器	鉢	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、 ユビ成形	内溝する体部で頭部なく直立する口沿部で端部丸く肥	10YR8/3 灰白	10YR7/3 灰白	細砂	(7.00)	(4.40)	-		
327	40	58	土師器	高杯	II-1 人形 西端	ナデ、ヨコナデ、ミガキ	外反する桟部、10mmに面直 り、杯底水平	2.5Y8/2K 灰	2.5Y8/2K 灰	細砂	(5.10)	-	-		

表 8 豆腐町遺跡 II 遺物観察表 (17)

写真番号	図版番号	種別	器種	地区	遺傳	技法	他	形態の特徴			胎土	色調	法量 (cm)	口径	器高	底径
								内面	外面	裏面						
328	40	58 土師器	高杯	Ⅱ-1 混じり層	聚り目、ナデ、ケスリ、外反し幅広がる、面取り	2.5Y8-2Kw 白	-	(6.00)	-	-	-	-	-	-	-	-
329	40	58 土師器	高杯	Ⅱ-1 混じり層	ヨコナデ、ナデ、ミガキ、化粧	水平な軽い、優しく外反する輪裏	2.5Y8-2Kw 白	-	-	-	-	-	-	-	-	-
330	40	58 土師器	高杯	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形、12面取り、化粧	直立から裾部膨がる、内面凹凸	2.5Y8-2Kw 白	細砂	-	-	-	-	-	-	-	-
331	40	58 土師器	高杯	Ⅱ-1 混じり層	ヨコナデ、ケスリ、面取り、外反し幅広がる、内面凹凸	直立から裾部膨がる、内面凹凸	2.5Y8-2Kw 白	細砂	-	-	-	-	-	-	-	-
332	40	58 土師器	高杯	Ⅱ-1 混じり層	化粧土	ハケ彫形からナラーナデ、板ナデ	球形の体部に短く外反する	2.5Y8-2Kw 白	細砂	-	-	-	-	-	-	-
333	41	59 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ヨコナデ	球形の体部が付き端部丸くきみ	球形の体部が付き端部丸くきみ	2.5Y8-2Kw 白	細砂	-	-	-	-	-	-	-
334	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ヨコナデ、口添形からナナデ、ハ	球形の体部から短く外反する	10YR8-2	10YR8-3	細砂	-	-	-	-	-	-	-
335	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形からナナデ、ヨコナデ	外側丸く屈曲して	7GYR4-1	7GYR4-1	細砂	-	-	-	-	-	-	-
336	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	熱(赤巣)	外側丸く屈曲して	10R5-6	10R5-6	細砂	-	-	-	-	-	-	-
337	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形、ナナデ、11限部	直立きみの体部から直ぐ外反する	10YR8-1	10YR8-1	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
338	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ヨコナデ、ハケ、ナナデ、ヨコナデ	直立きみの体部から短く外反する	7GYR8-3	7GYR8-3	細砂	-	-	-	-	-	-	-
339	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ、ナナデ、ヨコナデ	内側する体部から短く外反する	10R6-6	10R6-6	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
340	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形、板ナデ、ナナデ、ヨコナデ	内側する体部から直ぐ外反する	10YR6-2	10YR6-2	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
341	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形からナナデ、2次焼成	内側する体部から直ぐ外反する	7.5YR6-2	7.5YR6-2	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
342	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形からナナデ、ヨコナデ	内側する体部から直ぐ外反する	7.5YR6-2	7.5YR6-2	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
343	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形、内面有機質	直立きみの体部から直ぐ外反する	10YR7-2	10YR7-2	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
344	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ナナデ、2次焼成	内側する体部から直ぐ外反する	10YR7-1	10YR7-1	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
345	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形からナナデ、ヨコナデ	内側する体部から直ぐ外反する	10YR4-1	10YR4-1	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
346	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形からナナデ、ヨコナデ	内側する体部から直ぐ外反する	10YR7-2	10YR7-2	粗砂	-	-	-	-	-	-	-
347	41	58 土師器	甕	Ⅱ-1 混じり層	ハケ彫形からナナデ、ヨコナデ	内側する体部から直ぐ外反する	10YR7-3	10YR7-3	粗砂	-	-	-	-	-	-	-

表 8 豊岡町溝跡 II 遺物観察表 (18)

番号	図版	写真	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴	内面	外面	胎土	口径	基盤	法量 (cm)	備考
348	41	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形から板ナデ、ナデ、ヨコナナデ	内傾する体部から外反する体部ナデ、板ナデ	灰褐色～灰褐色～にぶい黄	10YR7/2 10YR6/1	クサリ繩	(25.70)	(8.20)	-		
349	41	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ユビ成形からナデ、板ナデ、ヨコナナデ	直立する体部から外反する体部ナデ、板ナデ	内傾する体部から外反する体部ナデ、板ナデ	10YR6/1	10YR6/1	細砂	(28.50)	(9.00)	-	
350	41	59	土師器	甕	II-1	人力	ハケ整形からナデ、ヨコナナデ	外反し端部角張る	灰褐色～5.1地灰	10YR6/1	10YR5/1	石英、長石、チャート	(24.50)	(2.50)	-	
351	41	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ユビ成形からナデ、ヨコナナデ	僅かに内湾するが直立ぎみ、体部内から外反する	灰褐色～5.1地灰	10YR4/1	細砂	(27.80)	(14.00)	-		
352	41	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ユビ成形からナデ、ヨコナナデ	内傾する体部から外反する口保部に張る	灰褐色～にぶい黄	10YR5/1	10YR6/1	細砂	(28.10)	(7.00)	-	
353	41	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形からナデ、ヨコナナデ	内湾する体部から外反する口保部に張る	灰褐色～にぶい黄	10YR4/1	細砂	(25.80)	(7.10)	-		
354	41	59	土師器	甕	II-1	人力	ハケ整形からナデ、ヨコナナデ	内傾する体部から外反し曲げ時部角張る	灰褐色～にぶい黄	10YR6/2	10YR8/2	石英、長石、チャート	(23.00)	(7.60)	-	
355	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ユビ成形からナデ、ヨコナナデ	内湾する体部から外反する口保部に張る	灰褐色～にぶい黄	10YR8/2	10YR8/1	細砂	(24.40)	(4.50)	-	
356	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ユビ成形からナデ、ヨコナナデ	内湾する体部から外傾する口保部に張付着	灰褐色～黒	10YR8/1	10YR8/1	石英、長石、チャート	(22.70)	(14.70)	-	
357	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ナデ、板ナデ、ヨコナナデ	内湾する体部から外反する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR4/2	10YR7/3	石英～にぶい黄	(26.80)	(7.60)	-	
358	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形、ナデ、ヨコナナデ	内湾する体部から外反する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR7/2	10YR7/3	石英～にぶい黄	(24.70)	(4.30)	-	
359	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ヨコナナデ	内傾する体部から外反する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR7/3	細砂	(27.90)	(11.00)	-		
360	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形、ナデ、板ナデ、ヨコナナデ	内傾する体部から外反する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR7/3	細砂	(28.40)	(10.50)	-		
361	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形、ナデ、板ナデ、ヨコナナデ	内傾する体部から外反する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR7/3	細砂	(27.30)	(6.10)	-		
362	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形、ナデ、ヨコナナデ	内面裏付着する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR7/2	10YR7/2	石英、長石、チャート	(30.00)	(10.40)	-	
363	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形、ナデ、板ナデ、ヨコナナデ	内面裏付着する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR5/2	10YR5/2	石英、長石、チャート	(27.30)	(6.10)	-	
364	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形、ナデ、ヨコナナデ	内面裏付着する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR8/1	10YR8/1	石英、長石、チャート	(26.70)	(5.65)	-	
365	42	59	土師器	甕	II-1	横見じり唇	ハケ整形、ナデ、ヨコナナデ	内面裏付着する口保部に張付着	灰褐色～にぶい黄	10YR7/2	10YR7/2	石英、長石、チャート	(28.20)	(4.50)	-	

表 8 豊橋町溝跡 II 遺物種類表 (19)

番号	図版 写真	種別	器種	地区	遺構	採取 方法	他	形態の特徴	他	内面	外面	船上	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
366	42	59	土師器	甕	II-1 東堤 西半 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形、ナデ、板ナデ、 ヨコナデ ハケ整形、ナデ、板ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外傾する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	2.5VY7.1 8.1VY6.7	灰白～褐 灰～黒褐	細砂	(27.40)	(8.50)	-		
367	42	59	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形、ナデ、板ナデ、 ヨコナデ ハケ整形、ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	灰白～褐 灰	灰白～褐 灰	細砂	(21.60)	(5.50)	-		
368	42	59	土師器	甕	II-1 東堤 西半 内里	火候 泥じ 火候 内里	ユビ魔形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰～黒 灰	灰白～褐 灰	クサリ繩	(27.20)	(8.50)	-		
369	42	59	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	灰白～褐 灰	粗砂	(30.00)	(20.90)	-		
370	42	59	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	灰白～褐 灰	粗砂	(29.90)	(6.00)	-		
371	43	60	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	灰白～明 灰	粗砂	(29.80)	(6.50)	-		
372	43	60	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	灰白～灰 灰	粗砂	(29.80)	(6.60)	-		
373	43	60	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	黒場～黒 灰	石英、長石	(27.00)	(7.70)	-		
374	43	60	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	灰白～灰 灰	細砂	(27.60)	(6.90)	-		
375	43	60	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	2.5VY8.2 2.5VY8.3灰	粗砂	(21.00)	(5.30)	-		
376	43	60	土師器	甕	II-1 東堤 西半 内里	火候 泥じ 火候 内里	ハケ整形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	にぶい、黄 灰	クサリ繩	(22.10)	(10.50)	-		
377	43	60	土師器	製埴土器	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ユビ魔形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	7.5YR8.2 7.5YR7.2 10YR7.2 10YR7.3	粗砂	(12.00)	(8.30)	-		
378	43	60	土師器	鉢	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ユビ魔形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ	内湾する体部から外反する 内縁部で端部肥厚する 内傾する体部から外反し端 部が内傾する	にぶい、黄 灰	にぶい、黄 灰	粗砂	(21.90)	(8.60)	-		
379	43	60	土師器	蓋?	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ	粘土壁則厚で外反する所 に付する 面三角形の突部貼付する手 すり	灰白～褐 灰	浅黄橙～ 褐灰	細砂	(21.80)	(19.70)	1.00		
380	43	60	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ユビ魔形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ	内壁に溝曲す 部分を貼付、貼付は直線的 内傾する体部で強度は薄厚 化する所に脚部 内壁は下方き、把手 部は上方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部	にぶい、黄 灰	にぶい、黄 灰	粗砂	(14.60)	-			
381	44	60	土師器	甕	II-1 東堤 西端 内里	火候 泥じ 火候 内里	ユビ魔形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ	内傾する体部で強度は薄厚 化する所に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部	にぶい、黄 灰	にぶい、黄 灰	粗砂	(25.50)	(32.00)	-		
382	44	61	土師器	甕	II-1 東堤 西半 内里	火候 泥じ 火候 内里	ユビ魔形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ	外反する口脚部で強度は薄厚 化する所に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部	灰白～褐 灰	10YR8.2 10YR8.3 灰	粗砂	(25.40)	(17.40)	-		
383	45	60	土師器	甕	II-1 東堤 西半 内里	火候 泥じ 火候 内里	ユビ魔形か ハケ整形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ ユビ魔形、 ナデ、 ヨコナデ	内壁は直線的 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部 内壁は下方に脚部	浅黄～灰 灰	10YR8.2 10YR8.3 灰	粗砂	(32.00)	(68.80)	-		

表 8 豊岡町溝跡 II 通物類型表 (20)

番号	図版	写真	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴	内面	外面	胎土	口径	法量 (cm)	底径	備考
384	46	61	須恵器	蓋(墨井)	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、墨書き 「十」	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	平たい天井部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	2.5Y8/1灰 白	2.5Y8/1灰 白	細砂	(14.20)	(2.55)	-	
385	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	平たい天井部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	N6.0 ~ 5.0灰	N6.0 ~ 5.0灰	細砂	14.50	2.45	-	
386	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	平たい天井部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	10YR7/1 5Y6/1灰	10YR7/1 5Y6/1灰	細砂	(15.80)	3.20	-	
387	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	N6.0灰 白	N6.0灰 白	細砂	14.50	3.00	-	
388	46	61	須恵器	蓋	II-1	人柄 桶形 袋足裏	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	2.5Y6/1灰 白	2.5Y6/1灰 白	細砂	13.60	2.90	-	
389	46	61	須恵器	蓋	II-1	人柄 桶形 袋足裏	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	5Y8/1灰 白	5Y8/1灰 白	細砂	15.00	2.50	-	
390	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	5Y7/1灰 白	5Y7/1灰 白	細砂	(14.05)	2.20	-	
391	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	2.5Y6/1灰 白	2.5Y6/1灰 白	細砂	14.00	2.50	-	
392	46	61	須恵器	蓋(津)	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	N5.0灰 白	N5.0灰 白	細砂	(13.80)	2.20	-	
393	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西端 西端	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	N7.0灰白	N7.0灰白	細砂	(18.60)	3.75	-	
394	46	61	須恵器	蓋(碇)	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	N7.0灰白 ~ N6.0灰	N7.0灰白 ~ N6.0灰	細砂	19.35	2.50	-	
395	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	N7.0灰白 ~ N5.0灰	N7.0灰白 ~ N5.0灰	細砂	(18.65)	3.80	-	
396	46	61	須恵器	蓋(碇)	II-1	袋足裏 西半 長方	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	N8.0灰白	N8.0灰白	細砂	(19.50)	(1.80)	-	
397	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西端	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	10YR6/1 N7.0灰白	10YR6/1 N7.0灰白	細砂	(19.80)	(2.30)	-	
398	46	61	須恵器	蓋	II-1	袋足裏 西端	ロクロケズナデ 内面 貼付ナデ、貼付ナデ、貼付ナデ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	手仕上上げ部から内湾し端部 下方につまみ出す下、平たいボタン状つまみ	2.5Y7/1灰 白 ~ N5.0 黄	2.5Y7/1灰 白 ~ N5.0 黄	細砂	20.85	2.25	-	

表 8 豊橋町溝跡 II 遺物整理表 (21)

番号	図版	種類	器種	地区	遺構	技術	他	形態の特徴		内面	外面	色調	寸法 (cm)	器高	底径	備考
								角の位置	外傾し端部上げ出ず、断面三							
399	46	須恵器	核被蓋	II-1	炭化	ロクロケズナデ	ロクロケズナデ、内面多方向に凹凸出せず、貼付ナデ	平たい天井部から外傾し端部上げ出ず、断面三	N6.0灰	N5.0灰~N7.0灰白	細砂	(19.10)	3.30	-		
400	46	須恵器	核被蓋	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、貼付ナデ	内傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	N7.0灰白	細砂	(19.60)	2.90	-		
401	46	須恵器	核被蓋	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロケズナデ、自然補、軽ねぬき、鉢に軸用	内傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	N7.0灰白	細砂	(20.65)	2.75	-		
402	46	須恵器	核被蓋	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロケズナデ、鉢に軸用	内傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	N7.0灰白	細砂	(21.40)	4.05	-		
403	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロケズナデ、貼付ナデ	内傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	2.5Y6.1黄灰	細砂	(18.70)	4.60	(10.80)		
404	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	内傾する底部から外傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	灰白~灰	細砂	(12.50)	4.80	-		
405	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	内傾する底部から外傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	灰白~黑	細砂	(12.00)	4.30	7.80		
406	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	内傾する底部から外傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	2.5Y8.1灰	細砂	(12.60)	4.30	-		
407	46	須恵器	杯	II-1	人力	ロクロナデ	ロクロナデ、内面仕上げナデ	内傾する底部から外傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	10YR6.1	細砂	(12.00)	2.90	(5.60)		
408	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、土陰片付着	内傾する底部から外傾し端部上げ出ず、断面三	N7.0灰白	5Y8.1灰	細砂	(13.00)	4.10	-		
409	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	内傾する底部から外傾し端部尖る	N7.0灰白	2.5Y8.3淡黄	細砂	(12.20)	3.55	-		
410	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	内傾する底部から外傾し端部尖る	N7.0灰白	灰白~灰	細砂	(10.20)	4.00	(7.60)		
411	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	内傾する底部から外傾し端部尖る	N6.0灰	N6.0灰	細砂	(12.55)	4.26	(8.80)		
412	46	須恵器	杯(墨書)	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、内面仕上げナデ、墨書	内傾する底部から外傾し端部尖る	N7.0灰白	N7.0灰白	細砂	(10.40)	(3.60)	(7.80)		
413	46	須恵器	杯(記号)	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	内傾する底部から外傾し端部尖る	N7.0灰白	5Y8.1灰	細砂	(13.20)	3.80	-		
414	46	須恵器	杯(墨書)	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、墨書「左二」	内傾する底部から外傾し端部尖る	N7.0灰白	5Y8.1灰	細砂	(0.80)	(9.20)			
415	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラ切り後	内傾する底部から外傾し端部尖る	N7.0灰白	灰白~灰	細砂	(13.20)	(4.30)	-		
416	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、火槽、自然補	内傾する底部から外傾し端部尖る	N6.0灰	灰白~灰	細密	(14.20)	(4.30)	-		
417	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、火槽、自然補	内傾する底部から外傾し端部尖る	N6.0灰	N6.0灰	細砂	(15.10)	(3.15)	(12.20)		
418	46	須恵器	杯	II-1	炭化	ロクロナデ	ロクロナデ、内面不定方向ナデ	内傾する底部から外傾し端部尖る	N7.0灰白	5Y8.1~7.1灰	細砂	(14.75)	(3.20)	(11.45)		

表8 豆腐町遺跡II遺物観察表(22)

番号	国版 写真 版面	種別	器種	地区	遺構	接法	他	形態の特徴			法量(cm)	口径	窓高	底径
								内面	外面	船土				
419	46	63 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、ロクロケズ 焼き、自然袖、火燐、重ね 自然袖、火燐	不安定な平底から外傾し端部内傾し 端部内傾し	N6.0 ~ 4.0/4.0Km	N6.0 ~ 4.0/4.0Km	細砂	(14.90) 4.70	-	-	
420	47	63 須恵器	杯	II-1	人力 西半 施脂	ロクロナデ、ヘラ切り 自然袖上げナデ、ヘラ切り ロクロナデ、羅脂	不安定な平底から外傾し端部内傾し 端部内傾し	5Y7/1Km	灰白~灰	細砂	(13.70) (6.05)	(10.50)	-	
421	47	62 須恵器	杯(墨書)	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、ヘラ切り後 平底から外傾し端部丸い、 墨書	平底から溝引きみに外傾し 端部外に尖る	2.5Y7/1Km	灰白~灰	細砂	(14.00) 4.20	(11.40)	-	
422	47	62 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、墨書	平底から溝引きみに外傾し 端部外に尖る	灰黄~灰 黄~黄	細砂	(16.00) 3.00	(12.60)	-		
423	47	62 須恵器	杯(墨書)	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、墨書	平底	灰~灰白	N7/0灰白	細砂	-	-	-	
424	47	62 須恵器	杯(墨書)	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、ヘラ切り 高台付ナデ、ヘラ切り	平底、高台は尖る	5Y7/1Km	5Y7/1Km	細砂	-	(0.70)	-	
425	47	62 須恵器	杯(墨書)	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、ヘラ切り	平底	白	2.5Y8/1Km	2.5Y7/1Km	細砂	-	(0.50)	-
426	47	62 須恵器	杯(墨書)	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、ヘラ切り、 墨書	不安定な平底	2.5Y8/2Km	2.5Y8/2Km	細砂	-	-	0.5 ~ (0.6)	
427	47	62 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、ヘラ切り、 墨書	平底から外傾	2.5Y7/1Km	2.5Y7/1Km	細密	-	-	(0.60)	
428	47	63 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、 ロクロナデ、 墨書	不安定な平底から外傾し端部尖り、 内傾方向の仕上	灰白~白	5Y7/1Km	5Y7/1Km	細砂	-	-	
429	47	63 須恵器	杯(漆)	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、底部へハラ切り、 墨書	内傾から体部へ内湾し端部灰白~黄	灰白~黄	5Y7/1Km	5Y7/1Km	細密	(15.20) (3.90)	(9.00)	
430	47	63 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、底部へハラ切り 内傾	不安定な平底から外傾し端部尖る	N7/0灰白	N7/0灰白	細砂	(15.50) (4.40)	-	-	
431	47	63 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、底部へハラ切り 焼成の跡の剥離	平底少し外傾し端部丸い、 底部から外傾し端部反って	N8.0 ~	N7/0灰白	細砂	(14.70) 3.90	11.40	-	
432	47	63 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、底部へハラ切り 高台貼付ナデ、墨書	平底から外傾し端部反って 見る台形の高台	10Y8/1Km	4.5灰白	細砂	(13.40) (4.00)	(9.80)	-	
433	47	63 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、底部へハラ切り ロクロナデ、高台貼付ナデ	平底少し外傾し端部丸い、 底部から外傾し端部反って	N5.0/0Km	N5.0/0Km	細砂	(13.90) (4.15)	(9.80)	-	
434	47	63 須恵器	杯(漆)	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、底部へハラ切り 墨書	平底から外傾し端部反る、 墨(ブルジ)	N5.0灰白	細砂多い、	-	-	-		
435	47	63 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、底部へハラ切り 粘付ナデ、墨書	平底から外傾し端部反る、 方形状の高台	N7/0灰白	灰白~墨	細砂	(12.80) 4.20	(9.30)	-	
436	47	63 須恵器	杯	II-1	焼退じ 口裏	ロクロナデ、底部へハラ切り 後ナデ、墨書	平底から外傾し端部反る、 方形状の高台	5Y7/1Km	N8.0灰白	細砂多い、	(13.30) 5.40	(8.80)	-	

表 8 豊橋町溝跡 II 滅物種登録表 (23)

番号	図版	写真	種別	器種	地区	遺構	技術	他	形態の特徴		船上	外面	内面	色調	注量 (cm)	底面	備考
									内面	外面							
437	47	63	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部ヘラ切 り後未削撃、内面不平底部外 向仕上げナデ、高台貼付	底部ヘラ切 り後ナデ、内面下方向仕 上げナデ、高台貼付ナ デ、内面仕上げナデ、 貼付ナデ	N7/0灰白	N7/0灰白	微密	(13.40) (4.40)	(8.90)				
438	47	63	須恵器	杯(漆)	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部ヘラ切 り後ナデ、内面下方向仕 上げナデ、高台貼付ナ デ、内面仕上げナデ、 貼付ナデ	底部ヘラ切 り後ナデ、内面下方向仕 上げナデ、高台貼付ナ デ、内面仕上げナデ、 貼付ナデ	N5/0灰	N5/0灰	細砂	12.00	4.90	9.60			
439	47	63	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部ヘラ切 り後ナデ、内面仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部ヘラ切 り後ナデ、内面仕上げナ デ、高台貼付ナデ	N6/0灰	N6/0灰	微密	(13.40) (4.10)	(9.60)				
440	47	63	須恵器	杯(墨跡)	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部ヘラ切 り後ナデ、内面仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部ヘラ切 り後ナデ、内面仕上げナ デ、高台貼付ナデ	N8/0灰白	N8/0灰白	細砂	(13.90) (4.40)	(10.00)				
441	47	63	須恵器	杯(墨跡)	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部ヘラ切 り後ナデ、内面仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部ヘラ切 り後ナデ、内面仕上げナ デ、高台貼付ナデ	N8/0灰白	N8/0灰白	細砂	(12.60) (4.80)	(9.00)				
442	47	63	須恵器	杯	II-1	集石 付近	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ、墨 曲線	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	N5/0灰	N5/0灰	微密	(14.00) (4.10)	(10.00)				
443	47	63	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部仕上げナデ、 高台貼付ナデ	N6/0灰白	N7/0灰白	細砂	(16.60) (6.20)	(12.70)				
444	47	63	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部仕上げナデ、 高台貼付ナデ	N5/0灰	N5/0灰	細砂	(16.80) (6.60)	(12.30)				
445	47	64	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、自然袖 貼付ナデ	底部仕上げナデ、 自然袖 貼付ナデ	N7/0灰白	N7/0灰白	細砂	(18.70) (6.45)	(14.00)				
446	47	64	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部仕上げナデ、 高台貼付ナデ	N8/0灰白	N8/0灰白	細砂	(18.00) (6.80)	(12.20)				
447	47	63	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部仕上げナデ、 高台貼付ナデ	N6/0灰	N6/0灰	細砂	19.65	6.10	(14.40)			
448	48	64	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部仕上げナデ、 高台貼付ナデ	N7/0灰白	N7/0灰白	細砂	(12.70) (4.35)	(9.60)				
449	48	64	須恵器	杯(記号)	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部仕上げナデ、 高台貼付ナデ	N7/0灰白	N7/0灰白	細砂	(16.00) (5.60)	(11.20)				
450	48	64	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部仕上げナデ、 高台貼付ナデ	N7/0灰白	N7/0灰白	細砂	(17.80) (5.90)	-				
451	48	64	須恵器	杯	II-1	英混じ 西半 西半	クロナデ、底部仕上げナ デ、高台貼付ナデ	底部仕上げナデ、 高台貼付ナデ	N8/0灰 底出	N8/0灰 底出	粗密	(13.10) (2.10)	-				

表 8 豊岡町溝跡 II 通物類型表 (24)

番号	図版 写真 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴		内面	外面	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径	備考
								内面	背面							
452	48	64	須恵器	皿	II-1 西半 リム	横見じ リム	ロクロナデ、内面仕上げナデ	ロクロケス、ナ ドする端部丸い	N7/0灰白	灰～灰白	細砂	(19.70)	(1.75)	(1.00)		
453	48	64	須恵器	皿	II-1 西半 リム	横見じ リム	ロクロナデ、内面仕上げナデ	ヘラ切り後 平底から外傾し端部尖る	2.5Y8/1灰 白	2.5Y8/1灰 白	細砂	20.20	2.15	17.35		
454	48	64	須恵器	蓋	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、自然袖	内面多方向 で端部内側につまみ出	5Y6/4灰 白	5Y6/1灰 白	細砂	(12.65)	(3.20)			
455	48	64	須恵器	蓋	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、自然袖	内面多方向 で端部内側につまみ出	N5/0灰 白	灰～褐灰	細砂	(13.00)	(2.70)			
456	48	64	須恵器	人形	東半 リム	横見じ リム	ロクロナデ、自然袖	外傾する体部から長い後縫 をもつ斜する内側に付いた端部	灰～灰 黄	灰～灰 黄	微密	(9.10)	(2.65)	(1.20)		
457	48	64	須恵器	臺	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、底部へチ り、高台付ナデ	内面多方向 で端部内側につまみ出	N7/0灰白	N7/0灰白	細砂	(11.00)	(4.05)	(9.40)		
458	48	64	須恵器	小形壺	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ	外反し端部ない	N7/0灰白	N5/0灰 白	細砂	(4.00)	(2.20)	-		
459	48	64	須恵器	壺	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、底部へチ り、高台付ナデ	内面多方向 で端部内側につまみ出	N8/0灰白	N8/0灰白	細砂	-	(7.20)	5.30		
460	48	64	須恵器	壺	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、自然袖	直立外側に付いた端部	2.5Y6/1～ 5/1黄灰	2.5Y6/1～ 5/1黄灰	微密	(4.80)	(10.40)	(6.30)		
461	48	64	須恵器	壺	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、ビヨ ヂエ、ナデ	内傾する肩部から外反する	N6/0灰 白	灰白～灰 白	細砂	-	(11.90)			
462	48	64	須恵器	壺	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、沈繩、自然 肩部は内傾する	外傾する口部に付いた端部	灰白～灰 白	灰白～灰 白	細砂	(17.30)	(9.30)	-		
463	48	64	須恵器	壺	II-1 西半 リム	横見じ リム	ロクロナデ、ケズリ、沈 繩、自然袖	内面工具痕部が鋸歯状で 外傾する	2.5Y6/1～ 5/1黄灰	2.5Y6/1～ 5/1黄灰	微密多い、 リープ黒	-				
464	48	64	須恵器	壺	II-1 西半 リム	横見じ リム	ロクロナデ、貼付ナデ、 体部タタキ、自然袖	内面工具痕部が鋸歯状で 外傾する	N6/0灰 白	灰～灰 白	細砂	-	(7.45)	9.90		
465	48	65	須恵器	壺	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、ナデ	内面工具痕部が鋸歯状で 外傾する	N8/0灰 白	灰～灰 白	細砂	(11.60)	(8.10)	-		
466	48	65	須恵器	楕瓶	II-1 西端 リム	横見じ リム	ロクロナデ、貼付ナデ、 体部タタキ	内側に扁平で弯曲する 頭部が鋸歯状で外傾する	10YR8/3 灰黄橙	灰黄橙～ 灰白	細砂	-	(25.50)			
467	49	65	須恵器	甕	II-1 東半 リム	横見じ リム	ロクロナデ、ナデ	内面工具痕部が鋸歯状で 外傾する	N6/0灰白	N6/0灰白	細砂	(40.80)	(10.30)			
468	49	65	須恵器	甕(1)	II-1 東半 リム	横見じ リム	ロクロナデ、ナデ	内面工具痕部が鋸歯状で 外傾する	5Y7/1灰 白	5Y7/1灰 白	細砂	(16.10)	(6.00)	-		
469	49	65	須恵器	甕	II-1 東半 リム	横見じ リム	ロクロナデ、ナデ	内面工具痕部が鋸歯状で 外傾する	2.5Y8/1灰 白	2.5Y8/1灰 白	細砂	(29.20)	(9.50)	-		
470	49	65	土師器	小皿	二重 リム	横見じ リム	ヨコナデ、ナデ	平底から外傾し端部丸い	5Y1R8/2 灰白	5Y1R8/2 灰白	細砂	(8.40)	1.20	(6.00)		

表 8 豊橋町溝跡 II 遺物種類表 (25)

番号	図版 写真 版面	種類	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴		内面	外面	船上	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
								平底から外傾し端部肥厚ぎみに丸い	平底から内湾し端部肥厚ぎみに丸い							
471	49	65	土師器	杯	2トナーネ	ヨコナーデ、底部へラ切り		平底から外傾し端部肥厚ぎみに丸い	平底から内湾し端部肥厚ぎみに丸い	7.5YR7/3 ～5.5YR6/4	細砂	(0.480)	3.10	(8.00)		
472	49	65	須恵器	輪	II-1	人力施用	ロクロナーデ、糸切り底	平底から外傾し端部肥厚ぎみに丸い	平底から内湾し端部肥厚ぎみに丸い	N7/0OK白 ～5.5YR6/4	細砂	(0.560)	5.30	(6.70)		
473	49	65	土師器	甕	II-2	包含層	ハケ繋ぎ、ナーデ、ヨコナーデ、2次焼成	平底から外傾し端部肥厚ぎみに丸い	平底から外傾し端部肥厚ぎみに丸い	N7/0OK白 ～5.5YR6/4	細砂	(0.240)	4.60	-		
474	49	65	須恵器	壺	II-2	包含層	ロクロナーデ、カキメ、目	内面汚すする体部から外傾し端部肥厚する	内面汚すする体部から外傾し端部肥厚する	N8/0OK白 ～5.5YR7/1K	細砂	(0.1950)	7.00	-		
475	49	65	須恵器	杯	II-2	包含層	ロクロナーデ、内面多方向斜め上げナーデ、貼付ナーデ	内面斜め上げナーデ、貼付ナーデ	内面斜め上げナーデ、貼付ナーデ	N7/0OK白 ～5.5YR7/1K	細砂	(0.1880)	5.40	(13.80)		
476	49	65	土製品	土馬	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	体部の腰片で尾・脚・頭部を構成する	体部の腰片で尾・脚・頭部を構成する	10YR6/4I ～5.5YR7/3K	細砂	全長 (5.00)	0.17	P6		
477	49	65	土製品	軒轅車	II-1	下	ユビ成形、転用	周開打ち欠き円形にする	周開打ち欠き円形にする	10YR7/2 ～5.5YR6/3I	粗砂	(0.108)	-			
478	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	外傾し端部角張る	外傾し端部角張る	10YR6/6I ～5.5YR6/6K	粗砂	(0.1040)	6.80	-		
479	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	外傾する体部で端部近くで直立する	外傾する体部で端部近くで直立する	10YR7/3 ～5.5YR7/2	粗砂	(0.1130)	6.30	-		
480	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	外傾し端部内側につまみ上げる	外傾し端部内側につまみ上げる	10YR7/2 ～5.5YR6/3I	粗砂	(0.1100)	7.10	-		
481	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	外傾し端部角厚ぎみに丸い	外傾し端部角厚ぎみに丸い	10YR6/2 ～5.5YR6/2K	粗砂	(0.1210)	7.60	-		
482	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	屈曲ぎみに外傾・端部丸い	屈曲ぎみに外傾・端部丸い	2.5YR7/1K ～5.5YR7/1K	細砂	(0.1110)	6.90	-		
483	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	外傾しやや屈曲する	外傾しやや屈曲する	10YR8/3 ～5.5YR7/3I	粗砂	(0.1320)	9.40	-		
484	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	外傾し端部下が厚くなり屈曲する	外傾し端部下が厚くなり屈曲する	1.5YR6/4 ～5.5YR6/4K	粗砂	(0.1660)	7.70	-		
485	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	屈曲ぎみに外傾尖り茎み	屈曲ぎみに外傾尖り茎み	7.5YR7/4 ～5.5YR7/4K	粗砂	(0.1020)	7.90	-		
486	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	外傾し端部角張り	外傾し端部角張り	2.5YR7/1K ～5.5YR7/1K	粗砂	-	-	-		
487	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ、内面屈曲ぎみ	外傾ぎみに外傾し端部角張り	外傾ぎみに外傾し端部角張り	3.5YR7/3 ～5.5YR7/3K	粗砂	(0.1080)	8.40	-		
488	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	屈曲ぎみに外傾尖り	屈曲ぎみに外傾尖り	3.5YR7/4 ～5.5YR7/4K	粗砂	(0.1200)	6.50	-		
489	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	外傾し端部付近厚くなり屈曲する	外傾し端部付近厚くなり屈曲する	2.5YR7/3 ～5.5YR7/3K	粗砂	(0.0980)	6.30	-		
490	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	器厚く内湾し端部から流れ出る	器厚く内湾し端部から流れ出る	10YR8/3 ～5.5YR8/3K	粗砂	(0.1230)	5.80	-		
491	50	66	土師器	製埴土器	II-1	提足	ユビ成形からナーデ	浅く内湾し端部内部内側に曲げ	浅く内湾し端部内部内側に曲げ	5YR5/4I ～5.5YR5/4K	粗砂	(0.1460)	(5.80)	-		

表8 豊岡町山瀬II遺物類型表 (26)

番号	写真 図版	種別	器種	地区	遺構	技法	他	形態の特徴	内面	外面	胎土	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
492	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	黒シルト	ユビ成形からナデ		内湾きみに延び端部上につ まみ上げる	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	粗砂	(13.80)	(8.10)	-	
493	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ		内湾端部丸く直立する	10YR7/3 にぶい黄 砂	10YR7/3 にぶい黄 砂	細砂	(12.50)	7.30	-	
494	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 端部 西半 り骨	ユビ成形からナデ		小さな平底、体部外傾し端 部近くで内湾する	73YR6/4 にぶい黄	73YR7/3 にぶい黄	細砂、小標	(11.00)	(16.00)	-	
495	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ		圓曲しながら外傾し、端部 付近厚く角張る	73YR7/3 にぶい黄	73YR7/3 にぶい黄	粗砂	(11.00)	(8.70)	-	
496	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ		圓曲しながら外傾し、端部 付近で直角に端部丸い	5YR6/6盤 にぶい黄	5YR7/3 にぶい黄	粗砂	(11.60)	(7.30)	-	
497	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ		圓曲しながら外傾し端部付 近厚く内側に突出する	73YR7/3 にぶい黄	73YR7/3 にぶい黄	粗砂、金雲母	(13.20)	(7.60)	-	
498	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ		圓曲しながら外傾して内湾 する	73YR7/4 にぶい黄	73YR7/4 にぶい黄	粗砂	(15.80)	(6.40)	-	
499	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ		外傾から圓曲して内湾する、 端部内側に尖らす	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	にぶい黄 ～明赤	(12.00)	(8.00)	-	
500	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ		屈曲して外傾し端部角強 い	2.5Y8/2K 白	2.5Y8/2K 白	細砂	(12.40)	7.10	-	
501	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ、ハケ 整形		内湾する体部下掌から外傾 し端部内側につまみ出す	5YR8/2 灰白	5YR8/2 灰白	細砂	(12.80)	(11.20)	-	
502	50	土師器	製埴土器	Ⅱ-1	炭化 西半 り骨	ユビ成形からナデ、布目 部丸い		外傾し端部付近厚くなり端 部丸い	2.5Y8/2K 白	2.5Y8/2K 白	細砂、小標	(12.30)	(10.30)	-	

第V章 科学分析

第1節 豆腐町遺跡II出土遺物の自然科学分析

はじめに

今回の分析調査では、豆腐町遺跡IIから出土した、井戸枠とされた材についてその種類を同定し、当時の植物利用について検討する。また、奈良時代後半の遺物包含層より出土した土師器について、その材質(胎土)の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関する資料を作成する。特に、今回の土師器試料には、壺、椀、壺、甕および製塩土器という用途の異なる各器種が揃えられており、これら器種と胎土との関係の有無から、それぞれにおける事情の違いについて考察する。

I. 井戸枠材の樹種同定

1. 試料

試料は、奈良時代の遺構とされるSE01を構成する井戸枠材5点(W4、W7、W8、W18、W19)である。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やRichter他(2006)を参考にする。

表9 樹種同定結果

3. 結果

樹種同定結果を表9に示す。井戸枠は、針葉樹2分類群(スギ、ヒノキ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

遺構名	試料名	樹種
井戸枠(SE01)	W4	スギ
井戸枠(SE01)	W7	スギ
井戸枠(SE01)	W8	ヒノキ
井戸枠(SE01)	W18	スギ
井戸枠(SE01)	W19	スギ

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

4. 考察

奈良時代後半と考えられる井戸(SE01)を構成する井戸枠は、スギを中心にヒノキが混じる組成が確認された。スギとヒノキは、木理が直通で割裂性が高く、加工は容易である。スギとヒノキを比較すると、ヒノキの方がより木目が均質で耐水性も高い。加工性や耐水性から井戸枠材に利用されたことが推定さ

れる。

兵庫県内では、地域が離れているが、摂津地域の上沢遺跡で多数の井戸枠材について樹種同定が行われており、ヒノキやスギが比較的多い結果が得られている(神戸市教育委員会,2002)。播磨地域では、奈良時代の井戸枠材に関する調査事例が無いが、柱材などの建築部材ではヒノキやコウヤマキが利用されており、スギの利用はほとんど見られない(伊東,1998;神戸市教育委員会,2002)。今回の結果は、奈良時代の本地域におけるスギ材の利用状況を考える上で重要な資料である。

II.土器の胎土分析

1.試料

試料は、奈良時代後半とされる遺物包含層から出土した土器器片20点である。器種の内訳は、杯が10点、(No.1～10)、椀が1点(No.11)、甕と甌が2点ずつ(No.12、13とNo.14、15)、製塙土器が5点(No.16～20)である。各試料の実測No.などは一覧表にして表10に示す。

2.分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細繭までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるため、同一の地質分布範囲内

表10 胎土分析試料一覧および胎土分類

No.	種別	器種	実測 No.	ネーミング No.	備考	胎土分類									
						鉱物・岩石組成					粒径組成				
						C1	C2	F1	F2	K1	K2	L	M	c	m
1	土器器	杯	107												
2	土器器	杯	136												
3	土器器	杯	440												
4	土器器	杯	351												
5	土器器	杯	116	435											
6	土器器	杯	155	32											
7	土器器	杯		442											
8	土器器	杯		201											
9	土器器	杯	233	480											
10	土器器	杯	116	435											
11	土器器	椀	232												
12	土器器	甕	353	漆付着			■								
13	土器器	甌	169												
14	土器器	甌	421												
15	土器器	甌	361												
16	土器器	製塙土器	289												
17	土器器	製塙土器	410				■								
18	土器器	製塙土器	432				■								
19	土器器	製塙土器	432					■							
20	土器器	製塙土器	432						■						

鉱物・岩石組成の各分類内容は本文を参照されたい。

砂全體の粒径組成においてピークを構成する粒径: c:粗粒砂 m:中粒砂 f:細粒砂 vf:極細粒砂 cs:

粗粒シルト ●: 第二のピーク

碎屑物の割合 I:15%未満 II:15%以上

にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細繩～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3.結果

観察結果を表10、図1～3に示す。鉱物片と岩石片の種類構成をみると、斜長石の鉱物片が多い組成、火山ガラスが多い組成、凝灰岩の岩石片が多い組成、花崗岩類の岩石片が多い組成、さらにも流紋岩・デイサイトの岩石片が多い組成などが認められる。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からK類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類により細分をしている。今回の結果も、その基準に従って分類してみると以下のようになる。

No.1、No.2、No.5は斜長石の鉱物片と火山ガラスの多いこと、角閃石の鉱物片を少量または微量含み、さらに多結晶石英以外の岩石片をほとんど含まないことが特徴である。これまでの分類でも、斜長石の多い組成や火山ガラスの多い組成は認められているが、同時に含まれる岩石片の種類構成が分類の基準となっていた。しかし、No.1、No.2、No.5の3点は、岩石片をほとんど含まないことから、これまでの分類には当てはまらない。したがって、これら3点は新たな分類であるL類とする。

岩石片の種類構成と量比に着目すれば、No.3、4、6～11、13～15の各試料は共通して、チャートや頁岩などの堆積岩類と凝灰岩および流紋岩・デイサイトを少量ずつ含んでいる。このような特徴を有する胎土は、これまでの分析例におけるK類に相当する。さらにK類については、火山ガラスを多く含む組成を特にK2類とし、そうでないものをK1類とした。今回の試料でも、火山ガラスの多い組成が認められており、K2類に分類される試料は、No.3、6、9、11、13～15であり、それ以外のNo.4、7、8、10はK1類に分類される。

No.12とNo.18は、ともに岩石片の種類構成では花崗岩類を主体とする組成となる。このような組成は、これまでの分類のC類に相当する。C類については、供伴する鉱物片のうち、角閃石の多いものをC1類とし、黒雲母の多いものをC2類としている。今回の試料では、No.12は黒雲母を比較的多く含むことからC2類に分類される。No.18は酸化角閃石の多いことが特徴であるが、酸化角閃石は、角閃石が800℃程度の高温により酸化して生成される鉱物である。したがって土器の焼成により生じた可能性があり、すなわち焼成前の素地土の状態では角閃石を多く含む組成であったことが推定される。このことから、No.18はC1類に分類することができる。

No.16とNo.17は、凝灰岩を主体とする組成であることから、これまでの分類のF類に相当する。F類は、これまでのところ、F1類からF5類まで細分されているが、No.16とNo.17の組成は、凝灰岩が突出して多いことが特徴であるF1類に分類される。なお、F類の凝灰岩は結晶質であることも重要な特徴で

表11 薄片観察結果(1)

No.	砂粒区分	砂 粒 の 种 類 構 成												その他の		合計					
		鉱 物 片						岩 石 片						その他の							
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	綠簾石	白雲母	黑雲母	シリコン	チヤート	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶岩石	花崗岩類	泥質片岩	脈石英	変質岩	珪化岩	植物片
1	細粒																				0
	極粗粒砂																				0
	粗粒砂																				0
	中粒砂	2																1	2		5
	細粒砂	7	3														1			4	15
	極細粒砂	1	2																		3
	粗粒シルト	4	5																		9
	中粒シルト		1																		1
	基質																				335
	孔隙																				3
2	細粒																				0
	極粗粒砂																				0
	粗粒砂																				0
	中粒砂	2	4	1																	7
	細粒砂	2	11	2																3	19
	極細粒砂	4	3	2																3	12
	粗粒シルト	5	1	8															1	5	22
	中粒シルト	3	1																		4
	基質																				507
	孔隙																				15
3	細粒																				0
	極粗粒砂																				0
	粗粒砂																				0
	中粒砂	5																1	1		12
	細粒砂	6	1																	8	18
	極細粒砂	9	1																	7	18
	粗粒シルト	5																	3	2	12
	中粒シルト	2																			2
	基質																				322
	孔隙																				16
4	細粒																				0
	極粗粒砂																				0
	粗粒砂	1																			1
	中粒砂	1	1	1																	6
	細粒砂	4	2	3														1	1		13
	極細粒砂	4	1	2																	9
	粗粒シルト	11	2	7																	21
	中粒シルト	5	1																		6
	基質																				424
	孔隙																				6
5	細粒																				0
	極粗粒砂																				0
	粗粒砂	1																			0
	中粒砂	2	3																1		6
	細粒砂	4	9	2															1	5	23
	極細粒砂	8	5	1															2		17
	粗粒シルト	7	6																	1	14
	中粒シルト	5	4																		9
	基質																				487
	孔隙																				13

表11 薄片観察結果(2)

No.	砂粒区分	砂 粒 の 种 類 構 成												その他の 植物珪酸体	合計					
		鉱 物 片	岩 石 片																	
石英	カリ長石	斜長石	角閃石	綠簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	チヤート	砂岩	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶岩石	花崗岩類	泥質片岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス
6	細粒																			0
	極粗粒砂	2											1	1						4
	粗粒砂	1										1	1	4					1	9
	中粒砂																		4	4
	細粒砂	3											1						20	24
	極細粒砂	2		2															30	34
	粗粒シルト	5	1									1						10	1	18
	中粒シルト	1																		1
	基質																			401
	孔隙																			25
7	細粒																			0
	極粗粒砂	1																		1
	粗粒砂	1	1																	4
	中粒砂			1																5
	細粒砂	1																		1
	極細粒砂	3	1									1	1							6
	粗粒シルト	7	3																1	11
	中粒シルト	2																		2
	基質																			221
	孔隙																			7
8	細粒																			0
	極粗粒砂																			0
	粗粒砂	2																		0
	中粒砂	3	3	1														1	1	3
	細粒砂	9	3	2																18
	極細粒砂	12	3																	15
	粗粒シルト	12	5	2		1												3	23	
	中粒シルト	4	1																	5
	基質																			509
	孔隙																			11
9	細粒																			0
	極粗粒砂																			0
	粗粒砂	1																1	1	8
	中粒砂		1															1	1	6
	細粒砂	1	1	1														7	12	
	極細粒砂		1	1														9	11	
	粗粒シルト																	9	8	17
	中粒シルト																			0
	基質																			285
	孔隙																			8
10	細粒																			0
	極粗粒砂																			0
	粗粒砂	1																1	1	1
	中粒砂	1	4															2		9
	細粒砂	4	5															2		14
	極細粒砂	4	4															2		11
	粗粒シルト	9	5															1	2	17
	中粒シルト	1																		1
	基質																			445
	孔隙																			9

表 11 薄片観察結果(3)

No.	砂粒区分	砂 粒 の 种 類 構 成												合計
		鉱 物 片	岩 石 片	その他の 植物珪酸体										
	石英													0
	カリ長石													0
	斜長石													2
	角閃石													1
	酸化角閃石													12
	綠簾石													18
	白雲母													5
	黒雲母													11
	ジルコン													4
	不透明鉱物													8
	チヤート													2
	砂岩													2
	凝灰岩													1
	流紋岩													1
	安山岩													2
	多結晶石英													5
	花崗岩類													18
	ホルンフェルス													12
	泥質片岩													1
	脈石英													1
	変質岩													12
	珪化岩													26
	火山ガラス													11
11	細礫													280
	板粗粒砂													9
	粗粒砂	1												3
	中粒砂	5	1											9
	細粒砂	8	1											18
	板細粒砂	5	1											11
	粗粒シルト	5												8
	中粒シルト	1												2
	基質													280
	孔隙													9
12	細礫													36
	板粗粒砂	7	2											9
	粗粒砂	22	12											33
	中粒砂	17	11											27
	細粒砂	17	2											8
	板細粒砂	5	1	1										5
	粗粒シルト	2	3											0
	中粒シルト													352
	基質													10
	孔隙													0
13	細礫													8
	板粗粒砂	1												4
	粗粒砂													3
	中粒砂													0
	細粒砂	1	1											16
	板細粒砂			1	1	1								24
	粗粒砂													10
	中粒シルト													0
	基質													317
	孔隙													15
14	細礫													0
	板粗粒砂	3												19
	粗粒砂	2												13
	中粒砂	3	3											21
	細粒砂	4	1	1										37
	板細粒砂	3	5	1										52
	粗粒シルト	6												26
	中粒シルト													0
	基質													625
	孔隙													30
15	細礫													0
	板粗粒砂	1												1
	粗粒砂	1	1											5
	中粒砂	7												14
	細粒砂	8	2	1										41
	板細粒砂	11			1	1								26
	粗粒シルト	1												12
	中粒シルト													1
	基質													322
	孔隙													21

表 11 薄片觀察結果 (4)

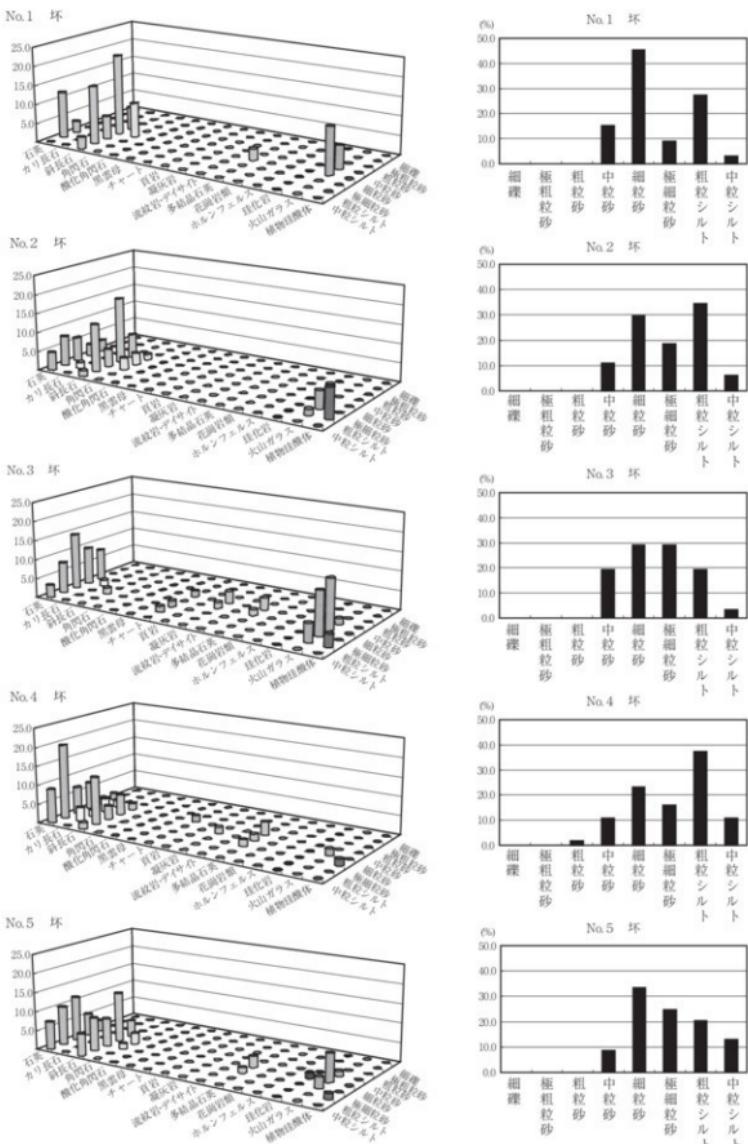


図20 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

図21 胎土中の砂の粒径組成(1)

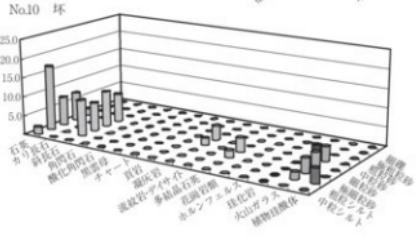
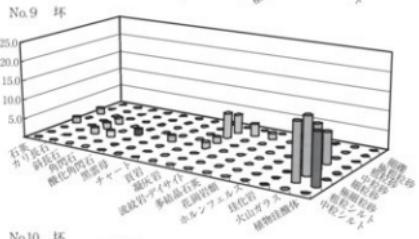
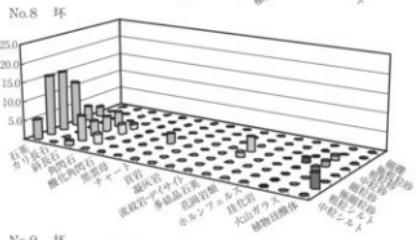
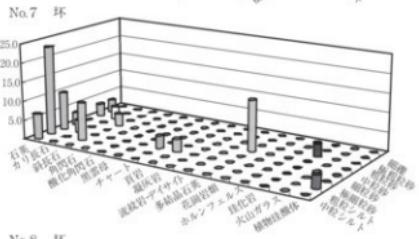
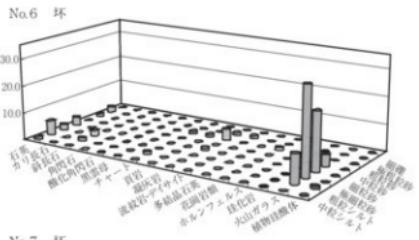


図20 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

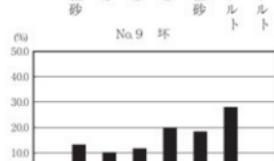
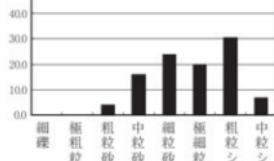
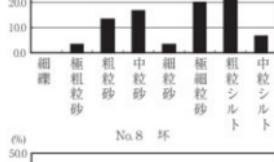
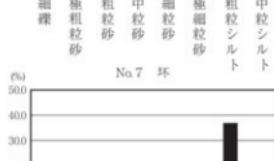
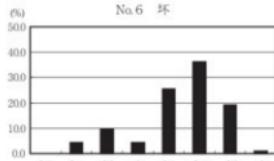


図21 胎土中の砂の粒径組成(2)

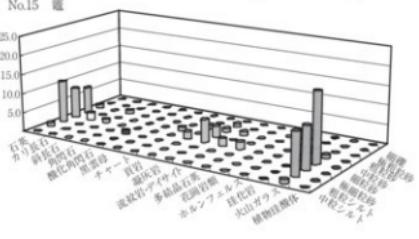
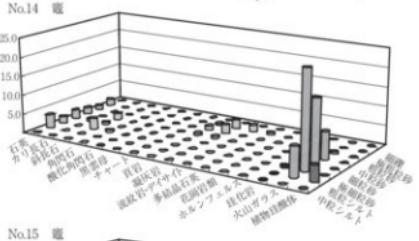
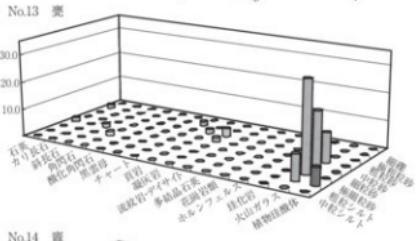
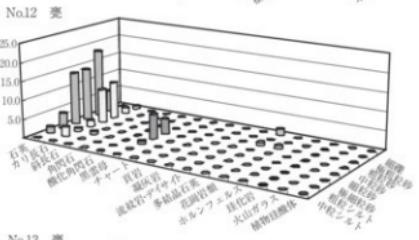
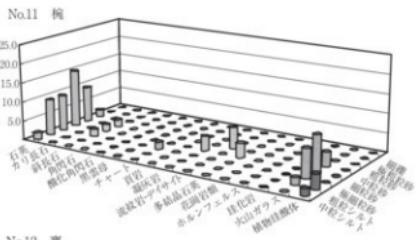


図20 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)

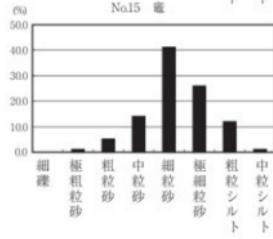
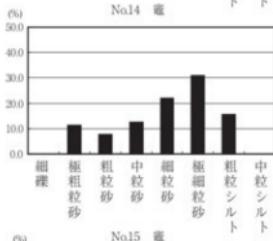
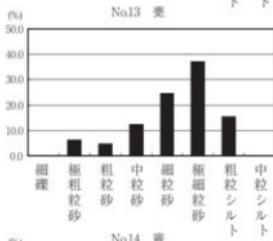
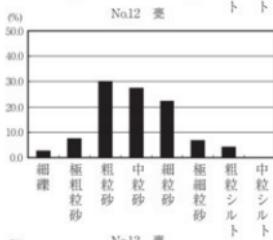
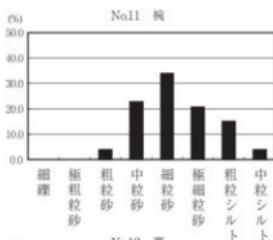


図21 胎土中の砂の粒径組成(3)

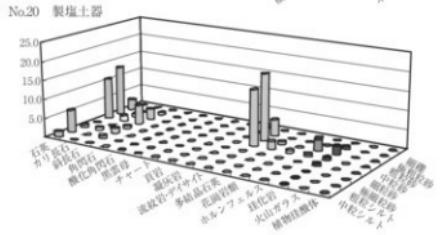
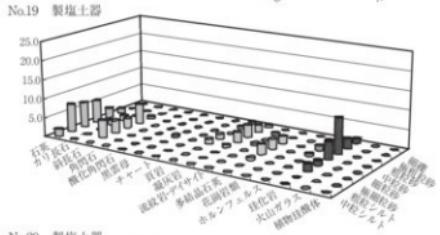
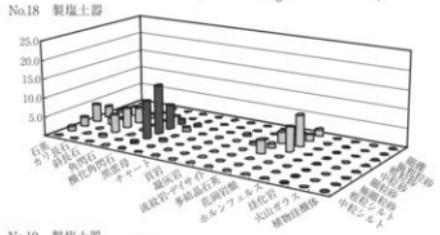
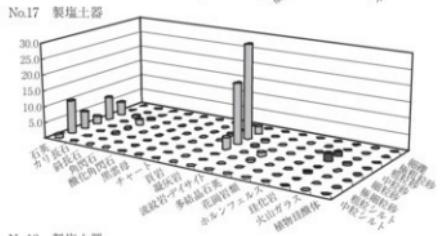
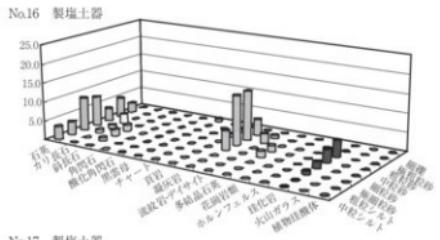


図20 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(4)

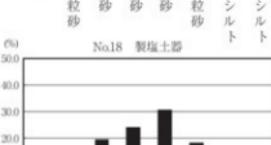
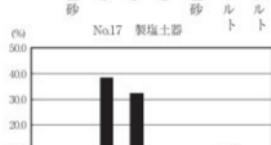
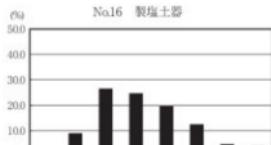


図21 胎土中の砂の粒径組成(4)

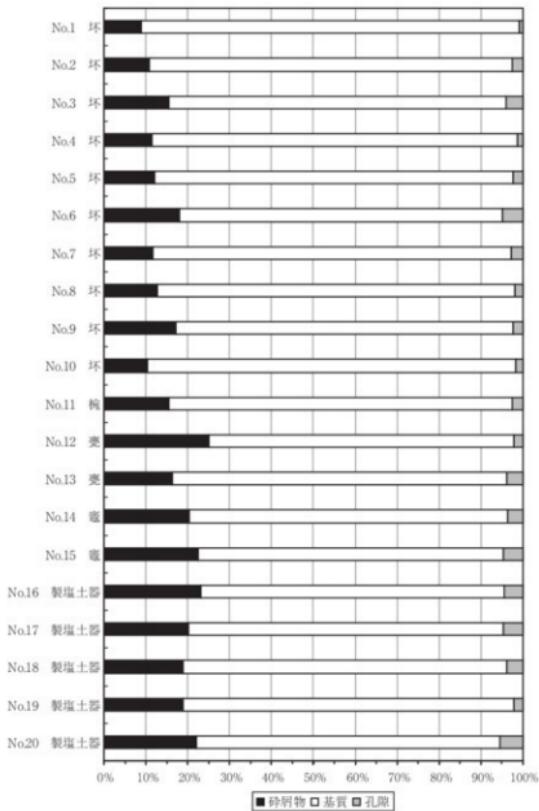


図22 碎屑物・基質・孔隙の割合

ある。

No.19は、岩石片の量比から見れば珪化岩が多いが、この珪化岩は、鏡下の観察から、凝灰岩または流紋岩が起源と見られる。このことから、No.19の分類としては、比較的凝灰岩が多く、堆積岩類やホルンフェルス、変質岩、珪化岩など他種類の岩石片が併存するF2類に分類することができる。

No.20は、流紋岩が突出して多い岩石片組成を示す。このような組成は、これまでの分析例では認められなかったことから、新たにM類とする。

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料によりことなり、2つのピークを持つ双峰性のヒストグラムを示す試料も認められる。ここでは、モードを示す粒径とモードに次いで多い粒径の2つの粒径の組み合わせを示すことで各試料の特徴とすると、以下のような状況が認められる。

極細粒砂と粗粒シルト：No.7

細粒砂と粗粒シルト：No.1、2、4、8～10

細粒砂と極細粒砂：No.3、5、6、13～15

中粒砂と細粒砂：No.11、18

粗粒砂と中粒砂：No.12、16、17、19、20

碎屑物・基質・孔隙の割合では、碎屑物の割合が15%未満と15%以上で2分することができる。前者をI類とし、後者をII類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

I類：No.1、2、4、5、7、8、10

II類：No.3、6、9、11～20

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および碎屑物の量比における各分類結果は、一覧にして表10に併記する。

4.考察

(1)胎土の由来

土器胎土の材料となった砂や粘土の採取地を推定する場合、その指標の一つとなるのは、胎土中に含まれている鉱物片や岩石片の種類構成である。今回の試料の場合、細分類も含めれば、9種類もの組成を認めることができた。その9種類の組成の中でも、F1類やK2類、L類およびM類のように、ある一種類の岩石片または火山ガラスの量比が突出して多いという組成が、今回の試料では多く認められた。

これらのうち、K2類とL類については、火山ガラスが突出して多いことが特徴であった。この火山ガラスは、薄手平板状のいわゆるバブル型の外形を呈するものが大部分を占め、鏡下の観察では、変質や粘土化などはほとんど認められない新鮮なものであった。このことから、K2類とL類の火山ガラスは、第四紀の更新世あるいは完新世に降下堆積した未固結のテフラ層に由来する可能性が高い。豆腐町遺跡の位置する沖積低地は、市川のような比較的流量の大きい河川とその他の複数の小河川による氾濫堆積により形成された地形であるから、このような場では、火山ガラスからなるような細粒のテフラ層は降下堆積後に擾乱や削剥を受けることにより地層中に保存され難い。一方、播磨平野西部におけるテフラの産状の例として、田中(2001)が、御津町の碇岩付近の丘陵の谷間に形成された緩斜面を構成する堆積物中から、姶良Tn火山灰(AT:町田・新井,1976)や三瓶山起源のテフラ層を確認している。この緩斜面は麓肩面とよばれており、氷期に生産された岩屑が移動、堆積したと考えられている。さらに、その後の温暖期の降水量の増加による麓肩面の浸食と再堆積により、麓肩面下流側に肩状地も形成されることが述べられている。そして、この肩状地堆積物中には鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井,1978)が確認されている。山元ほか(2000)による地質図(以下地質記載名は、特に断らない場合は本文献から引用)では、姫路市および周辺域に広がる丘陵や山地の縁辺にも山麓緩斜面堆積物としてその分布が記載されていることから、今回の試料におけるK2類とL類の火山ガラスは、豆腐町遺跡の位置する姫路市中心市街地を取り囲む丘陵の縁辺に形成された山麓緩斜面堆積物に由来すると考えられる。

なお、K2類とL類では、火山ガラスの特徴は共通するものの、それ以外の鉱物片および岩石片の産状は比較的明瞭に異なっている。L類については、多量に含まれる斜長石は、新鮮であることや自形のものが多いためから火山ガラスと同様に第四紀のテフラに由来すると考えられる。したがって、土器胎土中の砂分のほとんどはテフラ層から由来するものとなり、L類は、山麓緩斜面堆積物で認められたテ

フラ層自体が土器材料の一つとして選択されたことを示唆する胎土であると言える。K2類については、供伴する岩石片が、堆積岩のチャートと結晶質の凝灰岩および流紋岩という姫路市背後の地質に由来する種類構成であることから、テフラ層を含む山麓緩斜面堆積物と沖積低地堆積物とが混在している可能性がある。現時点では、L類もK2類も、その土の採取地を具体的に推定することはできないが、それぞれある特定の場所から採取された土が使用されていたという状況が推定される。

F1類とM類については、特定の種類の岩石片が突出して多く含まれるという状況から、様々な種類の岩石片が適度に混在する沖積低地の堆積物に由来するというよりは、特定の岩石片の種類からなる岩体がすぐ背後にいる場所の堆積物に由来すると考えることができる。F1類の凝灰岩もM類の流紋岩とともに結晶質であることといずれの胎土も珪化岩を伴うことも考慮すると、上述した丘陵縁辺に堆積する山麓緩斜面堆積物は、この場合にもその由来する堆積物として考えることができる。すなわち、姫路市北西部の大津茂川上流両岸域に分布する丘陵や姫路市南部の夢前川下流両岸域に分布する丘陵は、白亜紀の伊勢層と呼ばれる流紋岩火山砕凝灰岩および凝灰角砾岩からなる地質により構成されており、これらの丘陵縁辺の山麓緩斜面堆積物はF1類の由来する堆積物と考えられる。一方、太子町や揖保川町、龍野市には白亜紀・古第三紀の流紋岩からなる丘陵が分布しており、これらの丘陵縁辺の山麓緩斜面堆積物は、M類の由来する堆積物と考えられる。

F2類とK1類のうち、K1類は岩石片では突出して多いものはないが、鉱物片では石英が比較的多いことが特徴の一つとして指摘できる。石英は、物理的および化学的に風化に対する抵抗力が高いから、河川下流域の堆積物などでは、上流から流されてきた碎屑物の中で最終的に残る割合が高いから、含有量も相対的に高い割合となる。K1類の岩石片には、チャートや頁岩などの堆積岩類とともに結晶質の凝灰岩や珪化岩および火山ガラスなども認められることから、姫路市南部の諸河川下流域に広がる沖積低地の堆積物に由来する可能性がある。F2類は、鉱物片も含めて突出して多い碎屑物は認められないが、頁岩、凝灰岩、流紋岩・ディサイト、珪化岩という主な岩石の種類に加えてホルンフェルスや泥質片岩といった変成岩まで含まれている。このような多種類の構成から、やはり姫路市および周辺域の沖積低地堆積物に由来すると考えられる。

C1類については、鉱物片組成をみると、カリ長石よりも斜長石が多く、また黒雲母より角閃石が多いことから、花崗岩類とした岩石片は、角閃石黒雲母花崗閃緑岩などの岩質が推定される。また、微量ながらも凝灰岩および流紋岩・ディサイトを伴うことも併せて考えれば、C1類の由来する土は、姫路市南部に位置する桜山岩体と呼ばれる斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなる丘陵縁辺の山麓緩斜面堆積物である可能性があると考えられる。

C2類については、C1類と同様に花崗岩類を主体とする岩石片組成はあるが、C1類とは異なり、カリ長石が斜長石よりも遙かに多く、他に伴われる鉱物は黒雲母であることから、花崗岩類とした岩石片は、黒雲母花崗岩であることが推定される。黒雲母花崗岩の分布は、姫路市周辺域の地質では認められず、最も近い分布域としては、東方では六甲山地、西方では岡山県の瀬戸内沿岸域をあげができる(日本の地質「近畿地方」編集委員会編,1987;日本の地質「中国地方」編集委員会編,1987)。現時点では、いずれの地域かを特定することはできないが、いずれにしても姫路市からは数10km以上も離れた地域の土に由来する可能性が高いと言える。

(2)胎土と器種との対応関係

上述した鉱物・岩石組成の由来とさらに粒径組成および碎屑物の割合を器種に対応させてみると、今

回の試料では、高い相関性を見出すことができた。以下に器種ごとに述べる。

1) 坯

鉱物・岩石組成では、K1類が4点、K2類とL類がそれぞれ3点ずつという結果であった。この結果から、豆腐町遺跡出土の奈良時代後半の坯においては、すべて姫路市周辺の土が材料とされてはいるが、3種類の異なる材質が併存しており、それぞれの材質は、背後にそれぞれ異なる地質を有する採取地の土に由来していることが考えられる。この材質の違いは、生産者の違いを示している可能性もあると考えられる。

粒径組成では、モードの粒径と2番目に多い粒径の組み合わせ(以下粒径組み合わせとする)をみると、細粒砂-粗粒シルトが最も多く、6点であり、細粒砂-極細粒砂が3点、極細粒砂-粗粒シルトが1点となる。後述する他の器種に比べると、全体的に細粒の傾向にあることが看取される。また、碎屑物の割合も、後述する他の器種が全てII類であるのに対して、I類の試料が7点あり、II類の試料は3点しかない。以上のことから、坯の胎土の特徴としては、採取地の異なる土が3種類以上あるが、含有される砂分は、椀や甕などに比べるとほんと通して細粒かつ少量であると言える。

2) 梗

今回の試料では1点のみである。土の採取地は、姫路市周辺であり、坯の一部の土(K2類)と同様の場所であるが、砂分の粒径組み合わせは中粒砂-細粒砂であり、碎屑物の割合はII類である。すなわち、胎土の特徴として、坯に比べると砂分はやや粗粒であり、また砂分量も多いことが指摘される。

3) 甕

2点の試料のうち、漆付着とされたNo.12は、鉱物・岩石組成がC2類であることから、最も近い場合でも六甲山地周辺がある岡山県瀬戸内沿岸域からの搬入品の可能性があると考えられる。一方のNo.13は、姫路市周辺の土であり、坯や椀にも認められたK2類の土を胎土とする。両試料は、粒径組み合わせも異なり、No.12は粗粒砂-中粒砂、No.13は細粒砂-極細粒砂であり、No.12の粗粒傾向が明瞭である。なお、碎屑物の量比は両試料とともにII類である。

4) 瓢

2点の試料はともに、姫路市周辺の土であり、坯や椀にも認められたK2類の土を胎土とする。粒径組み合わせは2点ともに細粒砂-極細粒砂であり、坯の少數の試料やK2類の甕と同様である。また、碎屑物の量比は両試料とともにII類である。

5) 製塙土器

鉱物・岩石組成では、5点の試料のうち、F1類が2点であり、残り3点はC1類、F2類、M類に分かれる。この結果は、少なくとも4種類の異なる土が併存している状況を示しており、前述したように、いずれの胎土も姫路市および周辺で採取された土ではあるが、土の採取場所はそれぞれ異なった地質を背後に有する場所である。このことから、材質の違いは、製作者の違いを示唆している可能性があると考えられる。すなわち、4者以上の製作による製塙土器が併存していた状況があったと考えられる。さらに、製塙土器の胎土の鉱物・岩石組成は、上述した坯や椀、甕および甌とともに異なることから、それらの器種の製作とも異なっていた可能性がある。

粒径組成では、粒径組み合わせが4点は粗粒砂-中粒砂であり、1点は中粒砂-細粒砂である。粗粒砂-中粒砂という粒径組み合わせは、搬入品とされた甌に認められたのみであることから、粒径組成において他の器種との材質の違い(粗粒傾向にある)は明瞭である。なお、碎屑物の量比は全試料とともにII類である。

あり、これについては坏の一部や甕、甕と同様である。

当社では、これまでにも豆腐町遺跡から出土した奈良時代の製塙土器について10点の分析事例がある。既報告では、今回のような分類を行わずに、凝灰岩または流紋岩を含む胎土の試料を播磨平野産、それらを含まずに花崗岩類を多く含む胎土の試料を播磨平野以外の近畿地方あるいは中国地方の花崗岩分布域に由来すると考えた。前者の試料は3点、後者の試料は7点であり、その時点では播磨平野外のものが多いとされた。これらの試料について、今回の分析と同様の分類基準を当てはめてみると、F1類とF2類が1点ずつ、C1類が3点、C2類が2点であり、残る3点は、花崗岩類を多く含むC類であるが、角閃石も黒雲母も極めて微量しか含まないために、C1類ともC2類とも分類されない。これら3点について、これまでの分類基準を適用すれば、微量ながらも花崗岩類以外の岩石片を多種類含むC5類に2点が分類され、花崗岩類以外の岩石片が認められないC6類に1点が分類された。そのうち、C5類ではカリ長石よりも斜長石の多い傾向が認められ、極めて微量ながらも角閃石または酸化角閃石および凝灰岩が認められたことから、その由来は、今回のC1類と同様に桜山岩体周縁である可能性がある。したがって、前回の10点をここで見直してみると、10点のうち、C2類の2点とC6類の1点の合計3点が、今回のC2類の甕の試料と同様の搬入品であると考えられ、他の分類の7点は姫路市周辺域産ということになる。すなわち、前回および今回の分析を通じては、豆腐町遺跡出土の奈良時代の製塙土器については、同時期の坏や甕など土の採取地や砂の粒径は異なるものの、姫路市周辺域で作られたものの方が多く、少数の播磨平野以外の地域から搬入されたものが混入するという状況が考えられる。

引用文献

- 猪木幸男, 1981, 20万分の1地質図幅「姫路」, 地質調査所.
- 伊東隆夫, 1998, 八反田遺跡出土木材の樹種, 「兵庫県佐用町所在 八反田遺跡」, 兵庫県文化財調査報告第180号, 兵庫県教育委員会, 54-55.
- 神戸市教育委員会, 2002, 平成11年度神戸市埋蔵文化財年報, 416p.
- 町田 洋・新井房夫, 1976, 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-, 科学, 46, 339-347.
- 町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, 143-163.
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-, 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
- 日本の地質「中国地方」編集委員会, 1987, 日本の地質7「中国地方」, 共立出版, 290p.
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会, 1987, 日本の地質6「近畿地方」, 共立出版, 297p.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p.
[Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176p.
- 田中眞吾, 2001, 御津町とその周辺の自然, 御津町史編集専門部委員会編「御津町史第一巻, 御津町」, 276.
- 山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和, 2000, 龍野地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査所, 66p.

第2節 豆腐町遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

1. 測定対象試料

豆腐町遺跡は、兵庫県姫路市飯田に所在する。測定対象試料は、奈良時代後半の遺構面を覆う包含層から出土した木炭（No.1：IAAA-101168、No.2：IAAA-101169）2点である（表12）。

2. 測定の意義

材の絶対年代を明らかにする。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸・アルカリ・酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l (1M) の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表12に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

3MVタンドム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用し、¹³Cの計数数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C 濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表12）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表12に、補正していない値を参考値として表13に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も¹⁴Cによって補正する必要があるため、補正した値を表12に、補正していない値を参考値として表13に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表13に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6. 測定結果

包含層出土木炭の¹⁴C年代は、No.1が $1,560 \pm 30$ yrBP、No.2が $1,370 \pm 20$ yrBPである。历年較正年代は、 1σ でNo.1が5世紀中葉から6世紀前半頃、No.2が7世紀中葉頃の範囲となり、 2σ で見ると各々これらより若干広い範囲が示される。試料が出土した包含層に覆われる遺構面の時期よりも古い年代値となつた。

試料の炭素含有率は50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表12 試料一覧

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{14}\text{C}$ (%)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり	
					(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-101168	No.1	遺構：包含層	木炭	AAA	-26.57 \pm 0.62	1,560 \pm 30	82.30 \pm 0.28
IAAA-101169	No.2	遺構：包含層	木炭	AAA	-26.76 \pm 0.53	1,370 \pm 20	84.33 \pm 0.26

[#3756]

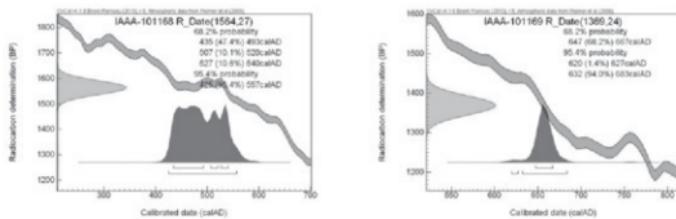
表13 历年較正年代

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		历年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-101168	$1,590 \pm 30$	82.03 ± 0.26	$1,564 \pm 27$	435calAD - 493calAD (47.4%) 507calAD - 520calAD (10.1%) 527calAD - 540calAD (10.6%)	425calAD - 557calAD (95.4%)
IAAA-101169	$1,400 \pm 20$	84.03 ± 0.24	$1,369 \pm 24$	647calAD - 667calAD (68.2%)	620calAD - 627calAD (1.4%) 632calAD - 683calAD (94.0%)

[参考値]

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon* 19(3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150



[参考] 図23 歴年較正年代グラフ

第VI章 おわりに

豆腐町遺跡は姫路駅構内に所在する遺跡である。6カ年にわたる発掘調査で多くの成果を挙げている。弥生時代から近代に至る複合遺跡である。弥生時代の溝などからは縄文土器も少數ながら出土している。弥生時代は各時代の遺構が僅かに検出されている。周辺には市野郷遺跡・北条遺跡・千代田遺跡など著名な遺跡が広がっている。船場川沿いにも多くの遺跡が存在するが、それらと比較すると小規模な集落ではあるが、広範囲に各時代にわたって遺構が認められる。古墳時代前中期の遺構は認められず、遺物もほとんど存在しない。遺構が確認されるのは古墳時代末頃から奈良時代にかけてで、豆腐町遺跡の盛行期である。平安時代から鎌倉・室町時代には小規模な集落だったようで、掘立柱建物・土坑・溝などが調査されている。室町時代後半から近世そして鉄道敷設される明治20年代までは耕作地であった。耕作痕が検出されている以外に農業作業場や倉庫と考えられる小規模建物も検出されている。近代の鉄道関連遺構は特徴的な遺構であり、豆腐町遺跡を代表する時代である。長期間にわたる複合遺跡であるが、奈良時代と近代が遺跡を代表する2つの画期である。

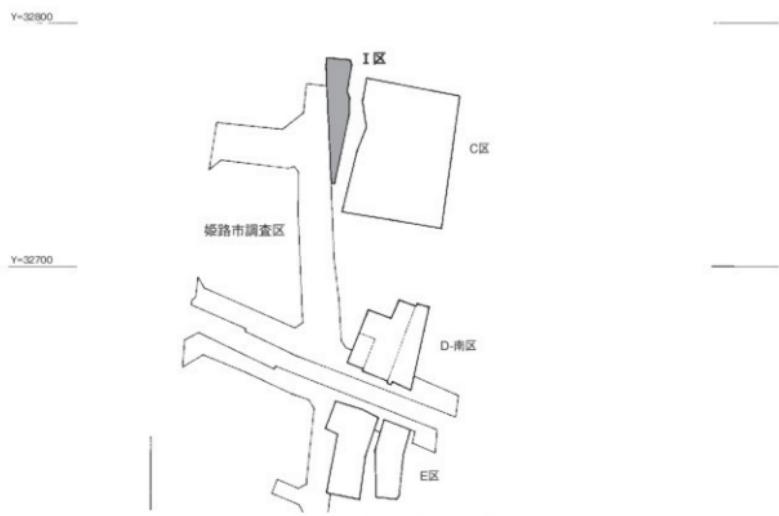
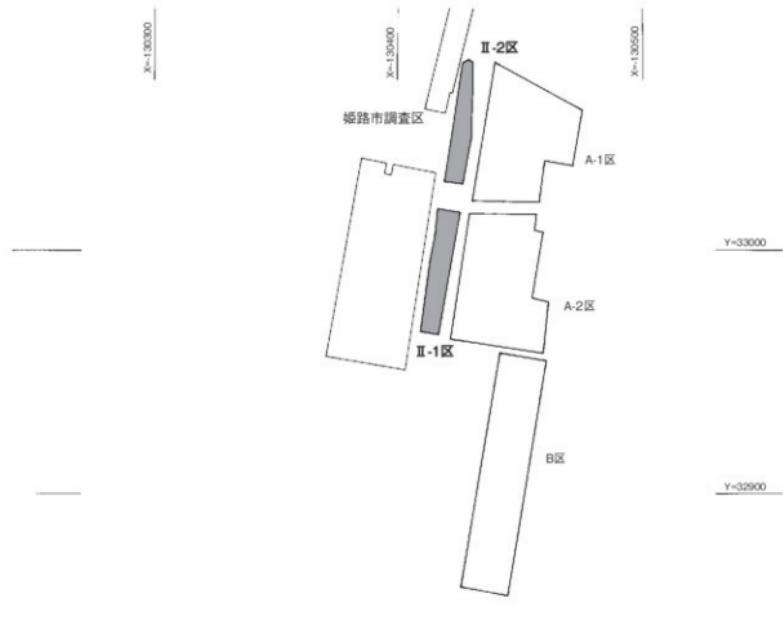
本報告の「豆腐町遺跡II」の調査は単年度で実施したもので、前回は山陽本線高架部分が対象であったのに対して、姫新線高架部分が対象であった。「豆腐町遺跡I」の北側隣接地である。調査は残暑厳しい8月末から調査をはじめ晩秋の気配が高まりはじめる11月中旬まで調査を行った。旧線路敷の下で山陽本線の下りホームに接した部分の調査であった。ホームなど解体作業と平行して行った。調査後半は兵庫団体が開催され、例年以上に昇降客が多くなったように思える。今まで通行していた高架通路や地下通路も閉鎖され、新（高架）駅から一元化されたことにより、さらに人が多い印象を受けた。I区の北側には未だ地上に位置する姫新線が走っていた。そこにはハバタン列車も走り、団体気分をさらに盛り上げていた。調査状況は西側の通路や駅北のビルなどからも見られ、興味深く線路越しやフェンス越しに見る姿も見られた。姫新線のホームから一生懸命見る姿や降りて近くまで来られる方もあった。工事区域内の調査で線路敷きであることから、一般的の立ち入りが困難で現地説明会を実施できなかつたことは仕方ないことはいえ、残念であった。その代わりとしての展示や報告会も実施できず、初代機関車転車台を保存できなかつたことを含めて心残りである。僅かにその後担当者の長濱が姫路市埋蔵文化財センターや兵庫県立考古博物館で講演したにとどまっている。報告書刊行後に資料が活用されることをさらに願うものである。

今回の調査は3地区合わせて1500m余りと小面積である。その割には成果が高かったと思われる。大筋では前回の結果を追認するものであるが、細かく見ると新たな事実もつかめた。

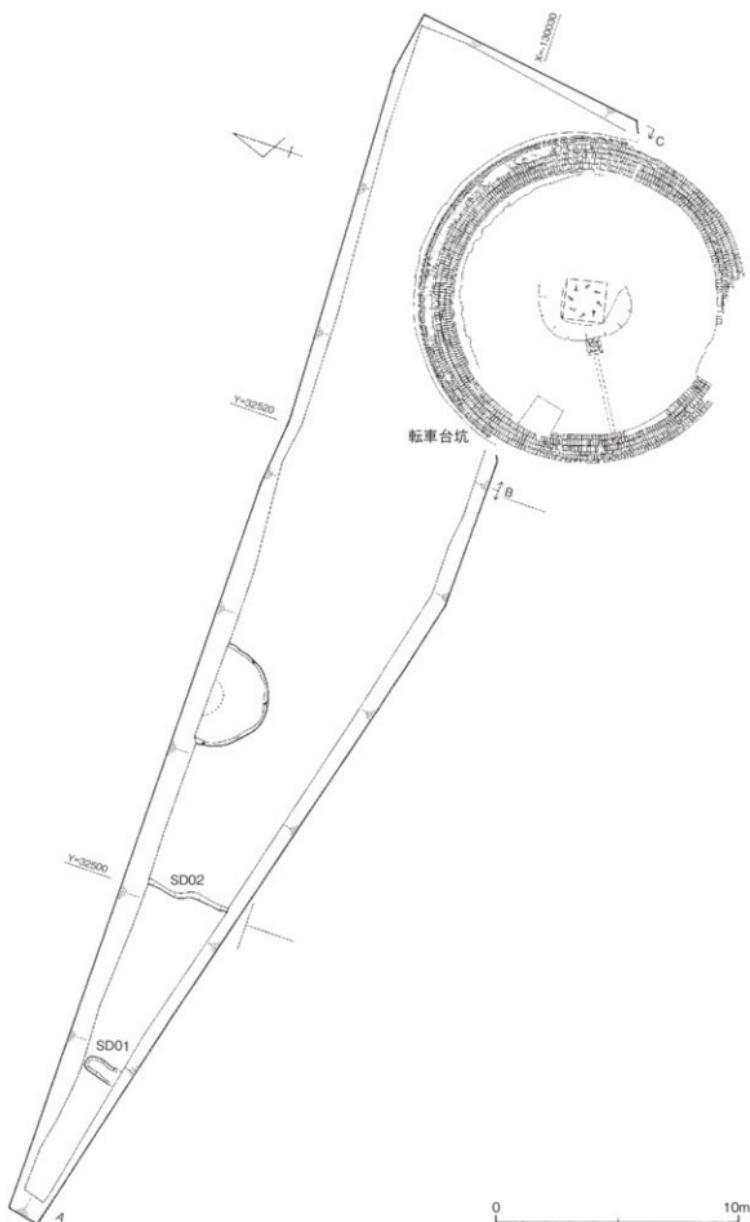
I区では初代転車台が検出されたことが大きい成果である。前回（豆腐町遺跡I）では2代転車台と扇形車庫が検出されている。兵庫県の近代遺跡でも鉄道遺産を代表する遺跡といえよう。過去のものと思っていた明治期の遺産が今回の調査や区画整理によって徐々に失われつつある。逆に現在まで生きている市川橋橋脚など現役のものもあることは新たな驚きであった。現状でも同じ煉瓦が使用されていたことは感動させられた。今回の調査では短期間しか使用されなかつた初代機関車転車台であった。明治20年代に構築され明治37年頃には撤去された短命の転車台であった。機関車の大型化に伴う2代転車台へのバトンタッチが行われたと考えられているが、当然初代の位置付けは重要である。今回、調査できたことは幸いであったと思われ、代表例となることを願うものである。

II区の大きな調査結果は、奈良時代の官衙遺構を調査したことである。国府関連遺構の可能性が高い遺跡もしくは飾磨郡衙の一部と考えられている。前回の調査成果に資料を追加したことになるが、今回の調査成果を加えれば、豆腐町遺跡の評価がさらに高まるものと思われる。検出した遺構は掘立柱建物・櫛・井戸・石敷遺構・土坑・落ち込み・ピットである。掘立柱建物・櫛の主軸方向は3種類あり、時期差があることはもちろん、地割り方向を変えていることが理解できる。SB01はじめ溝は正方位を探っているが、石敷遺構やそれに伴う櫛SA02は主軸を変えている。前回の調査では正方位を有するものはなく、今回の調査は時期差のある遺構を検出したことになる。掘立柱建物・櫛の切り合い関係から3時に分けられる。N4°Wに主軸を有するSB02から正方位を探るSB01・SA01になり、さらにN25°Eの主軸を有するSA02に変化している。前回の調査では主軸方向は3時期の前後に限られている。SB01は特殊な時期か方位を採用することになる。豆腐町遺跡の主流は正方位を持たない遺構で、石敷遺構などが主体となる盛期の遺構と言える。それを示すように特徴的な遺物は南北石敷遺構から多く出土している。墨書き土器や刻書き土器・漆付着土器・埴塙などが出土している。製塙土器は万遍なく出土している。厚手の丸形となるタイプで、布目が残るものも数点あるが大半はユビ成形のものである。出土遺物の質量から判断して官衙的性格を有していることは確実である。飾磨郡衙との関係を説かれているが播磨国府関連遺構でも構わないのではないかと思われる。工房を主とする雑所と考えられそうだ。

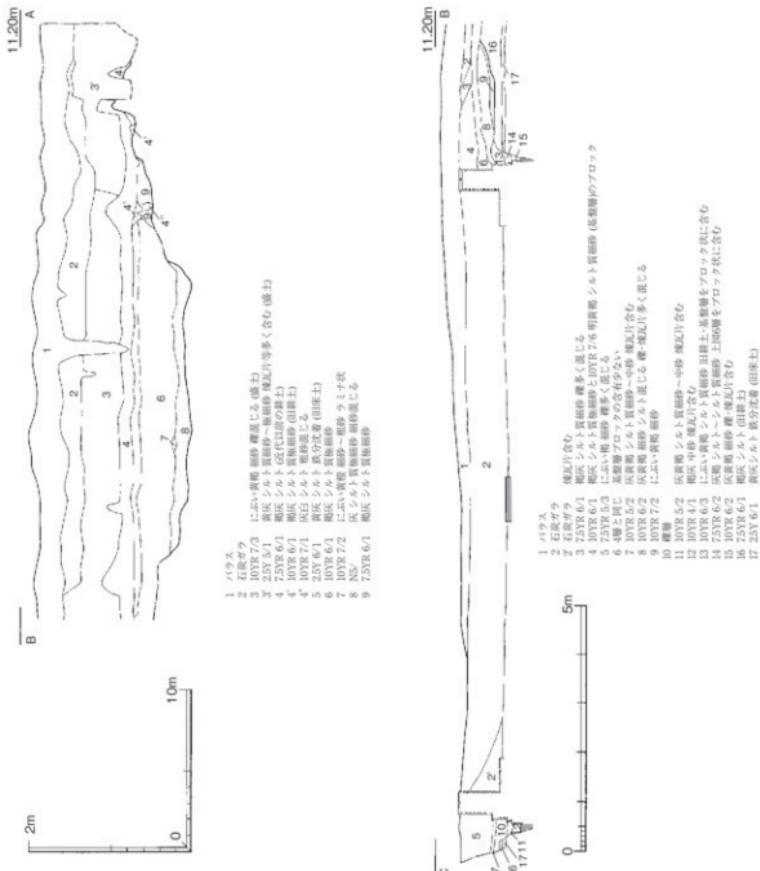
図 版



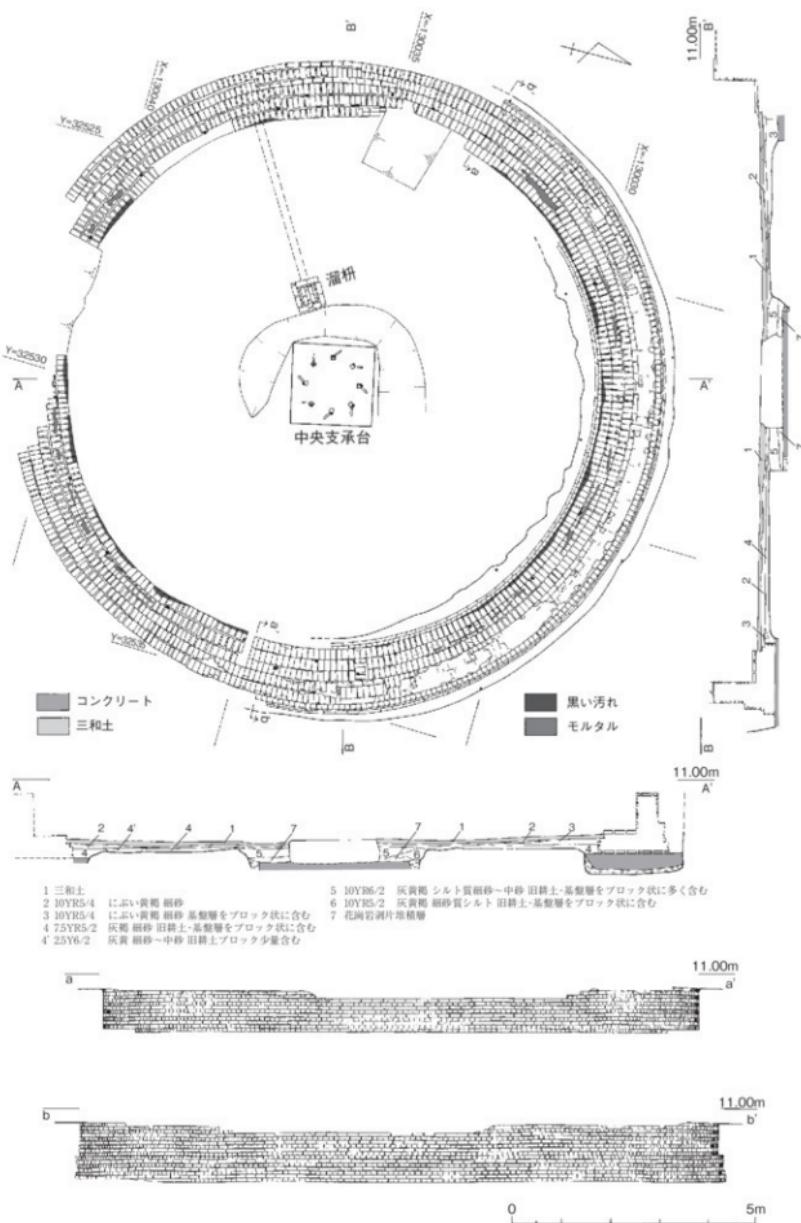
調査区配置図 (1 : 2000)

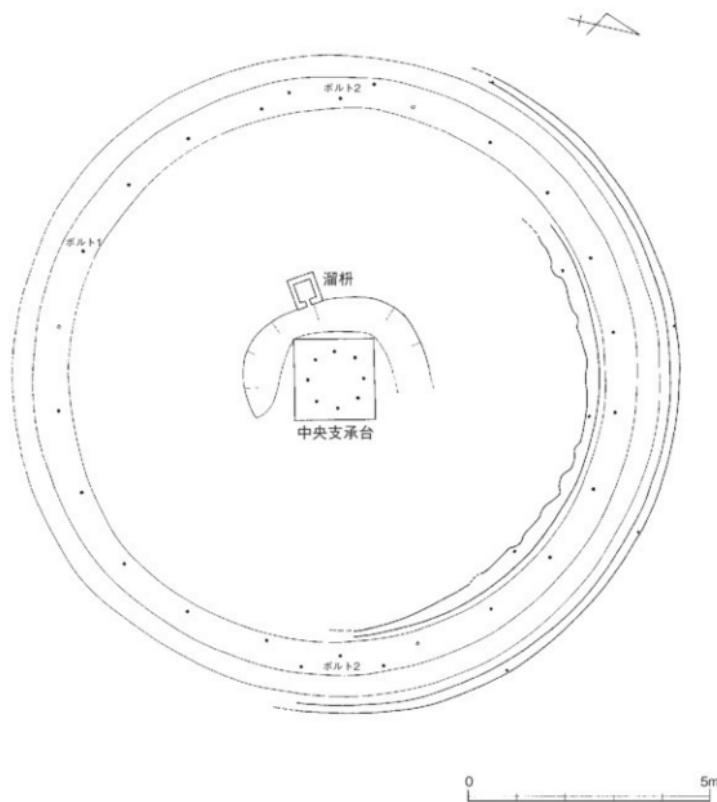


平面図

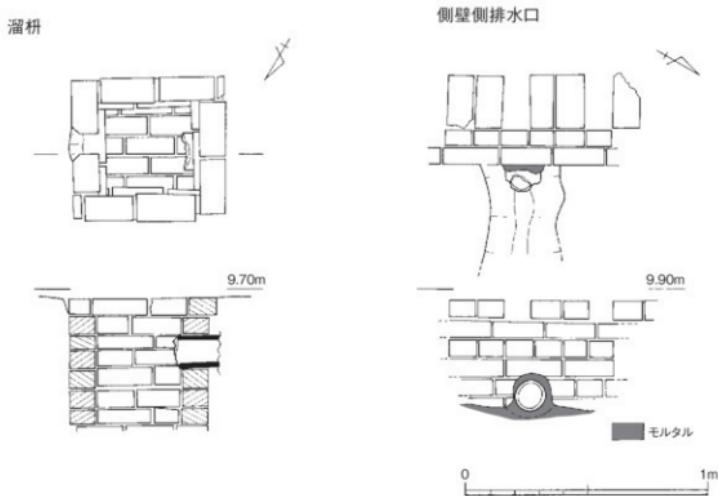
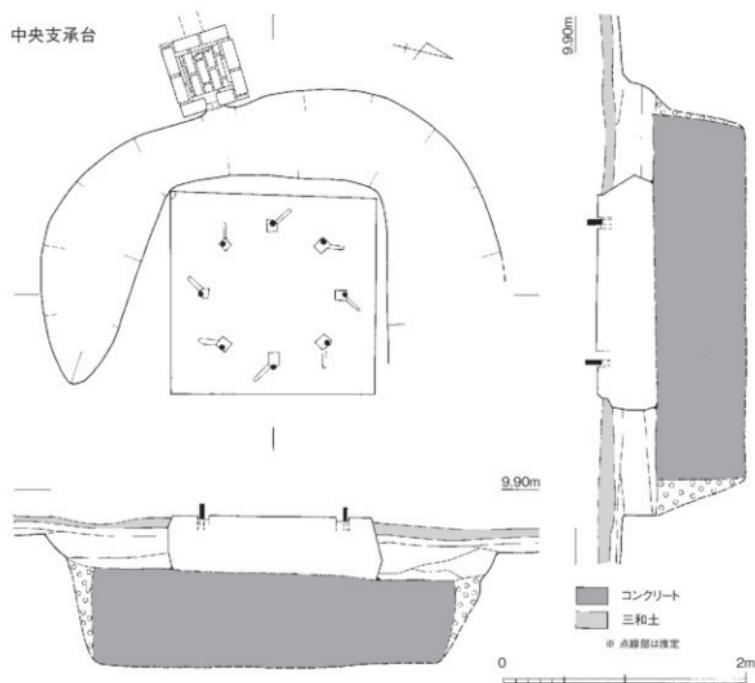


南壁断面図

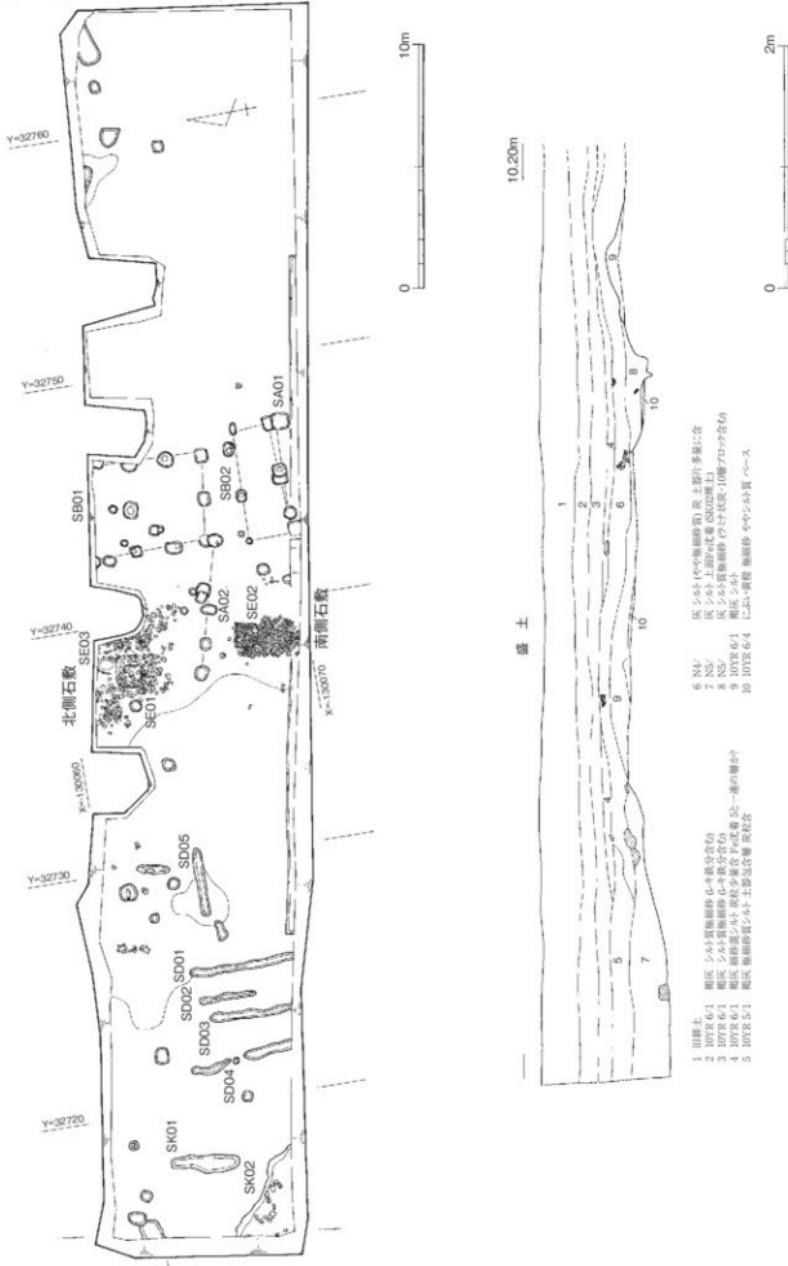




転車台模式図

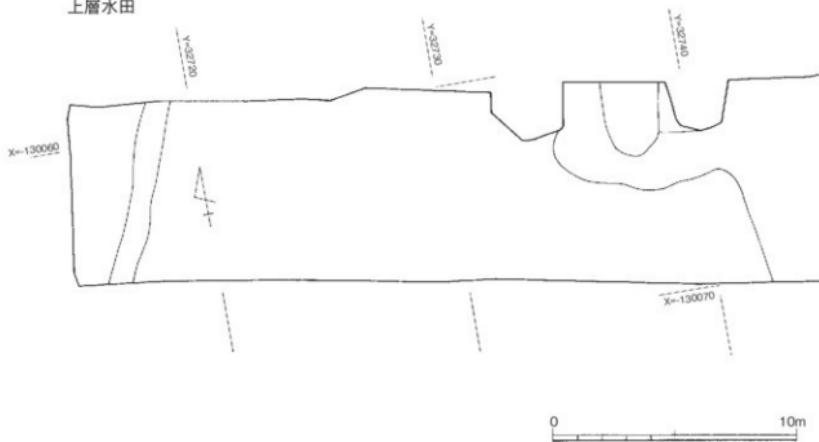


転車台坑中央支承台・集水枡実測図



平面図・西壁土層断面図

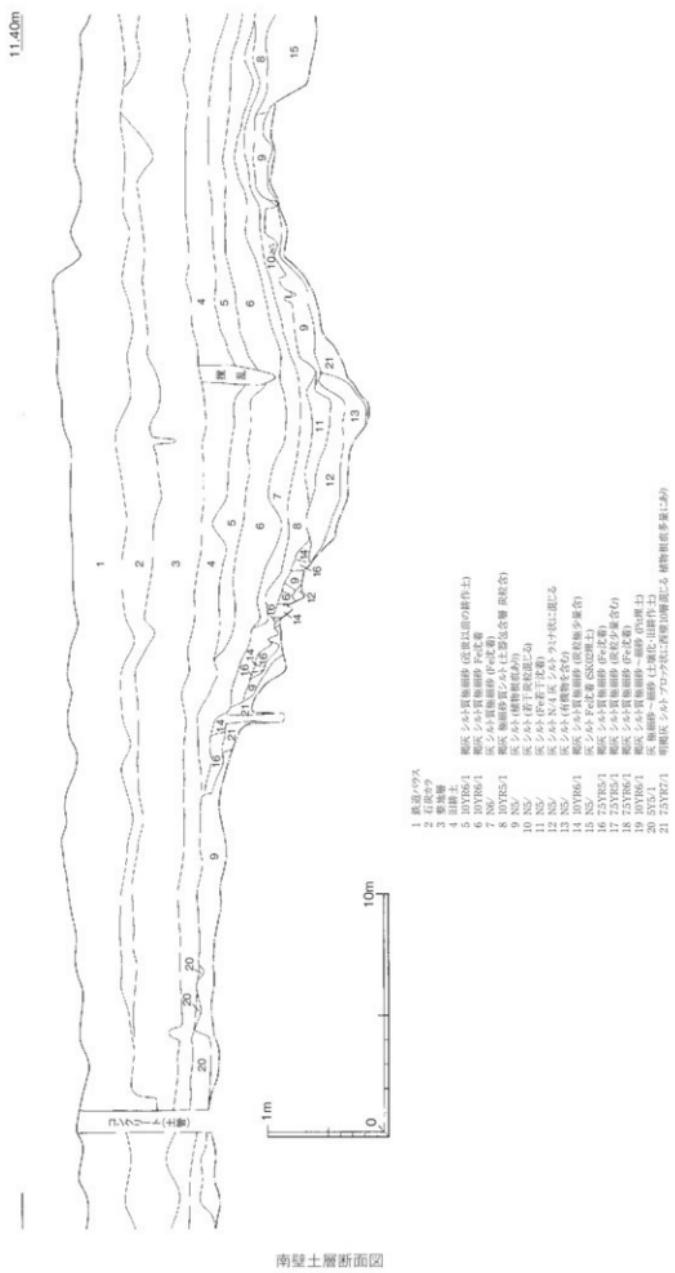
上層水田

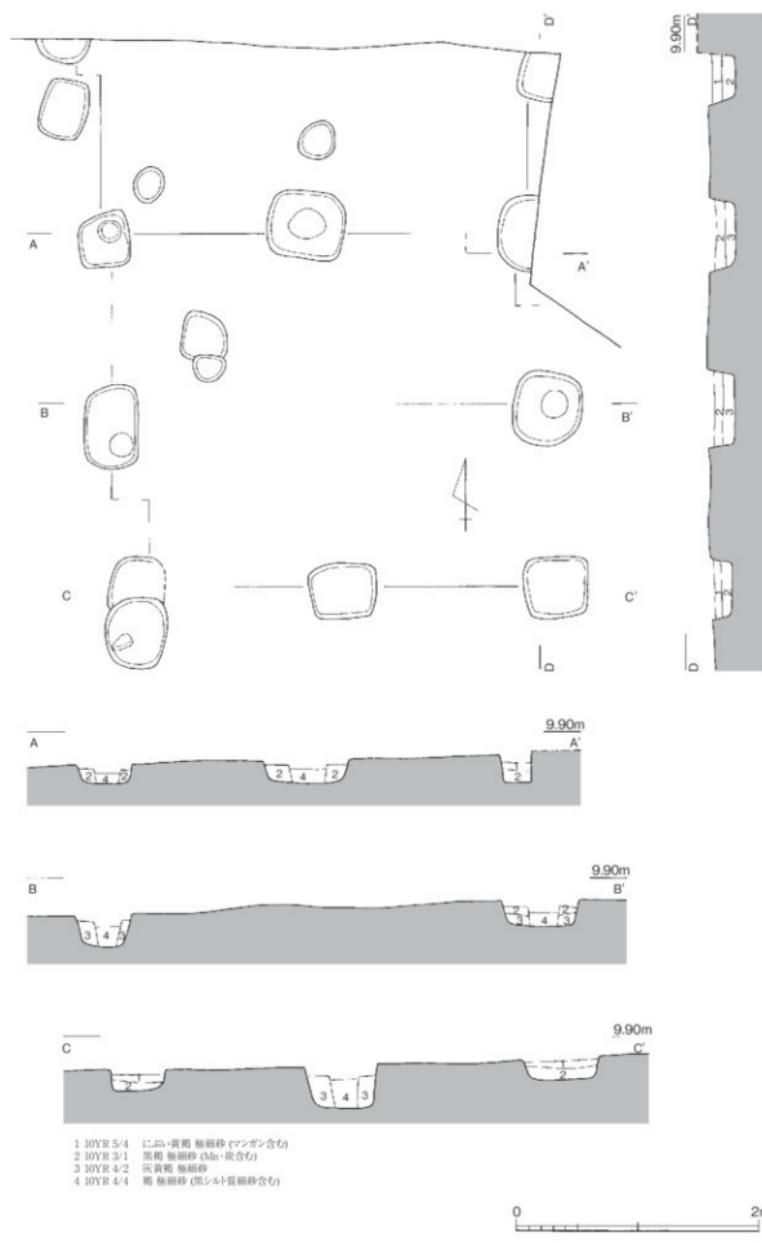


SB01

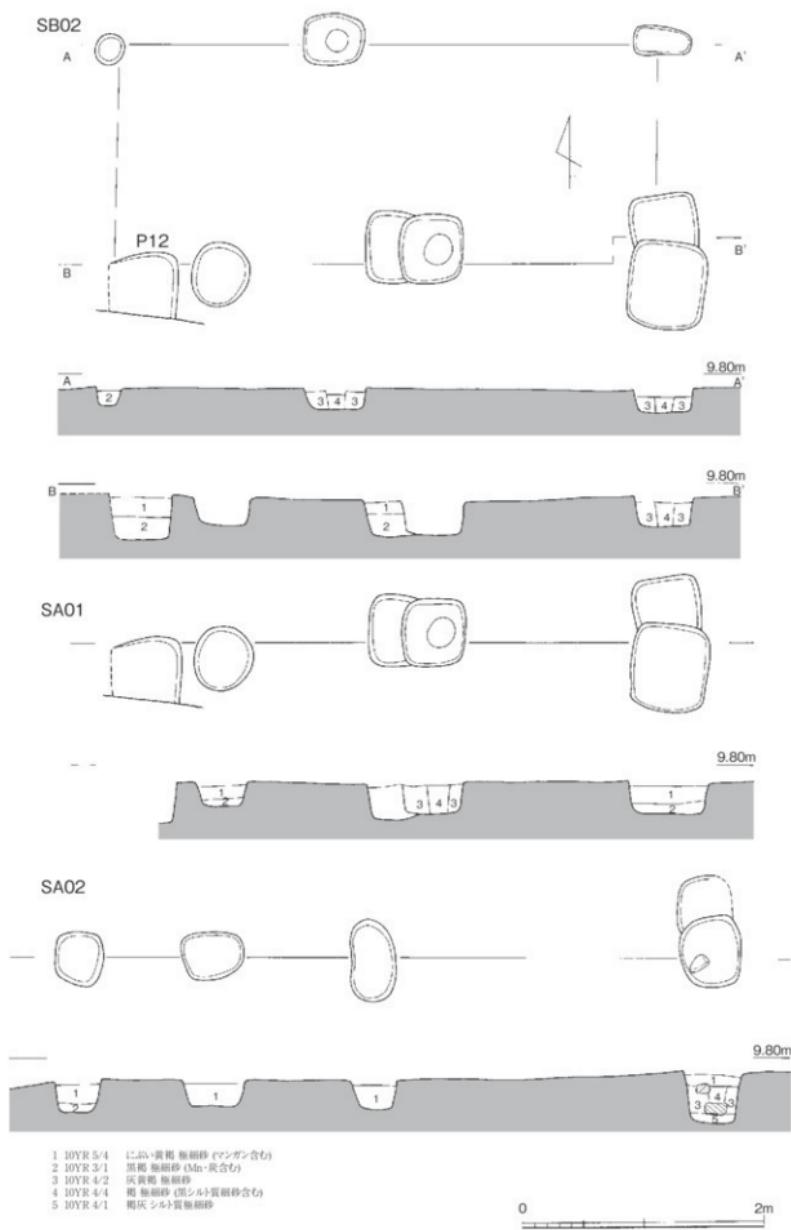


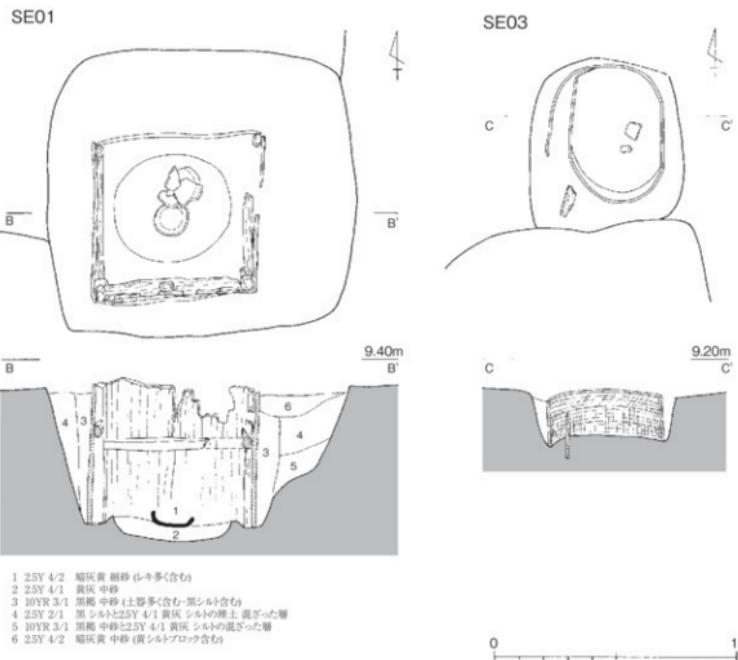
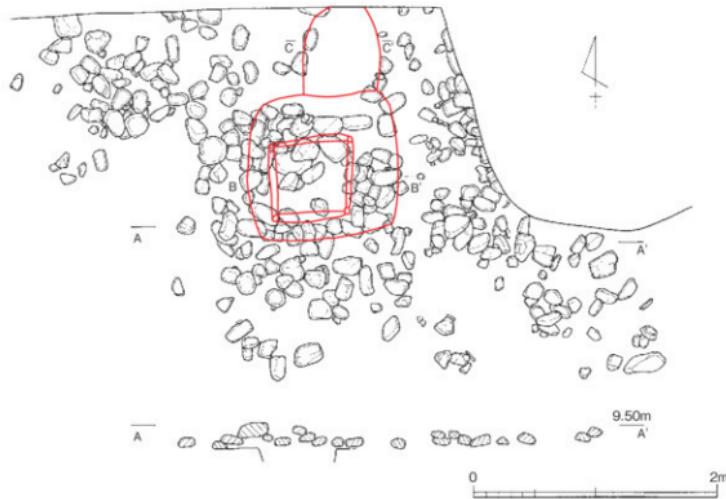
上層水田実測図・中央部平面図



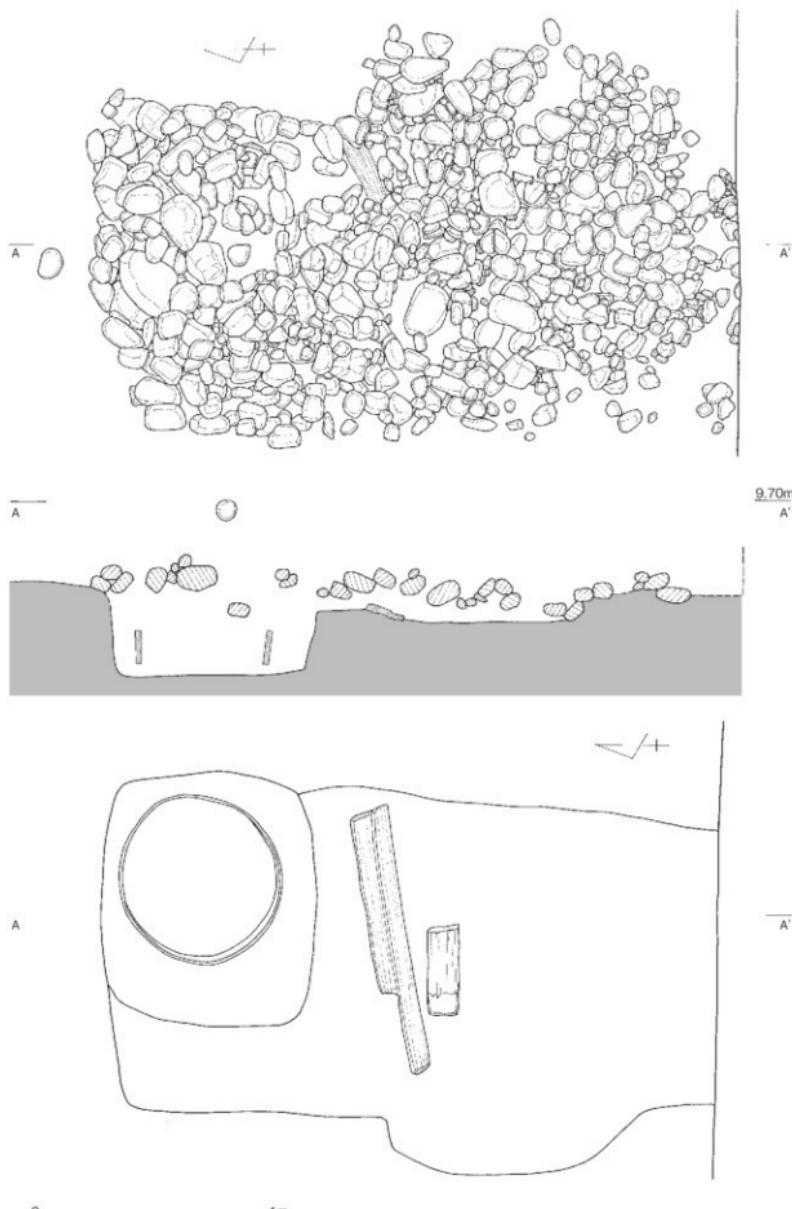


SB01 実測図





北側石敷・SE01・SE03 実測図



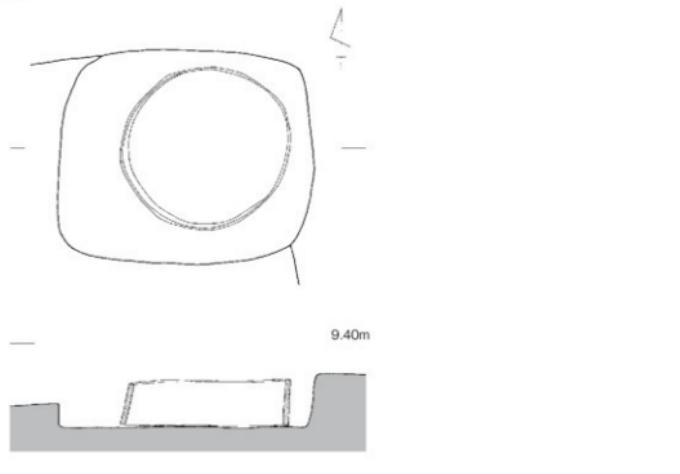
南側石敷・SE02 実測図



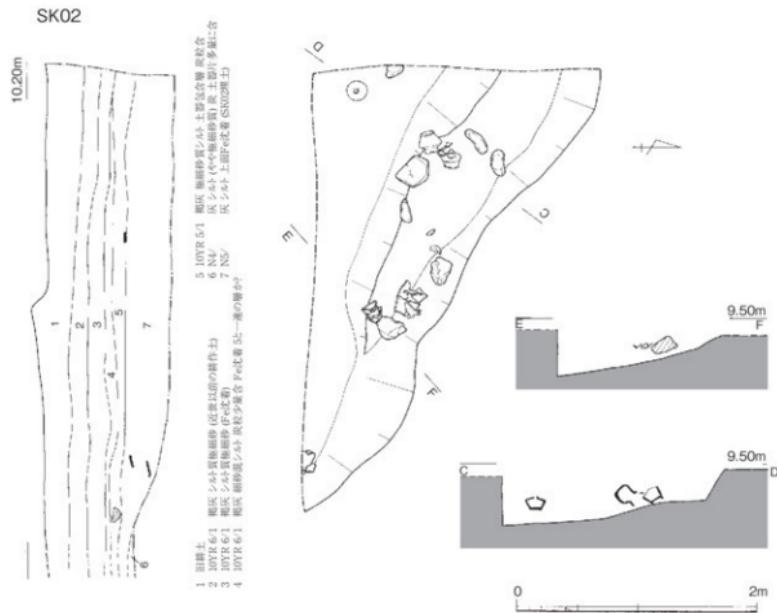
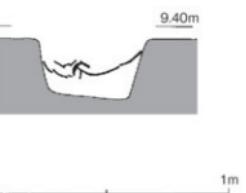
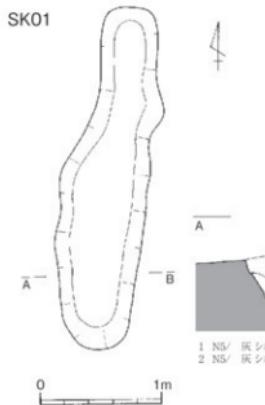
南壁



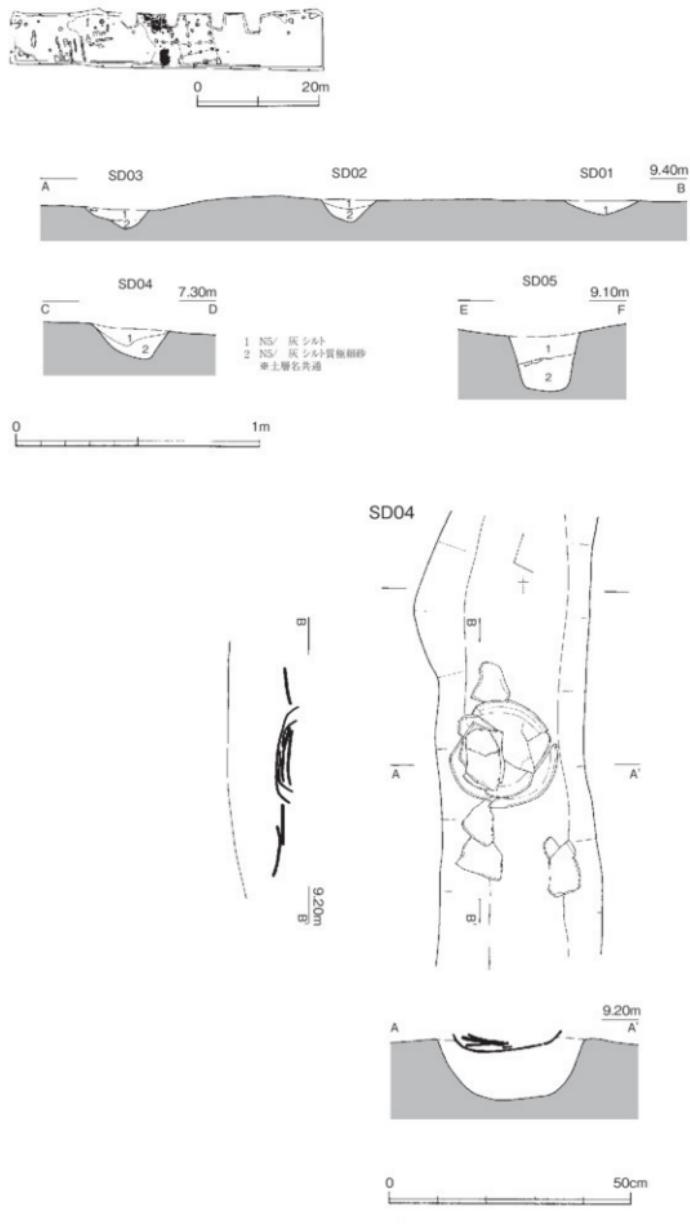
SE02



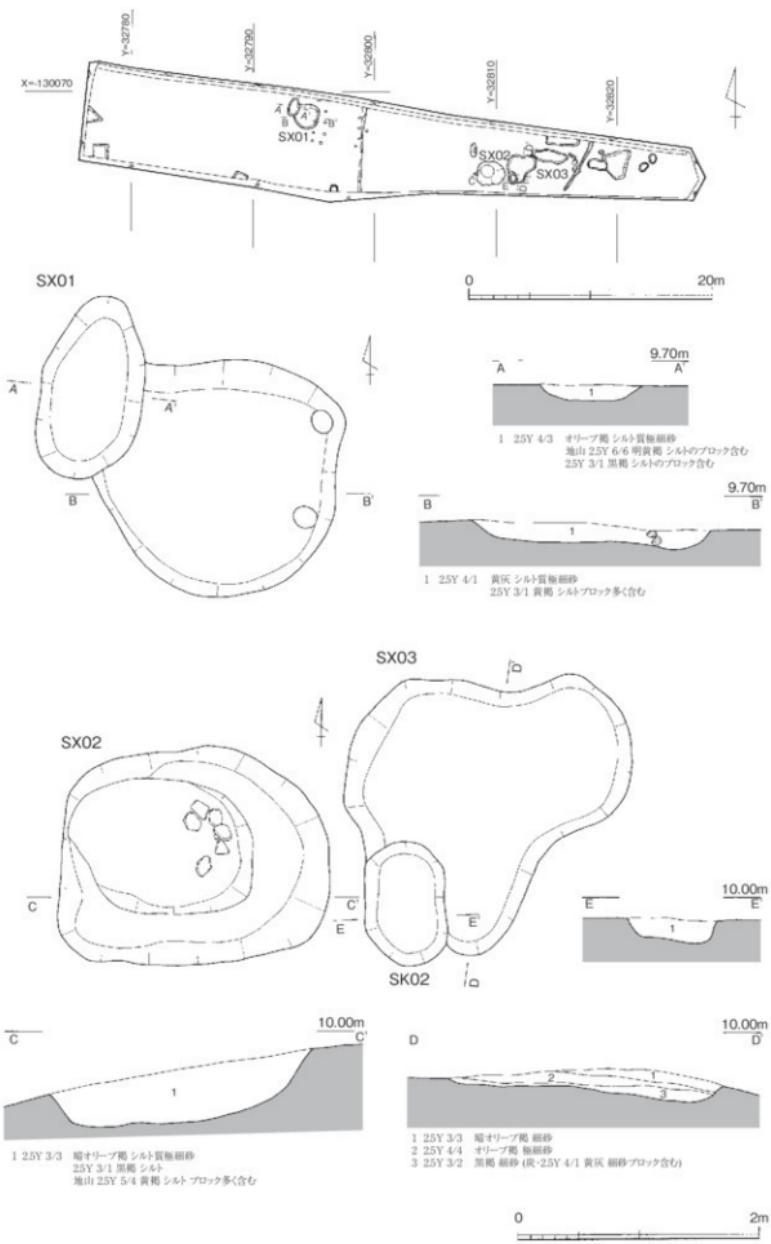
南側石敷南壁土層断面図・SE02 実測図



SK01 - SK02



SD01 ~ SD05 実測図



平面図・遺構実測図(1)





刻印1類



B1



B2



B3



B4



B5



B6



B7



B8



B9

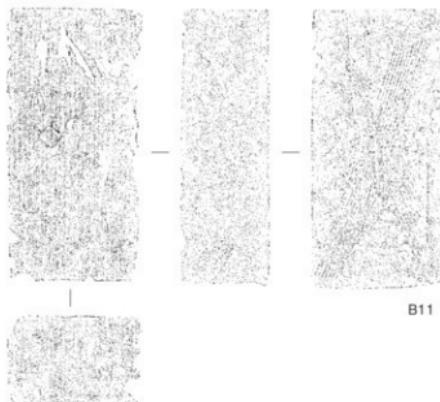


B10

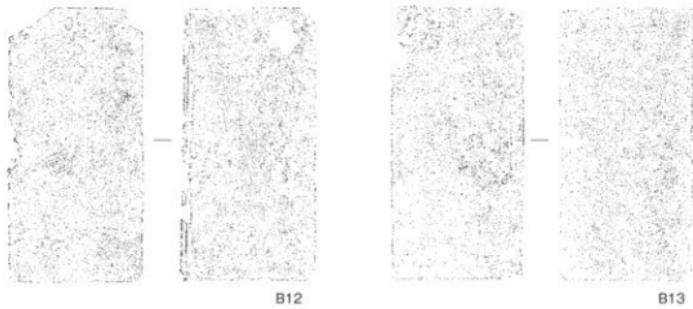


出土煉瓦(1)

刻印2類(1)

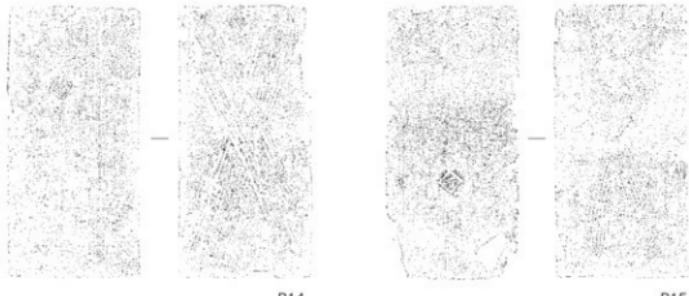


B11



B12

B13



B14

B15



出土煉瓦 (2)

刻印2類(2)



B16

櫛描1類

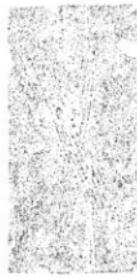


B17

櫛描1類



B18



B19



B20



B21

櫛描2類(1)



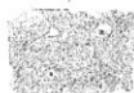
B22



B23

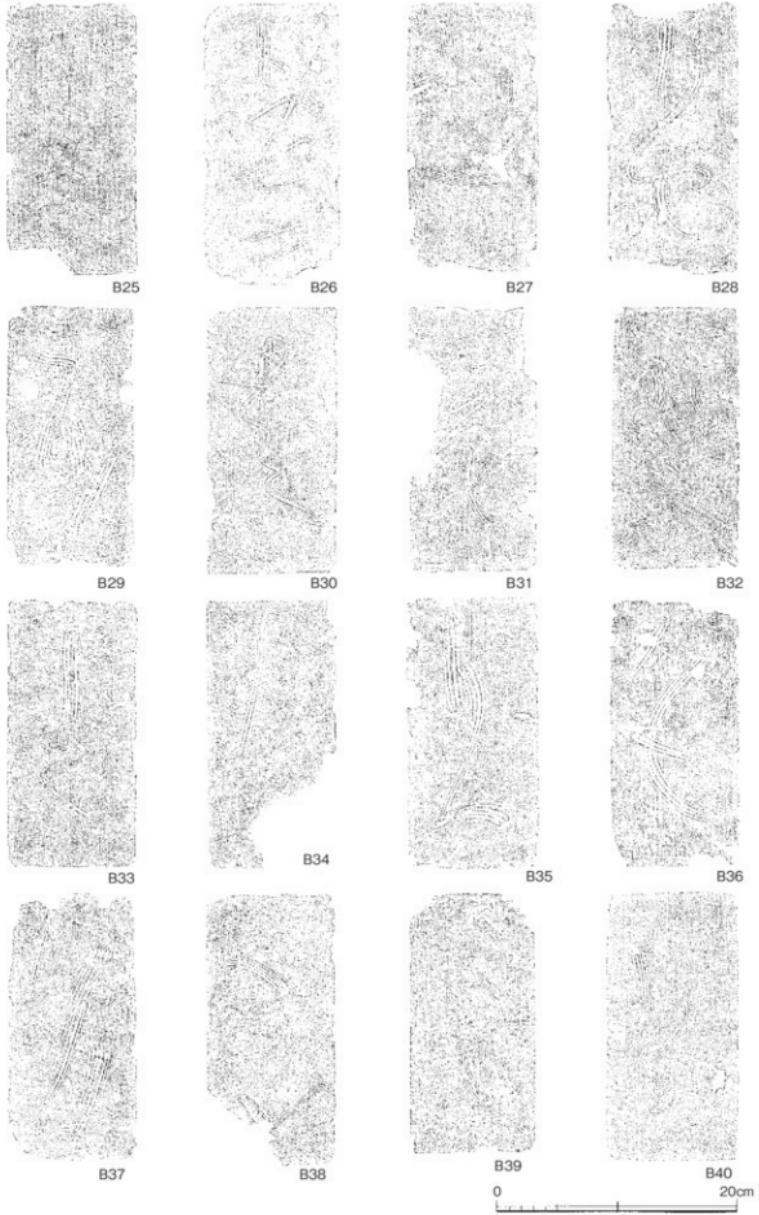


B24



出土煉瓦 (3)

櫛描2種(2)



出土煉瓦 (4)

刻印3類

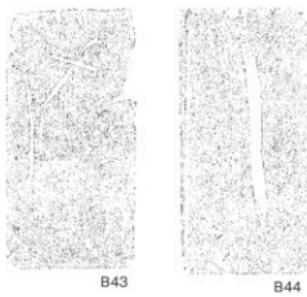


B41



B42

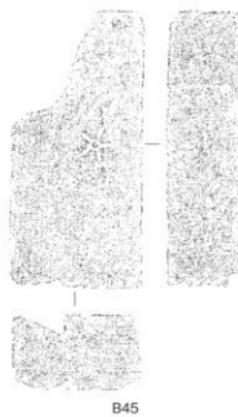
その他



B43

B44

調査区周辺採集煉瓦



B45



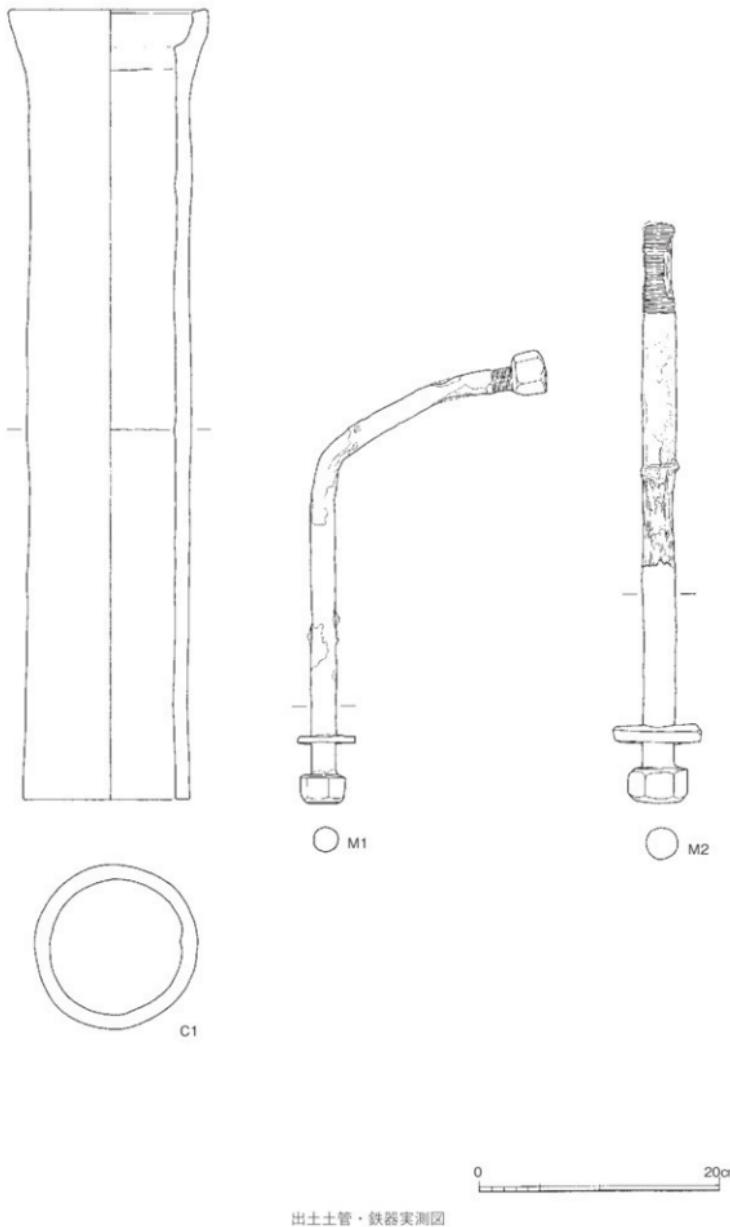
B47



B48

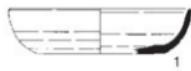


出土煉瓦 (5)

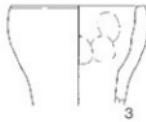


出土土管・鉄器実測図

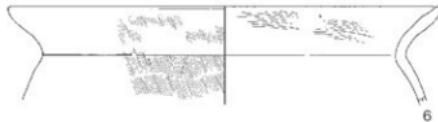
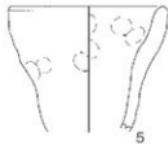
SA01



P41



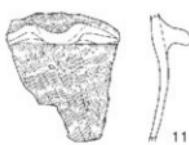
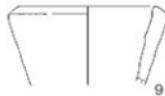
P42



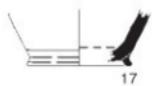
SD01



SD02



SD03

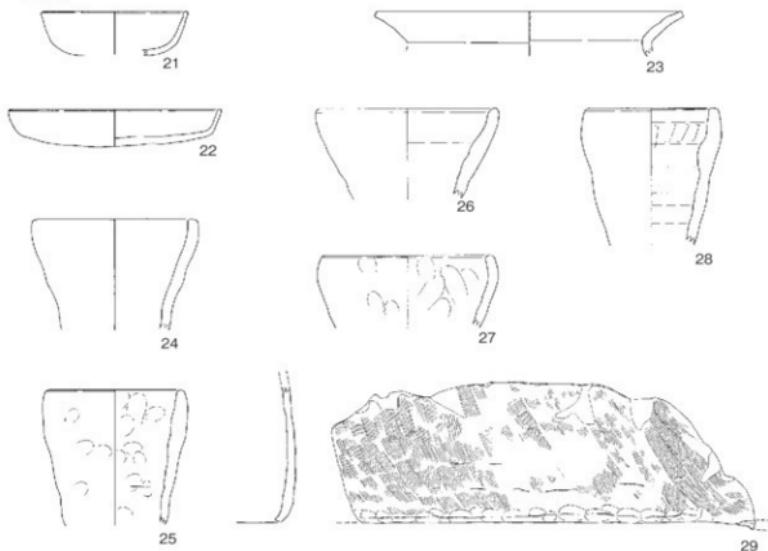


SX06

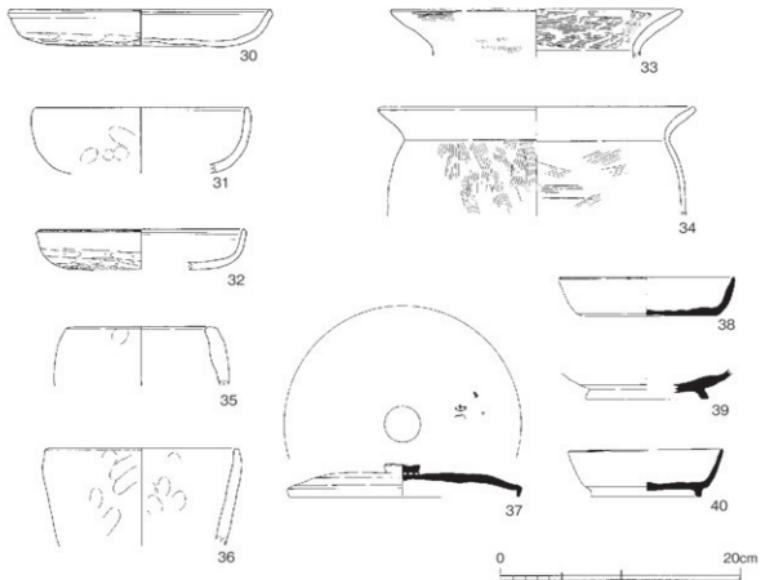


遺構出土遺物実測図(1)

SD04

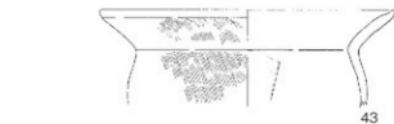
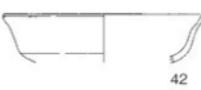


SD05

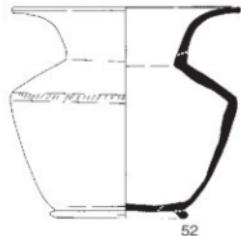
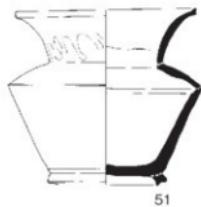
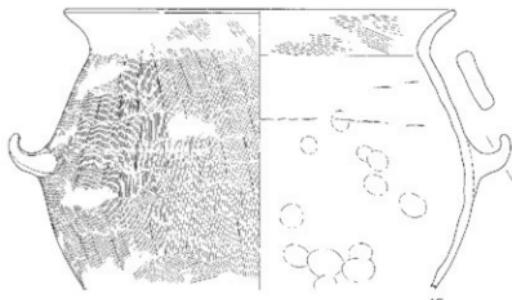
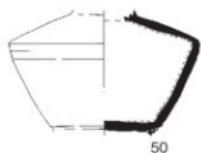
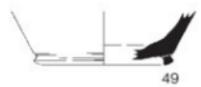


遺構出土遺物実測図(2)

SK01

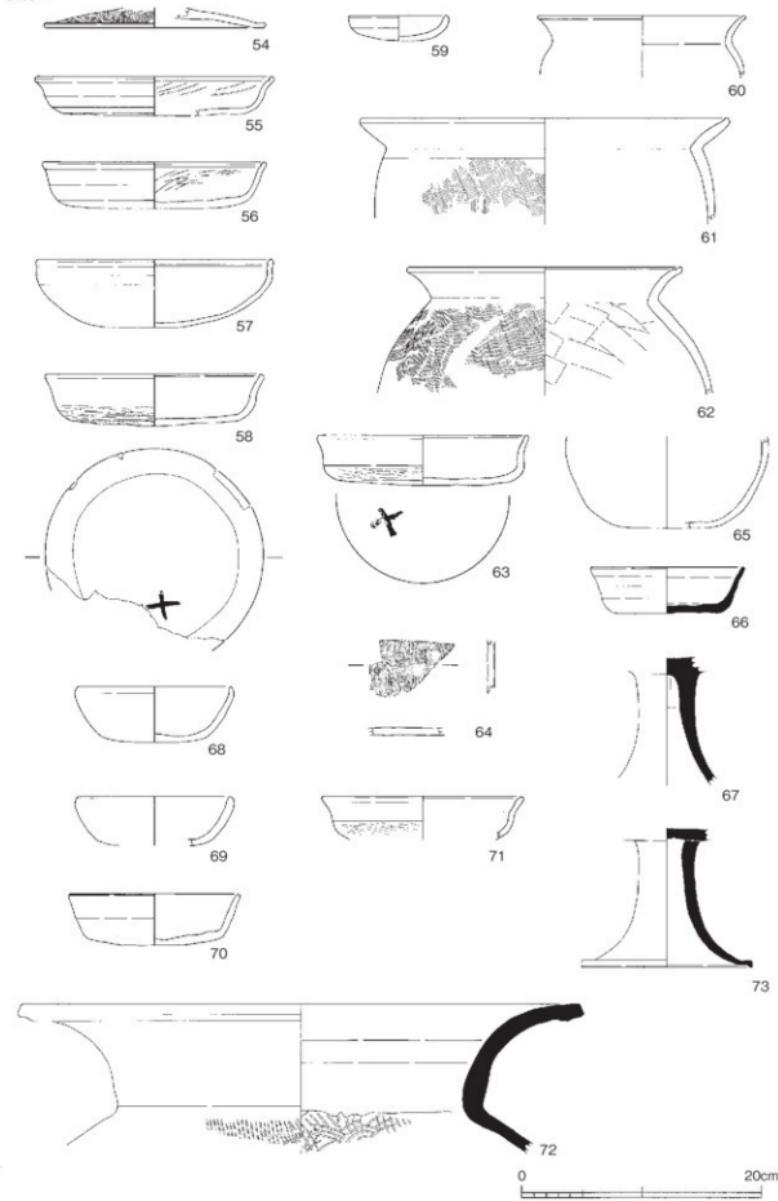


SK02

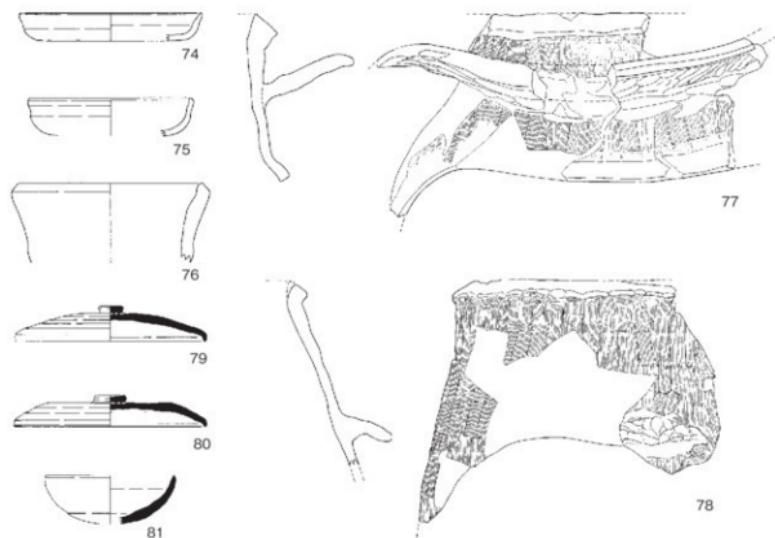


遺構出土遺物実測図 (3)

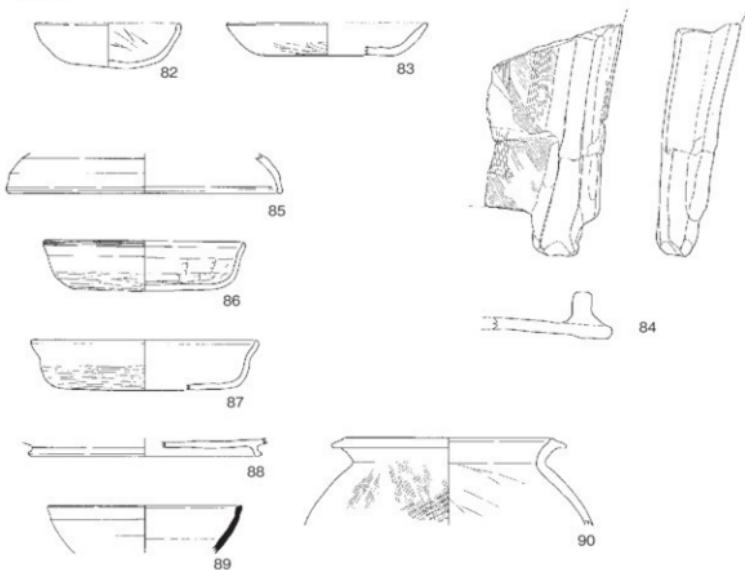
SE01



遺構出土遺物実測図 (4)

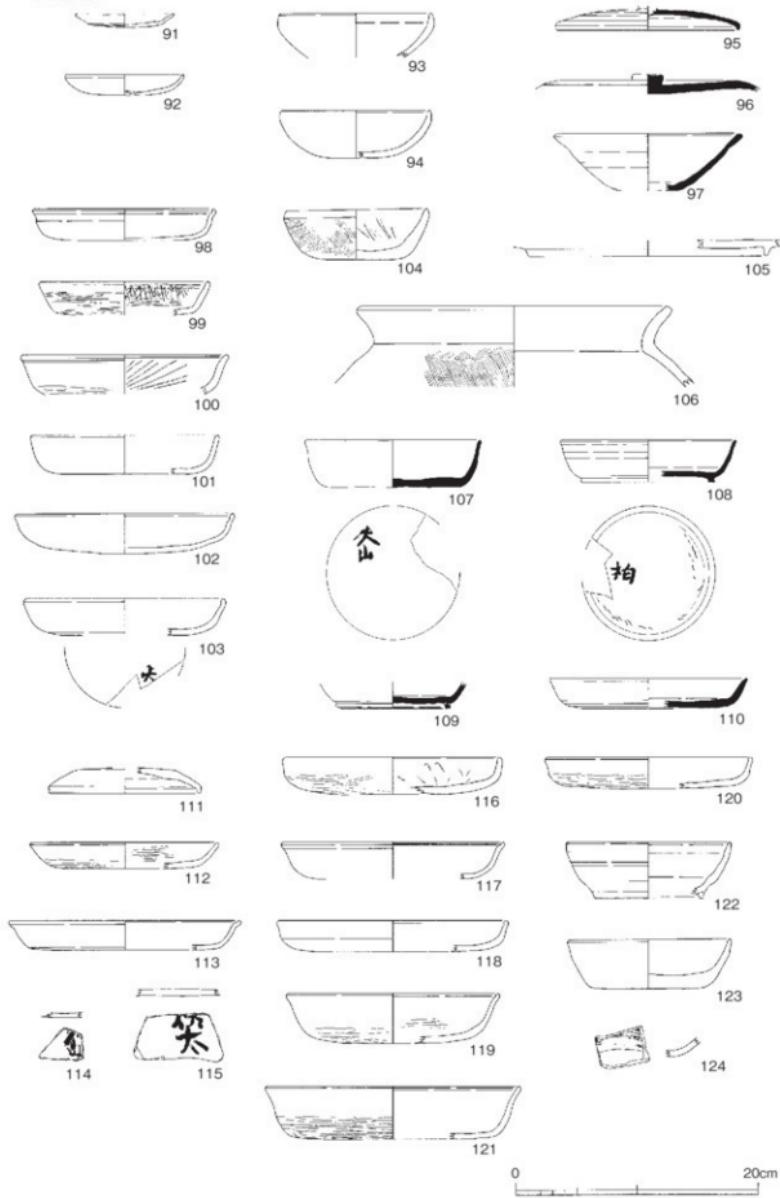


SE02

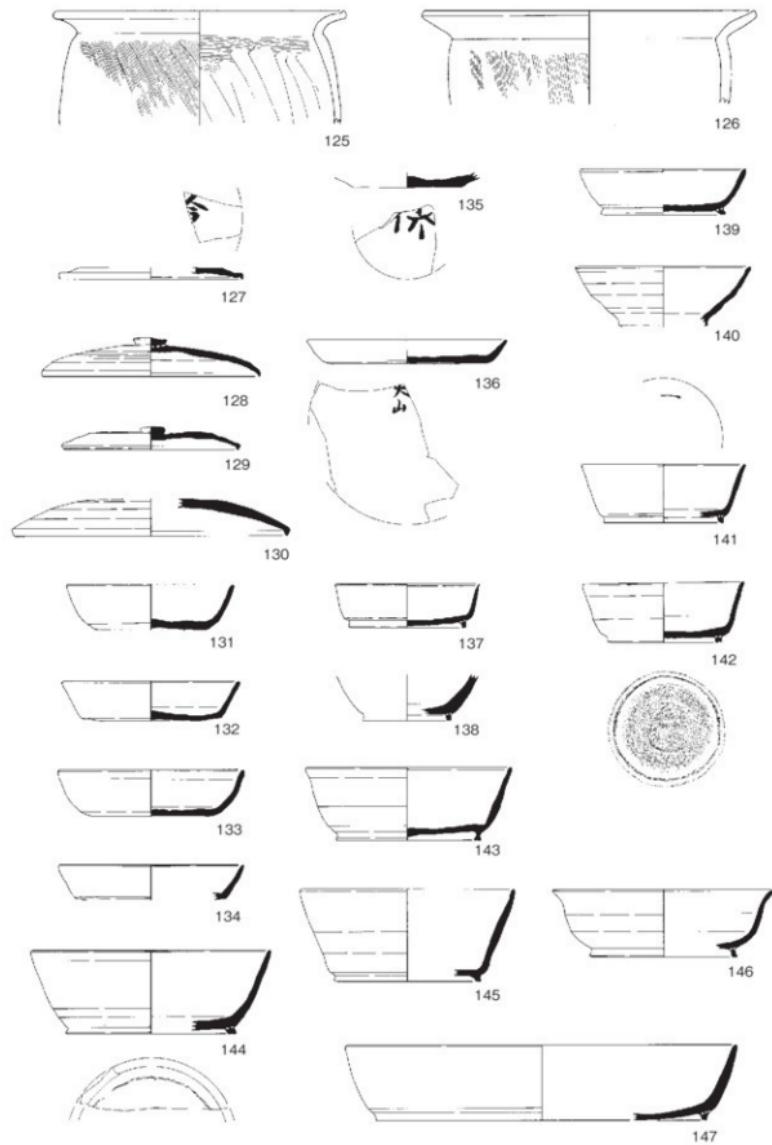


遺構出土遺物実測図 (5)

北側石敷

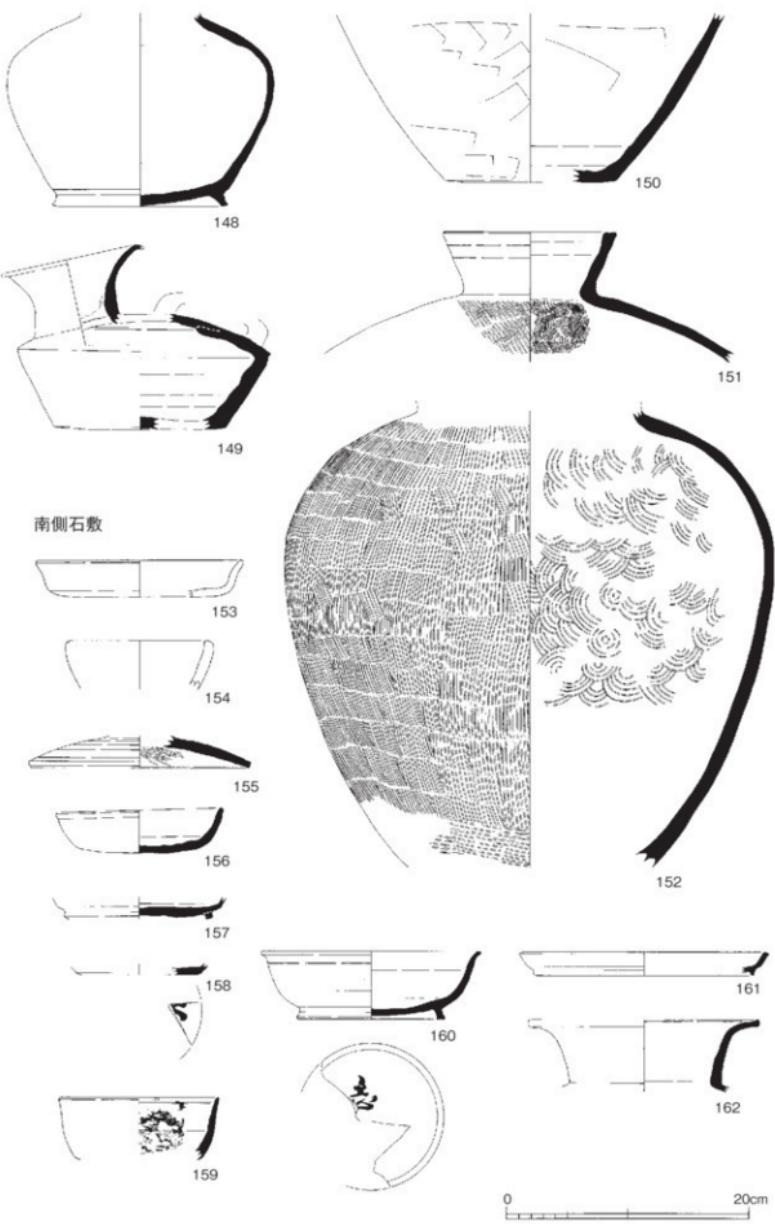


遺構出土遺物実測図 (6)

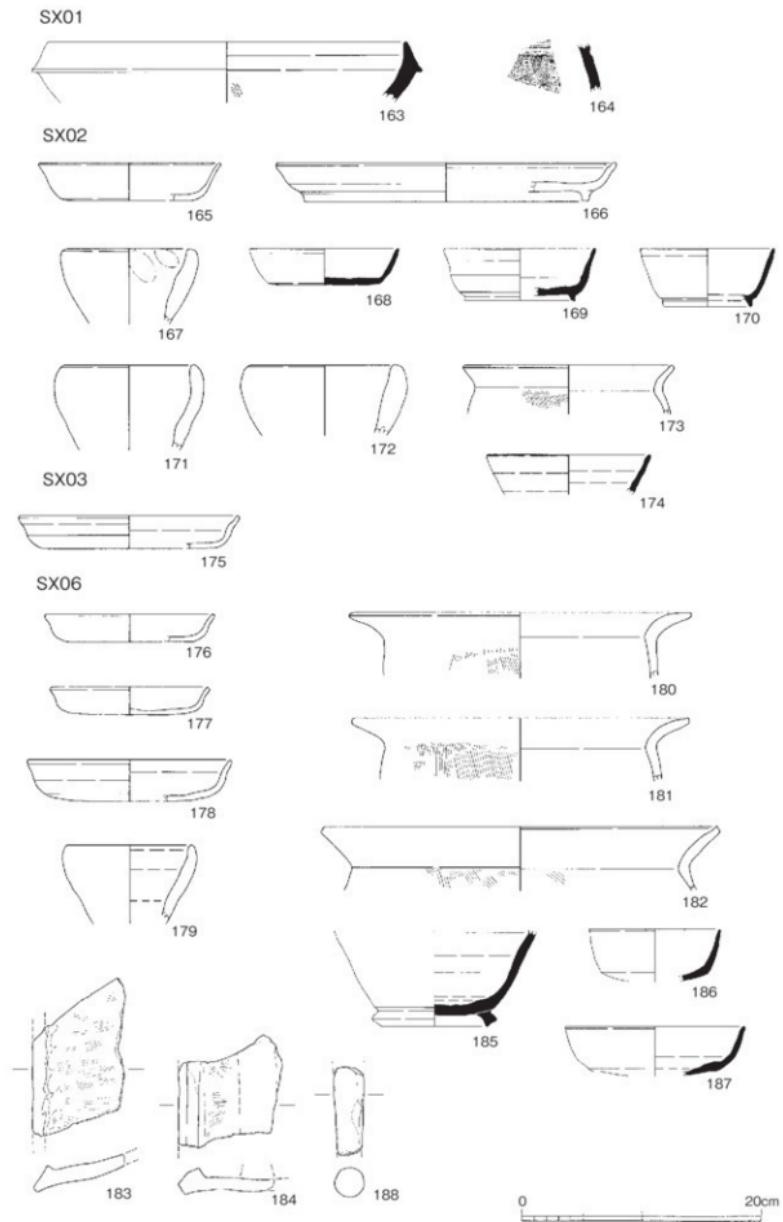


0 20cm

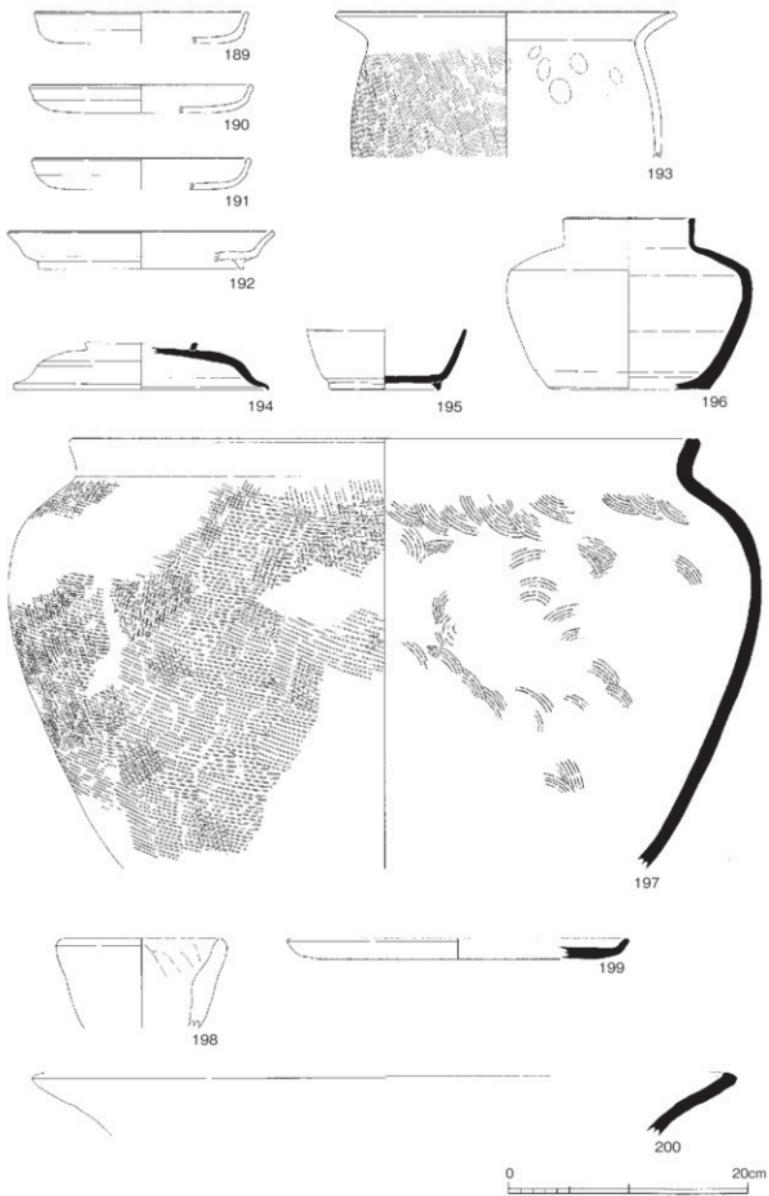
遺構出土遺物実測図 (7)



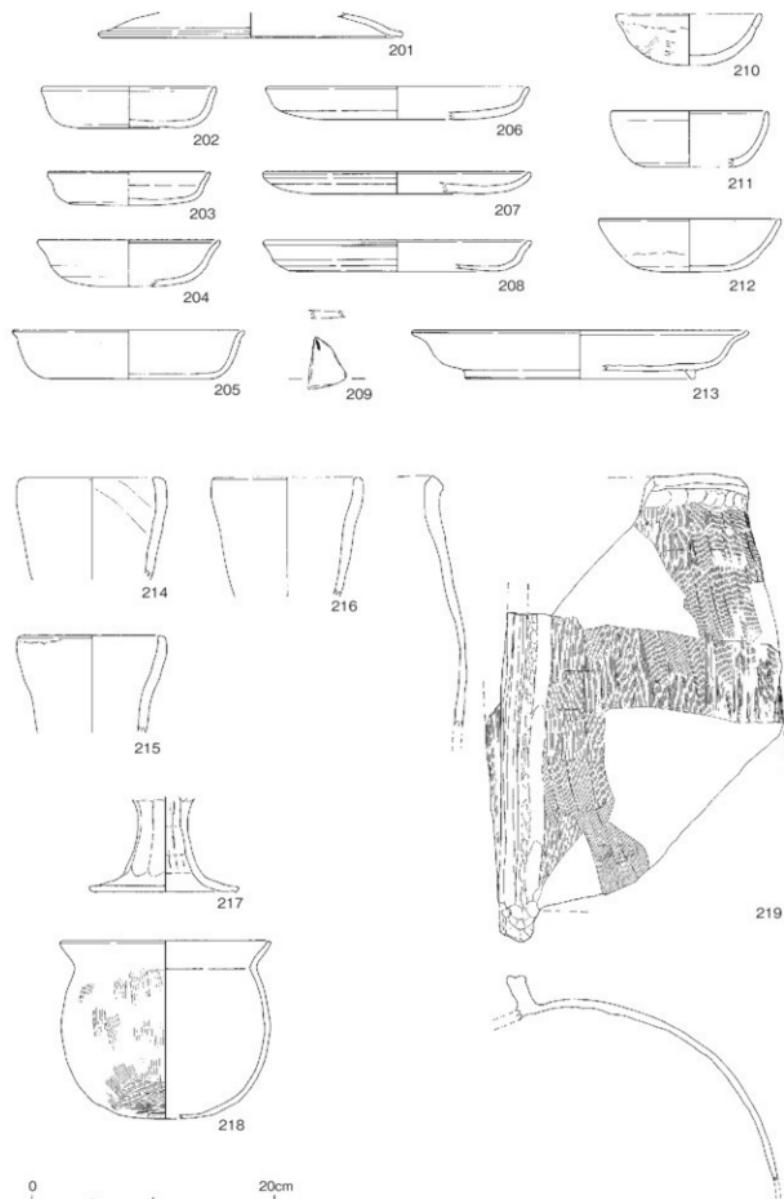
遺構出土遺物実測図 (8)



遺構出土遺物実測図 (9)

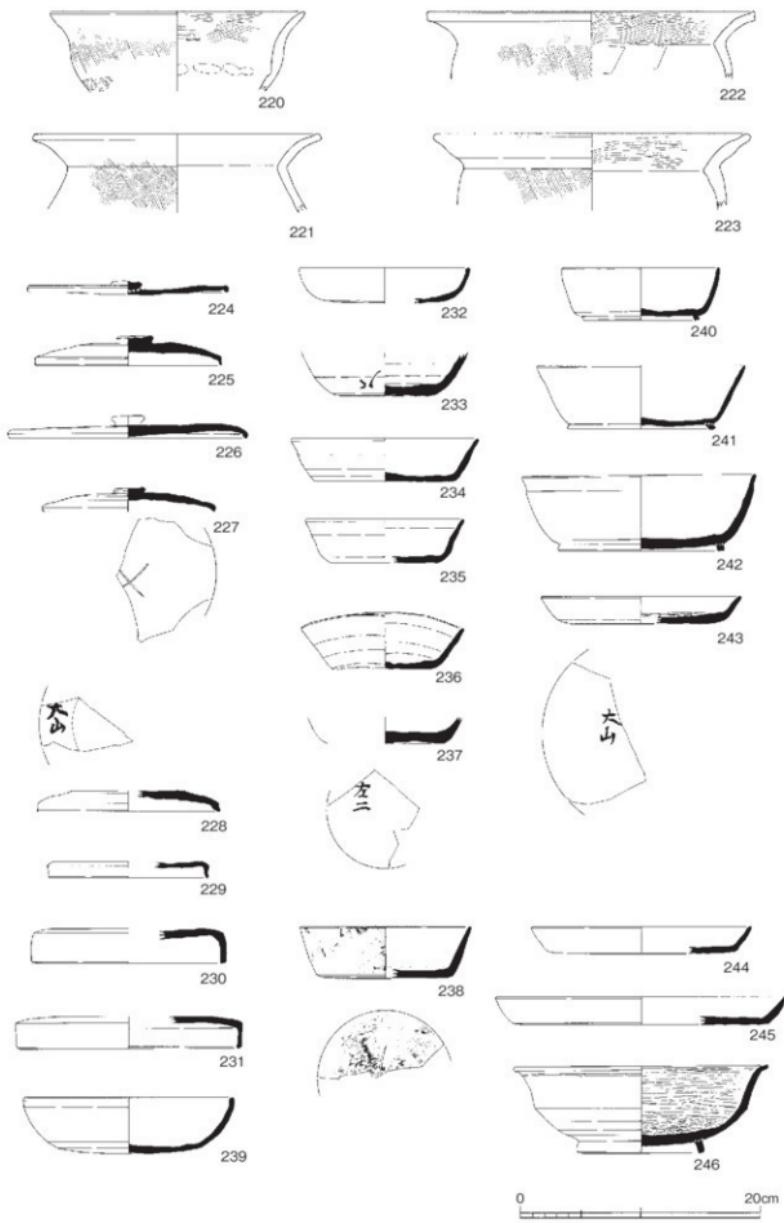


流路出土遺物実測図(1)

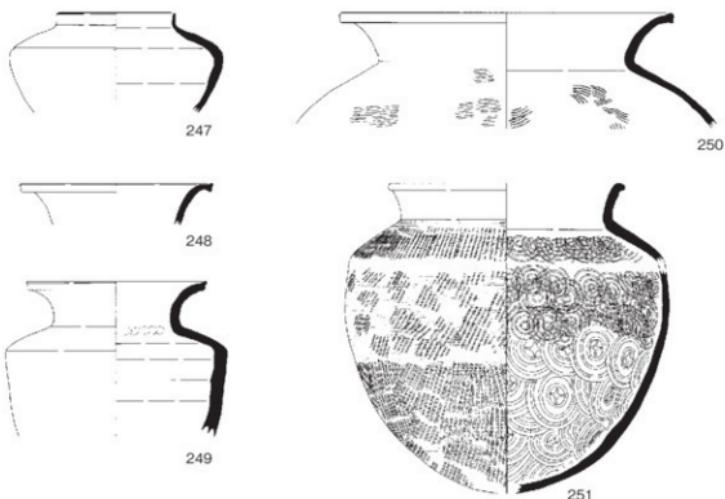


0 20cm

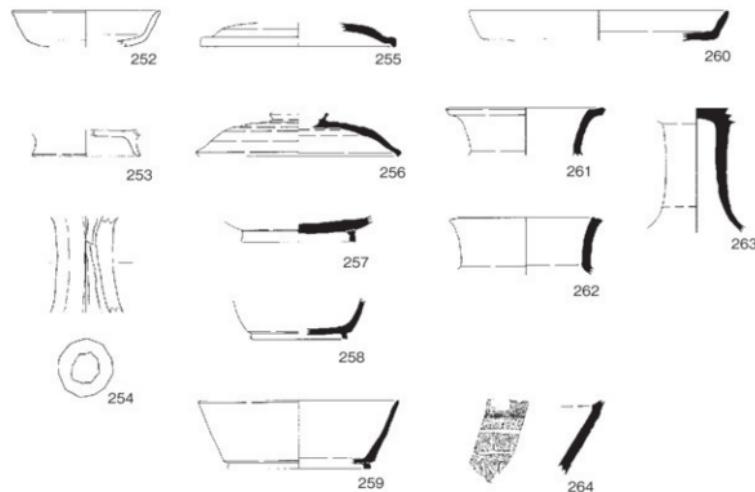
流路出土遺物実測図 (2)



流路出土遺物実測図 (3)

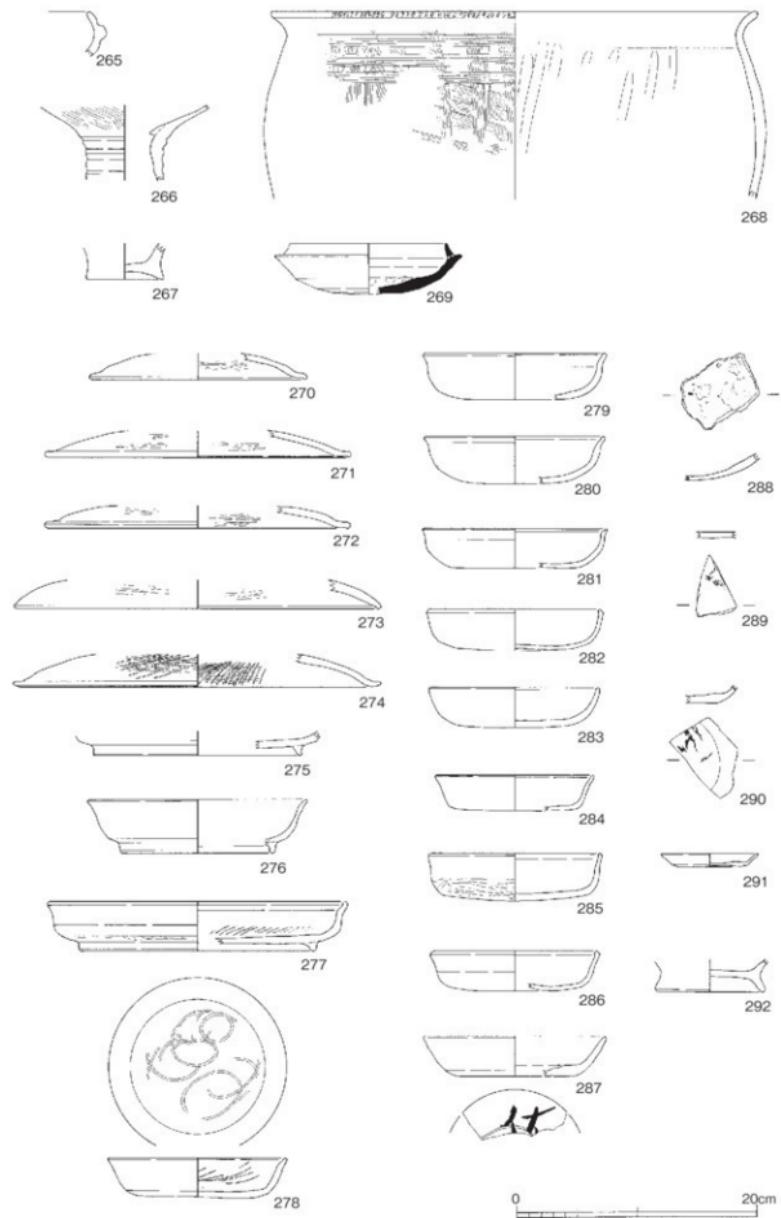


包含層



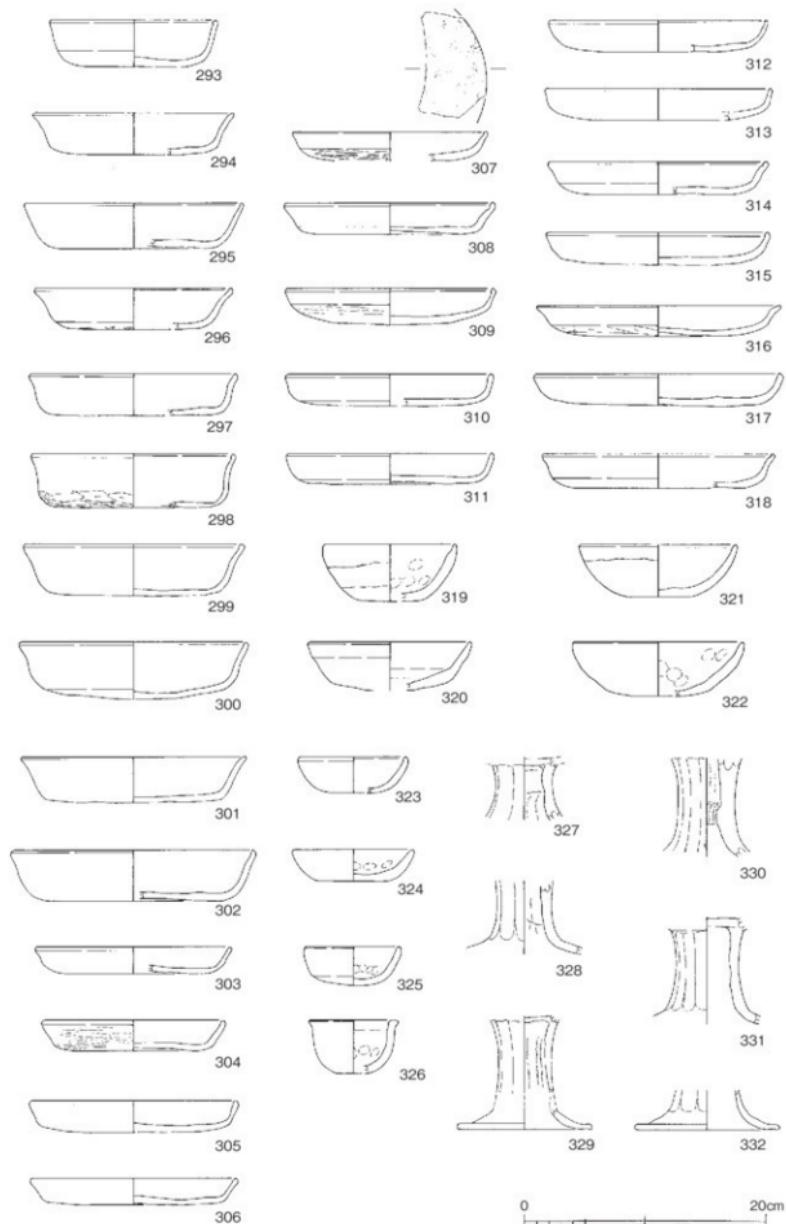
0 20cm

流路出土遺物実測図(4)・包含層出土遺物実測図(1)

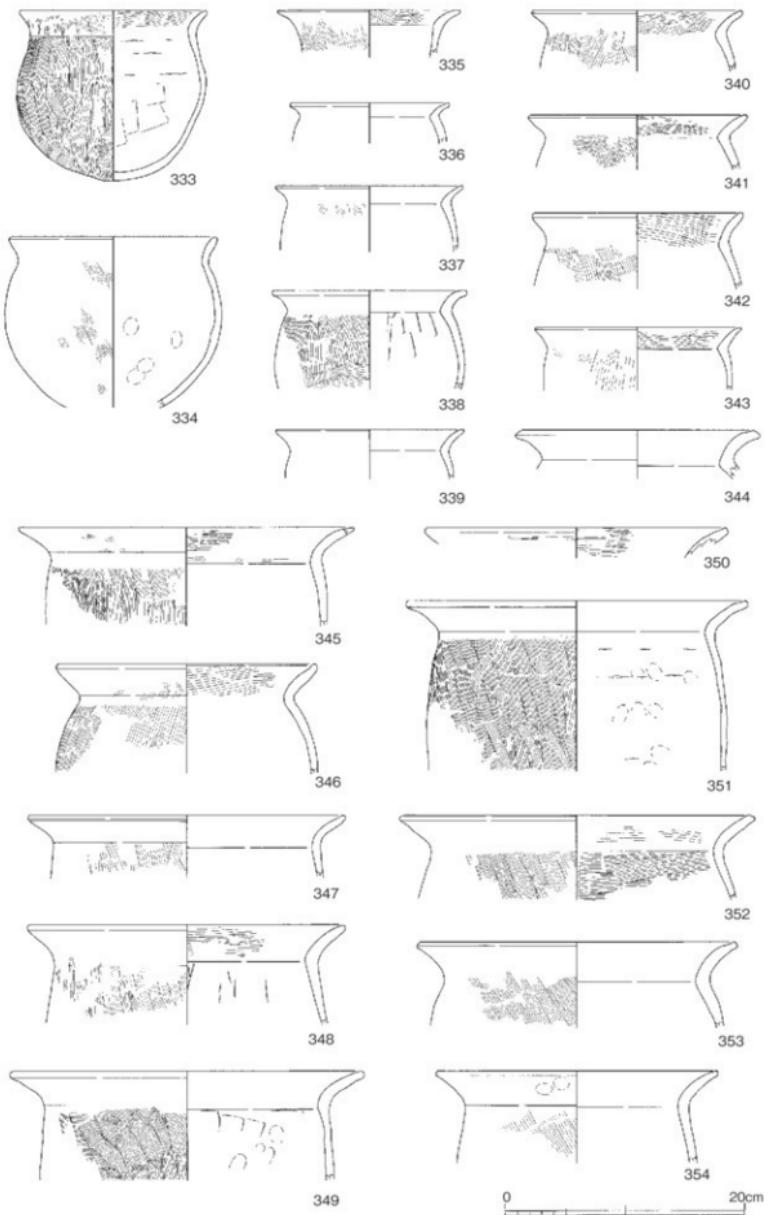


包含層出土遺物実測図(2)

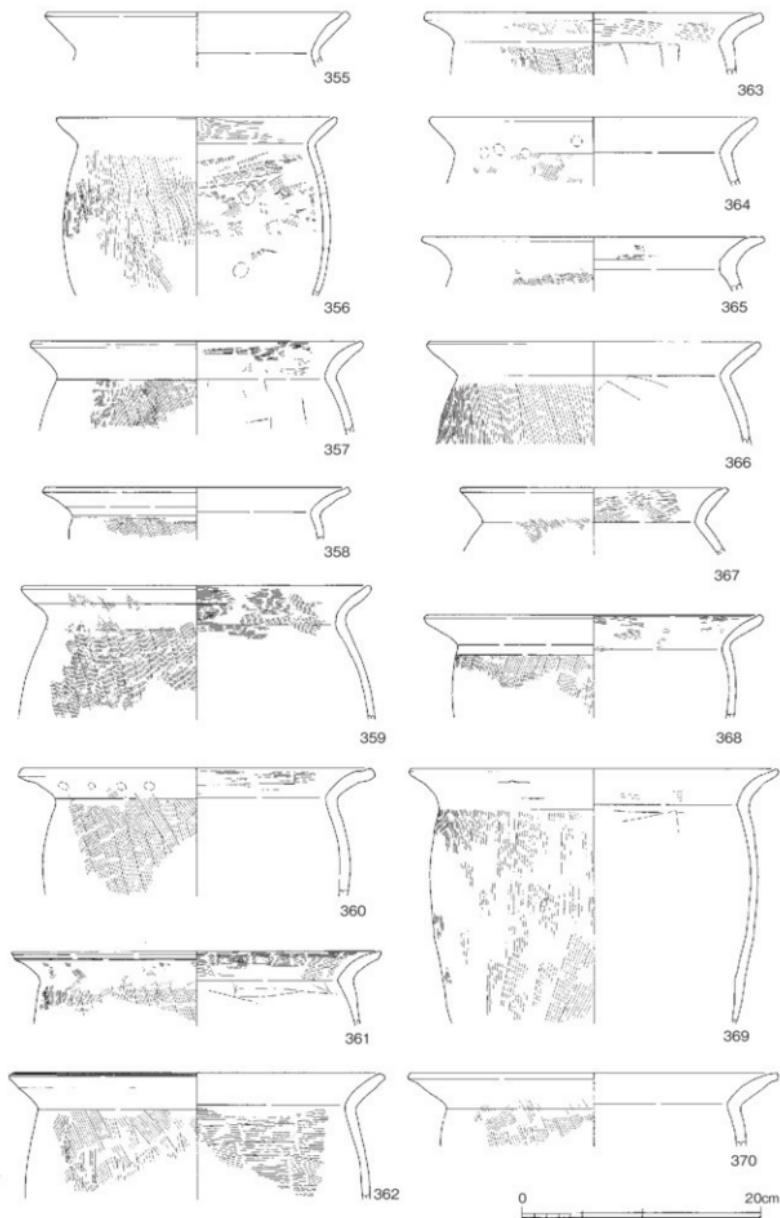
図版 40



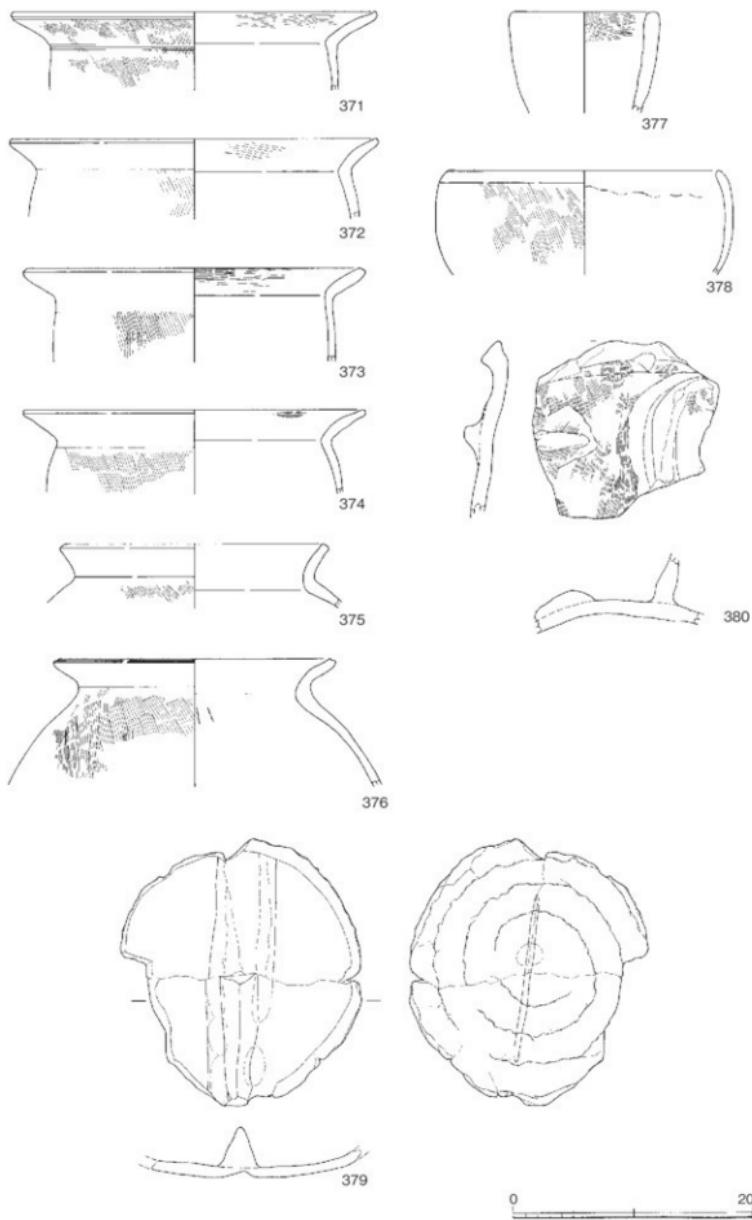
包含層出土遺物実測図(3)



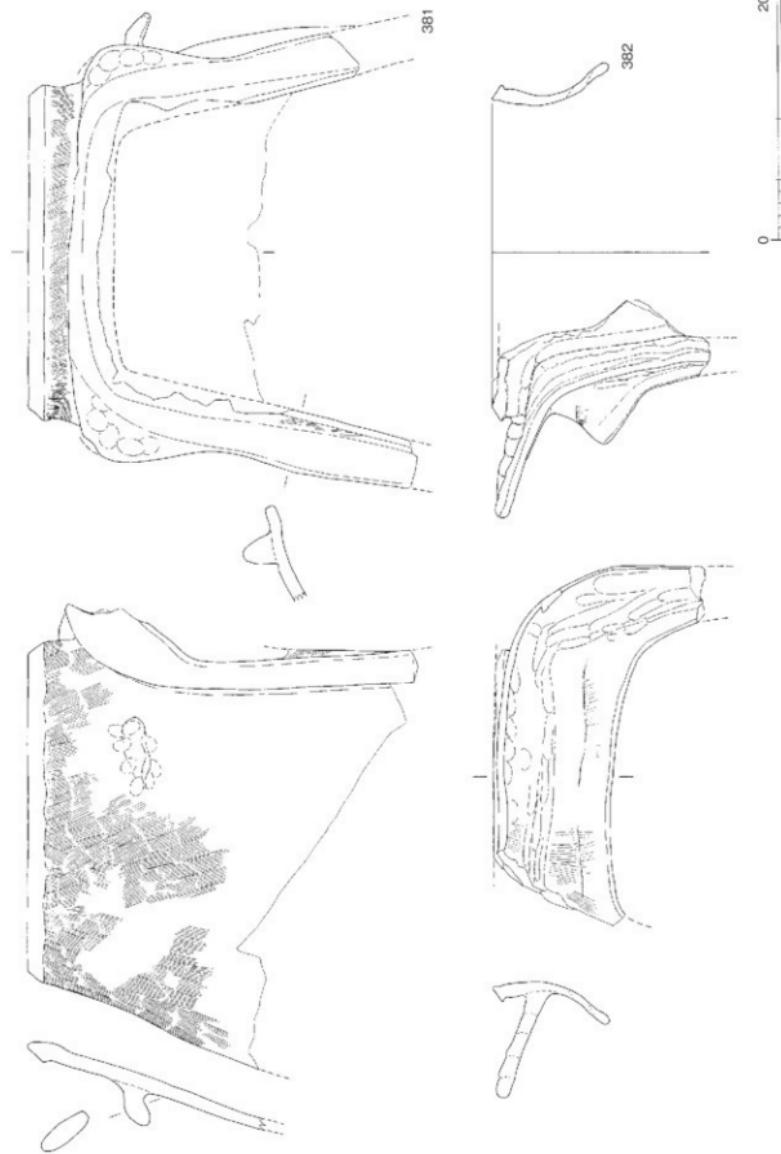
包含層出土遺物実測図(4)



包含層出土遺物実測図 (5)

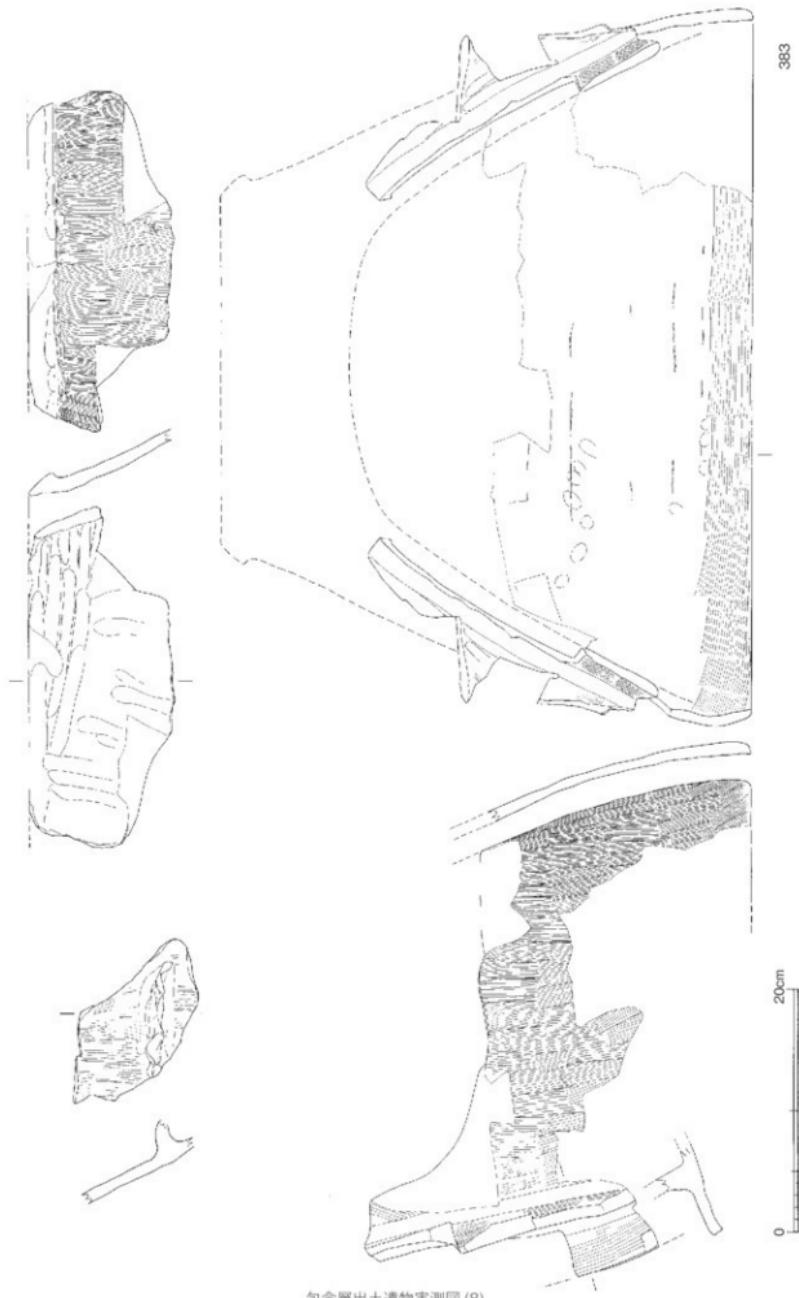


包含層出土遺物実測図 (6)

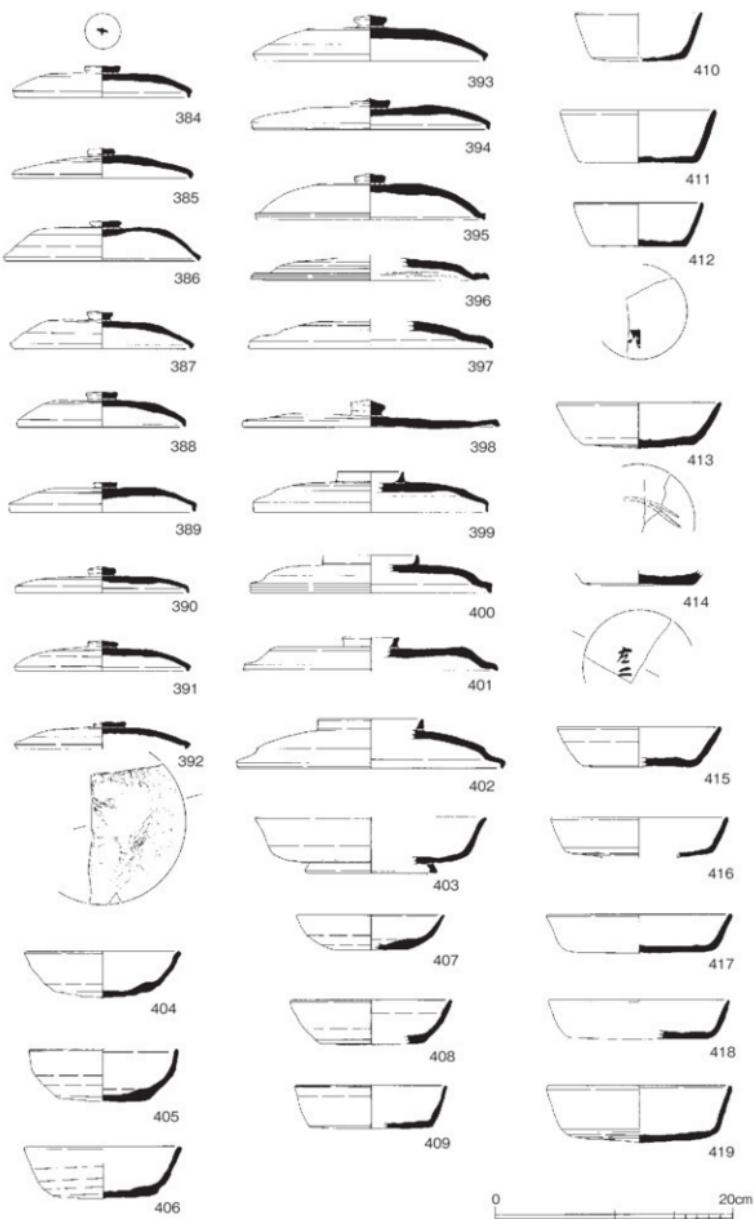


包含層出土遺物実測図 (7)

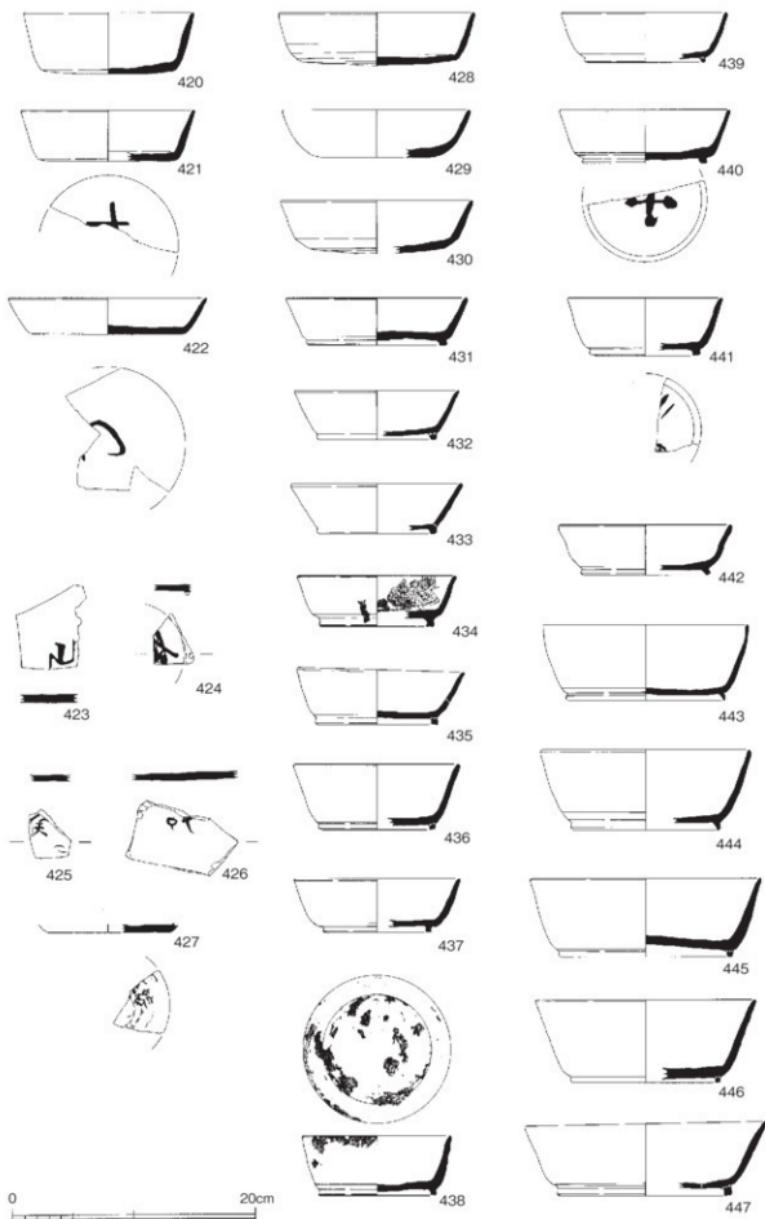
383



包含層出土遺物実測図 (8)

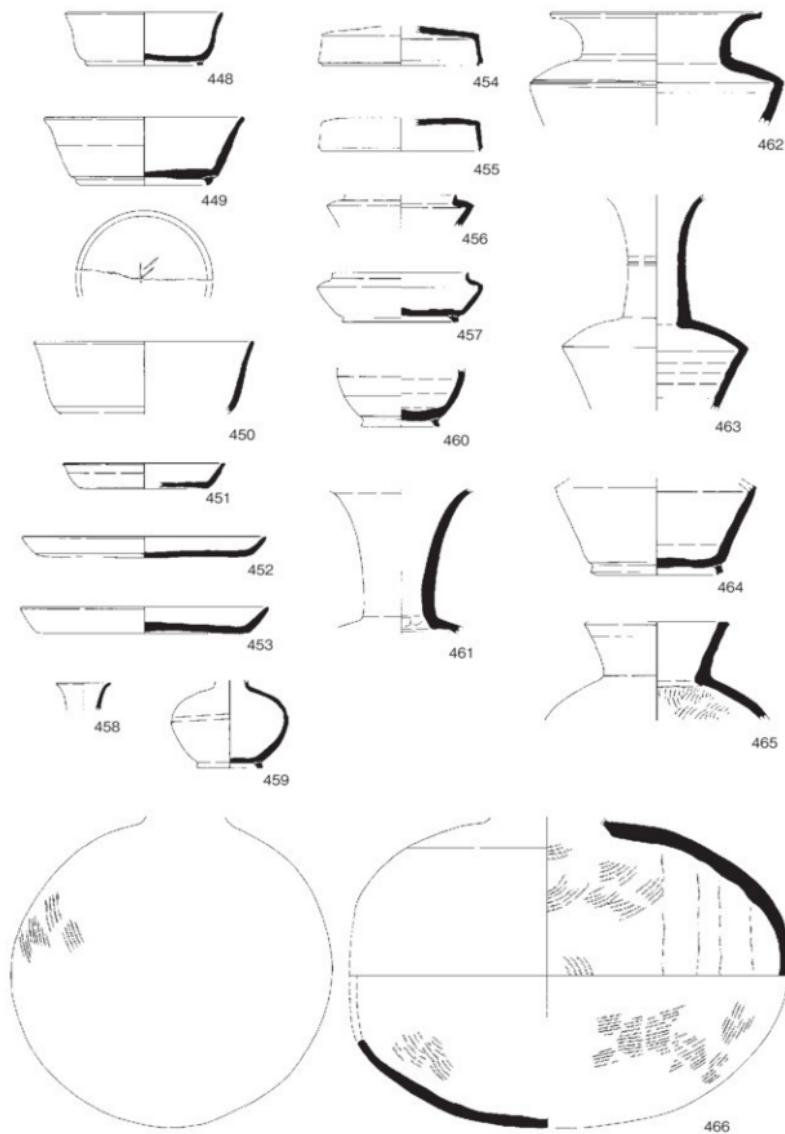


包含層出土遺物実測図 (9)



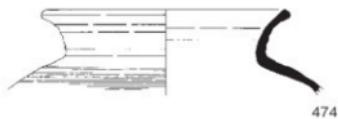
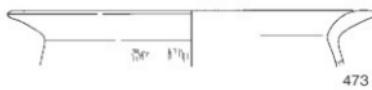
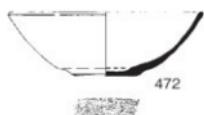
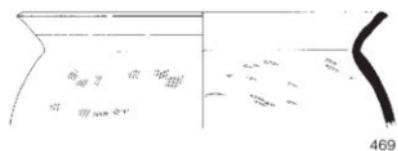
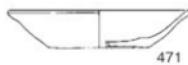
包含層出土遺物実測図 (10)

図版 48

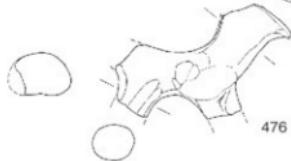


0 20cm

包含層出土遺物実測図 (11)

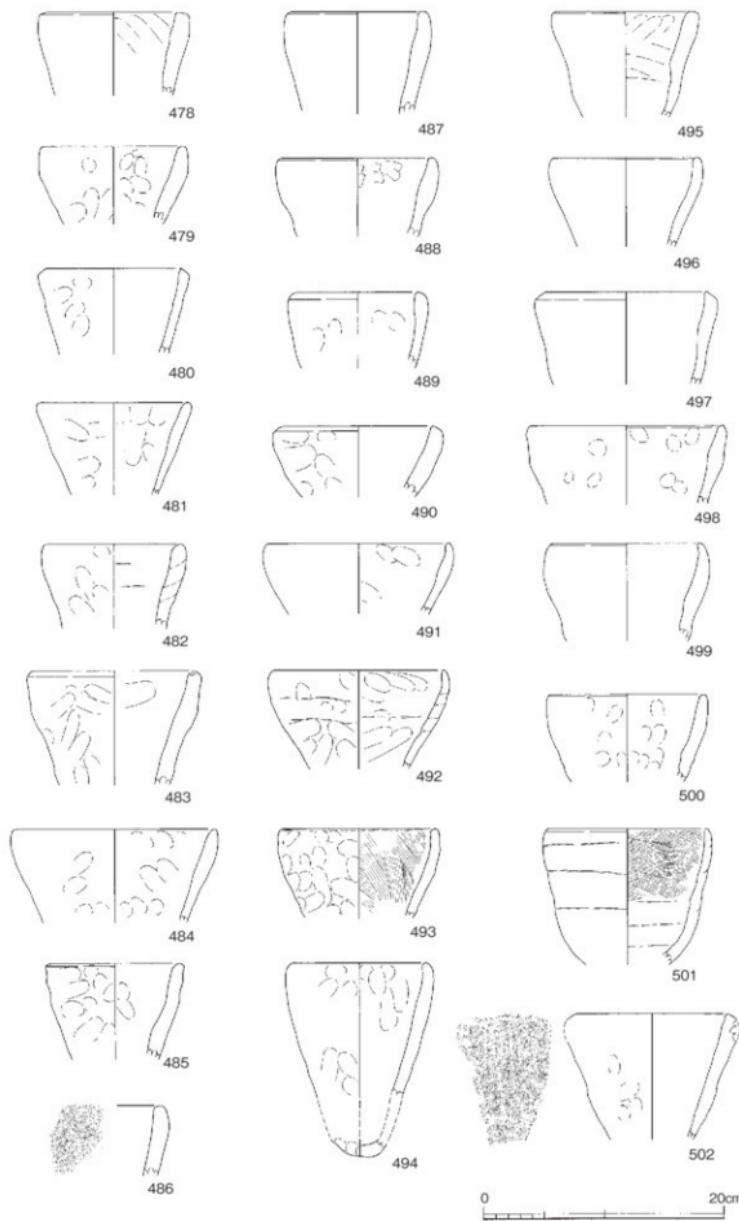


0 20cm

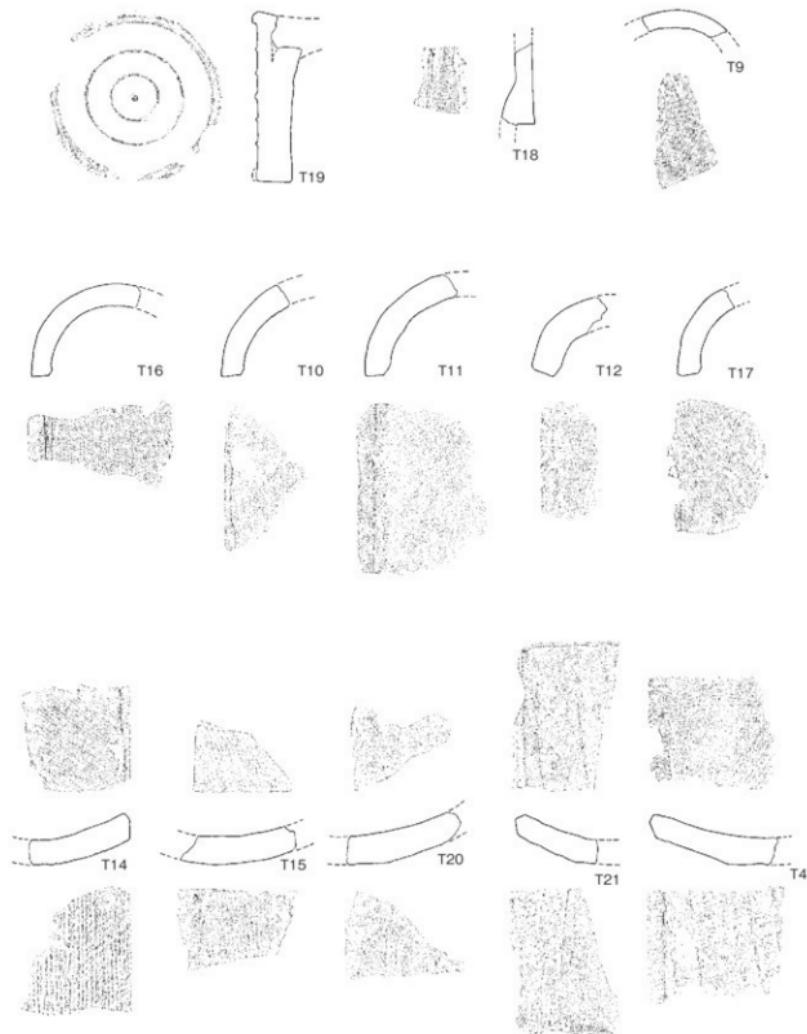


0 20cm

包含層出土遺物実測図 (12)

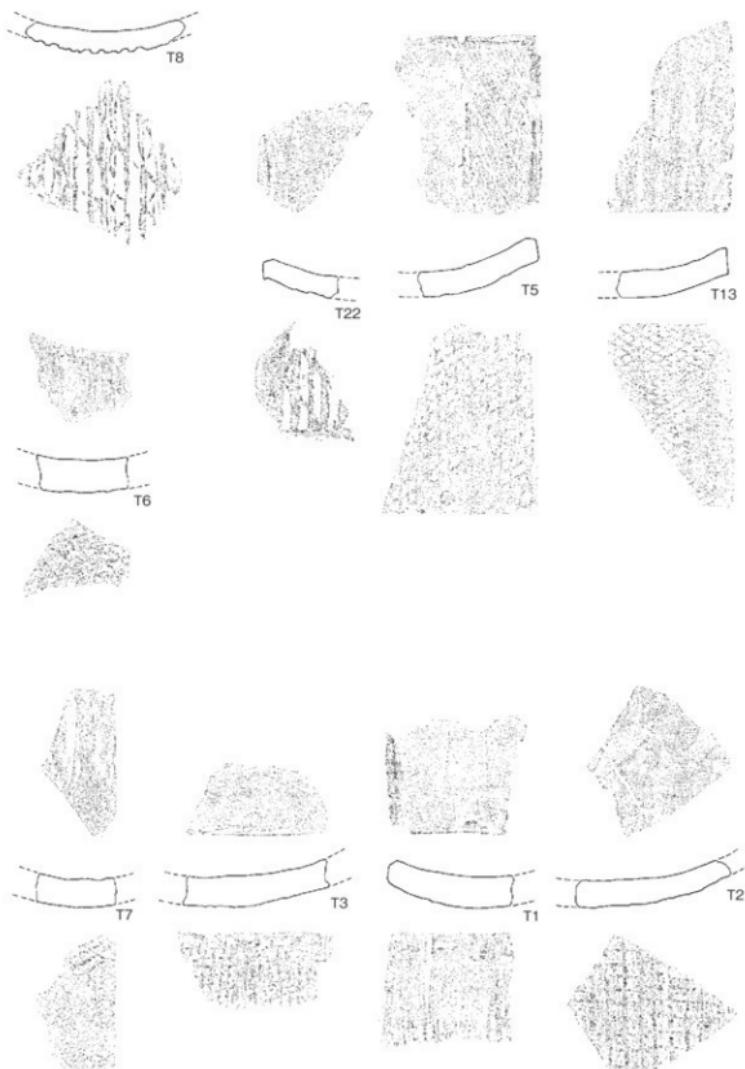


包含層出土製塙土器実測図



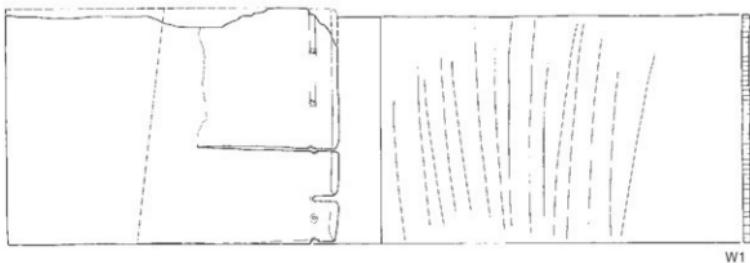
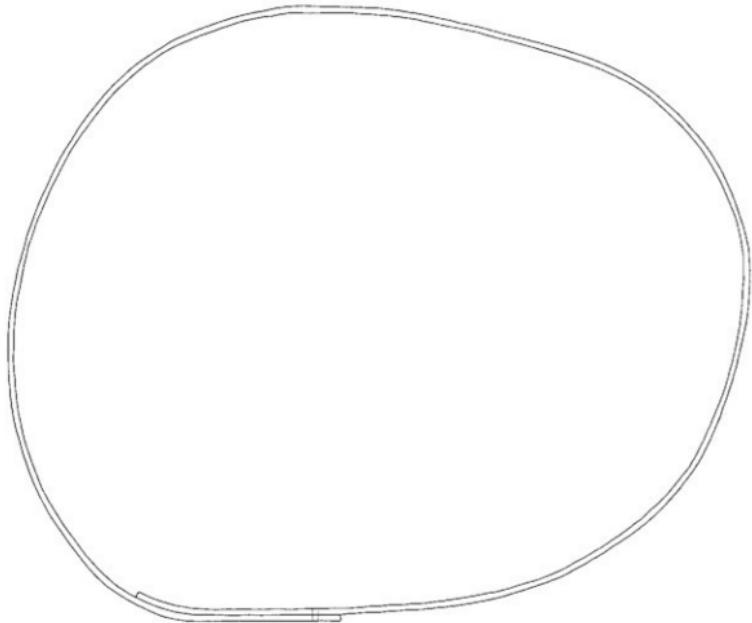
0 20cm

包含層出土瓦実測図(1)



0 20cm

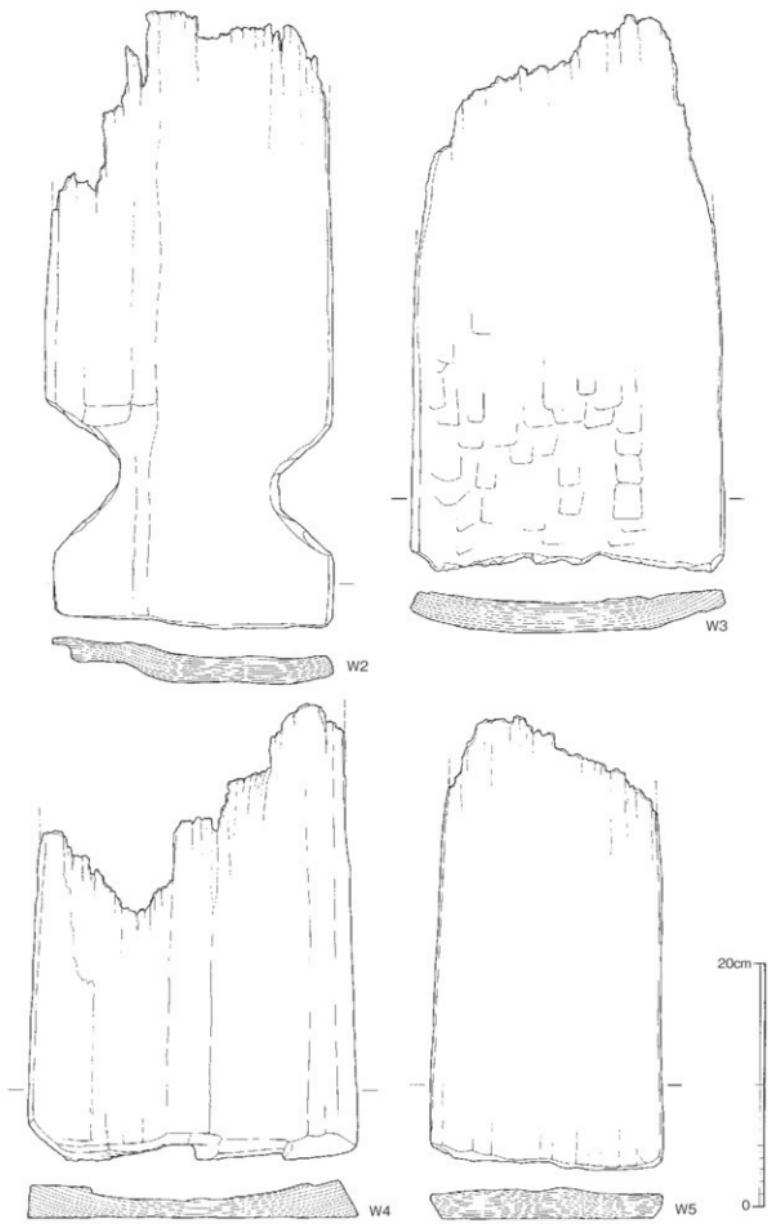
包含層出土瓦実測図 (2)



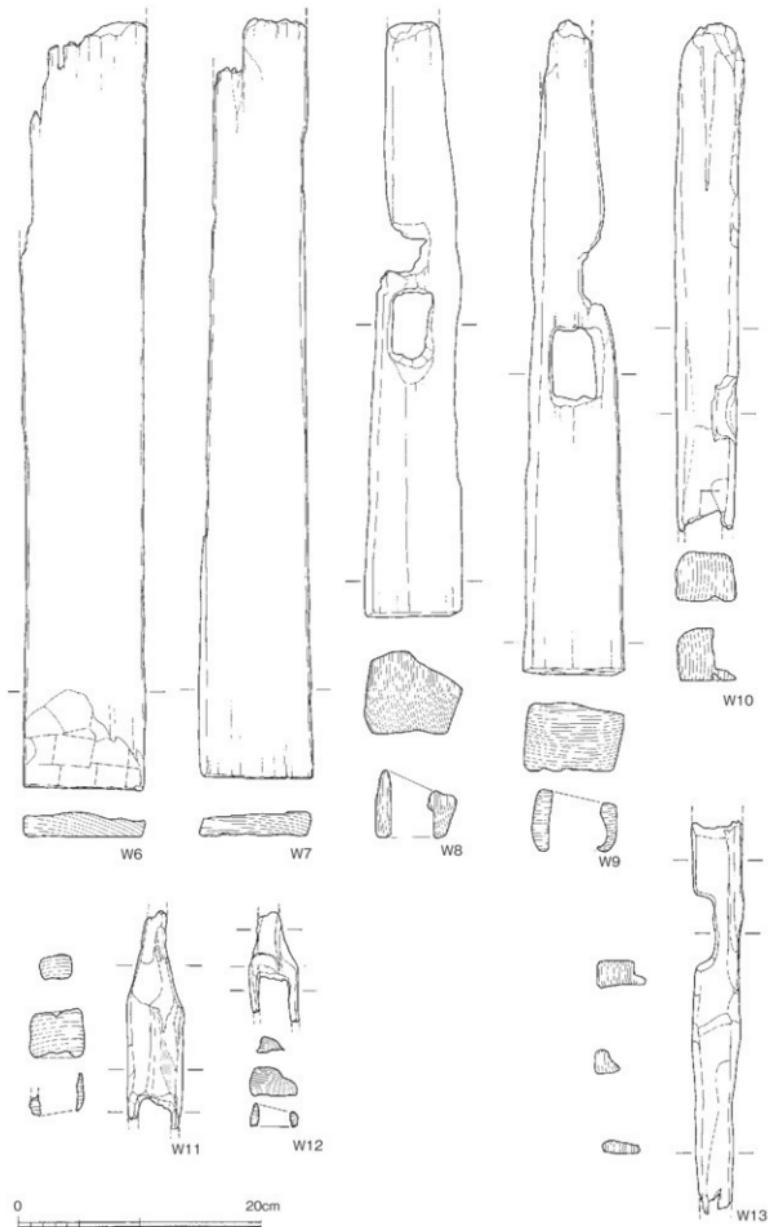
0 20cm

A scale bar at the bottom right, indicating a length of 20 cm.

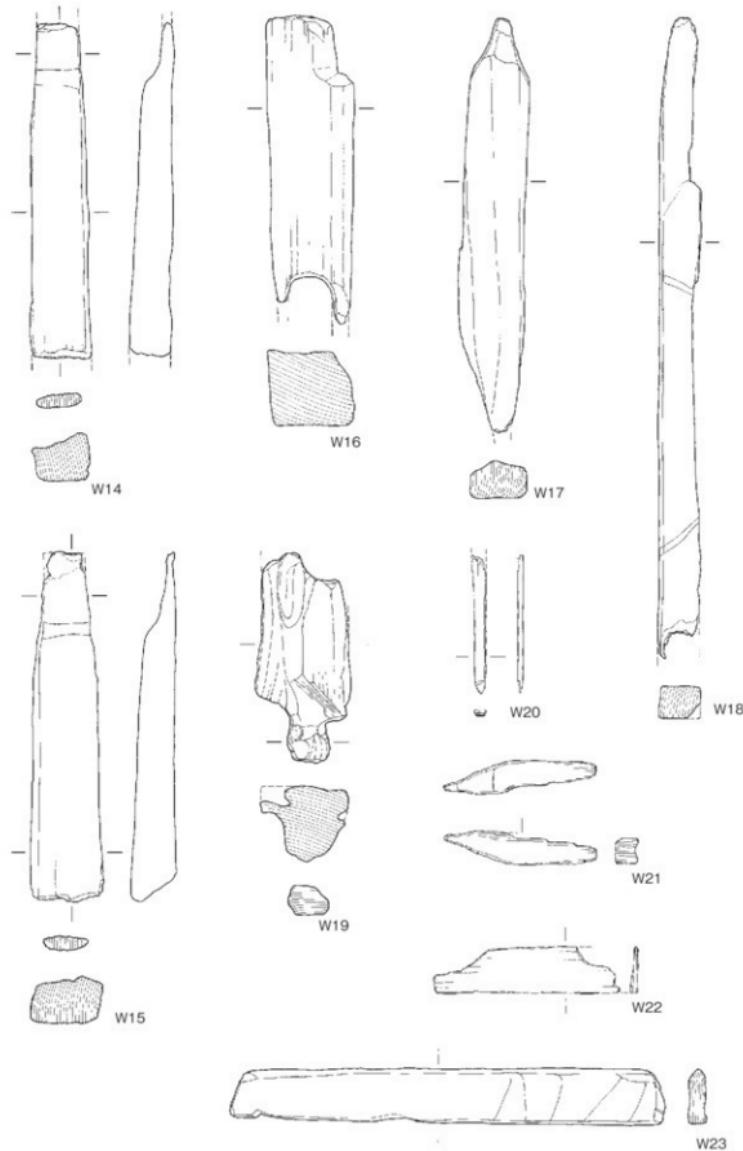
包含層出土木器実測図(1)



包含層出土木器実測図(2)



包含層出土木器実測図 (3)



包含層出土木器実測図(4)

0 20cm

写真図版





姫路駅と調査区



全景（西から）



南壁断面（北西から）



SD02（西から）



転車台坑 北半部(1)(東から)



転車台坑 北半部(2)(西から)



転車台坑 北半部(3)(北から)



転車台坑 完掘状況(東から)



転車台坑 駅構内盛土と掘方断面(北から)



転車台坑 側壁掘方断面(南半部)(東から)



転車台坑 側壁掘方断面(北半部)(東から)



転車台坑 側壁掘方断面(東半部)(南から)



転車台坑 側壁掘方断面(西半部)(北から)



転車台坑 側壁基礎の杭痕(1)



転車台坑 側壁基礎の杭痕(2)



転車台坑 側壁内面(西から)



転車台坑 側壁組積の状況(北から)



転車台坑 側壁内面の煉瓦組積(南から)



転車台坑 側壁外面の煉瓦組積(東から)



転車台坑 側壁最下段の煉瓦積(1)



転車台坑 側壁外面の加工された煉瓦



転車台坑 側壁最下段の煉瓦積(2)



転車台坑 煉瓦平面加工の状況



転車台坑 東側床面ボルト検出状況(北から)



転車台坑 西側床面ボルト検出状況(東から)



転車台坑 北東部床面ボルト検出状況(南から)



転車台坑 ボルト 1 設置状況



転車台坑 ボルト 1 固定状況(1)



転車台坑 ボルト 1 固定状況(2)



転車台坑 東側ボルト 2 設置状況(1)



転車台坑 東側ボルト 2 設置状況(2)



転車台坑 床面北西部枕木の痕跡(南から)

転車台坑 床面南東部枕木の痕跡(南から)



転車台坑 枕木の痕跡とボルト 1(東から)



転車台坑 中央支承台 検出状況(1)(東から)



転車台坑 中央支承台(2)



転車台坑 中央支承台上面(東から)



転車台坑 中央支承台基礎検出状況(北から)



転車台坑 中央支承台西側掘方断面(北から)



転車台坑 中央支承台上面加工の状況



転車台坑 中央支承台基礎(台石除去後)



転車台坑 溜枠の位置(東から)



転車台坑 溜枠全景(北東から)



転車台坑 溜枠排水口(北東から)



転車台坑 側壁部土管設置状況(北東から)



転車台坑 床面断面(北半部)(西から)



転車台坑 床面断面(西半部)(北から)



転車台坑 刻印煉瓦(刻印 1類)



転車台坑 刻印煉瓦(刻印 3類)



転車台坑 櫛描煉瓦



転車台坑 調査風景



全景（西から）



全景（東から）



西半全景（東から）



第1面水田（西から）



第1面水田（西から）



調査風景



調査風景



中央部全景（南東から）



SB01（南東から）



中央部 (SB01・02、SA01・北から)



SB01 (南から)



SB01・SB02 (北から)



P6



P7



P8



P30



P32



P35



調査風景



P5 (南から)



P15 (南から)



P5 (南から)



P36 (南から)



南壁と南側石敷



南側石敷と北側石敷・SA02（北から）



南側石敷と北側石敷・SA02（南から）





南側石敷（東から）



南側石敷（北から）



SE02 上面



SE02 (東から)



SE02 (北から)



SE02 (北から)



SE02 下層集石



SE02 噴砂



北側石敷（北から）



SE01 検出状況（南から）



SE01 全景と SE03 検出状況（南から）



SE01 (南から)



SE01 (北から)



SE01 土器出土状態



SE01 断ち割り



SE01 断ち割り



SE01 調査風景



SE03 (南から)



SE03 (南から)



SE03 断ち割り



調査風景



調査風景



SD01 ~ SD04 (北から)



SD02 アゼ (北から)



SD03 アゼ (北から)



SD05 アゼ (東から)



SD03 土器出土状態 (東から)



SD04 アゼ (北から)



SD04 土器出土状態 (北から)



SD05 土器出土状態 (西から)



SK01 (北から)



SK01 上層土器出土状態



SK01 アゼ (北から)



SK01 土器出土状態 (南から)



SK01・02 (北から)



SK02 (北から)



SK02 土器出土状態



SK02 (北西から)



SK02 断面 (東から)



SK03・04 (北から)



調査風景



SK03 断面 (東から)



調査風景



包含層土器出土状態



包含層土器出土状態



包含層土器出土状態



全景（東から）



全景（東から）



全景（西から）



北壁（南東から）



調査区から北東方向



調査区から東方向



調査区から北東方向



調査風景



東端遺構（南西から）



SD01（南から）



SK01（南から）



SK03（東から）



SK03・SX06（南から）



調査区西半（南東から）



SX01（南から）



SX02（南から）



SX01（南から）



SX02（南から）



SX03（南から）



SX05（南から）



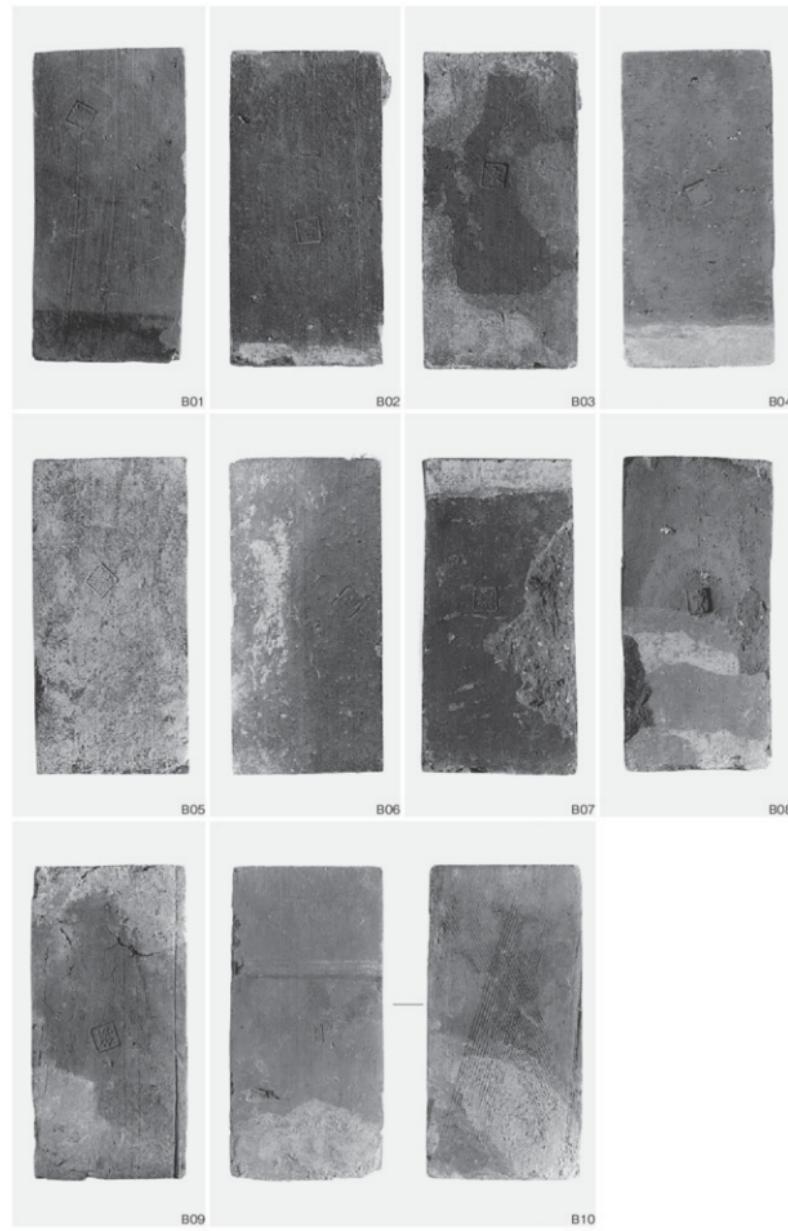
SX06（北から）



SX06（北から）



SX06（南から）



I区 転車台 煉瓦 (刻印 1類)



B11

B12



B13

B14



B15

B16

I 区 転車台 煉瓦 (刻印 2 類・櫛描 1 類)



B17



B18



B19



B20



B21



B22



B23



B24



B25



B26

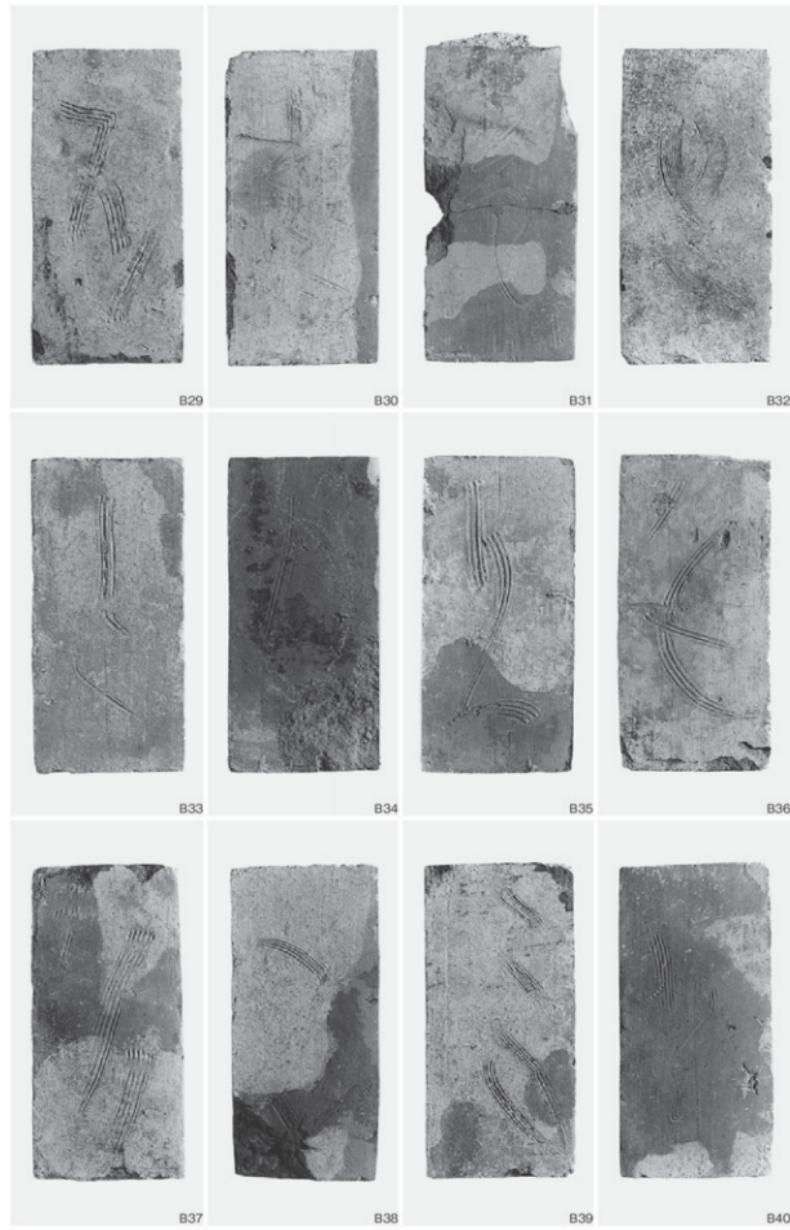


B27

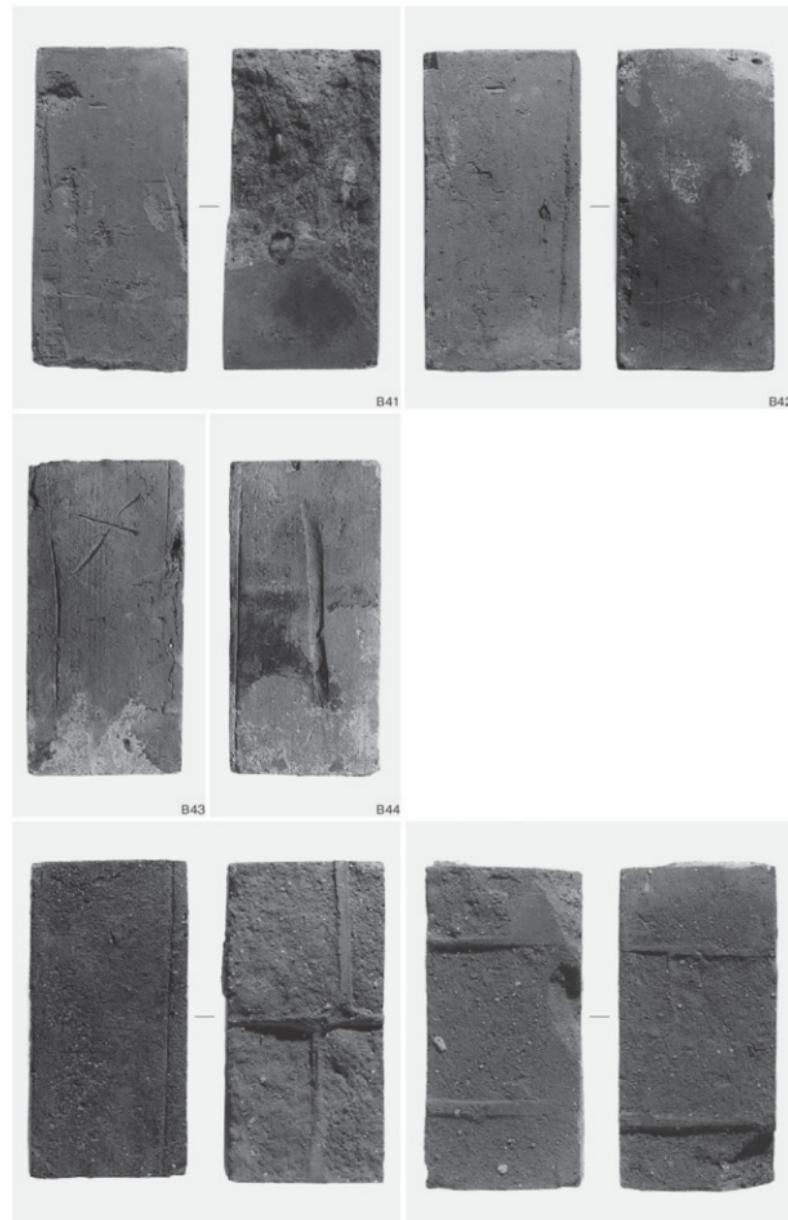


B28

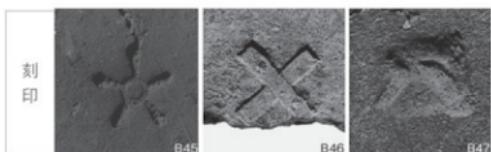
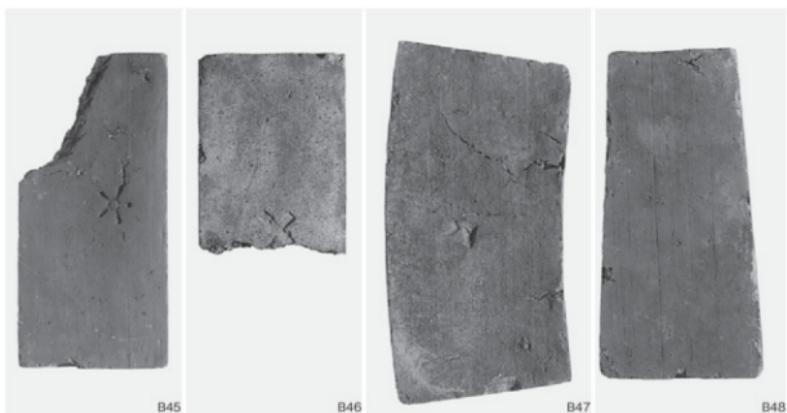
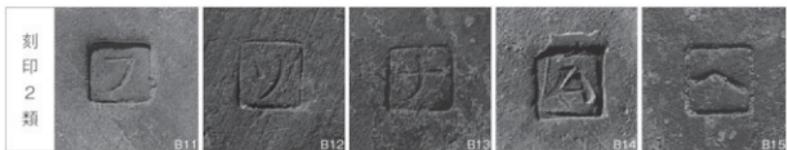
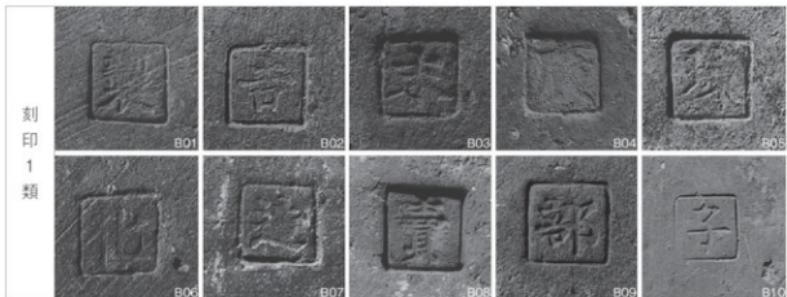
I 区 転車台 煉瓦 (櫛描 1・2 類)



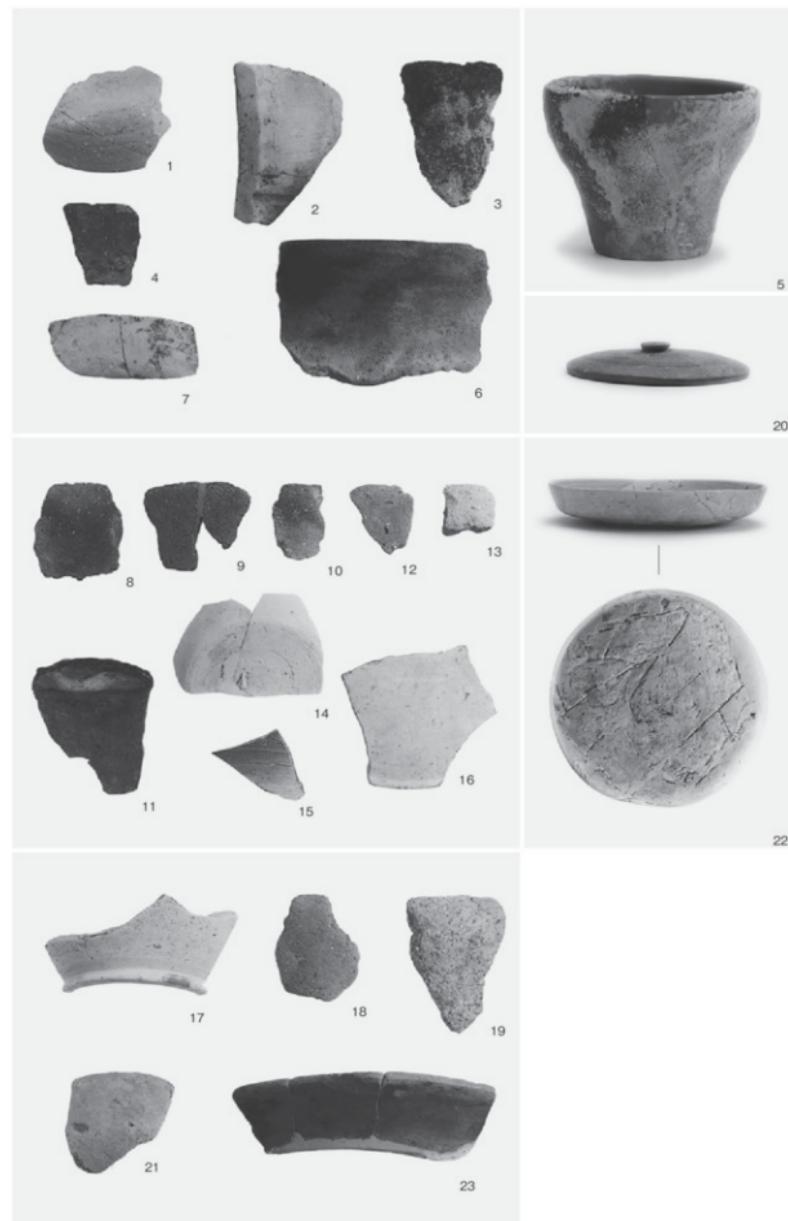
I 区 転車台 煉瓦 (櫛描 2 類)



I区 転車台 煉瓦(刻印3類・その他)



周辺採集煉瓦 刻印



SA・SP・SD01～04・SX06 出土遺物



SD04・05、SK01・02 出土遺物



41



51



44



52



45



56



50



57



59



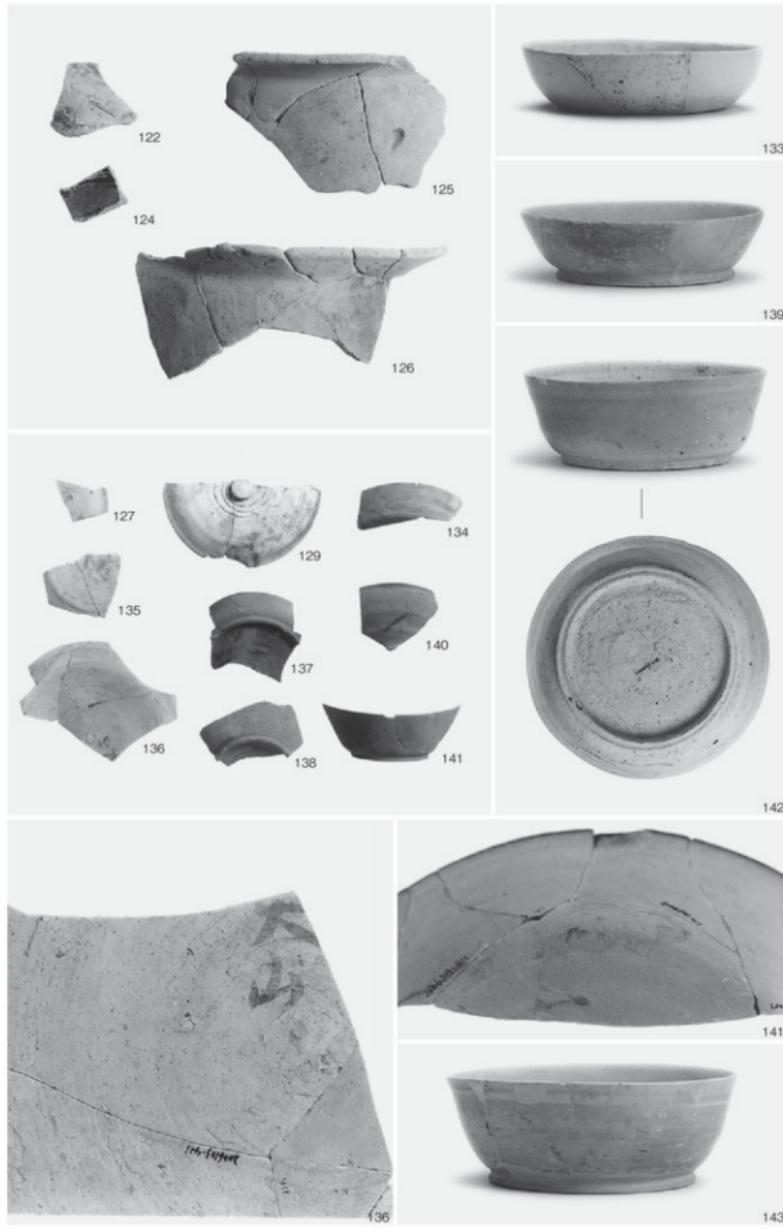
SEO1 出土遺物



SE01 ~ 03・北側石敷出土遺物



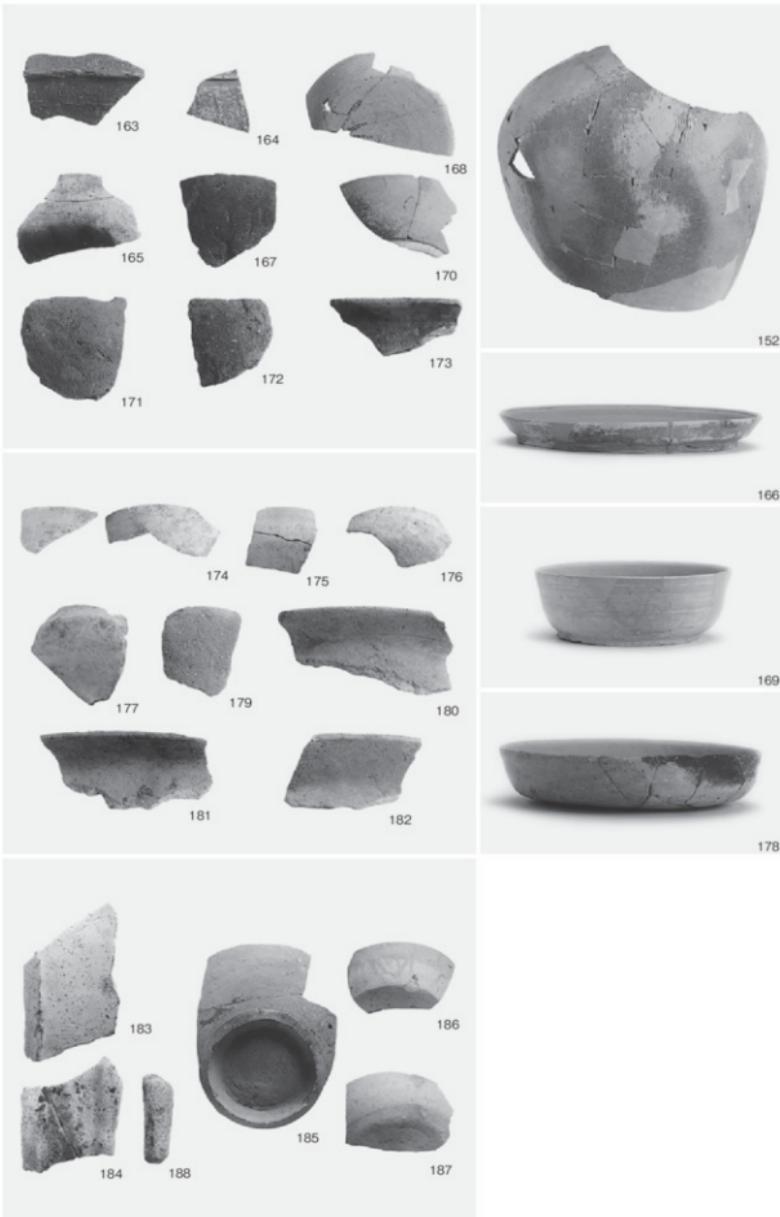
北側石敷出土遺物



北側石敷出土遺物



北側石敷・南側石敷出土遺物



SX01 ~ 03 出土遺物



189



190



191



193



194



195



196



198



201



202



199



200



203



213



219

流路出土遺物（1）



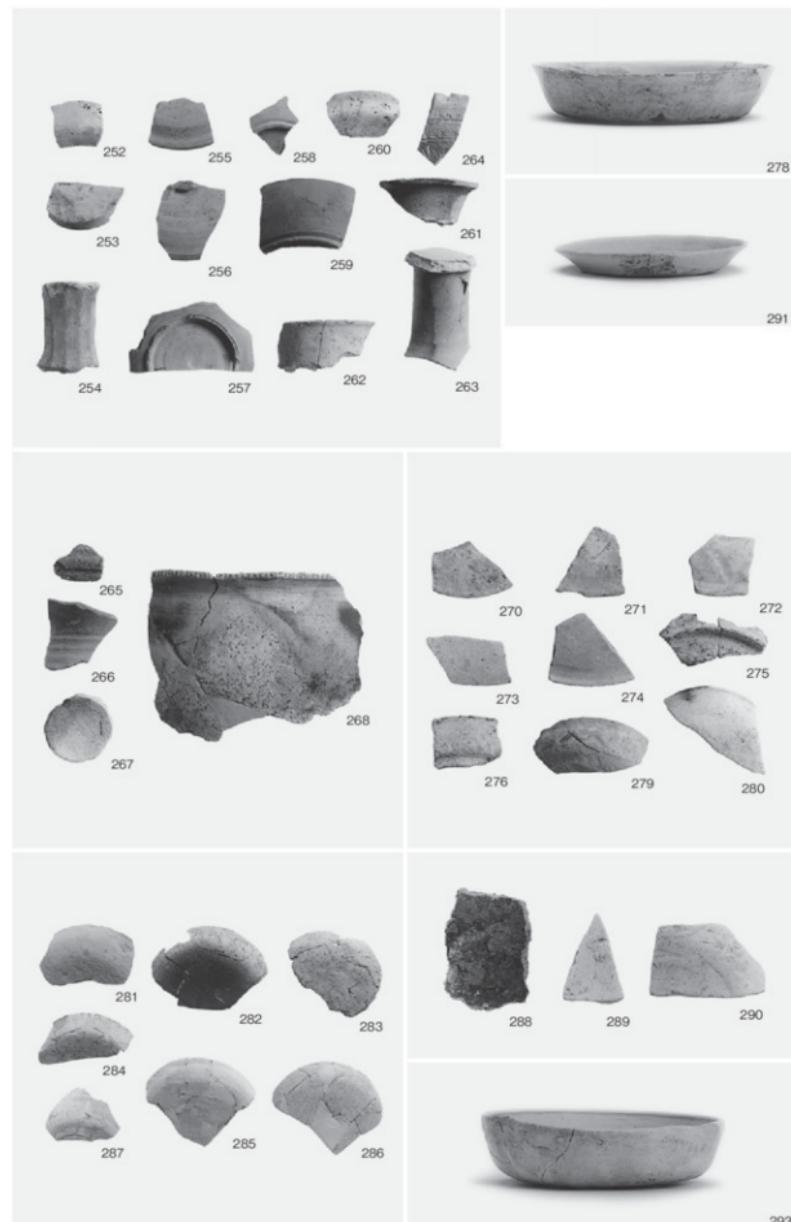
197



流路出土遺物 (2)



流路出土遺物（3）・包含層出土遺物（1）



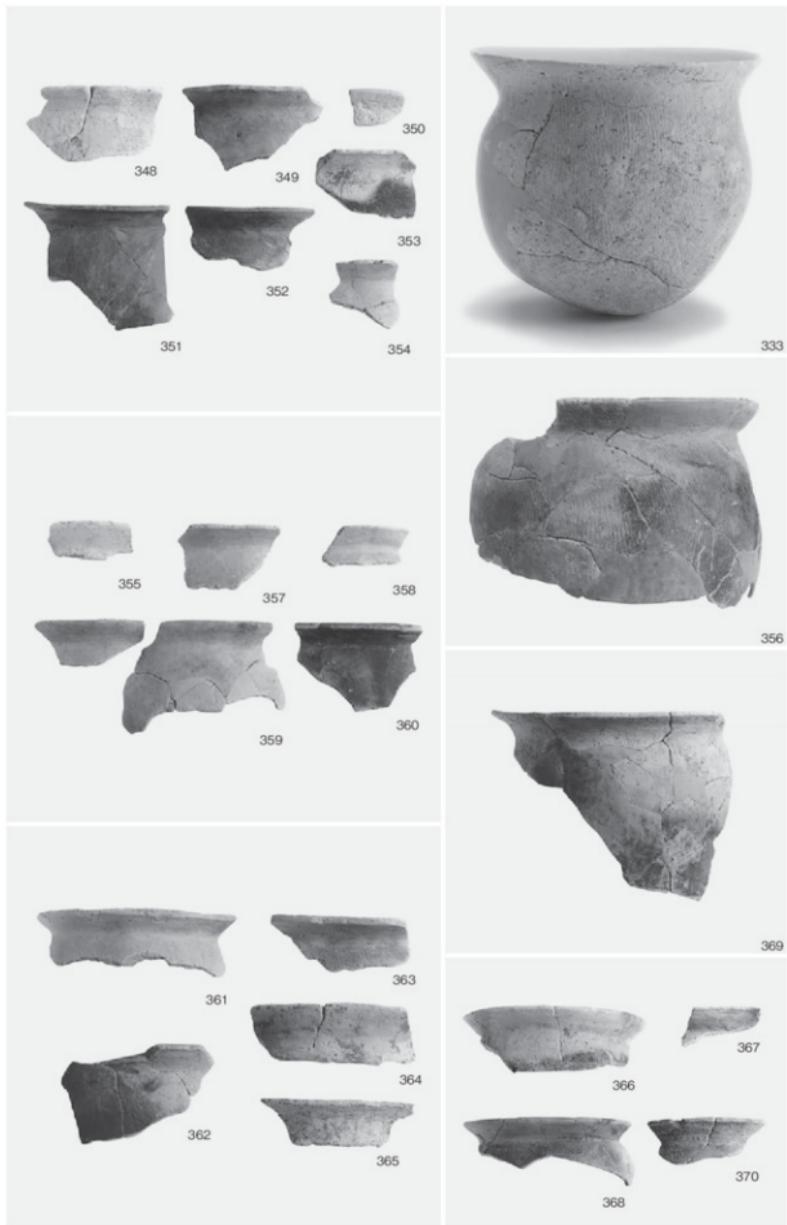
包含層出土遺物（2）



包含層出土遺物（3）



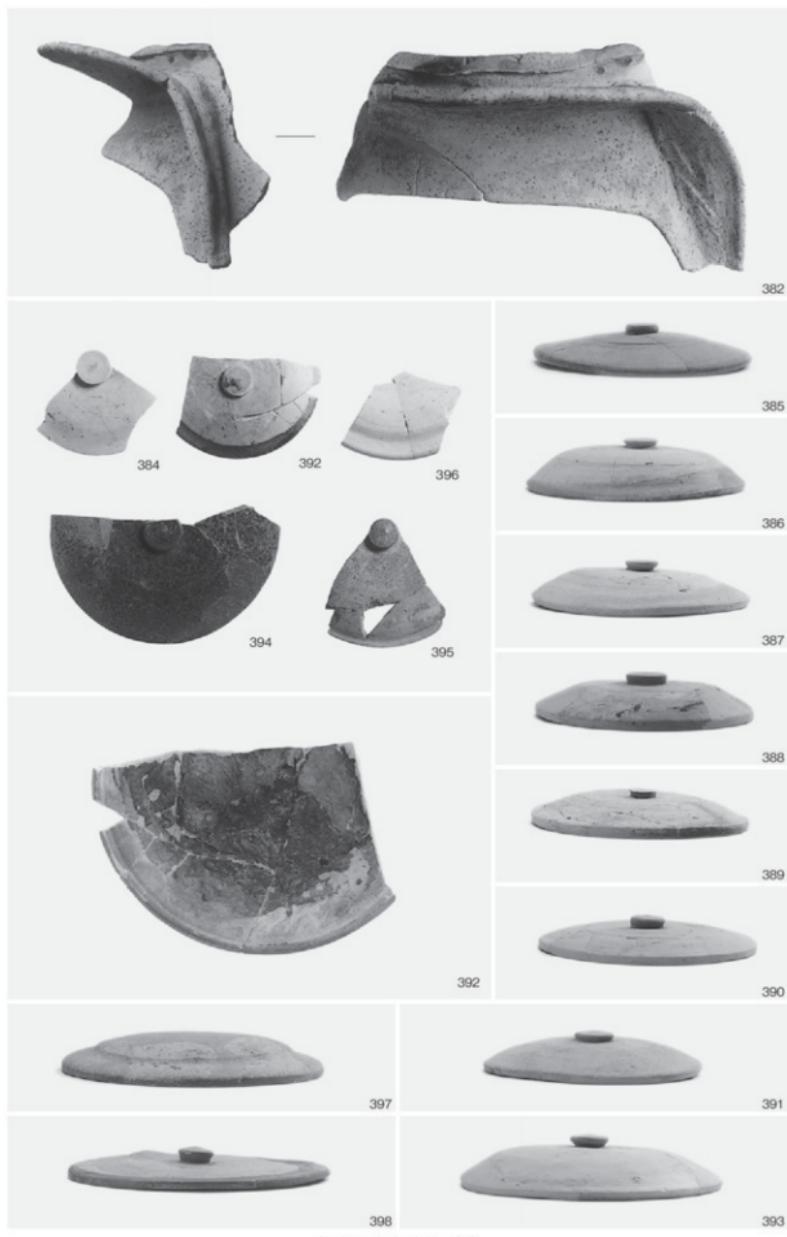
包含層出土遺物 (4)



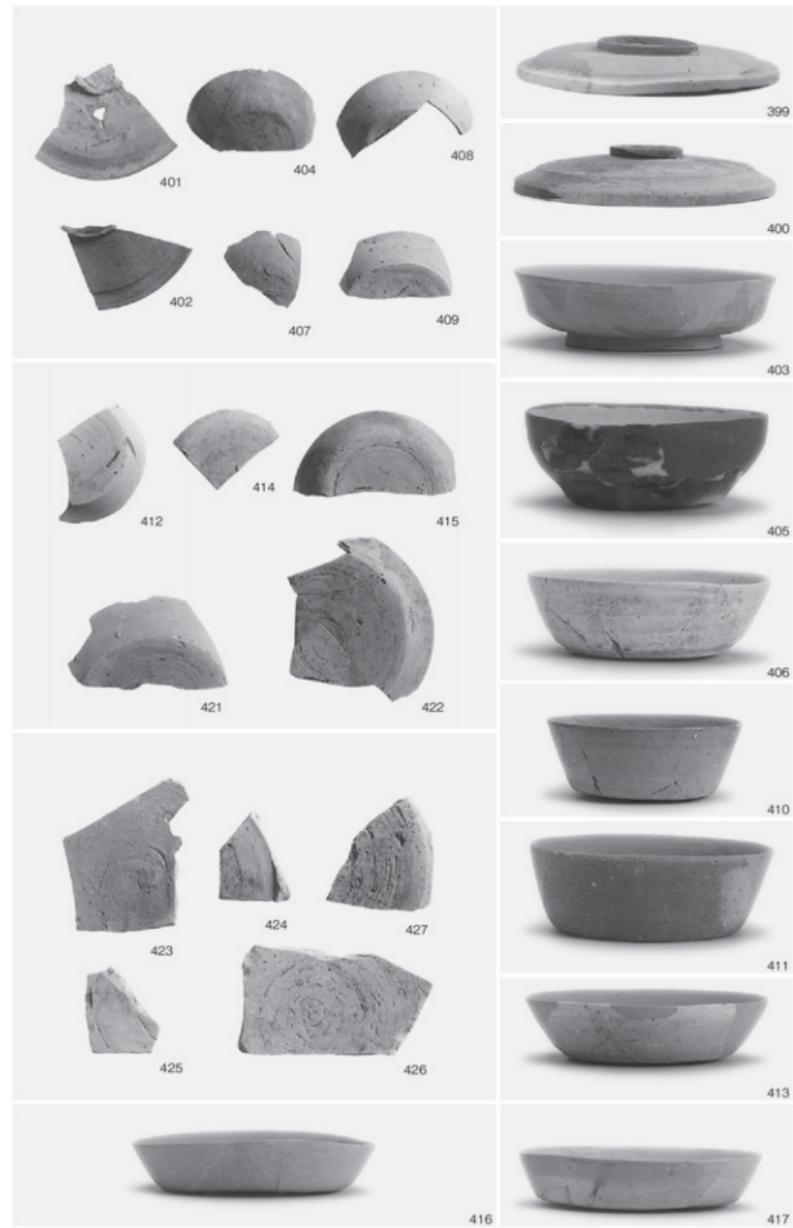
包含層出土遺物（5）



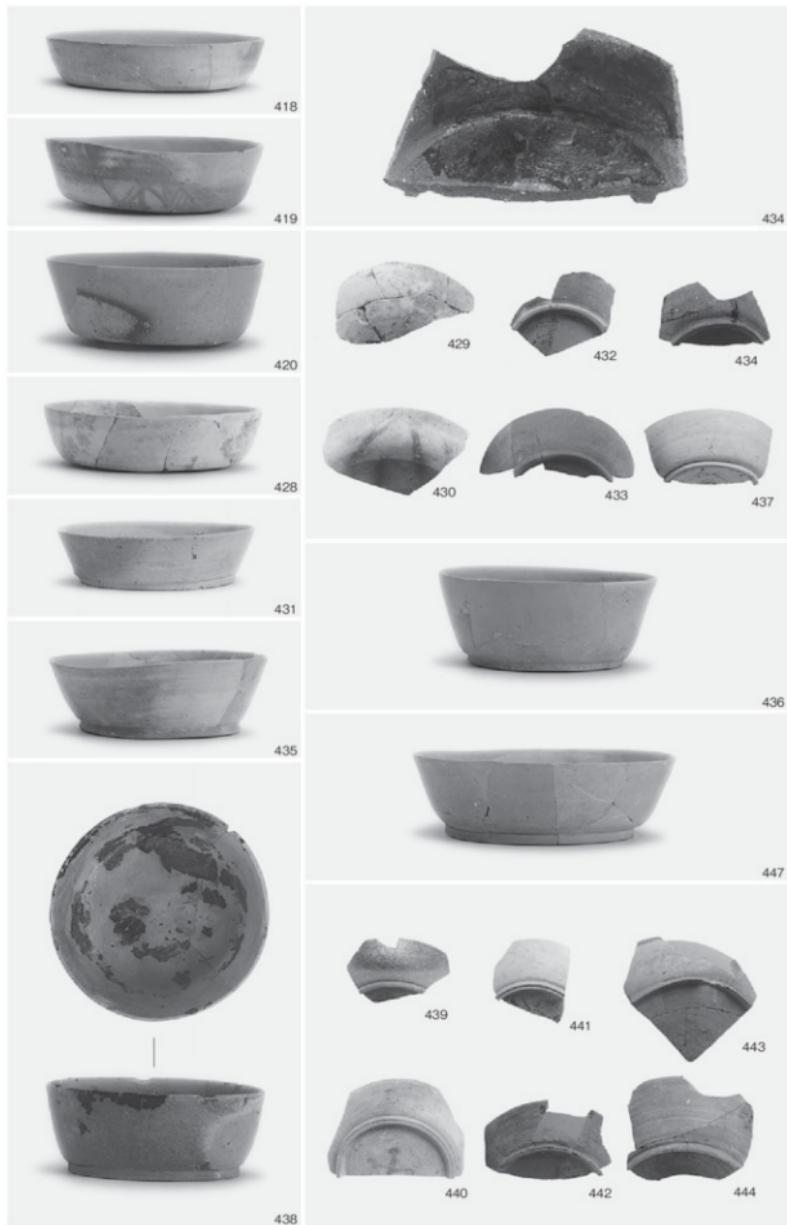
包含層出土遺物（6）



包含層出土遺物 (7)



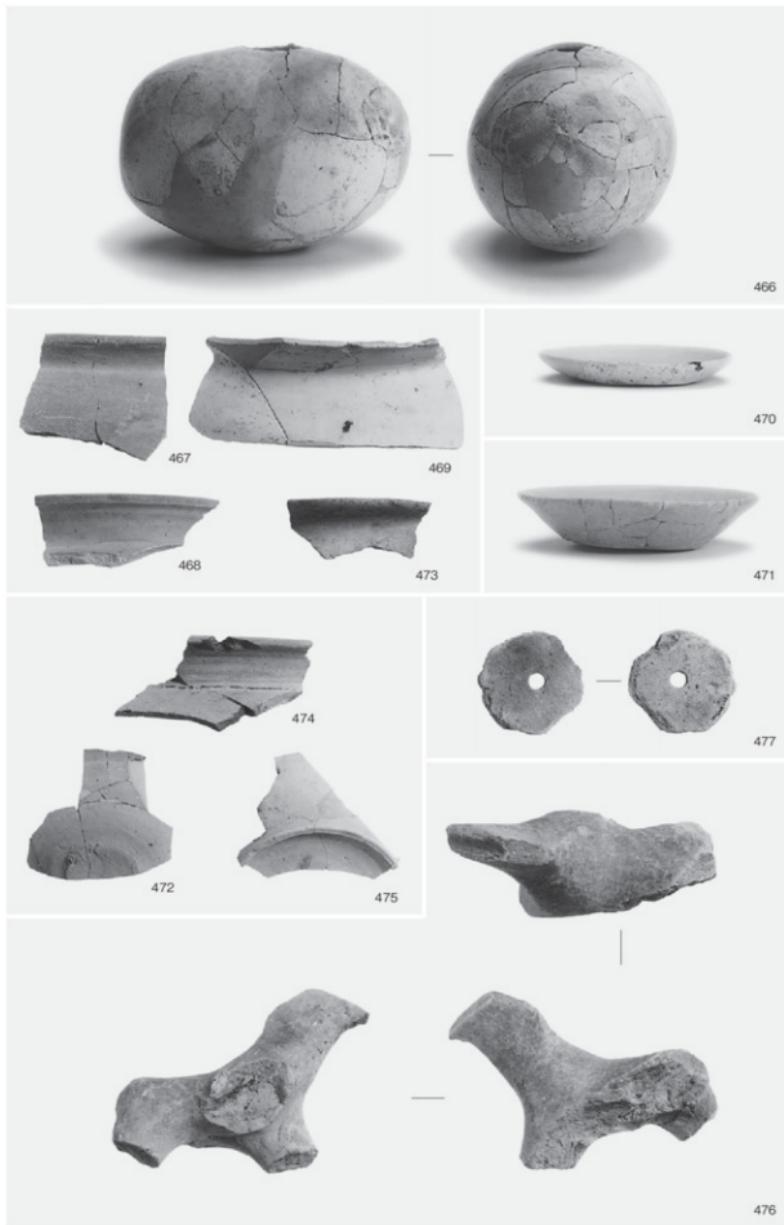
包含層出土遺物 (8)



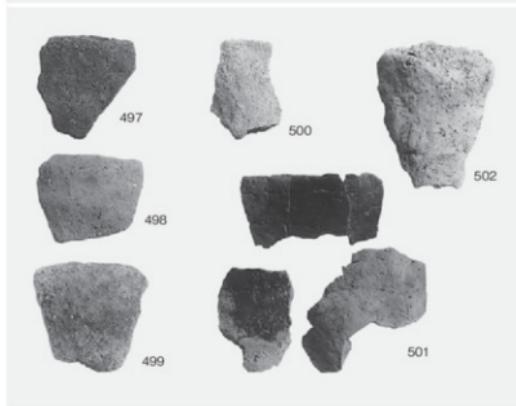
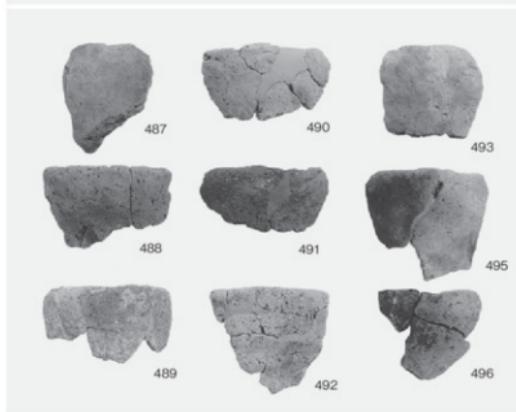
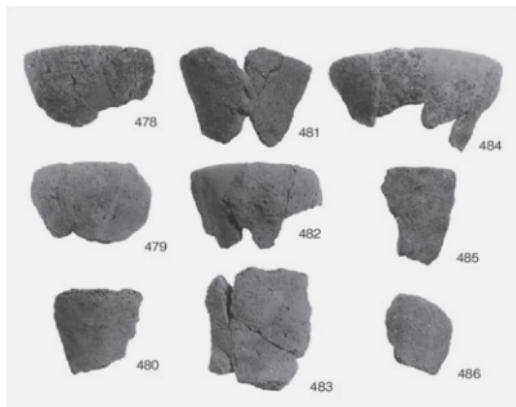
包含層出土遺物（9）



包含層出土遺物 (10)



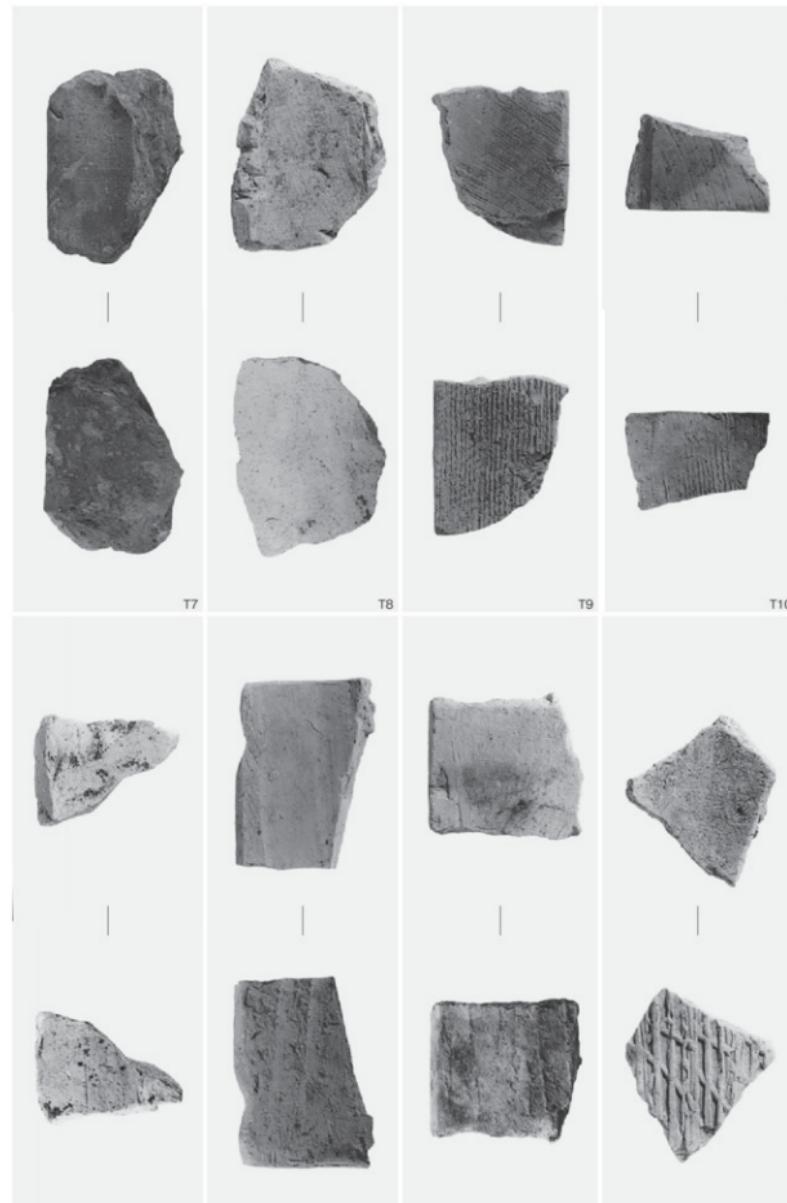
包含層出土遺物 (11)



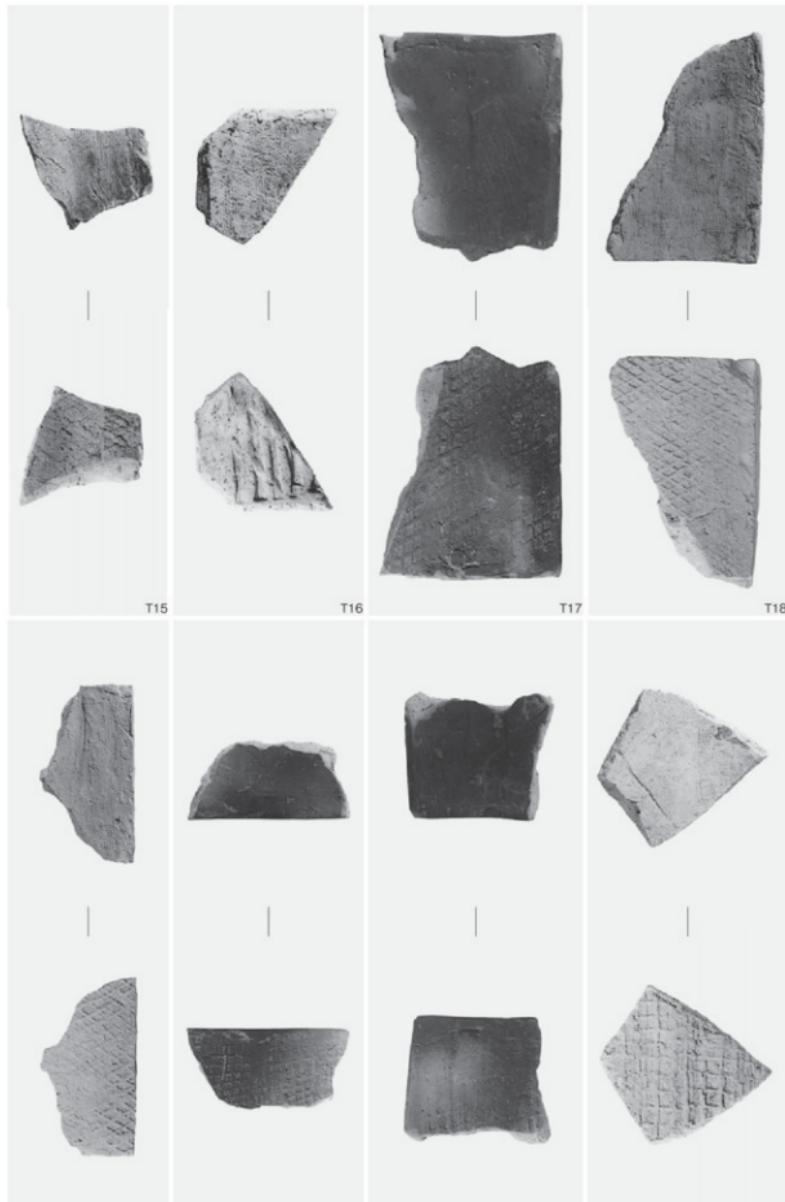
包含層出土製塙土器



出土瓦 (1)



出土瓦 (2)



出土瓦 (3)



W1



W2

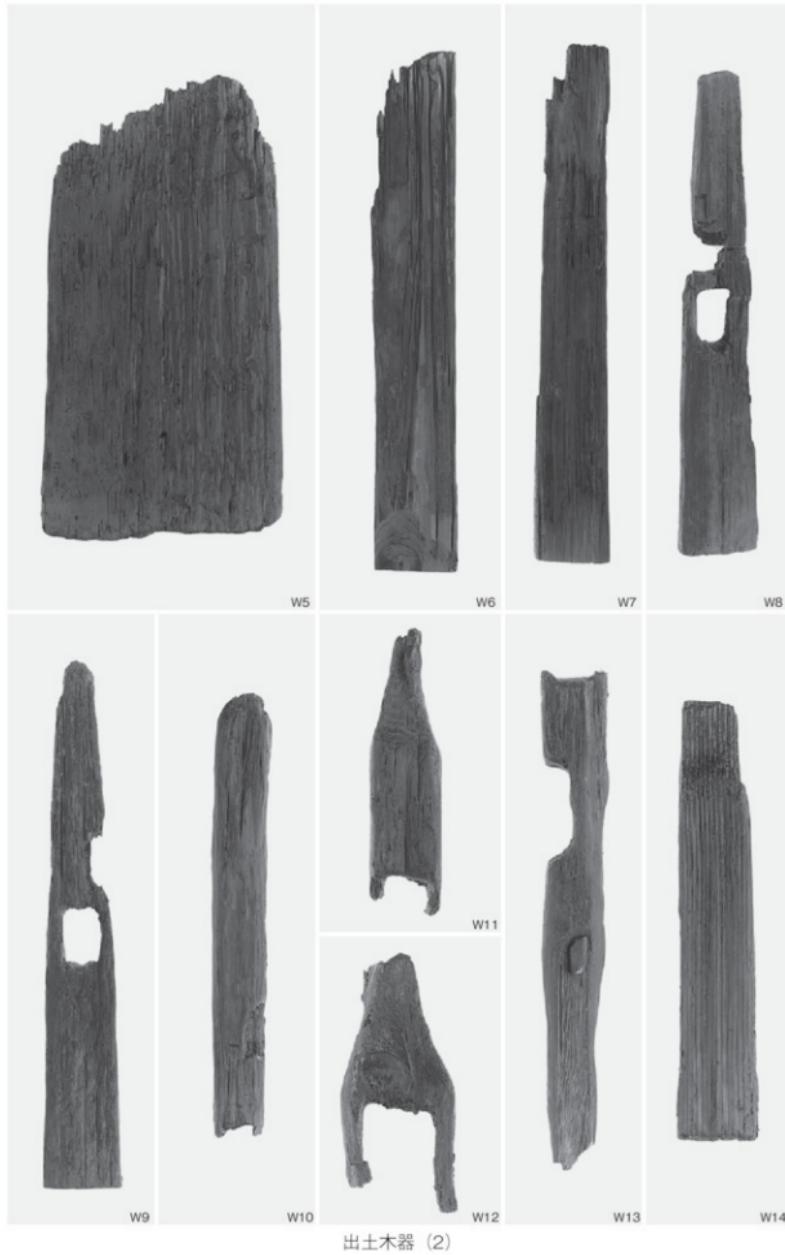


W3

出土木器（1）



W4





W15



W16



W17



W18



W19



W21



W20



W22



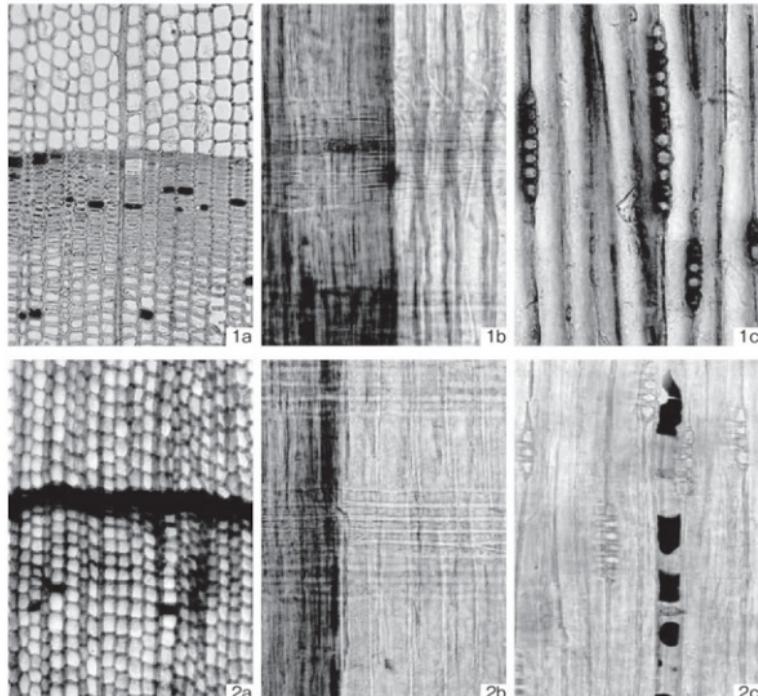
W23

出土木器 (3)



出土石器・鉄器・土管

木材



1. スギ (井戸枠SE01;W4)

2. ヒノキ (井戸枠SE01;W8)

a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200 μ m:a
100 μ m:b,c

報告書抄録

兵庫県文化財調査報告 第403冊

姫路市

豆腐町遺跡Ⅱ

—JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査報告書V—

平成23年(2011)3月24日 発行

編 集 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

〒 675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号

発 行 兵庫県教育委員会

〒 650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 交友印刷株式会社

〒 650-0047 神戸市中央区港島南町5丁目4番5号
